
東方医療録

ヘタレ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方医療録

【NZコード】

N2112V

【作者名】

ヘタレ

【あらすじ】

後ろから刃物か何かで刺されて、死んだと思ったら死んでなくて。眼を開けたら、森だつた。最初に会つたのは人の言葉を理解できる何かで、最初に辿り着いたのは……紅い、館だつた。

東方紅魔郷からの話。勝手な解釈、設定等があるので苦手な方にはお勧めしません。

其の壱（前書き）

初めまして。

知つてゐるかたはいないかと思いますので少し自己紹介を。万年ヘタレ、生涯勇気を出して奮い立つ事の無いであらうへタレと申します。

至らぬ所しかないかと思いますのでどうか温かい純粹な目で見ていただけたら嬉しい限りです。
では、しばし短い幻想を「覗」下せ。

其の壱

俺、桜井勇輝は医者を目指す普通の学生だった。

強いて違つてこりを上げるなら、父親が闇医者だったことだひつ。医師免許も無いのに腕だけは確かな物だつた。

何故それほどの腕を持ちながら闇の世界でのみ振るつたのは分からぬが、尊敬できる父親だつた。

何故過去形なのかと言つと、一度と念つこと無いだひつかひ。

俺は、もう死んでいるだひつかひ。

今朝の事だ。いつも通り学校へ通う道を歩いていた。そこで運悪く通り魔に襲われた。

重なつた偶然により命を落とすのはあまり氣分の良いモノではない。実際に未練は腐るほど残つていた。

真つ暗な空間で、通り魔に刺された傷の辺りから力が抜けていくようを感じた。死という、生きている内は味わう事の無い感覚。どうしてだらう、恐怖より興味のが大きい。

死者の魂はどこへ行くのか。この意識はどのように消えていくのか。止まる事の無い思考はより鮮明になつていく。

……鮮明に？

勇輝は弾かれたよつに起き上がり、目を開ける。

田立原の森。草木で埋め尽くされた景色。

だが、刺されたのはコンクリートの道の上だった筈だ。少なくともこんな森の中ではない。

「…………？」

そして、ふと気がつく。刺された傷が塞がっている事に。

しかし、夢だったという事はないだろう。現に血の痕はべつとつと服に残っている。

このままでは気持ちが悪い。仕方ないので、バッグの中から着替えを取り出して服を変える。

こんな森の中で白衣を着るのはどうかと思つたが、血だらけでいるよりは遙かに良いだらう。

足もしつかり動く。貧血という事はない。

まずは人のいる場所へ行かなければならぬ。かといって歩き回つて森の中で迷つて遭難しては死を待つだけになるかもしれない。

最悪、薬草なら分かるのでそれで餓えを凌げばよいので迷わない事に重点を置こう。

持ち歩いているメスを一つ取り出し、一番近い木にバツ印を着けた。

歩き回つて数時間、少し小さな湖を見つけた。

日も落ちはじめているし、今日は「」で火でも焚いて過ぐや。このほどの規模の森だ、熊や野犬ぐらいいるだろう。

荷物を置き、薪にするための枝を集めようとして湖に背を向ける。

「ねえ、アンタもしかして人間？」

後ろから人の声がした。少女のものだ。しかし、勇輝の背後には湖しかない。

恐る恐る振り返り、声の主を確認する。

そこには、青いワンピースのような服を着た氷の羽のようなものを持つ少女が湖の上、空中に浮いていた。

其の壱（後書き）

一話？プロローグ？まあ、導入の導入のような話になりますね。実は東方projectは一部キャラの名前すら正確に分からぬのですが始めさせていただきました。

STGやwikiや他の作者様を参考にして、精一杯書かせていただきますので、お付き合いいただければ幸いです。

投稿サイトを使うのは初めてなのでとりあえず1000文字程度にしたのですが、長い短いがあつたら三つ四つと助かります。

このような拙い文章に田を通じて下さりありがとうございました。

其の弐（前書き）

前回のあらすじ

主人公は刺されました。

其の弐

つまりは、そういう事らしい。

目の前の少女は人外の存在。そして、こちらはただの人間。

だから冷静に、敵意や恐怖を抱かぬように対応する。

「ああ、人間だよ。君は何なのかな」

「あたい？ あたいは幻想郷でさきよーの氷精よ」

少女は腰に手をあて、胸を張つて言つ。

幻想郷、氷精。意味は推測できるが現実味の無い事に変わりは無い。

まず氷精。氷の妖精、精靈のどちらかだらつ。

次に幻想郷。この土地、または世界を指す言葉。

「そつか、じゃあこの幻想郷で最強の君はこの近くで人の住んでいる場所へ俺を無傷で連れていく事が出来るかい？」

言動から察するにこの子は見た目に違わぬ精神だ。こうやって挑発を混ぜた要求には乗つてしまふだろう。

「ヒーゼンよ！ あたいはさきよーだからカエルだつて鬼だつて凍らせられるんだからー！」

「そうか、頼もしいな。けどもつすぐ暗くなるから明日田が上つてからでも良いかな？」

さすがに夜の森を歩くのは無謀だ。月明かりも差し込まない漆黒の森は猛獸の絶好の狩場といえるかも知れない。

「分かった。アンタはそれまで何するの？」

「寝るのは危険そだだから」「じでじつとしているよ。君は朝まで起きにしてもうつて構わない」

実の所、色々と考えて置かなければならぬ。

出所の分からぬ人物を簡単には受け入れてもられないだろう。

幸いにも、医療に関わっている分交渉の余地はあるが、確實ではない。

この幻想郷という場所がどのような所か分からない以上は迂闊に気を許せないだろ？。

もしかしたら、人間といつても特別な存在かも知れない。

人外の存在が普通にいるのだ、魔法使いや剣を振り回す騎士がいてもおかしくは無い。

バッグの中を探り、何か使えそうな物は無いか見る。

バッグの中には血のついた服、医学の参考書、救急箱、眼鏡、昼に食べようとコンビニで買った菓子パン、父親から貰った医療器具。

そういうえば通貨は大丈夫だろ？か、恐らくは別世界だらうし使えるない可能性が高い。

携帯も使えないだろ？ 少なくともこの森の中では。

そして、さつきからずっとこちらを見ている少女の扱いはどうしたら良いのだらうか。

「えつと……、まだ何か用かな？」

「それって何？」

少女が指差したのは菓子パンの入った袋。

「ああ、これはパンだよ。チョコロロネット言つんだけ食べただけ無いのかな？」

「無い。あたいは天才だけど見るのは初めて」

なるほど、少なくともこの子の知る限りではチョコロロネは幻想郷に無いらしい。

そういうえば言葉も通じてるので、昔の日本とでも考えておけばいいのかもれない。

少女はじっとチョコロロネを凝視する。

「もしかして食べたい？」

少女が首を縦に振るのに時間はかからなかった。

勇輝の隣に座り、少女は幸せそうにチョコロロネを頬張る。

「これすぐおいしい！ どうやって作ったの！？」

「いや、俺は作れないんだ。君は名前とかつてあるのかな？ いい加減、君って呼ぶのはどうかと思うんだけど」

「あたいはチルノだよ」

口のまわりにチョコを浸けたまま少女、チルノは答えた。

「チルノ、か。俺は桜井勇輝、勇輝で良いよ」

しかし困った。これで何も食べずに朝を迎えるにはいけない。

生憎、魚は捕ることも調理することも出来ないので湖を前にして希望が持てる訳でもないのだ。

隣ではチョコロロネを食べ終えたチルノが満足そうな表情を浮かべていた。

口のまわりにチョコがついたままなので、布で拭いてやる。

「ん…。そうだ、勇輝はやっぱり“外”から来たの？」

外というのは幻想郷の外という事だろう。

「よく分かつたね。流石天才」

「そりそり、あたいは天才だから何でも分かるのよ」

先程チヨコ口ネが分からなかつた奴の言ひ台詞だらうか、知らなくて当然なのかもしけないが。

「少し聞きたいんだけど、幻想郷つて人間はどれぐらいいるのかな？やつぱり少ない？」

「十人くらいだと思う。はくれいの巫女とか魔法使いも入れて。他はあたいみみたいな妖精や妖怪。あとは幽靈とか」

幻想郷。つまり幻想が具現化する場所と言つたところだらうか。

これなら医者の価値は上がるだらう。怪我をする機会も多そうだ。

「じゃあ、何で俺が外の人間と思つたんだ？」

「その格好だよ。幻想郷では見たことないから、もしかしたらつて思つたの」

チルノの発言に思わず笑みを浮かべていた。

これで決まつたも同然。幻想郷には医者はいない。

これでしばらくは衣食住は確保できそうだ。後は元の世界に帰れるかどうか。それを探さなくてはならない。

翌日、チルノに案内される家…いや、館にたどり着いた。

それは紅い館。鮮血にも似た紅で染められた魔の館。

其の弐（後書き）

チルノのターンは終了いたしました。

其の參（前書き）

前回のあいすじ

～」食べられました

其の参

紅い。とにかく紅い。

チルノの案内で屋敷が見える場所まで来たのだが、正直遠くても良かったから他の場所にしてほしかった。

これから、迷いこんだ外来者を突き通さなければならぬ。

チルノと会つた事も伏せておこう。あくまで無知を貫かなければ面倒に巻き込まれるかもしれない。

紅い館に近づくと、壁に囲まれている事が分かった。

どこかに門でもあるのだろうか、壁に沿つて歩いていく。

「……お」

門らしき物を見つけ、そこに向かつて歩いていく。

そこには女の子が寝ていた。

「.....」

開いた口が塞がらないとはいつこいつた時の自分の状態を言つのだろう。

見たことの無い緑色の服に赤い髪。容姿はかなり良いがどこか残念なオーラが感じられる。

「あの、ローリーの館の方ですかね……？」

「…………もつ、それ以上は……食べら、れ……ない」

定番、なのだろうか？

起こしてまで入るのはどうかと思つたが、行き倒れでは仕方ない。

「すみません。少し聞きたい事があるので起きても良いでありますか？」

肩を軽く叩いて呼び掛ける。返事が無い。

「…………仕方ない」

寝ている少女の鼻を摘まみ、口を葉っぱで塞ぐ。

かなり非道な起こし方ではあるが、面識の無い相手に水をかけたり叩き起こす訳にはいかないだろう。

待つことに60秒。

「んん！？ んーッ、ふはー。」

「おはよウジヤエコサク。田間めは最悪でじゅうね」

急いで距離を取り、自分は何もしていないといつた態度をとる。

「あ～、死ぬかと思いましたあ。ん？　お密さんですか？」

「氣づいたら森の中で倒れていって、ソーソーが見えたので。良ければ街に案内していただきたいのですが……」

本当はソーソーの館になろうと思つたが、嫌な予感しかしない。

ソーソーは昇慶に立ち去るべきだわい。

「やうですか、大変でしたね。でも私は門番なので出かける訳にはいきませんし……。そうだ、咲夜さんに聞いてますから待つていて下さいね」

騒がしい人だつた。

ソーソーの返答を聞きもしないで館の中に駆け込んでしまった。

かといって今更後には引けない。待つことじよつ。

「あの、連れてこことの……」

戻ってきた少女の額には切り傷があり、血が垂れていた。

思わず顔をひきつらせてしまつたが、少女はそれに氣づく余裕が無いよつだつた。

広い、そして不気味だ。

少女、紅 美鈴に案内されこの紅魔館へと入ったのだが先程から違和感が拭えない。

「美鈴さん、ここって何人の人が住んでいるんですか？」

そう、人が見当たらないのだ。

外から見た限りでは、少なくとも50人…その半分以上は人間ではないかもしれないが、とにかくそれだけの規模があった。

しかし、紅魔館の中で人とすれ違う事は一度もしていない。

「人間は一人ですね、人数なら六人です」

つまり、残り五人は妖怪か何からしい。

人数という事は、少なくとも人の形をしているという事。

「あの……人間が一人で人数が六人ってどういう事ですか」

そう、俺は妖怪の存在を知つていてはならない。あくまで、無知な外来者を演じる。

「説明はお嬢様がするので。あ、こちらです」

目の前にあるのは大きな扉。高さは一メートルちょっとぐらい。

美鈴さんは門番の仕事に戻らないといけないらしい、わざと言つてしまつた。

扉をノックして、手で押して開ける。

「……失礼、します」

この扉に触れてから妙な悪寒が走る。

この中に入る」と本能が拒絶しているのだろうか。冷や汗が頬を伝う。

半分だけ開けた扉から中に入り、自分を招待したであらう者達に視線を向けた。

「よつじや、紅魔館へ。私がこここの主、レミコア・スカーレットよ

視線の先にいたのは一人の少女。

今口を開いた少女は、見た目は十歳かそこらに見える。しかし異形、その背には人にはある筈の無い一対の翼があつた。

もう一人は、メイド服を来た一見普通の少女。見た目で推測出来る年は同じか少し下だらうか。

「……初めてまして。桜井勇輝と申します」

名前を名乗り、軽く頭を下げる。ここでの二人の機嫌を損ねるのは得策ではない。慎重にいかなければ。

「へえ、驚かないのね。突然だけビ勇輝。あなた、血液型は？」

……いや、それって四分の一か三の確率で殺されるのでは？

容姿、今の質問からしてレミコアは吸血鬼。気に入らない血液型なら殺す。または気に入っている血液型なら食糧とするのどちらかだわ。

しかし偽つたところで後からバレるに決まっている。

「B型です。自分で採血して調べて事もあるのでま間違い無いかと」

レミコアはそれを聞くと、僅かに笑みを浮かべる。

「そう。それで何故勇輝はこの幻想郷へと来たのかしら？」

「自分でもよく分かりません。田が覚めたら森の中でしたから

射抜かれるような視線に耐えながら勇輝は告げた。

「なら行く宛もないじょうし構わないわね。桜井勇輝、この紅魔館で私の従者として働きなさい」

其の參（後書き）

キャラの口調などについては、必ず脳内変換にて修正お願いします。

其の肆（前書き）

前回のあいすじ

中国に案内されました。

其の肆

「従者ですか」

「ええ、もちろん衣食住は保障するし好きに暮らしてもらつて構わないわよ。仕事さえしてくれたらね」

「仕事ですか、俺が役に立つような仕事場は紅魔館にはあるとは思えませんけど」

それに、個人的な意思でも自分の分野をまるで活かせない仕事は御免だ。

せっかく医者として生きるためのスキルを学んでいたのだから、そういう役職に望みはある。

「では、勇輝には何が出来るの？　そしてそれは当然他よりも優れているのよね？」

正直、自信は無い。

父の仕事を間近で見ていた。時には手伝う事もあった。だが、同職の人間よりも優れていると過信したことはない。

「僅かなことかもしだせんが、医療に携わっていました。そちらの一般人よりは知識も腕もあるかと。この紅魔館で役に立つ技術からは分かりませんけど」

「ならそれは捨てなさい。雑用が出来て血が吸えるなら十分だから

レミコアの言葉に思わず拳を握りしめ、歯を食いしばって睨み付けてしまつ。

今までの努力を否定され、必要無いと切り捨てられて。

だが、ただの人間である自分が吸血鬼に抵抗したところでどうなる。待つてているのは死だけだ。

「……分かりました。従者として働かせていただきます」

自らの感情を圧し殺して答えを出す。

「不服そうね。でも諦めなさい。この幻想郷で怪我や病にかかる事はほとんど無いわ、医者が必要になる事なんて何十年に一度かしらね」

レミコアの言い分はよく分かる。しかし、昔からの田標は簡単には諦められない。

「ええ、諦めますよ。“必要にならない限り”は、ね」

挑発とも受け取れる発言。しかしがれは楽しそうに笑つた。

「咲夜、勇輝に部屋を一室。それと紅魔館の案内をして、適当な仕事を『えなさい』

「分かりました。お嬢様」

レミコアの隣に立っていたメイド……咲夜で合っているのだろうか。その子がこちらに向かつて歩いてくる。

「私は十六夜咲夜。桜井勇輝で良いのよね、部屋に案内するから着いてきて」

こちらの返答を聞かないで咲夜は部屋を出ていく。少し予想外な行動に慌てて、後に着いていく。

今の広い部屋を出て、数分歩いたところにある部屋。そこに勇輝は案内された。

部屋の印象は普通に綺麗、ベッドにテーブル、クローゼット。生活に必要な物だけを置いただけのようだ。

「食事は広間、入浴は浴場、トイレ何かは適当に探して。他にも案内するから荷物を置いて早く来なさい」

嫌われているのかと思ひながらつけ仕事のように扱われている気がする。

バッグをベッドの上に放り投げて、咲夜の後に着いていった。

「貴方が入つていいのはキッチンや広間、掃除を申し付けられた場所。絶対に入っちゃいけないのは私達の部屋、図書館、地下。それと、無闇に外に出るのも禁止。妖怪に食られて死にたいならどうぞ」

「分かった。部屋は分かるけど図書館と地下に入れない理由は?」

「図書館にはパチュリー様がいるし、地下に入つたら間違いなく貴方は死ぬわ」

化け物でも彷徨いでいるのだろうか。

そんな事を考えていると咲夜がその答えを告げる。

「地下にいるのはお嬢様の妹、あまりにも強すぎる力と、不安定な精神を持っているからお嬢様が軟禁しているの」

「なら死ねそうに無いかな。俺は仮にも医者を目指してた、そいつた患者への対処法も学んだしカウンセリングの経験もある」

「近づいた瞬間に殺されるかも知れないから止めておく事ね」

あっさりと切り捨てられた。

「それで、紅魔館にはどれだけ働き手がいるんだ？ この広さで咲夜だけとは思えないけど」

「妖精メイドが數十匹。正直、今更人を増やすのもどうかと思つぐらー手は足りてるわ」

「じゃあどうして俺が？」

「血を貰うためよ。人里まで行つて献血をしてくるのにも限界があるの、だから身近に血を吸える人間がいた方がいいでしょ」

「人間は俺以外にも一人いるって聞いたけど」

「それは私。吸血鬼は異性の血しか吸わないらしいの。転生しても血を捧げたいとは思つたけど出来ないから仕方ないわ」

転生してまでやることではないと思つが、あまり触れないでおこう。

「じゃあもう一つ質問。万が一、俺が逃げ出した場合の対処は？」

「それは……」

咲夜の姿がそこから消えた。そして、後ろからナイフを首筋にあてられている事に気づく。

「いやって、脅して連れ帰るしかないんじゃないの？」

「了解。馬鹿な真似はしないでおくれ」

冷や汗をかきながらもさう答える。じつやら人間でも普通じゃないらしい。

「今は時間を止めたの。私の力は“時間を操る程度の能力”、使い勝手が良さそうでしょう」

「なるほど、確かに使えそうな力だな」

程度とついているが、十分すぎると思ふのは眞のせいだらうか。

とりあえず、回りに普通がないといつ生活を送っていくなければならぬようだ。

其の肆（後書き）

とつあえず多くの人に見ていただけていよいよつなので感謝しています。
もつ口調とか性格とか本当に残念ですけど、まあ仕様といふことで
勘弁して下さると助かります。

其の伍（前書き）

前回のあらすじ

紅魔館に雇われました。

其の伍

紅魔館で働き初めて三日、勇輝は与えられた部屋で参考書に目を通していた。

時間はまだ昼過ぎ、咲夜は働いている。

何故、仕事が回つてこないかといつと勇輝の家事スキルが絶望的に低かったためだ。

料理は出来ない。掃除は中途半端、選択は布を伸ばす。

よっているよりいの方がマシだと言われ、こつじて部屋に閉じ籠つている。

本を閉じて、鉄格子のはめられた窓から外を見る。

紅魔館で窓のある場所は珍しい。レミリアが日光に弱いからだ。

「……暇だ」

血は何日分か蓄えがあるので不必要らしく、仕事もない。

これでは家畜だ。何か役に立つ事をしなければ。

自然と、意識は地下室に向いた。

レミリアの妹、精神が不安定らしいが実際のところはどうなのだろう。

軟禁で済んでいるところとは、殺人鬼のよつには狂っていないといつ事だらう。

となると、回りの全てが敵に見える被害妄想者あたりとこつたところか。

それなら、時間をかけて治すこととは可能だ。

ベッドから降りて部屋を出る。

このまま食糧として過ごすのは嫌だ。そして家事では役に立たない、逃げるにしても不可能だし何より行き先が無い。

考えながら歩いていると、地下室への階段にたどり着いた。

確かに嫌な予感がする。ここから降りたら一度と田の光を拝めないよつな気が。

しかし、一度刺されて死んだよつな身だ。このまま家畜のよつな生活を送るより危険な場所へ赴いて変化を求めるのも一興だらう。

階段を一段ずつ降りて、地下に降りる。

蠟燭の日だけが頼りの、少し広めの廊下。高さは四メートル、幅は六メートル程だろうか。

蠟燭は替えているのか減らないのかは不明だが、消えているものは無いよつなだ。

別れ道も扉も無い一本道、その奥へ奥へと進んでいくと、突き当た
りに一つだけドアがあつた。

金属製の重々しい雰囲気が漂つて、ドアノブに手をかける。

これを開ければ、ただでは済まないのだろう。

しかし、勇輝は変化を求め、その重いドアをゆっくりと開けた。

「？……貴方は誰？」

中にはいたのはレミコアと同じような幼い少女。

背には奇妙な形の翼があるが、とても飛ぶために使つ物とは思えない。

「初めまして。数日前からこの紅魔館でお世話になつています。桜井勇輝と言います。お嬢様には妹様がいらっしゃると聞いて挨拶に来させていただきました」

現段階では、精神的に問題は無いように見える。

「ふーん、そなただ。それじゃあフランと遊んでくれる？」

大体の予想はつく。

断れば殺される。受けても死と隣り合わせな遊びなのだろう、ロシアンルーレットよりも生き残る確率の低い。

「構いませんよ。しかし、その前に少しお話をしましょ。楽しく

遊ぶためにはお互いに仲良くならないこと

「やうなんだ。でもお話を何を話すの？」

「まずは血口紹介しましょ。」
貴女の名前を教えて下さる

実はさつきから冷や汗が止まらない。話し方や外見からはとても危険など無いように見えるが、本能的な感情では今すぐここを逃げ出したい気分だ。

「フランだよ。フランドール・スカーレット」

「ではフランドール様。少し注意していただきたい事があるので説明しますね」

「まだ話すの？」

「あと少しですよ。始めに言つておきますが、俺は人間です。フランドール様とは違い、脆く弱い存在。だから、力比べのよつな遊びはすることが出来ません」

「それじゃあどうやって遊ぶの？ もしかしてフランを騙した？」

一気に悪寒が走る。

「いいで引いたら殺される。そう思つて言葉を続けた。

「いえ、フランドール様には違つた遊びを楽しんで頂いたと思つています。少し紙とペンをお借りしても良いですか？」

フランは不満そうながらも頷き、机から紙と……クレヨンを持ってきた。

勇輝はそこに、黒い人と白い人。川に船を描きフランに見せる。

「ちょっとしたゲームですね。この迷路を解いてみて下さい。ただし、紙を破つたり何かを描き足したりしてはいけません。そうですね……三十分かけてもからなかつたら答えを教えましょう」

「ただの迷路でしょ？ ならフランでも簡単に解けるよ」

そう言ってフランはスタートの場所から迷路の道を指先でなぞり始める。

五分かけて、出来る限り複雑に描いたが普通の迷路だと思っている限り絶対に解けない。

五分が過ぎた。フランはまだ迷路の道を指先でなぞっている。

十分が過ぎた。フランは紙を裏返したり上下を入れ換えたりしている。

二十分が過ぎた。

「無理っ、解けないよ」

「やうですか、ではヒント……こうよつちゅうと残念なお知らせ

諦めたようだ、しかしこまだ十分残っている。

をしましょ。その迷路、スタートからゴールまで普通に繋がっている道は一つもありません。頑張って裏技を見つけて下さい」

「……狡いよね、それ」

簡単すぎるものを出されても面白くないでしょう?といつ言葉に納得したフランだが、残り十分。ゴールまでたどり着くことは出来なかつた。

「では正解を教えましょ」

勇輝は紙を折り始める。一度は谷折りで半分に、さらにその半分を更に半分の山折りに。すると…

「あ、道が出来た」

「さすがに無理がありましたかね。ルールは紙を破らない事、折つていけないとは言つていません」

もしかしたら卑怯と言われ、何かされるかと思つたがそんな事は無かつた。

「ねえ! 他には…? 他には面白いのある?」

びりゅう氣に入つて貰えたらしい。飽きるまでは殺されないか。

とりあえず見ていた感じでは、精神が幼く自分の力の強さを意識していない……いや、相手を殺す事などに罪を感じていないといったところだろうか?

つまり一般常識を叩き込むだけで良い。以外と楽そうだ。

其の伍（後書き）

あ、もうなんか適当に……

其の陸（前書き）

前回のあらすじ

役立たずなフランのおもちゃ

其の陸

結局、フランに解けたのは最後の一問だけだった。

二十近く出しだが、どれも難しかつたらしい。

「解けたよ！ねえ、凄い？」

「はい。フランドール様はとても賢いですね。凄いですよ」

もう地下室に来て四時間程過ぎた。そろそろ戻つて言い訳の一つでもしないといけないだろ？

時刻で言えば夕方の六時、夕食の時間だつた筈だ。

「フランドール様、申し訳ありませんが俺はそろそろ戻らなくてはいけません。レミコア様に怒られてしまふので」

「……フランを一人にするの」

「しませんよ。今回は挨拶だけという事だったので許可を貰わなくてはいけません。フランドール様の遊び相手になる許可を」

それでも、フランは納得がいかないといった表情になる。

「明日も来ます。約束しましょう」

そう言って小指を出す。

「何それ？」

「指切りです。絶対に守る約束をする時に使つものですよ」

やり方を教えて、指切りをする。

「ではまた明日。次はもう少し解きやすい問題を考えておきましょ
う」

地下室の扉を開け、階段へと歩みを進める。

「言い訳を聞こつかしら」

地下から上がりってきた所を妖精メイドに見つかり、光の球をぶつけられて氣絶。気がついたら最初に案内されたあの部屋にいた。

「衣食住を確保していただいているのに何もしないのでは申し訳ありません。ですので、せめて話に聞いていた妹様の遊び相手になろうかと」

その言葉を聞き、レミコアは一瞬驚いたような、信じられないという表情を浮かべる。

「スペルカードの一枚もないただの人間がフランと弾幕『』をしていたの…？ いえ、それにしては静かだっただし……」

スペルカード？ 弾幕『』？ 聞き慣れ無い、というか聞いた事がな

い。

「失礼ですが、スペルカードとは何でしょうか？ちなみにフランドール様とは温厚にクイズで遊んでいただけです」

「フランがクイズ……想像できないわね。スペルカードというのは幻想郷での揉め事や争いに白黒つけるために使う札の事よ。最近は廃れてきたみたいだけど」

つまり、決闘的なものといふことか。

「弾幕」とは？

「スペルカードを使つた決闘の事。ちなみにフランはこれしか遊びを知らなかつたわ」

つまりアレだ。死ねる確率は十分にあつた訳で原因の六割近くがレミリアにある。

「他の遊びを教えればよかつたものを…。別に時間がなかつた訳ではないのでしょうか？」

「聞かないのよ。勇輝は運が良かつたわ、咲夜は初めてあの部屋に入つた時いきなりスペルカードルールで戦う羽目になつたから

死ななくて良かつた。本当に死ななくて良かつた。

弾幕は何回か見た、妖精メイドが紅魔館に入つてきた野犬のような何かに向けて放つていたり、野犬のような何かの侵入を許した美鈴に放つていたり。

そして、先程も威力が低いものだが自らの身を持つて受けた。かなり痛い、ボウリングの球を投げつけられたぐらいに。

「それで、勇輝は今後どうするつもりかしら」

「明日も行くと約束してしまいましたし、お嬢様が許可さえ下されば教育係くらいは勤めることができるかと」

むしろ行かないと次に会ったときに弾幕で…。これ以上は考えないようになりたい。

「良い忘れていたけど幻想郷に住んでいる妖怪はそれぞれ力を持っているわ。少ないけど人間も、咲夜が良い例ね。私は“運命操る程度の能力”、フランは“ありとあらゆるもの破壊する程度の能力”。少しば自分がどれだけ幸運な状態か分かつたかしら」

咲夜の時も思うが、何故“程度”とつけたがる。全知全能でも求めているのだろうか。

「それはお嬢様が俺を死なないようにしたのでは？」

「ああ、どうかしらね…」

とにかく、運が良かつた事に変わりはないよつだ。

「では、そろそろ夜も更けていますので下がらせて戴いても良いでしょうか?」

「その前に図書館に行きなさい。私の友人の魔法使いがいるのだけ

れど、……あとは本人に聞けば分かるわ

「分かりました。では失礼します」

正直、気疲れしているのでさつさと寝たかったが図書館に本を取つてこいとかその程度の用事だらう。

……なら妖精メイドに頼めば良かつたのではないだろうか。

しかし、気にしていても仕方ない。さつさと用を済ませて寝てしまおう。

図書館に入った事はないが、場所は大体分かる。

扉が妙に大きかつたのを覚えているが、何故紅魔館は扉の大きさを均一にしないのだろうか。分かり易くて良いが。

そうやつてあれこれ考えている内に図書館に着く。
重そうな扉は意外と軽く、見かけ倒しのようだった。

中を見れば扉よりも巨大な本棚がいくつもの列になつていて。しかも空いている箇所は無く、何万、何十万という本が静かに並べられていた。

「……凄いな

「えーと、どちら様ですか？」

図書館の様子に圧倒されていると、誰かに話しかけられた。

頭と背にコウモリの翼のようなものがついた赤い髪の少女だ。

「ああ、すみません。数日前からお嬢様にお世話をなっています。
桜井勇輝です。お嬢様から言われて来たのですが」

「ああ、貴方がそうでしたか。人相が悪いので侵入……何でもない
です。パチュリー様がお待ちですので案内しますね」

……まともな人?だと信じていたのだが。

本棚の迷路を案内され、たどり着いたそこには本に囲まれながら読
書をしている少女がいた。

其の陸（後書き）

実は紅霧異変の前だつたりします。

其の後（記載せ）

前回のおひすじ

図書館でひきこもつを覗つけました。

其の漆

本を読んでいた少女が、持っていた本を閉じて勇輝に視線を向けた。

「あなたがレミィの言つてた人間……私にはどこが面白いのか分からぬわね」

「初めまして。用件は貴女に聞くようにお嬢様から言われたのですが、どういった事をやればいいんでしょうか？」

眠い。それもかなり。

少女…パチュリーは物を見定めるように下から上へと目を動かして、一言。

「才能無し。レミィには悪いけど教える事は何も無いわ」

「どうですか。ちなみに何の才能が無いんですかね？ 家事は全滅していますけどそちらでしようか？」

少々イラついた物言いになってしまった。

だが、疲れているのに才能無いから帰れ、と言われれば誰だって良い気はしないだろう。

「魔法よ。靈力が人並み以下だからそつちでどうにかしようと思つたのでしきうけど…。やっぱリスペルカードを作るのも無理かもしないわ」

「スペルカード……ですか？」

「一応人間でも使えるのよ。ただ、貴方は外から来たみたいだから靈力が弱い。代用に魔法を教えようかとレミィは思ったみたいだけど才能の欠片も見当たらないの。分かった？」

つまり、ここでも役立たず、と。

「靈力は増えたりはしないんですか？」

「鍛えれば少しあ上がると思つ。でも数年はかかるわね」

「では、力とは生まれ持つて備わっているものなのでしょうか。それとも、ある日突然目覚めるものですか？」

「……大体の妖怪や魔法使いは生を受けたその時から力は持つている。人間は力を持つっていても発現せずに一生を終える者がほとんど。確率は幻想郷で産まれたら十パーセント。外はほとんど皆無、変な希望は抱かない方がいいかもね」

と言い終えるとパチュリーがパタンと倒れる。

「！？ 大丈夫ですか？」

「貧血だから……あまり大丈夫じゃないかもしれない」

「…………といつあえず生活習慣を見直す事をお勧めします」

パチュリーを放置。図書館から出て自分の部屋に向かつ。

勇輝が出ていった後、レミリアは咲夜を呼んで話をしていた。

「信じられる？あのフランが人の話を聞いて、しかも大人しく人間と一緒に遊んでいたのよ」「

「確かに色々と引っ掛かる所はありますね。私はいきなりスペルカードルールでの決闘になりましたし」

昔、咲夜が初めてフランに食事を渡しに言つた時は地下通路でかなりの規模の弾幕ごっこが繰り広げられた。

レミリアとパチュリーの二人ががりでフランを部屋に押し込んで事態は收拾されたのだが、フランはとにかく気がふれやすかった。

「パチエに弾幕を使えるように指導してもらおうと思つたのだけれど……やっぱり駄目かしらね」

「外から来た人間ですからね……。鍛えても妖精程度の戦力にしかならないと思いますよ」

実際、勇輝は頭の回転は早く手先もそれなりに器用だが体力は平均値、靈力は平均以下。スペルカードを一枚使えば靈力が切れるだろう。

「面白そうな運命が見えたのだけれど……やっぱり見間違いだったかしら？」「

「どのような運命でしょう？」

咲夜の問い掛けに、レミリアは楽しそうに答える。

「咲夜がスペルカードルールで勇輝に負ける所」

部屋に戻ってきた勇輝は、テーブルに向かって何かを書いていた。

「……もう数学でいいかな。クイズ考えるの面倒だし」

何問も考えるのは面倒だ。死と隣り合わせなので必死に考えるのだが。

フランドールが地下に軟禁されている理由はその力の恐ろしさ故だつたと分かった今、またあの部屋に戻るのも気が引ける。

対策に十字架でも作つてみようか……咲夜が殺しに来るだろう、多分。

それにしても、幻想郷にはまともな生物がいないのだろうか？ 妖精に妖怪に魔法使い。咲夜は人間らしいが規格外な力を持っている。

レミリア達の言うスペルカード。自分には使えないらしいがどういうものだろうか。

もう寝よう。考えるのにも疲れた。

明日は……生きていられるだらうか？

さて、夜が明けて日も昇った。

何故、ベッドに血痕があるのだろうか……。

それに頭が少しふりふりする。貧血にでもなつたかのようだ。

「まさか……」

真相を確かめるために咲夜を探す。

意外と早く見つかった彼女の手には赤い液体の入ったビンが。

「おはよう。気分でも悪いの？ 風色が悪いようだけれど」

「それだけ血を抜かれたら気分も悪くなる。言つてくれれば自分でやつたんだけど……」

「お嬢様が急に言い出したから仕方なかつたのよ。三時間前だつたかしら」

「三時間前つて明け方だろ」

「寝る前に飲まない？ お酒か何か」

「て事はお嬢様は完全に日中寝て過ごすつもりか？ 日光に弱いつて言つても不健康だと思うが」

「たまたまなのよ。昼間は行動が制限されるから夜更かしして、

毎晝すと寝てゐる」

「……そつか」

「お好めにござりたいことと思つ。自分に害が出なこよひにござりませうが。

「あと、お嬢様から伝言。妹様、たぶん田舎更直後から往つてゐる
筈。らしこわ」

咲夜から伝言を聞いた直後、勇輝は地下室に向かつて全力で走り出
した。

早くも死に一歩近づいてしまつた気がする。

其の漆（後書き）

現時点で全てにおいて役立たずの主人公（仮）です

其の捌（前書き）

前回のあらすじ

朝起きたら血が……。

其の捌

「……遅いよ」

トーンの落ちたフランの声に冷や汗が伝つ。

「申し訳ありませんでした。フランダール様……」

駄目だ、恐怖で頭が回らない。

「時間は言われてなかつたから怒らないよ。今日来る約束は守つてくれたし」

無理だ、田だけが笑つていな。

「時間をお伝えしなかつたのも俺のミスです。すみません」

誠意を持つて謝る。それがほとんどの頭で考え出した答え。

「じゃあ、今田一田あつひとにこにこたら許してあげる。こによね?」

「……? そんな事で良このですか?」

「うふ。だから昨日の続きしよ、今田まじんな問題?」

少し拍子抜けしてしまつたが、命が助かつたのなら十分だ。

「では最初にちよつと確認を。フランダール様は数字の計算が出来ますでしょうか?」

「それくらいこフランにも出来るよ、……得意じゃないけど」

「では」の問題が解けたら何か一つ、フランデール様の願いを“俺の叶えられる範囲で”叶えてさしあげましょ」

一部強調して言つたのは仕方ない。でなければ弾幕「」の地獄を見るか粉々に破壊されるかもしれない。

「ホント？ ならフランが諦めるまで答えをだしからダメだよ」

「分かりました。頑張つて下せ」

とんでもない地雷を踏んだ氣もするが、一度宣言した事を訂正する程落ちぶれたつもりはない。

それに、」の問題は高校の数学をクイズのように変えただけだ。早々解けるようなものではない。

現にフランは問題の書かれた紙を見て唸つている。

これならしばらくは時間が稼げるだろう。

しかし、ふと思つたのだが食事はビーフいたら良いのだらうか。昨日の夜から結局何も食べていない。

……もしかしてこれはピンチなのではないだらうか。

「……あの、フランデール様」

「まだ考へてるから黙つてて。絶対に解けるから」

次は暴力になるかもしない。黙ろう。

沈黙が続く事一時間。

「フランドール様……」

「黙つて…まだ諦めてないから」

空腹を意識したせいか、さつきから胃が悲鳴のような音を響かせて
いる。

そして更に一時間。

「フランドール様。そろそろ……」

「五月蠅い！ 集中してるから黙つてー！」

泣きたくなつてきた。

ずっとフランの様子を見ているだけ。暇だし腹が減つたし、いい加
減許してほしい。

それから数分経つと、フランに変化が表れた。

首が力クンと揺れているのだ。レミリアの伝言通りなら夜からずつ
と起きていたのかもしれない。

それでなくとも解けない問題とならめつにして数時間経っているの

だ。眠くなるだろ？。

「……フランデール様。いくら問題を見つめても答えは浮かび上がってはきません。一度休憩にしてはどうでしょうか？」

「……ん。じゃあ枕」

提案を受けたと思えば、勇輝の足を枕にしてすぐにフランは寝てしまった。

余程寝るのを我慢していたのだろうか。一分もせずに寝息が聞こえてくる。

普通の人間の子供のように無邪気な寝顔は、とてもフランが危険な存在とは思えない程幼さを感じる。

「……そこは駄目でさーん。死にそつなので食事を運んできてくれませんかー？」

両手を後ろにつき、顔を上に向けると後の扉から覗く咲夜が見えた。咲夜は音を立てないよう扉をゆっくり開けて、部屋に入る。

「まさかここまで妹様が手玉にとられるなんて思いもしなかったわ。それと、貴方がそういう趣味だという事も予想外ね」

「どんな趣味だ……。というか本当に昨日の夜から何も食べてないんだ、持ってきてくれないか？」

「分かっているわよ。ほら

咲夜がパンを取り出し、それを渡される。

「それと忠告。妹様はお嬢様と違つて少食ではないから、気をつけ
て」

「干からびるかもな。遺骨はどうなるんだ?」

「死体は森に放り投げておくわ」

骨も残してくれないらしい。

「なら死ねないな。それと、お嬢様に今日はここから出しても「もう
ない事を伝えておいてほしい」

「役に立たないのでから一生ここでもいいんじゃないかしら」

「ストレスで死ねるな、確実に」

咲夜は「馬鹿じゃないの?」と言ひ捨てて部屋を出ていった。

フランはまだ寝ている。

起きれないように体勢を変え、横になる。

どうせ暇だ。寝てしまおう。

まだ幻想郷に来て一週間も経っていないのだが、色々とありますぎた。

あの平穏な学園生活がひどく懐かしいが、戻れる確率ビリやか可能

不可能も分からぬのだ。 考えても仕方がない。

とりあえず今は休もう。

目を閉じると、数十秒で意識は落ちていった。

其の仇（前書き）

前回のあらすじ

フランと寝ました。

其の仇

真つ暗な闇の中、勇輝は意識だけをはつきりさせていながら体を動かせないでいた。

「気分はどうかしら。人の夢に入り込むなんてしたことないから不安なのだけれど」

聞こえてきた誰かの声。

聞き覚えは無いが、声から女性であることは分かる。

いつたい誰なのか……姿は見えない、ただ声だけが聞こえた。

「もしかして話せないのかしら？ まあいいわ、とりあえず貴方が置かれた状況だけ説明させていただくわ」

置かれた状況…？ どういう事なのだろうか。

「あら、意識だけははつきりしているのね。思っている事が伝わつてくるわ」

「どうか、夢だからか。……疲れているのだろう。

「貴方が幻想郷に来てしまったのは偶然、貴方が刺されて倒れた場所に境界の歪みがあつたから」

境界の歪み……何の事だ？

「それと、これはただの夢ではないわよ。私は現実に存在する、私の力は“境界操る程度の能力”、夢と現実の境界を繋げてみたのだけれど。信じられる?」

「どうせ信じようが否定しようが変わらないのだ。どうせ幻想郷では異常が普通なのだから。」

「良く分かってるじゃない。まだ幻想入りして数日だというのに」

幻想入り?

「IJの幻想郷に迷い混む事よ。主に私が原因の事だけど」

……おい。

「勘違いしてもらつては困るわ。貴方が幻想入りした事については私は関わっていないの、貴方は偶然にも境界の歪みに触れ、偶然にもこの地域に飛ばされ、偶然にも氷精に気に入られて一夜を無事に過ごし、偶然にも紅魔館に受け入れられ、偶然にもフランドール・スカーレットに気に入られただけなのだから」

……そう言わると随分と都合がいいな。

「……? 貴方の力ではないのかしら」

そんな都合良くな状況を操作できる能力があれば刺し殺されたりしないはずなんだが……。

「ああ、それもそうよね」

それで、いつまでこの状態が続くのだろうか。

「私が貴方の夢から出でていけば田が覚めるのだと思つけれど」

なら出ていってくれよ。別にこれ以上話そつと懸つひとはないのだから。

「つれないわね。まあ用があるわけでもないから今回はこれぐらいにしておきましようか」

次第に鮮明だつた意識が薄れ始める。

「あと、刺された傷を治したのは私ではないから」

目が覚める前、淡い紫色の服を着た女性が見えた気がした。

「……本当に夢、か」

目は覚めたのに何故か体がだるい。いや、重い。

「……フランデール様、何をしていらっしゃるの？」

仰向けになつている勇輝にフランが乗つていた。それに、首筋に噛みつかれている。

「お腹が減つたから」飯。いつもは料理されてたけど、無かつたから

料理がなかつたら食品を生で食べる子なのだろうか……いや、殺されてはたまらないが。

といふか咲夜に血を大量に抜かれているのこれ以上血を失うのは命に関わる筈だ。しかし、頭はすつきりしているし貧血の症状は出でていない。

まるで、朝に血を抜かれたのは夢だったかのように……。

「……とにかく、寝ながら食事をするのはどうかと思しますのどうぞいでもらえないのでしょうか」

「ん、もうこいや。それよつさつきの問題を解かないと」

そいつてフランは勇輝の上から降り、問題の書かれた紙を見る。

「……フランドール様、その問題はこれから考え始めなければ解けませんよ」

このままでは一生考へてしまいそうなのでヒントを出す。

フランもそれに文句は言わず、言われた通りに解き始める。

しかし、夢の中で言われた事。確かに今までの自分の状況は出来すぎている。もしかしたらもっと口奥に飛ばされ妖怪に食われていたかもしない。チルノに氷づけにされ殺されていたかもしない。レミリアが問答無用で殺していたかもしない。フランに殺されたいたかもしない。

ここまできると最早必然、ここだけでして生活することが決まっていたかのようだ……。

「…………え……ねえつてばー！」

フランの声で勇輝は我に返る。

「ど、どうかしましたか？　フランデール様」

「問題解けたよ、これで合ひてるよね？」

見ると、紙の端の方にフランの書いた答えが。

「はい、正解です。よく頑張りましたね」

「じゃあ約束。一つお願いを聞いてくれるんだよね？」

「ああ、そんな自ら地雷を踏むような発言をしていた気がする。

「何でしちゃうか？　俺に出来ることは限られてるのであまつフランデール様にとつて有益な事は出来ないかと思いますが」

「大丈夫。簡単な事だよ」

フランは「ゴー」と笑って、自分の願いを口にする。

「お姉様と結婚してフランのお兄様になつて」

死ねと言われたような気がした。

其の仇（後書き）

ちょっと今更な主人公のプロフィール（幻想郷に来る前）

名前	桜井 勇輝
性別	男
年齢	19
身長	約175
体重	約58

大学の医学部に通っていた。父親は無免許の医師、母親は幼い頃に死去。

手先は器用で頭の回転も早いのだが体力はあまりない。
たまに父親の仕事を手伝っていたため、ある程度の応急措置や対処法などは分かる。

髪は黒く、適当に伸ばしてありそれなりに顔立ちも良い。

このような人でした。

其の拾（前書き）

前回のあいすじ

爆弾発言からの……。

其の拾

「いらっしゃり向でもそれは無理かと……」

フランの発言をまだ全て理解出来ていない頭を向とか動かして否定の言葉を伝える。

そもそも一人の見た目からして年齢は小学生低学年、またはそれ以下だ。

「どうして無理なの?」

「まず、俺にはその資格があつません。従者といつ身分ですか。それにお嬢様は幼すぎます」

「お姉様もフランもずっと歳上だよ?」

「は?」

「何百年も姿は変わらないにナビ、フランはもつあと何年かで五百歳。お姉様はフランより五つ上だ」

「…………お、まあ年齢は良いとしても俺は従者です。結婚なんてとんでもありません」

詐欺だと想ひ。見た目の年齢とかもう詐欺だとしか思えない。

「えー、じゃあフランとなり結婚する? 旦那様でもいいから」

「申し訳ありませんがお嬢様に仕える身ですのでお嬢様の許可がないと出来ません」

それに無理だ。フランの言っている事が本当なら……。

「それに俺は人間です。だからどうしてもお一人より先に寿命を迎え、死んでしまう。辛いものですよ、身近な存在の死は……」

フランはそれを聞いて黙る。しかし、納得はいかないようだった。

「ですから、俺の事はただの使い勝手の良い召使だと思つてください。それ以上でもそれ以下でもない、小さな存在として」

考えようによつては拒絶に聞こえるかもしれない。だがこれが最良だ、ここに来て数日、会つて二日の人間を兄や夫と慕つて、それは彼女にとってプラスになるのか？

答えはノーだ。いつ死ぬか分からぬ程弱く、生きている時間は遙かに短い。

失うと分かつていて近付く覚悟もない、小さなお願い程度で決めて良い筈が無い。

「……じゃあ、もういいよ。ここから出ていって、一度この部屋に来ないで」

「……申し訳ありませんでした。フランドール様」

本当に、役に立たない男だ。

「……初めて来たときよりも重く感じる扉を開けて、部屋を出でいく。

「それで貴方は図書館に来て何がしたいの？」

「弾幕の一いつを使えるようにしたいので勉強を。そういう本つてありますよね？」

フランに部屋を追い出されてから丸一日。謝りに行こうと思つたが死亡フラグでしかないのは目に見えている。

真っ向からスペルカードルールでフランと戦い、酬いを受け謝る。それぐらいしか考えれなかつた。

「あるにはあるけど……その五段上、右から三十一冊目が人間用」

言われて手に取つた本の題名は『妖怪に勝てる弾幕入門』、不安だ。

他の本の表紙を見ると、『美しい弾幕の作り方』や『弾避け基礎講座』や『弾幕の神祕』など、内容に不安のある本が何冊かある。

「その辺りの本は何十年か前に貴方のいた外から来た本が参考になつてゐらしいわ。誰が書いたのかは知らないけど」

ショーティングゲームの本でも拾つたのだろうか……。とにかく、弾幕使えるようになるなら良い。

「これは持ち出しても良いのでしょうか？」

「駄目。中で読みなさい」

駄目だった。

とりあえず椅子を借りて、そこに座つて本を開く。

最初に書いてあつたのは弾幕は靈力を使い、攻撃弾を複数用いて作り出す物。……それぐらい分かる。

次に靈力について。人間は幻想郷の中でしか使えないらしい。靈力の概念やコントロールの仕方。

書いてある通りにしてみると、妙な力が体を伝うのが分かる。非科学的だがそれを自分で感じ取っているので否定は出来ない。

攻撃弾の生み出し方。試してみたが綺麗な球体にはならなかつた。何度もかやつてみないと無理かもしねり。

スペルカードについても書かれている。重要なのは名前で、弾幕の形状を記憶させるためのものらしい。

ルールは使うカードの枚数、自機数を決めて、カードが切れるか被弾回数が自機数に達したら負け。

妖怪と違つて攻撃弾の形状や打ち所によつては死ぬ。

また、最終的に自機数が同じで終わつた場合は弾幕の美しさで勝負

を着けるらしいが、これは第三者がいないと不可能だ。」

「……後は色々試すしかないか」

まだまだ攻撃弾も作れないのだからスペルカード云々は後にしよう。

本を元の場所に戻そしたら、小悪魔がやつておいてくれると言うので本を預け、自分の部屋に戻った。

「パチュリー様、あの方凄いですね。人間なのにもう力のコントロールが出来ていますよ」

「確かに早いけど、元々の靈力が大した事ないから無駄な努力なんじゃない?」

「あ、あはは……」

「……この会話があつたのを知るわけもなく、勇輝は部屋で攻撃弾を作る練習をする。

槍型の攻撃弾、鎧型の……これは弾なのだろうか? とりあえず色々試している。

「無駄な器用さだな……」

一番辛いのは靈力の少なさ。形は色々出来るにも関わらず数が少ないし連続は出来ない。

そして空も飛べなかつた。一ミリも浮かない。

これは大きなハンデになつてしまつ。相手は立体に動き回るが自分は平面しか移動できないのだから。

かなり前途多難ではあるが、やつていいくしかないだろう。

其の拾壹（前書き）

前回のあらすじ

何故か戦闘パートの兆しが。

其の拾壹

弾幕の修行を初めて一週間、満足の行くようなモノではないが一枚のスペルカードを作り上げた。

それ一枚を使うだけでもヘトヘトに疲れるので少ないなんて言つていられない。

つまり後攻になってしまふのだ。疲れた状態で相手のスペルカードを乗り切れるとは思わない。

とりあえず、後は実戦しかない。これ以上スペルカードを増やすのも不可能だ。

が、相手もいないのにどうすれば良いのだろうか。

それに、今考えたらこれは逃げていただけなのかもしれない。

謝るならすぐに謝れば良かつたのに、こうして理由をつけて、自分の安全を確保すると言いつつ傷つける手段を獲得しているに過ぎない。

本当に駄目な奴だ。

「……今日死んでも、自業自得か」

フランの部屋の前でポツリと呟く。

重い鉄の扉を開けて中を覗く。

壊れた家具、裂かれたぬいぐるみ、明かりの無い暗い闇。

「フランデール様。いらっしゃいますか？」

一步中に踏み込んだ時、何かが顔の隣を通り抜け、頬を血が伝う。

「来ないでって、……『戻ったよね？』」

そこにはいたのは狂気に染まつた赤い目をした悪魔。

「申し訳ありません。しかし、どうしてもお話ししたい事がありましたので」

返ってきたのは言葉ではなく弾幕の嵐。

勇輝はそこから弾かれたように通路へ飛び出す。

「フランデール様……ツー」

「壊れちゃえ、壊れちゃえ、壊れちゃえツー……」

降りやむ事の無い弾幕の雨を必死に避けるが、今にも当たってしまうやうだった。

体を無理に捻つて避ける。その場から身を投げるよつて安全地帯に飛び込み避ける。

……………“ひや、ひや、良くも悪くも今回の行動は正解だつたらし。

白衣のポケットから、まだ新しい札を取り出す。

「あはっ、弾幕『じつ』！」

「数は一枚、自機数も一機、負けたら相手の命令を一つ聞く。です
よフランドール様……」

スペルカードを持つ手が震えている。

「なじりつつたと壊れちやえ！… 禁忌『レーヴァテイン』…」

赤いレーザー状の攻撃、空中に逃げれない勇輝にとつてこれ以上無
い程に有効な攻撃だ。

それをフランは剣ように使い、振り回す。しかもその後に小さな攻
撃弾が続いているのでたちが悪い。

頭を落ち着かせ、冷静に弾幕を避ける計算を立てる。

まずは縦に降り下ろす攻撃、長さは五メートル、幅一メートルぐら
いか。それを確認。

次はそれを横屈ぎに振るわれる。剣の上は降り下ろした軌跡になる
ので不可能。床との僅な間を這つように避ける。軌跡に残る弾幕に
も隙間があり、ある程度は動ける。

「まだ壊れない……早く壊れちゃえ！…」

再び横屈きの一撃、今度は歯を返し切り裂くように振るつてこる。

これは上に飛んで避け、弾幕の隙間に着地。

嫌な汗が全身から吹き出す、当たつたら本当に終わりだ。

一度、靈力の使い方を知つてしまつたからこそわかる、フランの弾幕の強力さが。もしあのレーザーに触れたら間違いなく触れた部分が消し飛ぶ。

スペルカードの制限時間は一般的なモノなら六十秒前後。それ以下やそれ以上にすることも可能だが、短すぎても逃げ切られる可能性があるし、長すぎてパターンを覚えられてしまつては疲れ損だ。

まだ三十秒。

フランは軽々と赤い剣を振り、勇輝を切り裂こうとする。

白衣の一部が焼け焦げた。少しかすつたらしい。

残り一十秒。反応が遅れて髪が少し焦げる。

残り十五秒。息が切れ始める。

残り十秒。体を思い切り捻りた折れ込んで避ける。無理に動いたせいか足首挫くが、避け続ける。

残り五秒。腕に少し攻撃弾がかする、皮を抉られ血が出た。

残り一秒。

「はあ……はあ……」

もう既に肩で息をしているようだが、勇輝は一分耐えきつた。

フランも少し驚いているようで、目を丸くした。

「…………はあ…………次は、俺の番、です。」

ぼろぼろの白衣から取り出したのはさつきのスペルカード。

「行きます。戯符『欠陥迷路の遊戯』」

まず、最初に生み出されたのは無数の鎖型の弾幕。

それはフランを狙うものではなく、一人を囲うための壁となる。

更に鎖は二人の間に幾つもの壁を作る。そして、上空に逃げられな
いように壁の高さで更に鎖型の弾幕が交差し、人が通れる隙間を埋
める。

フランは自分を狙うものでは無いことを知り、静観していたが唐突
に攻撃は始まった。

壁となっていた鎖型の弾幕がフランに向かい、乱雑に弾けた。

一瞬驚いたフランだが、別の通路へ逃げる。しかし、そこには勇輝
が放った攻撃弾が飛んでいた。

横の通路に入り避けるが、それはフランの方へと向きを変えた。

「追尾弾！？」

フランは狭くなつた通路を飛び、追尾弾を振り切ろうと通路を抜けしていく。

幾度となく、壁となる弾幕が弾けたりどこからともなく飛んできた弾幕を避ける。

残りは二十秒。

そこで勇輝に変化が表れた。

「……は？」

膝から力が抜け、床に手をついてしまった。

靈力が足りないので。

それに伴い、弾幕の密度は圧倒的に少なくなり隙間だらけになる。

フランを追ついていた追尾弾も消滅。

今の勇輝に、ここから勝てるほどの力は無い。

其の拾毫（後書き）

紅魔郷は五百回以上ピュリしました。今ではボムも全て消費できるようになりますが。

其の拾弐（前書き）

前回のあらすじ

ピンチになった。でもどうせ勝つよね、初戦だし。

其の拾弐

弾幕が薄くなり、勇輝も靈力をほとんど使いきった状態。

「嘘、だろ……？」

おそらく、勝たなければフランは止まらない。そして、勝ちまであと数瞬だった。

結局は自分はただの人間だった。

ろくに弾幕を使えない靈力しかなく、自らが傷つけた少女を止めることが出来ない。

本当に、これで終わってしまうのか？

終わって良い筈が無い。

傷つけた少女を放つておくれのか？

そこまで薄情なつもりなど無い。

フランドール・スカーレットを止めたくは無いのか？

言つまでも無い。止めたいから、謝りたいからして戦いを選んだのだから。

しかし足りない。力が、靈力が。

自分にはそれが足りない。

もしあと数パーセントの靈力があれば。

もつあと数歩分の力があれば。

そんな欠陥が投げれば

「…………嘘？」

フランに勇輝の弾幕が被弾した。

それだけではない。一度、薄くなつた弾幕は最初の数倍の密度へと変わつている。

そして一分が経過したのか、弾幕は全て消滅した。

「俺の勝ちです。……フランドール様」

「あ…………」

負けたことで我に帰つたのか、フランが申し訳なさそうな顔をする。

その視線は勇輝の腕に向いている。血の流れるその腕に。

「ああ、傷なうじ心配なく」

この欠陥である傷は必要無い。

傷が少しずつ消え、何事も無かつたように元に戻る。

「えつ……え？」

「どうやら医者っぽい力を授かれたようですよ。“欠陥を修正する程度の能力”、らしいです」

「何それ狡い」

確かに狡いとは思つが、使えるようになってしまったので仕方ない。

「こやあ、色々と面倒ですよ。付け加えた物は一日で消えますし、一日三回の回数制限もあるようですから」

「こじまで理解しているのも、知らないという欠陥を知らず知らずの内に修正したため。今日はもう使えないのだ。

「では命令の時間です」

ビクッ、とフランの体が震える。

勇輝はフランへと近寄り、ポンと手を頭に置き言った。

「先日の俺の発言。アレを訂正させてください。そしてここにかかるお願いです」

フランの頭から手を離し、手の高さを合わせるように両手を組む。

「俺を、これからもフラン様の遊び相手として部屋に招いてはいただけないでしょ？」

フランは頷く事が出来ない。自分が勝手に怒り、今日に至っては話も聞かずに攻撃してしまったのだから。

「それと、俺は貴女に嘘をつきました」

「くつ？」

突然の勇輝の発言にフランが声を漏らす。

「どうやら、この力の用法を考えた結果……俺、死なないようなんですよ」

「え？ ちよつと……何で？」

「あのですね。幻想郷に来る前に一度命を落としているのですが、多分その時から微弱ながら力は使えていたんですよ。予想ですが不幸という欠陥を修正し、幻想郷への歪みに触れた。幻想郷に着いてから力はある程度の強さになり、死という欠陥、傷という欠陥を修正したんでしょう。死が打ち消された俺は死ねない人間となる訳ですね、歳はどうなるか分からないので明日にでも老化を修正しておかなければなりませんが」

ポカーンとしてしまっているフランの頭を撫でる。

「俺は今日のフランドール様の行動を咎めません。ですから、あの日嘘をついてしまった俺を許していただけませんか？」

「…………たら許してあげる」

か細い小さな声でフランは答える。

「何でしょう?」

「ちゃんと、フランを様をつけないで呼んでくれたら許してあげる」

「そうですが、では」

気持ちを切り替えるように咳払いをして

卷之二

....え？

「また随分と派手に暴れたのね、フラン」

勇輝とフランが仲直りした数分後、レミリア、咲夜、パチュリーの三人が地下の通路へと降りてきていった。

フランは勇輝に後ろから抱きつき、ユーリアを挑発するよつた。……。

「お姉様がお兄様を従者なんかにするのが悪いんだから」

「お嬢様。申し訳ありません」

「それよにもよく生きていたわね……スペルカードルールで決闘をしたのでしょうか？」

「数は一枚でしたし、ちょっととした収穫といつか力の発現もありましたので何とか。やっぱりただの人間が使うには派手すぎるスペルカードだったようなので」

白衣はぼろぼろのままだが、勇輝には傷も疲れた様子もない。

「それで、力とは何かしら」

「えーと、“欠陥を修正する程度の能力”ですね。色々と制約のようなものはありますか」

「……狡いわね」

レミコアの発言に後ろの二人やフランも頷く。

「確かに、今日中でしたら靈力も尽きなことがありますからね……」

今日使つたのは靈力の少なさ、知識、傷の三つ欠陥を修正。

次に使えるのは時計の指針が十一を指した時。

「とりあえず、これからもフランの世話役として頑張りなさい」

紅魔館での生活は、まだ始まつたばかりである。

其の拾參（前書き）

前回のあらすじ

序章が終了いたしました。

「紅い霧、か」

「そり、お嬢様は日光に弱いから紅魔館の上空を霧で包むの」
紅魔館に来て2ヶ月。もうすぐ夏という事もあって日の光も次第に強くなつてきている。

家事については、やつたことがないのにやらされた。という事だったので一通りの説明を受けた今はある程度こなせるようになつている。

靈力についても、能力が発現したことによ影響したのか、一般人以上には増えていた。

パチュリーが何度もあり得ない、あり得ないと呴いていたが今は忘れてしまおう。

「それで紅い霧出すつて言つても別に外で遊ぶ訳でもないんだろ?」

「……反射した日光で指が氣化したらしくの」

「ああ、そつ……」

吸血鬼は力が強い代わりに弱点が多い。

日光や流水、ニンニクに十字架。とりあえず多い。

「じゃあ、俺はフランに呼ばれてるから」

「暴れないでよ」

「……そつならない」と祈る

実は、あの日から何度も弾幕での決闘をしている。

死なないとわかったフランは容赦がなく、何度も死に日に遭っている。

死なないのだが痛いし辛いし、つかり回数制限に引っ掛けられた時は大惨事だった。

便利さが仇になるとはじついつ事を語りだらけ。

「あ、お兄様！」

扉を開けると、フランが駆け寄ってきて抱き付いていた。

「フラン、とりあえず中に入れてくれ。それと一度離れてくれ、閉めれないから」

最近では、フランはすっかり勇輝になつていてる。実の姉であるレミリアよりも……。

「じゃあ今日はこれを使って遊ぶか

「カーナー……やつたー弾幕！」……

「カードだけビスペルカードじゃないから、トランプっていう一から十三までの数字がかかる四種類とジョーカーが一枚。割と万能で色々な遊び方があるから一日潰すのは訳ないと思うぞ」

まずはババ抜きから。思った以上にフランは顔に出やすく、負ける気がしなかつたが手加減して五分五分の勝負をする。

それにしても、紅い霧を出すのは構わないのだが人里に影響は無いのだろうか？

行つたことはないが数百人の人間が住んでいると聞いた。チルノのは数え間違えだろう。

それと、ここは島だつたらしい。湖で見たのは対岸であつて湖が小さかった訳では無かつた。暗くなり始めていたのも影響していたのだろうが。

つまり、空を飛べない勇輝は人里に行けない。泳ぐ、船を作るのは構わないが食われて死なないようにと言われた。

まあ、ある程度信用もされ自由になつてきていた。

「フラン。これで上がりな」

「なつ……！？」

十勝九敗、そろそろババ抜きはいいだろう。

「他の遊びでもするか？ ババ抜きだけじゃつまんないだろ？」

「えー、フランまだ勝つた数負けてるし」

「明日も出来るだろ、次は……」

ダウト、ポーカー、神経衰弱、ブラックジャック。とりあえず色々とやる。

神経衰弱はフランが途中でキレかけたため、今後やらない事にする。

「じゃあ、明日にまた来るかい」

「もう終わりー？ お兄様もここで寝たらいいの？」

「一応、他にもやらないきやいけない事はあるからな」

「じゃあ明日はスペ力作ってきて弾幕」しこね

「一週間前にやったばかりだろ……。それも地下通路が崩れかけるまで」

弾幕」の名の通り、スペルカード以外の弾は禁止しているのだがキツーものはキツー。

フランの頭を撫でてから、部屋を出ていった。

「それで、霧は出来なかしら？ 咲夜」

「はい。お嬢様。先程から紅魔館の上空に展開しています」

「そう……。良くやつたわ咲夜」

レミリアは、窓から紅い空を見上げ笑う。

しかし、霧はまだ放たれたばかりであり、当然隙間もいくつもあり、その隙間から夕日の光が射しこみ、レミリアの髪に当たり、レミリアの髪が気化する。

גַּם־בְּרִית־

レミリアの体がフルフルと震え出す。

「咲夜あ
：！
」

そして、いつもの気品は何処へ行つたのか外見相応の子供のように咲夜に抱き付き泣き出した。

「大丈夫ですよお嬢様。髪はもう元に戻りましたし、あと少しで霧が日の光を通さないようになりますからね」

妙にうつとりとした表情で、咲夜はレミリアを抱き締めなだめた。

「アーティスト」

そこに吸血鬼の威厳は微塵も無い。そして、そんな部屋に入つていく度胸は俺には無い。

「……部屋に戻ろう」

レミコア本人に、フランと遊び終えたらこの部屋に来るよ」と言わ
れていたのだが、こんな所を見たとあっては弾幕が飛んで来きかね
ない。

そっとドアから離れて自分の部屋に行こうとした。

「どこへ行くつもり?」

離れたドアから咲夜が出てきた。

「あ、ここだけ。隣の部屋かと思つてた」

咄嗟に言い訳。咲夜は一瞬だけ疑うような表情をしたが、横を通り
抜けていく。

「見なかつた振りをしなさい。お嬢様もそれを望んでいるから

小声だが、確かにそう告げて咲夜は自分の持ち場に戻る。

「勇輝。最近フランと決闘ばかりしているじゃない?」

「いえ。最近は部屋で大人しく遊んで下れる事が多いですよ」

「ふうん……。そろそろ口も沈むわね」

ああ、また嫌な予感がする。

「少し、殺し合をしてみましょつか」

其の拾肆（前書き）

前回のあいさじ

ハリコトとやつれいだ。

其の拾肆

レミリアの言葉に、フランと初めて会った時の感情を思い出す。

「……殺し合いとは物騒ですね。いくら力が目覚めたと言つてもお嬢様の相手になれるとは思いませんが」

「私も退屈なのよ。まともに行動できるのも夜だけ、ちよつとした余興よ」

余興で命を奪われては堪らないのだが。

「やうね……あと一時間もしたら用も出るでしょうし、中庭に来なさい」

“やつやら、本氣らし”。

憂鬱だが仕えている身なので文句も言えない。フランの相手をしているが、レミリアの従者なのだから。

「分かりました。殺し合いとの事ですが、攻撃に使うのはスペルカードのみでよろしいのでしょうか?」

「いいえ。相手がスペルカードを使っている時に隙さえあれば攻撃しても構わないわ」

それだけ聞くと、頭を軽く下げるから部屋を出た。

部屋に戻ると、使うスペルカードの確認を始める。

フランとの弾幕ごとににより、数だけは増えているのだが使い物になるのは一部のみ。

フランと最初に戦った時のスペルカードは、カードの枚数を一枚に制限していたからこそ勝てたようなもの。正直、レーヴァテインで鎖型の靈力弾を破壊されたら負けは確定。

それに消耗も激しい。無駄が多いのだ。

「……逃げたらそれこそ殺されそうだしな」

自分で咳いておいて寒気がしたが、仕方ない。

十枚ほど候補をあげ、白衣に突っ込んでおく。

どうやら、時間も来てしまったようだ。

「スペルカードの枚数は五枚、三回ヒットしたら負け。これでいいかしら？」

「構いませんよ、精々最初の一枚で負けないよ」とします

霧のせいで紅く見える月に照らされる紅魔館の庭で一人は向かい合つていた。

紅魔館の玄関では、フラン以外のメンバーが今か今かと決闘が始まることを待っている。

「張り合いかないのは面白くないから……勝者が何か一つ敗者に命令する。ところのせどつかしら？」

「随分と面白みのない賭けです。どちらが勝つかなんて分かりきつているでしょ、うこ……」

「もしかしたら勝てるかもしれないでしょ?」

「……既に“もしかしたら”の確率でしかないんですね」

「じゃあ始めましょうか……楽しい余興を」

一人の間の空気が張り詰めたものに変わる。

最初に動いたのは勇輝。

「解符『トラップパズル』」

最初に展開されたのはレミリアの身長の倍もある球体の靈力弾。數は十。

レミリアの左右で、五つずつ直列に停止。レミリアは上空に移動するが靈力弾は追うように移動する。

続いて、かなり長く細い靈力弾。槍のようにも見えるそれを展開。数は三十。

まずは一本が、最初の靈力弾の間を通して横向きに間を貫く。

レミリアも、小さな動きでそれを避ける。

続いて、一本、三本、四本。お互いに干渉しない様に、隙間を埋めるように槍は隙間を埋めていく。

ある程度の位置で停止するのが腹立たしい所だが、それがレミリアの動きを制限し始めた。

レミリアもそれに気づいて、靈力弾を放ち槍を破壊しようと試みる。

しかし、弾けた槍はその小さな破片をレミリアに放った。

「（最初こそ悔っていたけどかなり面倒なスペルね。コントロールも無駄に高い……）」

ここまで精密に操られると氣味が悪い。正直な所、レミリアでさえここまでコントロールは出来ない。

幸いにもスピードは無い、弾けた破片が少し速いが、一方向だけを気にすれば良いので問題ない。

残りは一本。これで相手は一枚消費。

しかし、レミリアは靈力弾の隙間から不敵にほほ笑む勇気を見た。

最後の一本は、レミリアを狙いつつ、真っ直ぐに飛ばされた。

全ての槍が横向きに停止している場所に。

「ツー！」

そこからは、爆発が爆発を呼ぶように槍が弾ける。

数本破壊したが、二十近くは無視していたのだ。破壊したら次の攻撃に繋がってしまう。進んで破壊したくないのも頷ける。

そんな、樂をしたいといつ感情を利用し相手の周りを埋めるよつて爆弾を設置していくスペルカード。

正直、嫌らしいことこの上ない。絶対に嫌われる。知らずに最後まで避けていた人間からは苦情が来るだろう。

四方八方から飛んで来る弾幕。その一つは見事にレミリアに命中した。

ギヤラリーからは驚きの声が上がる。

「まさかお嬢様が最初のスペルカードで一機失うなんて……」

「お兄様は初見じゃ避けられないようなスペカを作るのが樂しいんだって。アレは狡いけど」

何故か地下からフランも出てきている。

「妹様！？ ビリヒニヒニ……」

「お兄様が戦う気がしたから出てきたの」

そんな理由で出て来ると思った者はいないし、妖精メイドもこの時間はうるつていないので出て来ないように対応するのには不可能だ

つた。

肝心のパチュリーは観戦しに来ていて、レミリアは戦っている。まあ、実害はなさそうだから良いかと、他のギャラリーは戦う一人に目を向けた。

「まさか私がいつも簡単に攻撃を受けるなんてね……」

「簡単では……無いです、ね。一枚で、これだけ精神的に疲れるのですから」

細かい操作が多い分、精度を上げるために集中を切らさないようこしなくてはならない。

「じゃあ、私も少し本気を出しちゃう」

レミリアがスペルカードを取り出す。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

其の拾伍（前書き）

今更ながら能力についての説明

能力名 欠陥を修正する程度の能力

- ・使用回数は一日三回まで。

・取り消す、元に戻す等は一生持続する事が可能だが新たに生み出したり、付け加えたものは日付変更と共に消える。

- ・欠陥と認識できない限り、修正は不可能。

- ・別に代償や副作用は無い。

其の拾伍

レミリアの手に、妖力で作られた深紅の槍が握られた。

どこか、フランのレー・ヴァテインを思わせるそれは、間違いなく殺すための手段として生み出されたもの。

今更だが、弾幕で競う勝負の筈なのに近接武器を使って良いのだろうか？

「行くわよ」

レミリアがグングニルを横薙ぎに振るうと、大きさ五十センチほどの妖力弾が勇輝に向かつて猛スピードで放たれた。

その場から飛び退いて避ける事が出来たが、地面が爆発し爆風が勇輝を襲つた。

「驚いている暇はないわよ？」

いつの間にか背後に立つレミリアから発せられた声に反応し、靈力で盾のよろづなものを生み出す。

簡単にそれは貫かれたが、標準を狂わせる事には成功した。

冷や汗が全身から吹き出す。

「やはり姉妹ですね。少し戦い方が似ています」

「余裕がありそうね。もつ少し速さを上げましょうかしじら~」

飛べない勇輝では機動力も行動範囲も相手に劣る。それでもここまで避けられるのは才能でもあつたのだろうか。

レミリアが正面からグングールを突き刺そつと振るう。

こちらからも攻撃を仕掛けているが、全て叩き落されていた。

「まぢは一回」

突き出したグングールを引き直さず。一回転。

それによつて生み出された靈力弾が勇輝にヒットし、体を大きく跳ね飛ばす。

「かはつー?」

腹に直撃したそれは、肺から酸素を押し出し呼吸を狂わせた。

足や手をやられなかつたのはせめてもの救いだ。まだ戦える。それに…

「手加減、ですか……」

今、グングールで足の一本でも切り落とせば勝負はついたも同然だつた。

突きに集中していた事もあつて、全く反応出来ていなかつたのだ。

「従者が刃向かつた訳でもないのに壊しては勿体無いでしょ?」

「殺し合ひと言つたのはお嬢様でしたががね……」

「あら、その割には最初のスペルカードに殺傷力が無かつたような氣もするけど?」

どうやらばれていたらしい。

精度を上げるためにもあるが、パワーが無かつたのは事実。

「本氣を出させたいのなら、勇気も本氣で私を殺しに来なさい。でも安心して」

グングニルを構え、妖艶に微笑む。

「今からは殺しに行くから」

レミリアが、一瞬で距離を詰めて来る。

痛みを無視して立ち上がり、靈力弾を放つ。

あつたりと避けられたが、少しスピードは落ちた。

「偽符『サクリファイスドール』！」

スペルカードが、半透明な人型の靈力の塊と化して剣を生み出し、レミリアのグングニルを受け止めた。

「本当に器用ね……医者を辞めて物造りの職人でも目指したらどう

かしら？」

「医者にも手先の器用さなんかは必要なんですよ」

前方からはスペルカードによつて生み出された者から、後方からは勇輝が、同時に靈力弾を放つ。

レミリアは、グングールを消して回避に専念した。

どうせ、あと数秒しか持たないのなら邪魔になると思ったのだろう。

結局、一度も当たらないままスペルカードの効果が切れた。

「思った以上にやるようだけれど、これで終わりにしまじょうか」

レミリアが一枚目のスペルカードを取り出す。

「『紅色の幻想郷』」

数十秒後、勇輝はレミリアに敗北した。

「……スペルカードで対抗してもこの結果か」

レミリアの一枚目のスペルカードに対抗するために勇輝も二枚目のスペルカードを使用したのだが、呆気なく負けてしまった。

庭に仰向けに倒れ、先程までの戦いを思い出す。

圧倒的な量と力の弾幕。

序盤は避けていたが、すぐにのみ込まれてしまつたのだ。

「暇潰しにはなつたわね。もう少し強いかと思つていたけれど」

「申し訳ないです。期待外れでしたでしょうか？」

起き上がろうと思ったが、体に力が入らない。

「勇輝の能力で、洞察力や身体能力を向上させたのなら勝てたのではなかつたの？ 加減をしていたなら殺すわよ」

「…言い訳に聞こえるでしょうが、回数制限に達してしまつていたので。二つ修正した後にお嬢様から命令が下りましたので靈力を修正するのが精一杯でした」

それを聞くと、レミリアは面白くなさそうな顔をした。

「なら、次は万全の状態で挑みなさい。また機会があれば申し付けるわ」

それだけ言つとレミリアは紅魔館に戻つていき、ギャラリーも解散していく。

だが、一人だけ勇輝に近づく者がいた。

「まさかとは思つけど、お嬢様に勝てるつもりでいた？」

「咲夜か。……勝てるとは思わなかつたけど、勝つために戦つてた」

未だに体は動かないで寝たまま話す。

「貴方は外に帰りたいとは思わないの？」

「どうしてそんな話になる？」

「外には吸血鬼も妖怪もいないんでしょ？ 美鈴から聞いたわ」

「ああ、そういう事か。お嬢様やフランにぶちのめされておいて、逃げ出そうって気にならないのか。答えは簡単、既に俺は外で普通に暮らしていく事が不可能だから。靈力やら能力が使える存在が普通通しかない世界で暮らしちゃ駄目だろ」

「……幻想郷から出る方法もあるし、外ではどっちの力も使えないと知つても？」

「お前は俺を追い出したいのかよ…。まあ、とりあえずは働くよ。向こうで田舎す事はあつたけど、それをこっちで叶える事は出来るだろうから」

それよりも部屋に帰りたい。こんな荒れ果てた庭で一晩明かすのは嫌だ。

「そう。じゃあ、あと三十分で日付が変わるから庭、元に戻しておいてね」

其の拾陸（前書き）

前回のあいすじとか要らなこですよね

其の拾陸

翌日の朝、じうも調子が優れないで部屋で寝ていた。

ダメージも元に戻したし、昨日の疲れは残つてはいない筈なのだが
体がだるい。

能力の副作用なんて事は無いのだが、どうこう事なのだろうか。

「いつまで寝ていろの……？」

「ああ、無断欠勤で悪いけど体の調子が悪くてな。特に病気って事
はないから看病なんかはいらない」

咲夜が起こしに来たのだが、だるさに負けて寝たまま対応する。

「分かつたわ。じゃあ、妹様の所まで引きすつて行けばいいのね

「は？　え、ちょっと待て。足掻むな。あの、え…？」

石造りの床や階段を引きずり回され、地下室の前に捨てられた。

「あ、お兄様。…じうじてそんなボロボロなの？」

氣配でも感じたのかフランが顔を出し、部屋の中に連れ込まれた。

「フラン。今日は少し楽な遊びで勘弁してくれ。体のだるさに加え
て拷問並みの肉体的、精神的ダメージを受けたから」

階段を降りるのがそこまで危険に感じたのは初めてだった。

「うん、別に良いよ」

しつとりで良いだろ？。頑張れば一寸を潰せる。

そして、次の日も、その次の日も体の調子は元に戻らなかつた。

風邪や疲労でもなく、これといった病気の症状も出でていない。

とりあえず仕事（八割がフランの相手）はこなしているが、何とかしなければならない。

能力で打ち消してしまつのが一番楽なのだが、それでは原因が分からないので止めた。

「という訳で図書館への入室許可を頂きたいのですが」

「……分かったわ。それよりも勇輝、勝負の前の約束は覚えているかしら？」

「ええ、……命令でしたよね」

今思つと主が従者に命令するのは当然の事なので、大したリスクは無かつた気がする。

「覚えているならいいわ。まだ考へていてる最中だから」

何を言われるかは知らないが、適当に聞いてこなしてしまえば良いだろう。

入室許可が降りたので、図書館へ行く。

相変わらず多すぎる本の中から探すのは不可能なので、小悪魔に聞いて案内して貰つた。

調べるのは風土病や幻想郷特有の植物や虫。

自分で原因が分からぬ以上は、違つた視点から見るしかない。

知らない土地、知らない力。

自分の知る病ではない原因となるものが見つかるかもしれない。

とりあえず、目を通していくがこれといって有益な情報は得られないと。い。

いや、有益ではあるのだが今知りたい情報はこれといってないのだ。

「貴方、靈力が相当弱くなっているけれど何かあつたの？」

通りかかったパチュリーから声をかけられた。

「靈力が、ですか？」

「ええ、人並み以上にはなつていたのに最初に見た時より弱く。妹様にでも何かされた？」

「それでいいのでこうして調べているのですがね……。ですが、そういう事なら調べる必要はないかもしません。管轄外ですし、靈力なんて、使っていても理解できないようなものだ。無理に改善する必要はないだろ？」

「死にはしないでしようから、しばらく様子を見ることがありますかね？」

「どうでもいいけど、本は元に戻しておいてよ」

言われた通りに本を元に戻していくが、やはり体の調子は悪い。だが、出来ることではないと普段通りの生活をしていった。

「侵入者? 一体何が目的で……？」

数週間が過ぎた紅い霧が月光を紅く染める中、勇輝は咲夜に叩き起こされていた。

「そう。霧が広がりすぎたみたいで止めようとした奴が一人。どっちも人間だけど力はそこらの妖怪を簡単に消し炭に出来るぐらい」

「……化け物の間違いじゃ？」

「いいから起きる。貴方は一階の階段前で待機。その前にパチュリ一様と私もいるけど警戒だけはしておく事」

「了解、まあ俺の所まで来ない事を祈ってるよ」

それだけ聞くと、咲夜は急いで持ち場に行くために部屋を出た。

とりあえず、白衣を着て自分の持ち場である階段に行く。

紅魔館の中は張り詰めた空気が充満していく、いつもよりも騒がしい。

館内には爆発音のようなものが鳴り響いているが、気にしないようにする。

「……面倒な。咲夜は倒されたのか出し抜かれたのか

田の前には篠にのった金髪の少女が。

「メイドなら巫女と戦つてるんだぜ」

「巫女のせいで医者と魔女が戦いになっちまつのか……」

「医者が人に怪我させるのは不味いだろ？だから通してくれ

「生憎、ちょっと前に医者から従者に転職したんだよ。大人しく帰つて寝る」

「」の霧を止めてから寝る

「……聞き分けのない女の子は嫌われるよ？」

少女がいきなり攻撃を仕掛けてくる。もうスペルカード云々ではなく普通の攻撃弾で。

同情するしかない。つい先程、十一時を回ったばかりだ。

靈力、体力、身体能力を修正。ただ、それを一括りの力として修正する。

これであと一回能力を使う事が可能なのだ。

こちらも応戦するために靈力で武器を作り上げる。

「そんな戦い方する奴は初めて見たんだぜ」

「そりだろ？ 僕も初めて使ったからな、これ」

作り出したのは鎖鎌。それも、異様に短い。

「それと、保険をかけとくか」

そう言って靈力の壁で少女の入ってきた出入口以外を塞ぐ。

「しまつた……」

「俺を通り抜けてお嬢様の所まで行かせる訳にはいかないからな。倒れるつもりはないけど倒してから行け」

「じゃあ遠慮なく。恋符『マスタースパーク』」

「は、ちょっと！？」

本当に遠慮の欠片もなく使われたスペルカード。それも『デカいレーザー』的な何か。

かわせば屋敷が壊れる事は必至。なら手段は一つ。

「つ！ 無理だろコレ……普通死ぬつづつのー！」

馬鹿高い威力のレーザーを靈力の壁で受ける。

死きる事はないが、全てと言つても良い程の靈力を注ぎ込んだ。もう受けたくない。

「弾幕はパワーだぜ！」

「馬鹿だろお前！ 僕が一般人なら消し炭になつてるぞ！」

「普通じやない場所で暮らす人間が一般人の筈ないぜ」

「……ああ、納得」

咲夜が思い浮かんでしまったのは申し訳ないと想う。

「じゃあ、決闘といこうか。方法はスペルカードルール。枚数無制限、相手が負けを認めるか戦闘不能になるまで」

「分かつたんだぜ。魔符『スターダストレヴァリア』！」

「少しほ落ち着けよこの野郎つ！」

其の拾漆

星形の攻撃弾を避け、叩き落し、一矢仇も攻撃を仕掛けた。

「そろそろ帰つては……貰えないな」

「当たり前だ。こんな迷惑な異変を放置して置く訳ないだろ」

お互に涼しい顔で会話しているのだが、その間には無数の弾幕が飛び交っている。

その一つ一つが一撃で相手を昏倒させる程の威力があり、少しでも氣を抜いた方が負けるのはお互い理解している。

「異変？　何の事だ？」

「とぼけても無駄なんだぜ。この霧が人里に住む人を苦しめて、それが結界の外に出るかもしないんだぜ」

「……あー、そういう事だつたか。俺の体調が悪かつたのは霧が原因、と」

紅い霧は人間には有毒。たぶん霊力の量が関係しているのだらう。

だから普段霊力の少ない自分には症状が出て、霊力が多い咲夜には影響が無かつた。

「分かつたらそこを退いて貰うぜ」

「そいつは無理だな。俺も怒られたくないんだよ」

弾幕の嵐が激しさを増す。

「修正『ラビリンスボックス』！」

勇輝がスペルカードを使つ。

少女の上下左右前後を五メートル程の靈力の壁で囲おうとしたが、間一髪の所で脱出されスペルカード一枚を無駄にした。

「幻想郷で一番早い私を捕まえようなんて頭が高いぜ」

「ホントに早いな、当たる気がしない」

「なら退いてくれ」

「断る」

「じゃあ帰るからあの壁を消してくれ」

「お帰りは後ろの通路になるんだけどな」

靈力に……少女の場合は魔力だろうか？それに限界があるのは間違いない。

一方で勇輝にはまだ余裕のある大量の靈力、高い身体能力。更にはあと二回の能力使用が残っている。

このまま行けば勇輝の勝ちだ。

「じゃあ帰るから霧を止めてくれ。そしたら大人しく帰るんだぜ」

「悪いけど、俺にその権利は無くてな」

「そうか。なら、魔砲『ファイナルスパーク』」

最初に放たれたレーザーの一倍近くの大きさを持つレーザーが放たれる。

当然受け止めるのだが、レーザーの威力は二倍では済まなかつた。

「やべつ、靈力が持たなつ……」

油断した。

大量の靈力を防御に回したが、先程までの戦闘で減つてしまつたので持たなかつた。

スペルカードが何枚も無駄になつっていた事も原因だろつ。

靈力の盾は割れ、光に飲み込まれる。

「……やつたか？」

周りを囲つていた壁が消え、少女は煙の上がる勇輝がいた場所に視線を向ける。

確實に死んだ。そうでなければ目の前にいたアレは化け物だ。

少女がここに来るまでに美鈴、パチュリーを倒して来ているのだが二人ともここまでやる前に決着が着いている。

「あー、死ぬ。絶対死んでた」

「なつ！？」

煙の中から聞こえた声に少女は驚愕した。

少しづつ煙が晴れ、声の主の姿が見えてくる。

「酷えよな。俺だつて人間だつてのにあんなん撃つか？普通」

砕けた床の上で崩れかけた壁に背を預け座り込んでいる勇輝の姿がそこにあつた。

「どう考へても人間とは思えないぜ……」

「これでも全身の骨がボロボロなんだけどな。自身を強化、白衣も強化。それでこのダメージだ、俺はお前が人間かどうか疑わしいよ

靈力の盾が破壊される寸前に一回、勇輝は能力を使っていた。

一つは、自身の脆さを修正。もう一つは白衣に魔力への耐性の無さを修正。

少女の方も力を使い果たしたのか、篝から降りて座り込む。

「あー疲れた。もう動けないんだぜ」

「人の体をボロボロにしておこして呪へ聞えるな。で、帰る返になつたか？」

もつ、能力は使えない。どうやらこのままじつとしないければならないらしい。

「んー。朝まで寝て行けつかな。どうせ靈夢がもうすぐ来るし」

「図々しいなお前」

先程まで殺し合っていたのに普通に談笑しているのは一人の性格からか。

「お、靈夢」

少女の視線の先には赤と白の巫女装束を着た少女が飛んでいた。どうやら咲夜は負けたらしく。

「魔理沙。アンタ負けたの？」

「勝つたけど引き分けだぜ」

そう言って魔理沙は勇輝を指差す。

「巫女、咲夜……メイドは生きてるか？」

「わあ、多分生きてると呪ひが解けるわよ」

気絶か永眠か、気絶であつて欲しい。

「家のお嬢様は一階のあの通路の先の部屋にいる。出来るなり殺さずに終わらしてくれ」

「アンタ人間でしょ。わざのメイドもだけど、どうしてこんな場所にいる訳？」

そりやあ、好んで吸血鬼と同居する人間はいないだろ？。

「咲夜は知らん。俺は外来人だから、どつかで保護して貰わなきや食い殺されるだけ。最初はそういう理由だな」

「今はどうして？」

「ああ？ 情でも移ったんじゃねーの？」

力は持つた。それなのに何故紅魔館に留まるのか。明確な理由は無かった。

その結果、じつにこの事に巻き込まれているのだが別に恨みなど微塵も無い。

「やう。じゃあ私はここのお嬢様をボコボコにして来るから魔理沙はここつの見張りね」

それだけ言つと、魔理沙は勇輝が指差した通路に飛んで行った。

「見張り……ね」

正直、もう戦えるとは思えない。

「服が汚れちゃったんだけど代わりとかないか?」

とつあえず田の前の少女を先に進めないだけ良しとしよう。

其の拾捌

「へー、便利なのがよく分かんない能力だな」

「そつちこそ、人間で魔法が使えるとは羨ましいよな」

何故か意氣投合した勇輝と魔理沙は階段に座り色々と話していく。

「それにしても博麗の巫女、だつけ？そんな規格外なのか？」

「アソツを同じ人間だとは……思えないぜ」

「どうやら比べてはいけないらしい。」

「家のお嬢様も吸血鬼だけど、どう思つ？」

「持つて一時間」

「ああ、そつですか……」

屋敷内は静かなものだ。どうやら外で戦っているらしい。

「お嬢様は殺されやしねーのかな……」

不吉だが、話を聞いていた限りではその可能性も否めない。

「死んだら私が雇つてやるぜ」

「……あ、忘れてた。ちょっと行つてくれる」

フランが地下室にいたのを忘れていた。

万が一にでも今出てこられたら…考えたくない。

「急用か?」

「ちょっと感情的なお嬢様の妹の世話を。趣味は弾幕^{パラ}。この危ない子だ」

痛む体を無理やり立たせ、地下への階段に向かう。幸い、ここからなら直に行ける。

「肩ぐらこなら貸すけど?」

「お構いなく。どうせ多少無理しても口付が変われば全快するよ」

魔理沙も疲れているだろう。むしろやつであってくれなければ幻想郷の人間を人間として見れない。

歩くこと十数分。地下室の扉を静かに開いて中を確認する。

「あ、お兄様だ。もう朝なの?」

「ちよつと寝苦しくて歩き回ってたら階段から落ちてな。それで目

が覚めたから様子を見に来たんだ」

階段から落ちたにしては切り傷や擦り傷が少ないが。

「ふーん……」

少し疑うような視線を感じるが、何とか取り繕つ。

「お兄様」

「どうした？」

「お兄様の怪我の辺りに知らない魔力を感じるの」

「え、気のせいじゃないのか？」

少し顔が引きつったのが自分でも分かる。

「それに、お兄様が部屋に入つて来た時にお姉様が本氣で戦つてゐるのを感じた」

どうやら、地雷を自ら踏みに来てしまつたらしい。

「これだけは教えて。フランのお兄様に手を出したのは……誰？」

自分以外に向いている殺氣の筈なのに寒気がした。あのフランと最初に戦つた時よりも凄まじい。

「……お嬢様だけじゃ手に余るらしい」

「誰とは言わない。今のフランと魔理沙が戦えば……魔理沙は死ぬ。

「分かつた。お兄様は大人しくしててね」

すみません、博麗の巫女さん。

少し死ぬ氣で頑張つて下さい、お願ひします。

「ハニコ」と笑いながら部屋を出ていくフランを止めるには、勇輝は色々と足りなさ過ぎた。

「むわわわ……」

魔理沙と戦い、最終的に本の山に潰されたパチュリーは小悪魔に救出されるも氣絶したままだった。

「パチュリー様あ、しかつりして下さるー。」

小悪魔が涙目で必死に起こそうとしているのは、つい先程地下室から巨大な妖力の持ち主が出て来たため。

確實にフランだが、だからこそ屋敷の外に出してはいけない。

吸血鬼の弱点を突くには、パチュリーの魔法が必須だつた。

紅い月の夜は更けていく。

「へつ……」

レミリアはやはり、苦戦を強いられていた。

「やあやあ、終わりにしようかしら」

靈夢がスペルカードを取り出した。

「私が、人間なんかに…‥」

レミリアは身体中に傷があり、服もボロボロ。

しかし靈夢は服こそ少し破れているが立つ傷は一つも無い。

一方的という程ではないが、圧倒されているのは間違いなかった。

「靈符『夢想封印』！」

七色に輝く七つの巨大な攻撃弾。それがレミリアを襲つ。

レミリアはそれを避けたが、一つだけ勘違いをしてしまっていた。

その攻撃弾が真っ直ぐ飛ぶものだと思ってしまったからこそ、自分の後を追ってきた弾に反応できない。

敗けを覚悟し、レミリアは目を瞑る。

しかし、いつまで経っても弾がレミリアに当たる事は無かった。

「お姉様、勝手に出てきたけど今回は許してよね」

フランがレーヴァテインを使い、攻撃を相殺したのだ。

レミコアは驚きを隠せない。

“あの”自分勝手なフランが。

“あの”自分の興味が無いものを直ぐに壊すフランが。

“あの”精神的に不安定で気の触れやすい…

「お姉様。アレを見て思つたんだけど、フランでも勝てないかもしれないけど……どうする？」

「あー、ヤバい。幻想郷も今日で終わりかな……」

ボロボロの体を引きずり、魔理沙と庭に出た勇輝は空を見上げる。

二人の悪魔と変わった巫女が向かい合ひ、紅い空を。

「お前はあの金髪の娘が出てこないように行つたんじゃなかつたのか？」

「自ら導火線に火をつけちまつたらしい」

「役立たずだな」

否定は出来ない。

空気が張り詰めたものに変わる。殴りやらい闘いが始まつてしまつら

しい。

「一対一、卑怯とは言わないけど面倒ね」

とは言つても、レミリアは相当消費が激しい。どう考へても勝ち目は無い。

風が吹いた、それを切つ掛けに弾幕が飛び交う。

レミリアとフランの二人の弾幕を、靈夢は危なげながらも的確にかわしていた。

フランは早くも当たりそうになってしまった。

吸血鬼の体は人間よりは遙かに丈夫だ。だが、それを些細なものに変えてしまうほどの威力を持つた攻撃を靈夢は撃ち出していた。

博麗の巫女として生まれ持つた才能と力。それが人間と妖怪との差を無くしている。

そして、勇輝と魔理沙は思い知られる、彼女達との差を。

攻撃の質も、量も彼女達と比べたら赤子同然の力。

勇輝はフランと、レミリアと戦った事がある。だが一人とも本氣では無かつた。

もし一人が最初から本気を出していたら、勇輝は今生きていはない

だろ？。

恐ろしくも美しい、弾幕の嵐。

それも長くは続かなかつた。

レミリアが限界を迎へ、被弾してしまつたのだ。

力なく地面に落ち、体を叩き付けてしまつ。

そして、ijiからは不運としか言ひようが無かつた。

目の前の敵の強さに冷静さを失つたフランの、容赦の欠片もない攻撃がレミリアの倒れている場所に向かつていった。

其の拾仇

何故だか、分からなかつた。

レミリアがやられて、地面に落ちて、フランの攻撃がレミリアに向かつて行つて…。

どうして俺は走つてゐる?

吸血鬼がアレで死ぬとは限らないのに、自分が死ぬ確率は遙かに高いのに。

レミリアの腕を掴んで、思い切り投げる。

魔理沙と戦つた時に使つた身体能力の強化、どうやらかなり役に立つてしまつたらしい。

身体がもつどうなつてゐるのかすら分からぬ。神経に異状でもあるのだろうか?

目の前に妖力の塊である光の弾がある、あれ程速かつたのに今はとてもゆっくりに感じた。

だけど身体は動いてはくれない。

上空のフランがとても、後悔したような表情をしてゐる。

レミリアは何が起つたのか分かつていよいよ顔、魔理沙は驚いているようだ。

巫女さんは後方にいるからどんな顔をしているか分からぬ。

死なないが、身体が再生する訳では無い。

能力は既に使い切ったし、身体が残るかすら分からない。

走馬灯というやつだろうか、まだ考へてゐる時間がある。

何故レミリアを助けたのか答へは考えなくとも、なんとなくわかる。

助けたかったのだ、人を。

レミリアは吸血鬼じゃないか、そう思ふ自分も居るが、会話をし関係を持った彼女を切り捨てる事は出来なかつたようだ。

目を閉じる。

医者としてではないが、目の前の命を救つことが出来た。それで良いのではないか？

そういう行為を続けていく事が目標で、その手段として医者を指したのだから。

昔の自分のよきことはなりたくなかつたから。

そして、フランの攻撃は地面と一緒に勇輝の姿を抉り取つた。

その時、勇輝の存在は幻想郷から消え去ってしまった。

後日、紅い霧は消えレミリアは靈夢へ謝罪。紅霧異変は終結した。

「お嬢様、体の調子は如何でしょうか？」

数日後、紅魔館は以前……勇輝が来る前と変わらぬ生活が送られていた。

フランはあれから一度も出て来ていないし、食事も摂っていない。

美鈴は包帯が取れていないので、門番の仕事を再開している。

パチュリーは相変わらず図書館に引き籠り、小悪魔はその世話を。そしてレミリアは……。

「咲夜、あれはもう出来ているの？」

「はい、人里から先程運んで屋敷の裏に」

「そう、着いてきなさい」

後悔していた、あの紅い霧を使った事を。

咲夜から日傘を受け取り、屋敷の裏へ。

そこには墓石が設置されていた。「yuuuki-sakurai」と刻まれている。

勇輝の名前は分かるが、文字は知らない。

今までに何人も人間の死を見てきたが、いついたものを作ることには無かつたので平仮名は止めておいた。

十字架だと近づけないので、ローマ字の刻まれた日本風墓石と奇妙なものになってしまったがこの際それは描いておく。

「咲夜、少し一人にして貰つていいかしら?」

咲夜は無言でその場を立ち去る。

それを確認すると、レミリアは墓石の前に屈んで話し始めた。

「勇輝。何故勝手に死んだのかしら?」

答えは返つてこない。

「貴方の能力なら、万が一私が死んだとしても生き返らせれる事が出来たんじゃない?」

確かにそれは可能だつただろう、勇輝も一度生き返つた身だつたのだから。

「勝手に来て、勝手に居なくなつて……どこまで私たちを困らせれば気が済むのかしらね……」

最初は、手頃な食料としてしか認識していなかつた。

「いつもフランの相手ばかりしていたわね、咲夜に聞いた限りだと面白そうな事をしていたらしいじゃない？」

実は、咲夜に何度も監視をさせていた。そして自分でも能力を使って見ていた。

フランはとてもよく笑っていた。楽しそうに、幸せそうに。

「まだ一度も私とは遊んでいなかつたのよね…」

レミコアも、数百年生きてこようと本質は子供だ。

我儘で、だけど紅魔館の当主としてそれを隠し大人のよつて振る舞つて。

「やういえば、命令は忘れてはいけないわよね？」

答えは無い。それにレミコアは耐えられなかつた。

「…………なれー」

絞り出したよつた声、だがそれは更にレミコアの感情を揺さぶる。

「戻つて来なさいよ！ 従者でしょーっ！ 主の命令を聞かないでっ
……私をこんな気持ちにさせてっ……」

本当は羨ましかつた。勇輝に甘えているフランが。

本当は近寄りたかった、だけど無駄なプライドがそれを許さなかつた。

「どうして…… 答えないの？……！」

レミコアは泣き崩れる。

名を刻まれた墓石の前で。

「お嬢様っ！」

「咲夜……？」

いつもとは違い、冷静でない咲夜が駆けてきた。

「仕事をサボったあの中国が、人里でつ……」

……本当に冷静さを失っている。

「白い奇妙な服を着た男の噂を！」

レミコアは目を見開く。が、直に冷たいような、何か恨むような表情に変わり……。

「お嬢様？」

「咲夜、屋敷をトラップだらけにしなさい」

墓石を思い切り壊し、咲夜に告げる。

「ですが……」

「あの馬鹿だつた場合、次は無い事を教え込まなければいけないの
レミリアはそれだけ言いつとわつと屋敷に戻ろうとする。

「お嬢……分かりました」

日傘ではつきりとは見えなかつたが、笑つていた。

「トライップは軽めでいいわね」

咲夜も屋敷に戻る。

残されたのは、下に何も埋まつていらない壊れた墓石だけ。

「凄いな、チルノ」

紅魔館への道で、最大の難関は湖だつた。

飛べるように能力で補えばいいのだが、どうなるか分からないので
あまり使いたくない。

なので、偶然見つけたチルノに湖を一部凍らしてもらつた。

「当然よ、あたいは天才なんだからー。」

「ありがとうな、また今度も頼むよ

最初の餌付けが良かつたのかもしれない。人里で傷を癒している時に貰つたお菓子で素直に聞いてくれた。

とにかく、紅魔館に向かわないといけない。

湖を渡り、森を駆け抜けて紅い建物を目指す。

あの場所に、帰るために……。

其の弐拾

「さあ、説明して貰おうかしら」

屋敷に入ったと思ったら、急に視界が反転し逆さづりにされ縄で巻かれてレミリアに差し出された。

「えーと、死んですらいませんでした」

言つた瞬間、頬をナイフが浅く切り裂いた。

レミリアの隣に立つ咲夜の仕業だ、次を構えている。

「勇輝がふざけた返答をすると咲夜がナイフで攻撃するわ、次は足よ」

二人共本気だつた。

「フランの攻撃が当たる瞬間、地面にスキマのようなものが現れそこに落ちました。そこで幻想郷の管理者の一人だと言う妖怪に会い、人里に飛ばされたんです。勿論、紅魔館に送るように頼んだのですが聞き入れてはもらえませんでした」

ハ雲 紫と名乗る妖怪に会つた。何処かで会つた気がしたが気のせいだつたのだろう。

自分に興味があるらしく、偶然起きていたので助けたらしい。

「そひ……。それで、何か言いたい事は無いのかしら」

「言いたい事ですか？……ああ、お嬢様が無事でなによりです」

言つた瞬間、レミコアが椅子から立ち上がり勇輝の側に近寄る。

そして、勇輝の頬をつねつた。

「おひょうははー！」

何故頬をつねられているなか分からぬ。そして力が強い、物凄く痛い。

「勇輝は私を心配させておいて、まだそんな態度をとるのかしら？　この口が悪いの？　それとも勇輝の頭には何も詰まつていらないのかしら？」

そう言い終えると、レミコアは手を離した。

「申し訳ありません。では、どうした反応をしたら良かったのでしょうか……」

咲夜から一度田のナイフの投擲。

体を捻つて避けたら、縄を切り裂いたのか巻き付いていた縄が落ちた。

「本当に馬鹿ね」

それだけ言つて咲夜は部屋を出ていく。

「今から三つ数える前に何か言いなさい、言わなかつたり下らない返答をしたら従者から奴隸に格を下げるわ」

レミコアの発言に勇輝は動搖する。

何を言つべきか。検討が着かないのだ。

そして、レミコアの口は本気だった、間違えば奴隸どころかミンチにされやうな。

「一〇

思て出せ、ミンチになりたくないのなら。

「一〇

早く、早く何かつ……。

「三〇。さて、遺言はなにかしら?」

「……お嬢様

勇輝は慌てるでもなく、静かに口を開いた。

「心配をお掛けしてしまってすみませんでした。それと、しばらく紅魔館を離れてしまつていた事、深く反省しています。不甲斐無い身ですがこれからも従者としてお仕えしてもよろしくでしょうか?」

その返答に、レミコアは満足したような表情をして。

「駄目よ。勇輝は今日でクビね」

「はい？」

「従者どひか奴隸にもいらないぐらいだわ。だから……」

レミコアは勇輝の手を握り、告げる。

「あの日、私の勝ち取った命令の権利、覚えているわよね？　今日、今から勇輝は私の友人として接しなさい。勿論、呼び方はお嬢様ではなく名前で」

少し呆気にとられてしまった。

何か変わった事を言われるとは思つたが、ここまで予想外だとどう反応して良いのか分からなくなる。

一番ありえそうだと思つたのは家畜だった。虚しいが。

「何？ 拒否は駄目よ。これは勝負で勝ち取った公平な権利だつて、いつのまに勇輝も認めたでしょう？」

「いえ、そのような事に使われるとは思つてもみなかつたので……」

「友人に敬語で話すの？ フランにはあれだけ砕けた話し方をするのに」

「え？　ああ、クビなんて言われたからマイナスなイメージしか浮かばなかつたんだ」

「……切り替えが早いのね」

「ナニコア性格なんだ」

とは言つても敬語で話していた期間が長かったのでたまに戾りそつだが。

「それで、俺は従者じゃなくなつたらしきナビ住む場所はどうなる？ 人里にも面識ができるから出ていく事はできるけど」

「あの部屋を使つていいわよ。どうせ余つてこいるのだし」

金持ちの余裕と云うヤツか。

「じゃあ、そうせむつもいづ。フランも食つてくるよ。もしかしたら自分のせいだと思い込んでショックを受けてるかもしれないし」

やつ言つと、ナニコアは嫌な事を思つ出したかのよう。

「アレは……病んでるわね」

「どうしよう、行きたくない。まだ生きていきたい。

だが時間が経てば経つ程に状況は悪化してしまつかもしない。

「とつあえず、生きて帰つてくの……とゆづ」

「ナニコアは云つて切りなさい。それと……」

ナニコアに腕を掴まれ、組み伏せられる。

勇輝の上で馬乗りになり、その幼い顔を近づけてくる。

「あの一人が食料庫を破壊してたみたいで、ストックが無くなつてお腹が空いているの」

首筋に噛み付かる。

注射器の採血とは違う感覚に、背筋に鳥肌がたつた。

フランにも一度直接吸われたが、あれは傷口から出た血を飲んでいただけだった。

十数秒の間、一人は無言だった。

「ん。もういいわよ。小食な方みたいだからこれで十分

「……従者はクビじやあなかつたのか」

「ええ。でも友人が困っているのに見過しきないでしょ?~勇輝は

確かに自分に出来る事ならやりかねないので反論できない。

「実は普通の人間と同じ食べ物でも死なない程度の生活が送れるのだけれどね」

「は? いや、じゃあ今の行為の意味は?」

「無駄ではないわよ。人の血を吸わなければ妖力が落ちてしまうもの

「せう……。じゃあ、フランの所に行へよ」

「分かったわ。あと……」

レニアがその小さな腕で勇輝の頭を抱きしめた。

「……おかれりなさい」

「ただいま。でいいのか?」

フランは鎮めるのに半日程費やした。一度と無茶はしないと誓おいつ。

其の弐拾（後書き）

これで紅魔郷は終結ですね。

多くの方に見ていただけてるよつで嬉しいです。

幼稚な文章や表現であるかもしませんが、これからもお付き合いいただけたら幸いです。

其の弐拾九（前書き）

とつあえず新章的なモノをスタート、春までいんな感じです。

其の弐拾壹

「これはどういう事かしら？」

「あー…それ…」

レミコアに呼び出されて来てみると、頭に鳩を乗せたレミコアがいた。

「そいつは伝書鳩だ。人里にいた時に捕まえてなつかせたんだよ」

「だから、どうして鳩が紅魔館の、私の頭の上にいるのか説明して」

確かに伝書鳩は用意したがレミコアの頭の上に乗るような飼育をしつつもりは無い。

「えっと、人里には医者がいないうらしくてな。十年ぐらい前に死んじまつたらしくて代わりに診察や治療をする事にした」

「その連絡方法がこれ？」

「里に住むのが一番楽なんだけど、フランが何を言つか分からぬからな…」

「住めばいいじゃない？」

「へ？」

「フランは説得してあげるから、人里に住めばいいじゃない。週に

一度帰つてするのが条件だけ

そういうば従者ではなくなつたのだし、特に縛られる必要は無いんだ。

「じゃあ、一度里に行つてみて考えてみるよ

鳩の足に巻かれた紙を外し、鳩を両手で抱えて部屋を出る。

先に近くの窓から鳩を飛ばし、自分の部屋からバッグを持ち出す。

バッグには紅魔館で使つことはなかつたが、手入れはしつかりした医療器具が入つてゐる。

流石に薬品は無いが、診察するだけなら問題ない。

紅魔館から人里までは歩いて一時間ほどかかる。湖も渡らないといけないのでチルノを搜さなければいけないので更に時間はかかる。

人里からの手紙によれば、畠仕事の最中に入人が倒れたとの事だ。熱中症だらう。

最悪、命に関わるので急がなければいけない。

「能力を使うか…」

しかし、どういう欠陥を修正したらしいのだろうか？

飛びない。は人間として欠陥ではないように思い込んでしまつてい

るからか、出来なかつた。

そう考えると身体能力や靈力も欠陥ではない気がするが、実際に足りない危機があつたので欠陥と認識出来ている。

「…落ちればいいのか」

が、そこまでの度胸は無い。失敗したら今度こそ死ねる。

「あれ？ 勇輝だ」

湖に出た所でチルノに会つた。今日は運が良い。

しかしその隣に黒い球体がふわふわと浮いている、触れないでおこう。

「ちょっと人里に行きたいんだけど、頼めないか？」

「分かった。お礼はお饅頭でね」

チルノが湖の一部を凍らせる。これで人里に向かう事ができるのだが…。

「チルノ…こいつは何がしたいんだ。というか何だこれは」

黒い球体が背中に体当たりしてくるのだ。威力がないので痛くはないが、鬱陶しい。

「ルーミアだけど、それが？」

「…質問が悪かつたな。この黒いものは妖怪ですか、教えてください」

「うん、妖怪。確かに人食い妖怪」

逃げた。聞いた瞬間に全力で湖の凍つた部分を走る。

しかしついでくる。何故かスピードを上げて。

「…恨むなら自分の行いを恨めよ」

手に靈力を集め、黒い何かに向けて放つ。

黒い何かは自分からも当たりに行き、当たりで弾けた。

「……妖怪は子供が多いのか？」

黒い何かが霧散し、中から小さな少女が出て来て。

湖に落ちた。

「やつちまつたつ！」

急いで鎖型の靈力弾を作り、落ちた少女を引き上げる。

この湖、魚型の妖怪が腐るほどいるのだ、しかも肉食。

どつやら被害は無かつたようだが、田を回して氣絶していた。

「おーい、起きろー」

頬を軽く叩いて田が覚めるのを待つ。

「……ひ、ん

どうやら気がついたようだ。

「……誰？」

そしてわざわざまでぶつかって来たことを覚えていないのか、初めて見たような顔をする。

「あっちの館に住んでる人間。名前は桜井勇輝」

「そーなのかー。…食べていい？」

「駄目だ」

「そーなのかー」

……チルノとは違つタイプだが、この子は、馬鹿だ。

適当にあじらつて人里に向かう事にした。

チルノが早く見つかったお陰で、時間があまりかからなかった。

しかし、ゆっくりしていたら患者がどうなるか分からぬ。

身体能力を修正し、急いで人里に向かつた。

「先生…」ひちです

人里に入つて直ぐに呼び止められ、倒れた人の場所へと案内された。

連絡があつてから一時間も経つてゐる。速足に患者の元に向かうと、五十代ぐらいの男性が木陰に寝かされていた。

「……熱中症ですね。過呼吸になつたりしませんでしたか？」

「いきなり倒れて、直ぐに氣を失つてしましましたので…」

「なら良かつた。暫くは過度な運動はさせないでください、特に日中は。それと今からでも水と塩分を摂らせて下さい」

「塩ですか？」

「はい、汗で体の塩分と水分が不足した事が大きな原因なので」

「分かりました！」

そう言つて倒れた男性の娘だろうか、女性が近くの家に向かつて走つていった。

とりあえずは大丈夫だろう。そう思つて次の目的地に行こうとしたが。

「先生…」

わざの女性があわてて戻ってきた。

「どうかしました?」

「その、塩を切らしてしまつていて…。元々、幻想郷には海が無いので湖から少量だけしか採れなく、妖怪も出るので…」

「そうでしたか……。一先ず、親御さんでいいのかな?この人を家に運びましょ。日陰で風通しの良い部屋にお願いします」

そう言って、勇輝が男性を背負う。

思つたより軽い。自分の力が上がつているからか、男性が本当に軽いのかは分からぬ。

恐らくは両方。食料は自給自足、妖怪も出る。これでは満足に食事を取れる事が少ないだらう。

「いいでしょ?」

案内されたのは寝室。冷暖房が無いのでこいつた位置に寝室があるのだらう。

「はい、申し分ないですよ。では起きたら十分な水分を取らせ、休ませて下さ」

「はい、あつがとひじきました

これは困る事も多そづだ。

勇輝は女性に一礼してからある場所に向かった。

其の亦然亦（前書き）

色々と投げ遣り氣味。あまり眞にせずお読み下さい。

其の武拾弐

「久しぶりだな、今日はどうした？」

「二人目の患者を見に来たのと、一つ慧音さんにお願いがあるんです」

上白沢慧音、半人半獣であり人里の私塾で教師をしている女性だ。

以前、紅魔館に行く前に人里に立ち寄った時に面識を持つていた。

「ああ、大抵の事なら引き受けるぞ。あの時の借りも返せていないしな。但し、一般常識の内で頼む」

「常識かどうかは微妙なところですが、空いている家屋がないか教えて欲しいんです。それと、可能ならそこに住みたい」

「？ 何のために」

「病院とまではいきませんが、診療所を開こうかと思いまして。だからと言つては難ですが、可能な限り里の中心……それに少し余裕のある広さが望ましいですね」

「それなら一度良い物がある」

随分と早く、軽く一軒家を持つことになつた事に物足りなさと不安を感じるが、この際どうでもいいかと気にしないようにする。

案内されたのは少しあきめで庭もある、少し洋風な建物。

「……」は昔いた医者が使っていた建物でな、そいつには子供も兄弟も居なく、ずっと空き家になってしまっていたんだ

「……それは随分と都合の良い……というか、医者の一人や二人いてもおかしくないですよね」

里の広さは半径五キロ、人口は三百程度。むしろ年単位でいなかつたことの方が疑わしい。

「無理もないんだ。里の者は皆、田や畠、家畜の世話で精一杯。年寄までな。それに子供には任せられないだろ?」

「……そうでしたか。一応聞きますが年間の死亡者数と出生数は分かります?」

「詳しく述べ分からんが、死亡者は一十前後、出生数は七、八ぐらいだな」

「死亡者の中、七割が病死。ぐらいですか?」

「後は妖怪の被害だ」

どうやら思つた以上に深刻らしい。

生まれてくる人数の倍以上の人間が死んでいる。これでは遅かれ早かれ里は死ぬ。

「慧音さん。ありがとうございました。少し建物の中を整えてから挨拶に回ります」

「ああ、頑張つてくれよ」

慧音を見送ると、建物の中へと入る。

中は特に壊れた箇所は無く、変に変わった所は見つからない。

「埃は多いが……特に何もないな」

だが、あまり時間をかけるのは得策ではない。

欠陥である埃、汚れ、弱くなつた木材等を能力で修正。

荷物を書斎のような部屋に置く。

どうやら診療所の役割も兼ねてくれていたようで、ロビー や診察室。その他には寝室、書斎、リビング。

前の家主の私物は残つていなかつた。

外見もだが、中も洋風な作りになつっていた。これは嬉しい誤算だ。

今更だが、幻想郷はどこにあるのだろうか。

言語からして日本、しかし里は武家屋敷やここのような洋風な建物があり、それでいて外との通信や流通は無い。

それに、紅魔館も……いや、気に入らなければ負けだ。

挨拶回りをしていて、こんな若いのに大丈夫か?とか何者なんだろ

う。そんな反応が返つてくるかと思つたがそれは違つた。

「やうかい、それは助かるねえ。時間があるならお茶でもどうだい？」

ある人には歓迎され。

「貴方はあの時の！ 本当に先日はお世話になりました、これで恩を返せるなんて思つてもいませんが持つて行ってください」

ある人にはもつ……感謝しかされなかつた。

実は人里に立ち寄つた（妖怪に上空から落とされた）時に病にかかつた子供を治療したのだが、それがこういつた結果をもたらしたのかもしれない。

そのせいでフランに……思い出すのも嫌だ。

とりあえず、挨拶回りを終えて診療所に帰る。

何やら外の品物を扱つた店もあつたので今度見に行くとじよつ。

「……飯、どうするかな」

次の問題。衣と住はどひにかなつた。食はどひじよつか。

通貨は外と変わらないので数日は持つ。が、それ以降はどひしたら

良いだろ？

毎日のように病人が来る訳でもないし、里の人に分けて貰うだけといつのは申し訳ない。

先程も、少しの米や野菜を貰つたのだが三日分ぐらいだろ？

副業を始めるか、自給自足をするか。どちらかを選ぶしかない。

「ん？」

足音がした。今いるのは書斎だが、木造のせいいか音が伝わりやすい。それに、足音はここに近づいてきてくるのだ。

数年空き家だったといふし、誰かが来るとは無いと想つたのだが……。

それに、何時間もかけて全ての家に挨拶回りしてここに住むことを告げたのだ。

と、言う事は患者だろ？しかし取り付けた呼び鈴は鳴つていな
い。

ガチャッという音がしてドアが開く。そこにいたのは……。

「…………勇輝？あれ、死んだはず…………そもそも何でここに

黒い服に白いエプロン、そして大きな帽子の少女。

「魔理沙……お前何しに来たんだよ」

「！」は私の勉強部屋みたいなものだぜ。勇輝は何で生きてんだ？』

「死んでないんだよ。逃げたんだ。それに、今日から『』が俺の家だ」

「就職難か、大変だな」

「いやクビになつた訳じやねーよ。それと、お前の家は？」

「あるぜ。魔法の森に」

「ん？ じゃあ霧雨店つて道具屋は？」

「知らないぜ」

何か聞いてはいけないような空氣なのでこれ以上の詮索はしないでおく。

「他に私物が無いのに本だけ残つてんのはおかしいと思つたけど魔理沙のだつたか……」

よく見ると、本のタイトルは怪しい物ばかりだ。全てが魔法に関係しているようだが。

「勇輝が住むんじや仕方ないな。本は少しづつ持つてく事にするよ記すのよつこ心がけてるからな」

「別に構わないけどな。本は一冊しか持つてないし、大体の事は暗記するよつこ心がけてるからな」

「 もうか？ ならそのままにさせてもらひや 」

少し話をして、魔理沙は家に帰つて行つた。が、何かを思い出した
ように戻つてきて一冊の本を持って行つた。

…… そういえばレミリアに住む場所が見つかった事を報告しなけれ
ばならない。

其の式拾參

目を開けると、知らない天井だった。

「……ああ、住む場所変えたのか」

里に住み始めて一四年。時計が無いので時間が分からない。

寝室から出で、まず始めに向かったのは書斎。目的はその机の上にある大量の書類か何か。

「……そつぱり分からん」

実は、昨日魔理沙が帰った後、能力を使ってある知識の欠陥を修正して紙に書いて残したのだが、理解できたのは三割程だった。

そこに書かれていたのは薬品の作り方、材料、材料の取れる場所。

材料の名前だけ書かれていて、どんな姿形をしているのかまったく分からぬのだ。

大学で取り扱つたり、紅魔館の図書館で見た図鑑に記されていたものは辛うじてわかるだけ、そしてその材料だけで作成できる薬は二種類。

傷薬と、胃腸薬。

「…傷薬はともかく、胃腸薬は」

そんな頻繁に腹痛の患者が現れるのか……無いな。

診療所を開いたからと言つて、診察しか出来ないので役に立たないし生活費が稼げない。

幸いにも傷薬の作り方は分かるのだ。それを優先して作ろう。

傷薬の材料が書かれた紙を拾い上げ、確認する。

薬草が数種類。採れる場所は……。

「妖怪の山か、博麗神社周辺の森。後は霧の湖周辺か……」

妖怪の山、霧の湖の場所は分かるが博麗神社はどこに在るか分からぬ。

住んでいるのはあの巫女さんだらう。きっと神社周辺には妖怪が近寄らないで、安心して薬草が摘めそうだ。

あの巫女さんに近づく妖怪なんて……無謀を通り越して自殺志願者だ。

そうと決まれば場所を聞きに行く。慧音は私塾を開く時間だらうし、適当に見つけた人に聞けばいい。

薬草を放り込むための鞄を持ち、診療所の玄関の掛け札を『本日休診』にして出ていく。

掛け札は夜に作った。別に暗くなつて明かりがなくて他にやる事がなかつた訳ではない。

診療所を出てすぐ、「一人の男に会つた。

「少し聞いてもいいでしょうか?」

「はい?」

何故かプラウン管テレビを運んでいたが、そこには聞かない方がいいのだろうか?

「博麗神社つてどこにあるか分かります? 昨日越して来たばかりでどこへ向かえばいいのか分からなくて」

「それなら東の端だ。歩くなら一日、飛ぶなら半日で着く

「……マジかよ」

「一日は…そんな診療所を空けるのは医者としてどうなんだろう。薬草を探す時間も含めて五日。駄目だ、そんなに空けれない。

「知り合いに数時間で行ける女の子がいる。頼むか? 今日来るかは分からぬが」

「…ああ、頼むよ。診療所の桜井だ。診療所で待てばいいか?」

「香霖堂の森近霖之助だ。別にどこで待とうと構わない

「香霖堂…ああ、あの店か。見て待つてもいいか?」

「邪魔さえしなければ」

この無愛想な奴が店員とは……まあ小さな里だし良いのだろうか。それと電気もなく電波も通じないのでそのテレビは何に使うのだろうか。

霖之助の後に続き、香霖堂へと向かつた。

「凄いモンだな、これは……」

香霖堂に並べられていたのは勇輝が見慣れた、外で使われている物。霖之助はブラウン管テレビを空いている場所に置くと、レジの置かれたカウンターの椅子に腰を降ろし、置いてあつた新聞を読み始める。

……子供なら泣いて逃げかねない空気の重さだ。

「……」の商品はどうやって仕入れてるんだ？」

「稀に幻想入りしたものを拾っている。使える物も、使えない物も」

成程。見た感じ電化製品もそれなりに有る、それに外から来た身としては目ぼしい物ばかりだ。

まずパソコン。アレさえ使えたらいろいろと楽になる。薬品のリストや患者のカルテ、そういうものが作りやすくなる。

次にエアコン。もはや現代人には必須だつた物。

残念ながら発電機は無いようだ。あればセットで借金して……土下座しても買つた。

「……残念だよな」

思わずため息を吐いてしまつた。

「何が残念なんだ」

「ああ、俺、半年ぐらい前に幻想郷に来たんだけどさ、ここいらが使えたならよかつたのになーって思つたんだよ」

「使用方法が分かるのかー? ビデオやつたら使えるとか、使つために何が必要なのかとか」

「まあ、一応は」

「じゃあ、さつき拾つてきたそのテレビとこいつのはじついたら情報を受信できるようになる」

「そいつは無理だな。発信元の電波が幻想郷まで届かない……携帯も圈外だつたし」

「せうか……ならこのストーブは?」

「これは、ここに石油を入れてここに電気を通せば……」

「電気か……。雷を使つのか?」

「ぶつ壊れるぞ。発電機があれば良かつたんだけど……」

「作れないのか？それは」

「いや、作り方が……」

分からぬなら、能力を使えばいいじゃないのか？

「……分かるな、うん」

「本当か！」

「ただ、材料がな……」

材料の取れる場所も、加工方法も能力で知れば……。

「希少な物なのか？」

「何とかなりそうな気がしてきた」

レミリアに医者を辞めて職人になれと言われた事もあつたが、副業でそれも良いかもしけない。…本職の方に申し訳ないが。

片手間で自家発電氣を一から作るとか、どんな天才だよ。

「森近。協力して発電機を作らないか？ 勿論一台」

「是非頼む。協力は惜しまない」

この日は人知れず、幻想郷現代化計画が発案された日となつた。

「仲良いな……何時の間に」勇輝と香霖は仲良くなつたんだ?」

「あれ? 魔理沙。昨日以来だな」

「知り合いか。なら丁度いい、簾に乗せて行つてもらえ」

「え? その女の子つて魔理沙なのか?」

確かに紅魔館で戦つた時に簾に乗つてゐる所を見たが、早かつたな、
弾幕が追い着かないのだから。

「勇輝は私に用があつたのか?」

「んー、博麗神社まで行きたかつたなんだけど。頼めるか?」

「いいぜ。私は幻想郷で一番速いから神社までなら直ぐ着くぜ」

「それは頼もしいな。それよりもこの店に用があつたんじゃないのか?」

「無い。香霖は品物を売る氣も無いしな」

……エアコンを診療所に取り付ける夢が一步遠のいてしまつた瞬間
だった。

其の武拾參（後書^{ゆき}）

眞にしたら駄目です。色々と…。

其の式拾肆

「境内には……あまり来たくなかつたんだけどな」

魔理沙にしがみついて簾に乗り、夕方に迎えに来るからと境内に落とされた。

実は少し巫女さん恐怖症を患つてゐる。原因は言わざともあの時の事だ。

殺されそうになつたのはフランだが、その一人を圧倒していた巫女さんを怖がつていけないのであるづか？

魔理沙に負けた自分を攻撃しなかつた所を見ると、戦闘狂ではないようだが……妖怪と間違えた。なんて理由である世に送られる気がする。

しかし、随分と古い神社だ。見た感じでは百年以上前からあるのではないだろうか？

折角だし、お参りをしてから薬草を摘みに行こう。

財布を取り出して中を確認すると、小銭が殆ど無かった。

仕方ないので五百円玉を賽銭箱に放り込む。そして鈴の付いた紐に手をかけようとした時……。

「ちゅうとー」

後ろから肩を掴まれた。まったく気配を感じなかつたので体がビクツと震えてしまつ。

「今、いぐり入れたの……？」

カクカクと不自然に強張つた首を回して肩を掴む相手を見ると、あの時の巫女さんだつた。

「五百円……です」

「ありがとうっ！」

物凄く感謝されました。

更に、お茶まで出していただきました。

「ああ、そうなんだ……」

話を聞く限りでは、こんな場所にある神社に来る物好きは妖怪だけらしい。人間は道中の妖怪が恐ろしくて近づかない。つまり、賽銭による神社の収入はゼロ。

「それで勇輝さん。どうして博麗神社に来たの？」

賽銭の影響か、さん付けで呼ばれてしまつていた。まあ年も上だろうから違和感は無い…はずなのだが。

靈夢と同じか年下の魔理沙、見た目幼女のレミリアには呼び捨てにされているのでこいつ…何かむず痒い感じがする。

「ああ、紅魔館を出て人里で診療所を始めたんだけど、薬がまだなくてな。その材料の薬草を探りに来たんだよ」

「……医者、つまりは……」

靈夢がブツブツと何かを呟く。お金、とか収入、と不穏な単語が飛び出す辺り、相当金銭面に厳しい。

まさか脅迫されて金を搾り取るつもりではないだろ? なんて考えてしまつ。

湯飲みの中のお茶を飲み干して立ち上がる。

「じゃあそろ行へよ。お茶ありがと」

薬草は自然に影響が出ないくらい取るつもりなので、時間は多い方がいい。

「ちよつと待つて!」

ガシッと、靈夢が白衣を掴む。

「私も手伝うわ。どうせお爺さんは来ないし、神社の周りは妖怪だらけだから」

「……はい?」

妖怪が、多い?

少ないと思つたからこんな遠くまで來たのですが。

ちよつと靈夢さん？もしかして妖怪退治サボつてませんか？

なんて不満を感じながらも素直に手伝つてもらつ事にした。

もうひん靈夢の考えはこいつである。

「医者ならお金持ち、つまり仲良くなれば遊びに来て、神社に來たら賽錢を……」

勇輝が薬草を探している時、ずっとこんな事を呟いていたとか。

そして時間は過ぎていき、太陽が降り始めていった。

「……昼飯、考えてなかつたな……」

爆発音の鳴り響く森の中で、空腹を感じ辺りを見回す。

木、草、妖怪、巫女さん。食べられそうな物はない。

それにはあの御札は何なのだ？ 木に突き刺さるし、妖怪が爆発する。

怖い。下手な銃弾の流れ弾より怖い。

何か妖怪の腕らしき物が転がっているが見なかつた事にしておこう。

人型以外の妖怪はあまり見た事が無かったのだが、今靈夢が相手しているのは全部それだ。

人型の妖怪に比べ、知恵も力も断然劣るらしい。

それにも空腹だ。

……妖怪って、食えるのかな。

しかしそこは現代人としての理性で抑える。ゲテモノは珍味だとか旨いとか言わても未確認生物は食べちゃいけない。

考える、宇宙人やコーマは食わないだろう？目の前の熊みたいな生物だった欠片はそれと同じ。どうせならちゃんとした熊を食え。

……あれば、林檎？

林檎的な果物が生っている。

近づいて一つ採ろうとする。

「キシャアアアアー！」

顔があつた。妖怪だ。

「……刺されて来たせいか夢見心地だよな、反応が」

最近自覚が出てきたのだが、チルノを見たときやレミリアを見た時の反応が尋常ではないぐらい薄い。

グロテスクな物はよく見ていたが、未確認生物を見たのは幻想郷に来てからだ。

幻想郷では確認出来てはいるが、そういう事はこの際気にしないでおく。

「靈夢！ 薬草も必要な数集まつたから一度安全な場所に行きたいんだけど、神社に行つて良いか？」

未だに妖怪を倒し続ける靈夢に聞こえるよう大きな声を出す。

「ん？ もう終わりでいいの？」

疲れのまつたく無い声で靈夢は答える。ビリやら靈力は有り余る程の量らしい。

妖怪の屍は百を超えていたのだが……。

それと、人の恐怖心や畏れによつて産み出された妖怪は屍が自然消滅した後に復活するらしい。放つておいても問題ないのだ。

薬草を詰め込んだ布袋を背負い、靈夢の後に続いて博麗神社へと戻つた。

神社に戻つてからは、一人でお茶と和菓子で和んでいた。

「そういえば勇輝さんはどうやって此処に？」

「魔理沙に送つてもらつた。俺は飛べないからな」

能力を使えば一時的に飛べない事も無いだろうが、飛べなくとも苦労しないので飛べないまま良いと思っていた。

しかし、じつやつて薬の材料を集めるために飛べない事は不都合になつていくだらう。

「それなら、私が飛び方を教えようか?」

闇話壱（前書き）

紅霧異変の時の話。

実は本編に入れるのが面倒で書かないつもりだったのは言わない約束。

レミコアの身代わりになり、死を覚悟した。

ゆっくりと流れる時間。勇輝は目を閉じ、自分の最後を迎えようとする。

すると、地面が消えた。

重力に従い落下していく、慌てて目を開けると……。

「ツー？」

視界に広がるのは眼、眼、眼。赤黒い空間の中に張り付くように存在する無数の眼。

開腹手術は見た事があるが、その時よりも嫌悪感と恐怖心を抱いた。

思わず胃の中から何かが込み上げて来るが、何とか抑えた。

足は付く。しかし、まだ底は無限に続いているように感じる。

上も、下も、前も、左右も。同じ、無限に続く赤黒い空間だ。

「気味が悪いな……、これが地獄だつたりするのか？」

「人の空間を地獄呼ぼうなんて酷いですわ」

「…………」

後ろから声がしたので振り向くと、両端にリボンの付いた出入口があり、そこから女性が出てくる。

「初めまして、人間さん」

扇子で口元を隠しながら話す女性は、どこか神秘的なものを感じさせる。

「アンタ、どうかで会った事あるだろ。その声は聞き覚えがある」

「会うのは初めてですわ。話すのは初めてではないですけれど」

「前とは口調が違つな、夢に入り込んだとか言つてた奴だろ?」

普通に話しているが、警戒心は微塵も緩めてはいない。

目の前の妖怪には、フランやレミリアを凌ぐ程の妖力がある。自分からしたら三人共化け物である事に変わりはないのだが。

「そう警戒しなくてもいいのよ?私は今の所、貴方をどうこうする気はないもの。ただ、興味があつたから助けただけ。口調はそういう気分だったの」

「……幻想郷に入った理由なら仮説は出来る」

「そう? 聞かせて貰つても?」

「まず、刺された時。ここで自分の運のなさを怨み、微弱ながら能力が発動した。多分、不幸という欠陥を修正し、消し去った」

幻想郷の外では能力も、靈力も、妖力も、魔力も極僅かな力でしかない。だが、何故か能力が発動し、欠陥を修正したのだ。

「だから、幸運にも幻想郷へと繋がる歪みに倒れこんだ。幻想郷なら能力は十分に發揮できるからな」

歪みはそこにあつたのか現れたのかは分からぬが、

「そして、死ぬという欠陥を修正した。無意識だつたから上手く修正がで来ていなかつたんだな。再生や不老不死ではなく、死という不祥事が起きなくなつた。傷を元に戻したのはこの後だろ」

「それが、貴方の能力……」

「今回もそういう事だらうな。俺の能力は元に戻した事や消した事は日付が変わつてもリセットされない。不幸が起きない俺は、幸運にもお前が見ている時にレミリアを庇つていた」

補足だが、能力についての知識は付け足したモノになるが、声に出す事で新しい記憶、知識として残つている。

「次はアンタの事を聞かせて貰いたいんだけど。どういう存在で、何が目的なのか」

「私が気に入つたのは、貴方の能力の副産物みたいなモノという事ね……。まあそれも良いわ。私は八雲縁、幻想郷に古くから居る妖怪で一応、外との境界を管理している形になるわ」

「へえ……。じゃあ、俺を助けたのに特に理由は無い訳だ」

それなら、能力によつて幸運しか起きなくなつてしまつた結果のようなものだらう。

幸運にも程度があるだらうが……。でなければフランにボコボコにされた日々、レミリアと戦う事になつたあの日の説明が着かない。

打ち所が良かつた。程度の幸運だつたのだらう。

「これも貴方の力で誘導されてゐるのなら氣に入らないけれど、今 の会話の中で私からの好感度は上がつたわよ?」

「どうに上がる要素があつたのか分からない」

「頭の回転も早いし、芯が通つた眼をしている。それに私相手でも 尻込みしないでそれだけ話せていいでしょ?」

「最後のについては強制的に身に付いたようなものだから。親父と一緒に危ない薬を使つ組に治療しに行つた事もあるからな……」

物怖じしていると見下され、つけ込まれる。

堂々としていないと逆に危ないのだ。そういう意味でも父親は尊敬できる。

「あと、本当に誘導されているか確かめる方法もある」

不幸が起きない。一見、欠陥では無い氣がするが十分な異常だ。それを元に戻してしまえば良い。

「じゃあ、やつてみて貰えない?」

「今日は無理だな、使用制限回数に達してるから。それに体もボロボロなんだ、休ませて欲しい」

紅魔館に帰つて寝たい。

「じゃあ……」

紫が薄く笑うと何か不思議な感じがした。

「今日と明日の境界を少し弄させて貰つたわ。これなら能力が使えるでしょ?」

「……便利な能力だな。先に傷だけ戻しても良いか?」

「どうぞ」

紫の承諾を得る事が出来たので、身体の状態を元に戻す。

折れていた骨や、擦り傷が消えたのを確認し、自分に起きている不運の起きない欠陥を修正。

「これで俺の無駄な幸運は消えた。何か変化は?」

「……特に無いわね」

「じゃあ、今から俺をどうするつもりだ?」

「私の家に持ち帰らうと思つてるわ。もう少し貴方について知つて

みたいし

「……心なしかさつきよりも積極的になつてゐる氣がするけど、氣のせいだよな？」

「つまり、私に好かれる事が貴方にとつては不幸だったのかしら」

「そういう訳じゃないと……思いたい」

「冗談よ、招待しようと思つていたのは最初から。興味が有つたのも伝えたと思うけれど」

紫はからかう様に笑つた。そこから真意を読み取る事は出来ない。

「一応、命の恩人からの招待だ。後からが怖いけどお邪魔させて貰うよ」

其の三拾伍

「いや、浮くだけでも相当……」
「いやつ、浮くだけでも相当……」
「いやつ、浮くだけでも相当……」
「いやつ、浮くだけでも相当……」
「いやつ、浮くだけでも相当……」

「それで？ 後はさつき言つた通りに靈力をコントロールして移動するだけでしょ」
「いや、今まで何の支えも無く宙に浮くなんてしたことないから随分な進歩……」

以前に図書館の本で得た知識が靈夢の助言に補足を付け、何とか真上に浮く程度までは成長したのだ。
「いや、今まで何の支えも無く宙に浮くなんてしたことないから随分な進歩……」

「その程度で？」

イラッとしたのは言つまでも無い。

難易度としては、割り箸の口を付ける方を下にして立てるべし」と。

慣れれば簡単らしい。だが自分が自由自在に空を飛べるとは思えなかつた。

時は流れ、太陽も沈み始めた頃には白衣を着た男が境内でうつ伏せに倒れていた。

「情けないわね。これぐらいで疲れるなんて才能無いんじゃないの？」

返事は出来ない。それに精神は疲労している。

「魔理沙の話だと弾幕を作る才能はあるのよね……。けど靈力もそんないし、飛べないし……」

「……酷い、言われようだ」

「だって魔理沙と引き分けたんだしょ？ それなのにここまで飛ぶのが苦手だなんて信じられないのよ」

確かにまだ秒速五十センチほどの速さでしか飛べないが、一日でこれなら問題ないと思つ。

靈夢自身は能力によるものだし、妖怪は飛べない方が少ないくらいなので普通の人間がどの程度の成長スピードか分かつていないので

うつか。

「おーい、迎えに来たぜー！」

魔理沙の声が聞こえるが、勇輝にはその姿を確認できない。うつ伏せだから。

「あれ？ どうして勇輝はこんな所で寝てるんだ？」

「急に地面が恋しくなったんじゃないの？」

「……そんな趣味があつたのか。まあ、止めるつもりはないぜ」

「変な誤解はしないで……欲しい。疲れたんだ、朝から何も……食べないし」

そんな地面に顔を擦り付ける趣味は無いし、そんな趣味を持つ人間はこの世にいない……と、思いたい。

そういえばお茶と和菓子は腹に入れた気がするが、朝から夕方まで動いてそれだけでは持たない。

「じゃあ靈夢、ハイツは貰つてくれ」

「落とさないよ。特に無駄に強い妖怪の巣とかに」

「…………え？」

落とされるのか？ 可能性があるのか？

「大丈夫だぜ、箒に縛り付けてくから」

「こは日本だつたよな。基本的人権の尊重はどこに行つたんでしょうか？」

「じゃあ縄がいるわね……。これでいい？」

「細い、切れそう。それに、それは糸です。」

「仕方ないな。鎖とかが良かつたけどこれで我慢するか」

「お前等……俺を何だと思つて……」

問答無用。箒に糸で縛り付けられ、更に魔理沙にしがみつき、博麗神社を後にした。

「……そういうば魔理沙は魔法使いだったよな。やつぱ俺より長く生きてるのか？」

神社に向かった時とは違い、ゆっくりと飛ぶ箒の上で思い出したように尋ねる。

「何いつてるんだ？ 私は普通の魔法使いだぜ。パチュリーみたいに妖怪化はしてないぜ」

「成程、まだ人間なのか……。ん？ パチュリーと知り合いなのか

？」

「本を貸して貰つてゐぜ」

紅魔館の図書館は本が多い。それにパチュリーが管理をしているのだから魔法に関するモノも少なからず有るのだろう。

能力が使えるようになつてからは傷んだ本を元に戻す為に何度も出向いていたが、最近は入つていない気がする。

「それで、結構時間も経つけど人里までは後どれぐらいかかる?」

「何言つてるんだ? 人里には向かつてないぜ」

「は?」

何を言つてゐるんだコイツは、という視線を全力で送りつけた。

「今から人里に行くと私の帰り道が妖怪だらけになるんだ。だから向かうのは魔法の森だぜ」

「聞いてない! 魔法の森つて……下手したら俺、死ぬじゃねえか!」

「あ、そうだったな」

「何の対策も無いのかよ……。あれ? 一応死はないよな、俺。永遠に苦しみ続けるのか?」

この歳で死より辛い地獄を味わう事になるとは……。幸運スキルが

消えた事も関係しているのだろうか。

「能力で何とかならないのか？」

「不安要素が多い。どこまでが有害でどの程度まで無害なのか分からぬし、妖怪も近寄らないぐらいなんだろう？」

「たぶん、普通の人間にとつては魔力 자체が有害。森には鬼ぐらいだつたら入つて来るぜ」

「不安しか無くなつたんだけど？」

「魔力への抵抗力とか上げられないのか？ 私だつて人間だしそれぐらいは出来るだろ」

「魔法を使えるか使えないかは大きな違いだろ……。無理そうだつたら森の外で夜明けまで外で待つよ」

妖怪に食われないために、寝る暇が全く無い夜が明けるまで。

「……あ、きっと大丈夫だぜ」

魔理沙が何か思い出したように口を開いた。

「私が作つたマジックアイテムの中に、一時的に魔法使いになれるアイテムが」

「副作用は？」

途中で遮るように尋ねる。きっと口クな物では無いだろうから。

「使つた分だけ、下痢になる」

「……仕方ないか」

其の式拾陸

魔法の森。

魔力が大気中に満ちていて、魔法使いには極楽、その他には地獄に感じる森。

「ゴホッ……既に、苦しijnだけビ……」

魔理沙の家に来たのだが、空氣中にわずかな毒でもあるかのような苦しさを感じる。

表現としては、一酸化炭素の充満する煙の中だ。普通に死ぬ。

「ちよつと待つてて……あれ? どこに仕舞つたんだっけな……」

魔理沙の言つ、一時的に靈力を魔力に変換して疑似魔法使いになるマジックアイテム。十数分の間見つかっていない。

本やガラクタのようなマジックアイテムが部屋中に散乱している。数分前までは足の踏み場があつたのだが今は床が微塵も見えない。

「早く……死ぬ」

「……え? 早く死にたいのか?」

「違つ……」

虫の息とは今の自分の状態を表すのに最適な表現だと思つ。

「お、あつたぜ」

勇輝が倒れてから三分。魔理沙がガラクタの山から腕輪のような物を取り出した。

それを魔理沙から受け取り、プルプルと震える手で左手の腕にそれを通す。

通したと思ったら電流のような衝撃が体中に走り、虫の息だった為に声すら上げられずに悶絶した。

「大成功だぜ」

「ホントに死ぬ……生きて帰れない……」

息苦しさは消えたのだが、どうも納得いかなかつた。

夕食は作られた。普通、一いつい場合は手料理を振る舞ってくれるのではないのだろうか。

何故かと聞いたら、

「タダ飯を食う氣なら追い出しそ」

その通りなのだが、納得がいかない。

紅魔館で上げた家事スキル。外では何一つやろうとしなかつたので最初はアレだつたが、今では一人暮らしでも困らない程度には上が

つて いる。

正直、料理については能力で知識を得てしまえば作れる。それを咲夜に言つたらナイフを投げられた。

しかし、材料が米やキノコ、僅かな調味料しか無いのに何を作れと言つのだろうか。

最終的に焼き込みご飯になつたのだが、魔理沙からの評価は普通、靈夢の料理のが旨い。

しかも、取り分が八対二だつた。当然魔理沙が八割である。

「……紅魔館が恋しいな」

食器を洗いながらそんな事を呟く。水道は無いので桶に水を入れ、そこで洗う。

紅魔館では掃除こそ面倒だつたが、少しの家事とフランの遊び相手、レミリアの話し相手、パチエリーからの頼み事。それさえやつていれば衣食住には事欠かない。

……別にニート願望がある訳ではない。実際、人里で診療所を始める事が出来て嬉しく思つて いる。

が、この扱いは不満しかない。

食器は外で洗つて いる。今はまだ夏、暗くなつたが蒸し暑い。

そういうば、今日はまだ能力を使つてい ない。

リスクが無いのは大いに助かるが、こぎとこつ時に使えませんでした、では困るので使用は最低限にしてい。

ストックが出来ないので使わなければ損。そんな気がするが、今は妖怪もいないし薬品のリストも作れな……傷薬を作ろう、体力や気力を全快の状態にして。

薬草は布袋に入れ、魔理沙の家のドアの横に置いてある。

魔理沙も女の子だ。紅魔館のように広い家では無いので屋根の下で寝ようとすると同じ部屋になってしまつ。それは避けたい。

やましい気持ちがある訳ではない、世間体を保つ為だ。

「勇輝ー、生きてるかー？」

皿洗いを押し付けた本人が家から出てきた。手伝ひ気は田に見えて無い事が分かる。

「今の所は生きてるよ……。魔理沙は何時ぐらうに寝るんだ?」

「襲つたら殺すぜ」

「命を賭けてまで性欲を満たす気は無いから安心しろ。寝る前に外出でおきたいから時間だけ聞いておきたいんだよ、既に寝る気みたいだしな」

魔理沙はいつもHプロン姿ではなく、パジャマを着ている。

帽子も被つていないし、髪も卸してあった。

「まさか……死ぬ気か？」

「違う。家中に寝れる場所が無いだけだ」

「自殺は良くないぜ」

「人の話を聞けよ」

「寝る場所はあるぜ、ベッドの下だ」

「お前、俺を人間として扱つてないだろ。ペット感覚で接しない
か?」「

「ベッドの下だからペットか……そんなに面白く無いくな

「……一度解剖してみるか?脳の回路に異状があると想つんだ

「！」のペド野郎…

「喧嘩売つてんのかお前ー！」

氣力は全快の状態に戻した筈だったのだが、精神的疲労がどんでも
ない。

「いやあ、からかえる相手は少ないので重宝してゐるんだぜ。一応

魔理沙と親しい人物を思い浮かべてみる。

靈夢、林之助、パチュリー、里の年輩者方……本當だ、からかえる奴がない。

「限度を考えてくれ……。いへり俺でも怒る時には怒る。仮じゃないから許さない時もある」

呆れた声で呟く、しかし魔理沙は過剰に反応した。

「その……悪い。勇輝は面白いから、えっと……」

借りてきた猫のようにシコンとして、視線を泳がせる。

こんな落ち込む魔理沙は初めて見る。…知り合つてから口が浅いので当然かもしけないが。

「……私の事、嫌つたか？」

恐る恐る、といつた感じに魔理沙が尋ねてくる。

「嫌つてはない。気軽に話せる相手は欲しいからな。魔理沙は結構好きなタイプだし」

「なつ……ー？」

魔理沙が顔を真っ赤にしてから呟く。自分の爆弾発言。

「性格の相性的な意味でな？ 決して容姿だけとか、そういう事ではなくて……」

「つまり全部ー？」

駄目だ。解釈がそっちの方向にしか行っていない。

思春期の女の子を甘く見ていた。ここまで恋愛方面に思考が持つて
いかれるとは…。

ベッドに引きずり込まれそうになつたのは夢に違いない。目が覚め
たら元に戻る…と良いと思う。

其の式拾陸（後書き）

実際にあつたかどうか分からぬ会話。

「告白までしておいて往生際が悪いぜー！」

「落ち着けー寝ろ、これは夢だー！」

「だから寝ようとしてるぜ、二人でな」

「婚期を逃した人みみたいになつてるから！頼む、一人で寝てくださいー！」

「そんな…一人でしろだなんて」

「何をー？」

「言わせるなんて変態だぜ」

「だから何する気だよー？」

其の式拾漆

魔理沙は寝た。

月の位置からして、11時から12時といったところだらう。

月明かりで、どこか神秘的な雰囲気の森を壁に持たれながら見ていた。

「……半年、か」

幻想郷に来て半年。外はどうなっているのだろう。

行方不明になつてているのは間違いないし、ひょっとしたら死んだ事になつてているかもしねりない。

親しい友人もいたし、父親との仲も良かつた。

割り切れていたと思つたが、未練はまだまだある。

それでも、この幻想郷なら自分の知識が、経験が十分に發揮できるのだ。

帰る方法なら知つた。だけど、この外ではあり得ない好条件で医者として生きていける場所を捨てれない。

「……結局は自分の欲か」

ポツリとそんな事を呟いてしまつ。

医者になるために勉強し、なれるだけの学力はつけた気でいた。

薬剤師もいない、設備の整っていない場所では力不足である事を知つた。

だけど、ここでは自分しか医者がいない。他に頼るべき存在がない。

外ではこうは行かないだろう。小さな病院なら人が来ないし、大きな病院ではサポートとして付けられるのが目に見えている。

だから、ここでなら百パーセントの力を出せる気がする。

誰の指図も受けず、邪魔をされず、人の為に力を使える。

その考え方が正しいとは全く思わない。

患者だつて、助けてもらえるなら誰でも良いのだ。

だけど、俺は……桜井勇輝は自分で助けたい、そんな独占欲が出てしまっている。

背凭れにしていた家の壁から離れ、森を歩く。

早く今の考えを消してしまいたい、それだけで。

自分が地面を踏みしめる音、風で草木の揺れる音。それだけが森の中で響く。

一度抱いてしまった嫌悪感は直ぐには消えてくれない。何も考えな

じよひに前に進む。

そして……。

「わし……。どうやつて戻るつか」

当然、考えなしに進めば迷ひ。

直進だけしていれば良かつたとか、目印を用意しておけば。そんな今更の後悔はしていないが戻れないのは問題だ。

更に、今の自分はついてない。

不幸と幸運はバランスがとれていると聞いたことがある。良い事もあれば悪い事もある、というアレだ。

迷信染みていると思うが、ここは幻想郷。外の常識は全く役に立たない。

「……やつぱりだよクソ野郎」

田の前には異形の生き物。

大きさは三メートル、頭は牛、体は蜘蛛。牛鬼とか言つヤツだらうか？

あの獅子舞の原点的な……。

そして補足。魔力を持たない存在にとって魔法の森の空氣は毒に近い。

それを気にせず森を歩けるのは魔法使いか、毒をものともしない程の力を持つ存在…。

「……人語は、理解出来るか？」

冷や汗をかきながらも声を絞り出す。

しかし、返ってきたのは身の毛もよだつような咆哮。

十中八九、捕食対象にしか見られていないという事だらう。

だから逃げた。全速力で。

牛鬼は予想外だったのが、一瞬遅れて後を追い始める。

一足と八足、どちらが速いかは言つまでも無いだらう。

想像できない方は、普通のサイズの蜘蛛が走るところを思い浮かべて貰いたい。牛鬼はあの速さで足を動かしている。新幹線と良い勝負では無いだらうか？

何が言いたいかといふと、滅茶苦茶恐いのだ。

新幹線並の速さで二メートルの蜘蛛が追いかけたら失神モノだとは思わないだらうか。

勿論、牛鬼の姿を確認した瞬間に身体能力は上げた。

人外のスピードで走っているが、やはり何度も捕さえられそうにな

つた。

ここが森でなかつたら既に自分は食い殺されているだろ？

自分の胴より太い大木をへし折りながら、牛鬼は血走った田で追つてくる。

……逃げ切るのは、不可能だ。

こちらの体力にも限界はあるし、撒くことは出来ない。

下手に逃げて魔理沙の家に出てしまえば魔理沙が危なくなる。

「……あ、忘れてた」

飛んで逃げればいいのではないだろうか？

上手くはないが、十分に浮けるようになつた。アレが飛べるとは思わない。

直ぐ様地面を蹴つて跳躍し、さらに靈力をコントロールして上昇。

地上から十メートル程の位置で停止する。

下から牛鬼が睨み付けてくる。どうやら助かつ……らなかつた。

「嘘だろオイ……」

心臓が今までに無い程に強く鼓動を打ち始める。

牛鬼、牛頭に蜘蛛の体。

見た目の通り糸も使つらしい。

自分の足には牛鬼の糸が巻き付いている。避けられなかつた、反応すら出来ていない。

牛鬼は糸を引き、地面に叩きつけようとした。

だが、ここは森だ。

「がッ……！」

地面に到達するまでに何度も木とぶつかり、その回数分、当たつた箇所から嫌な音が聞こえた。

右手は肘から折れ、アバラは折れ、足は曲がる筈の無い関節の無い場所で曲がった。

痛みで悲鳴を上げる事さえ出来ない、性格的な事もあつてだが。

牛鬼の下まで引きずられていく。糸を切るために靈力の刃を作り出そうとしたが、痛みでコントロールが出来ない。

牛鬼の目の前に引きずり出され、その足の一本を頭蓋に突き立てられた。

即死。

もし誰かが見ていたならどうとしか思えない光景。

トマトを潰したように赤い液体が飛び散り、地面に赤い華を描く。

悲鳴は無い。口など既に無いのだから。

牛鬼は突き立てた足をソレから抜き、次は腹に突き立てる。

再び吹き出す鮮血。臓物は潰れ、幾つか出てしまっていた。

牛鬼は骸にしか見えないソレを口へと運び、一飲みにした。

其の弐拾添（後書き）

完。

……〔冗談です、うん。〕

其の式拾捌

一人の少女が魔法の森を歩く。

人形を近くに侍らせる魔法使いの少女、アリス・マーガトロイド。元々は人間だが、何年も前に魔法使いとなつた彼女はこの森で、あまり外に出ないようにして暮らしていた。

何か用がある訳でも無いのにこうして外に出ることは珍しい。

そして、田の前には……。

「気紛れで外を歩いていただけなのに……運がないわ」

何かを食い殺したばかりであらう牛鬼の姿があつた。

しかし、アリスの表情には焦りも絶望も無い。ただ、面倒な事になつた程度の呆れた顔。

牛鬼がアリスに喰らいつこうとする。しかし、見えない何かによつてその行動は阻まれた。

「結界は……分からぬからそつしているのよね」

牛鬼は力任せに障壁を越えようとしているが、この程度の妖怪の力で壊れる程アリスの結界は弱くなかった。

ここで、何故スペルカードルールが存在するかを少し説明する。

本来、能力を持つた人間でも妖怪には敵わない。

敵うとしたら、特別な役割を果たしている博麗神社の巫女だけだろう。

そこで、博麗の巫女がスペルカードルールを作り、幻想郷での人と妖怪の争い事をそれで解決するよう取り決めたのだ。

つまり、弾幕勝負ではなく能力と妖怪本来の力で闘った場合は圧倒的に妖怪の方が上。

そして魔法使いも妖怪と同等。妖怪同士の戦いにスペルカードは本来必要ない。

「話が通じないなら、スペルカードは使わなくとも良いわよね」

牛鬼の下に魔法陣が浮かび上がる。

そして、牛鬼は内側から弾けた。

「え……？」

アリスはまだ、何もしていなかった。人形の張つた障壁に牛鬼の破片が当たって落ちる。

そして、牛鬼の中から生まれたように出て来る男を見て、警戒心を最大まで引き上げた。

「……汚ねーな、トラウマモノだ」

元に戻した体の調子を確かめるために、手を握ったり閉じたりする。牛鬼に食われ、飲み込まれた時にも意識はあった。頭は確かに潰れていたし、出血も致死量を超えていたのにだ。

牛鬼に食われ、飲み込まれた時にも意識はあった。頭は確かに潰れていたし、出血も致死量を超えていたのにだ。
これが死がないという事なのだろう。痛みは感じていたのでトラウマになりそうだ。蜘蛛を見たら全力で殺したくなるぐらいには。

一応人間のつもりだったが、これではゾンビか何かに思える。……勿論、自分が人間の枠に当てはまるのに変わりは無いが。

「何物なの？その蜘蛛の子供って訳じやないんでしょう？」

「ん？ ああ、悪い。気づいてなかつた」

声がしたかと思つと、こちらを睨みつける少女の姿があつた。

多分、この森に住む魔法使いの一人だろう。浮いている人形にはもう何も言わない。

「答えて。貴方は妖怪？ それとも別の何か？」

「能力持ちの人間だよ。少し変わった能力の、ね」

未だに疑うような視線をぶつけてくる少女。どう考へても今の自分は怪しいので仕方ないのかもしれない。

「勘違いはしないで欲しい。魔法使いに知り合いかいでな……そいつの家に厄介になつてたけど散歩中にコイツに襲われて食われたんだ」

そう言いながら牛鬼の亡骸を指差す。

「じゃあ、どうして貴方は生きているのかしら。こうこう知識の殆ど無い妖怪は獲物を殺してから食べるんだけど」

「殺したつもりだったんだね! ち。頭を潰されて腹を貫かれたから自分で言つておいてその時の痛みを思い出しちまつ。じめじめトラウマが続きそうだ。」

痛みや蜘蛛に過剰反応してしまつだろ。

「そんな体験して生きてる時点で人間じゃないわよ

「不死者なんだよ、不死身じゃないんだ

残るのは意識のような物だけなので不死身と言つにまじこか違つ気がするので間違いないと思う。再生も自動ではないのだから。

「じゃ、俺は行くか!」

「その格好で里に降りたら寺子屋の半獣が襲つてくるわね

「慧音さんが? 一応知り合いだし、そんな事は……」

「アレの里への愛情は普通じゃないわ。多分、血塗れで武器を持つたら人間にも容赦しないわね」

今の自分の格好を確認してみる。

穴の空いた血生臭いシャツ、その上に自分の血で赤く染まったボロボロの白衣。

帰りは薬草を入れた布袋を持たなければいけない。

「……ああ、危険な雰囲気しか出せないな」

「それに、能力持ちなら存在が凶器みたいな奴もいるから尚更ね」

弾幕の特徴から全身凶器のようになつていて自分はどうでしょう？
鎌や鎌や剣に槍。もう大体の武器は瞬時に作り出せるようになつてしまつた。……フランのせいで。

「……何か着れる物は無いでしょうか？」

この格好で里に帰る度胸は無かつた。

「条件次第で用意していいわよ。どんな内容かは貴方が頷けば話すし、断るなら話さない」

「随分と足下を見た交渉だな。それじゃあ簡単には答えられない」

「別に命を取つたり奴隸にしたりはしないわ。人間に出来る範囲は心得ているもの」

「……なら、決まりだな」

仕方ないが、こうするしか無い。

「断る、服は諦めるよ。布を被つていけばいいし、明日には元に戻せる」

「まあそりでしうね。御使いを頼もつと思つたんだけれど仕方ないわ」

「……断らなければ良かつたなんて思つていない。少し自棄になりたい気分だが。

「そういえばまだ名乗つてなかつたな。桜井勇輝だ、里で医者をやつている」

「アリス・マーガトロイドよ。人間だった魔法使いをしているわ」

其の式拾仇

「おおっ……」

魔法の森の、ある魔法使いの家に勇輝は招待されていた。

「どう? これだけ揃えるのには一年かからないけれど相当なモノでしょ?」

「驚いたけどさ、……何で人形?」

アリスの家、その中には棚、テーブル、イス。あらゆる場所に人形が敷き詰められていた。

「私の魔法は人形を媒介にしているの。だから使えば壊れる時もあるし、基本的にこれだけ生きていればやりたい事も無くなつてくるわ」

「それで暇さえあれば人形を作るつて事が」

「あれ? どうして自作つて分かるのかしら」

「全部雰囲気が似てる。それに魔法使いに一年でこれだけの人形を買つほど収入があるとは思えない、そんな推測だけだよ」

「……まあ、拾ってきた曰く付きの呪いの人形もあるから無闇に触らないように」

何故アリスの家に来る事になつたのかは、少し時間を遡る事になる。

「じゃあ、俺はそろそろ戻る事にするよ」

これ以上森を歩いていて、また妖怪と出合つたら次は無いのだ。身体能力の強化、身体の復元、牛鬼を内側から殺すための靈力増幅。既に三回、能力を使つてしまつた。

「そう？ 夜は妖怪の時間だから気をつけなさいね」

「……え？」

聞いてない。そんな事だれにも教えてもらひてない。

「まさか知らなかつたの？ 妖怪は昼より夜の方が妖力も高まるし、氣性も荒くなるの。一定以上の知力がある妖怪は朝も行動したりするけど今みたいな妖怪は基本的に夜に行動するの。でも里は結界で囲まれているし、神社には入るだけ無駄。私達魔法使いの家にも妖怪避けの魔法が掛けられているから野生の獣が被害に逢うのよね」

「……つまり、無謀にも夜に散歩をしていた俺は」

「生け贅同然の餌ね。一度食べられたんでしょう？」

フランは朝から次の日の朝まで遊ぶし、レミコアはランダムで朝か夜に行動するし、美鈴は一日中寝ている。

これで分かる筈がない。

「はあ……。うん、大人しく帰る。もう夜は外に出たくない」

そう言つてアリスに背を向けると、夕食に満足に有り付けなかつた腹から男とは思えない程可愛らしく音が…。

「…………」

「…………良かつたら私の家に来る? 夕食の残りならあるけれど」

「お願ひします」

そして現在に至る。

人形だらけの部屋で、人形が飛び交うのを見ながら食べ物が出て来るのを待つ。

もつこいつた物に抵抗が無くなつてしまつた自分が怖い。なんて馬鹿な事を考へているといかにも洋食と言つた感じの食事が運ばれてくる。人形によつて。

魔理沙は基本的に和食しか食べないらしいが、アリスは洋食派なのだろうか。

……名前の問題か? 違つと思うが。

運ばれてきた物はとても美味しかつたです。色々な意味で涙が出そうになつた。

「どうだつた？　他人に食べさせる事はあまり無いんだけど……」

「十分旨かつたよ。……悪いな、会つたばかりなのに」

会つて数時間の内に、女の子に家に招待され食事を作つて貰うなんて経験は普通出来ないだろう。

幻想郷に来てから普通に生活出来た試しが無いのでここでは普通かもしれないが。

「じゃあ、お礼と言つては何だけビ勇輝の能力を教えて。どうして不死者なのかも。タダでは悪いと思つたんでしょ？」

「……最初からそのつもりだつたつて顔だな。別にいいけどさ。……欠陥を修正する程度の能力。それが俺の力だ、死なないのは死ぬつて概念を消したからだな」

「……本当に人間？」

「最近は自分でも怪しくなつてきたけど人間だよ、一応

「言い切れないのね」

「悲しい限りだよ。つい半年前まで普通の学生だつたんだけどな……」

「あ、やっぱり外から来たの？」

「やっぱり？」

「人里で貴方を見た事は無いし、そんな格好をしてる人はいないか

「それは血で濡れたって意味か、この服の事なのかどっちだ」

「両方」

そう言つてアリスは楽し気に笑つ。

「……じゃ、そろそろ帰るよ。もう遅いし、長居するのも悪いから

「私は別に構わないわよ？」勇輝は思つたよりも面白くじ

「やつ言つて貰えるのは嬉しいけど、それじゃ俺の気が済まないから……正直、寝たいし」

「じゃあ、借りを作つておかなきゃね」

アリスが手をかざし、何かを呟くと魔法陣が勇輝の足下に現れ、体を潜らせるように上昇する。

「血が……」

魔法陣が通つた後から服が元に戻つていく。

「魔法使いにも服ぐらい一直せるのよ」

「便利なモンだな……。で、借りはまつ返せばいい?」

「利子が大きくなるまで取つておいてあげる」

「……早い内に返せるよつておくれよ」

一、二言話してからアリスの家を出る。

家から一歩出た所で、靈力をコントロールするのに集中した。

歩いていくのは危険。飛ぶ意外に安全な道は無い。

ゆっくりと田を開ける。

「……行ける」

ゆっくり、少しづつ体を浮かせる。

未だに、浮いてから移動する事が出来ないがアリスの人形を見て気づいた。

アリスの人形は糸で操って飛ばしている。しかし浮かせたり、行動させるのは魔力。それだけでは何のヒントにもならないが、要は見方だ。

糸で引いているように見えた。浮いているモノを動かす方法はいくつもある。その一つが……。

「身近に居すぎて気づかなかつたな……」

翼。浮くのは靈力のコントロールによるものだが、移動は翼を動かした時の風圧によるもの。

靈力で作り出した翼は蒼く、透き通った色をしていた。

「当然靈力を使い続けるし、まだ上手く動かせないか……」

しかし、これなら速く飛べるし使いこなせれば細かい動きも出来る。靈力の密度を高めたら防御にも使えるだろ？

「さて、帰るか……」

魔理沙の家で薬草を持つたり里に戻る。書き置きぐらいは残して。

其の参拾（前書き）

。 そう言えどもユニークアクセスが一万を超えたました（2011年9月）

読んでいただいている皆様には感謝してもしきれません。

其の参拾

冬になった。

これと言った事件も起こらず、坦々と時が流れたのである。

診療所もようやく軌道に乗ってきて患者の数も増えて来ている。喜ぶ事では無いのだろうが素直に嬉しい。

また、慧音の寺子屋の子供達の身体測定は此処でやっている。機具は林之助から奪つた。

発電機の作製に協力しているのだから文句を言われる筋合には無い。

計るのは身長、体重、座高だけ、中学生くらいの女の子の体重を計りうとしたら慧音に頭突きを食らつたのは忘れる事は無いだろう。

そして……。

「あのさ……此処、一応病院なんだけど」

「いいじゃない。神社は人は来ないし寒いもの」

「私の家は暖炉はあるけどマジックアイテムを詰め込んでるから使えないんだぜ」

病院には暖炉があった。それが原因で巫女と魔法使いが残念な程に入り浸っている。

更に……。

「咲夜、お茶は?」

「申し訳ありませんお嬢様。この家には紅茶の葉が一枚足りとも有りませんでしたので……」

紅魔館からも一人、暇人が来ていた。

そして四人はあたかも自分達の家であるかのようにくつろいでいる。待合室となっているロビーでの事だが、他に患者もいないので文句が言えない。言つたら論破された。

この診療所に足りていらないのは金銭、薬、機具の三つである。

患者が居ないのは今は昼時であり、休診時間となつてているからであるだけで、信頼性が無い訳ではない。

一応、料金体制としては診察はネギが一本買える程度の料金。

薬の処方が、モノによるが風邪薬だと米が一合買える程度の料金。

重傷、重病では入院させる。料金は症状にもよるが、足の複雑骨折で大抵のコミックスが大人買いで全巻買える程度の料金。

瀕死の場合は能力による治療。自分の実力とは言えないので極力使いたく無いのだが、命と天秤に架ける事は出来ない。料金は漫[画]喫茶で半年暮らせる程度。

何が言いたいのかと云つと、厳しいのだ。金銭的に。

とてもこの疫病神的存在達の相手をしている場合では無い。

サプリメント等が作れたら収入も安定するのだろうが、そうすると必要な薬を作る時間が足りなくなつてしまつ。

「あ、年越せそろに無い」

年末年始は休診としている。が、働かないとその日の食事も危ないときがある。

現在の蓄えは、一週間分の食料を貰える程度。休診は十一月三十日から一月三日まで、年末年始に質素な食事だけで済ませないといけないのは悲しすぎる。

「何言つてゐる? 勇輝は正月は紅魔館で過ぐすに決まつてゐるじゃない。ねえ、昨夜」

「はい、予定ではそくなつています」

「は?」

聞いてない。

「『』のチビツ娘は何を言つてるんだ? 勇輝は私と靈夢と一緒に神社で年を越すんだぜ」

それも聞いてない。といつかそれなら何の問題もない気がする。

「あんな神社では年を越す前に凍え死ぬんじゃないかしら？ 紅魔館は温かいけれど」

魔理沙に向けての言葉なのに靈夢への暴言にしか聞こえない。現に靈夢の拳がフルフルと震えている。

「あんな辛氣臭い屋敷で悪魔なんかと過ぐしたらおみくじで大凶を引くぜ」

「問題ないわよ、あの神社におみくじは無いもの」

靈夢がハツ、と何かに気づいたような表情に。

しかし、位置的な問題としか思えないのに今更おみくじを導入しても無意味だと思つ。

「俺は別に構わないけど。年末は博麗神社、正月は紅魔館で……」

「お嬢様、…………です。…………だから…………」

「…………それもそうね。なら私は正月に薬輝を連れていく事にするわ

「分かったぜ。じゃあ年末は私達が借りていくぜ」

咲夜が何か言つていたが気にする必要は無いだろ？

丸く収まつたので良しとし……。

「桜井先生はいらっしゃいますか？ 年末年始についての念仏について連絡……したい、のですが……」

間が悪すぎる。確かに里の纏め役の一人である爺さんの孫だった筈だ。

レミコアと魔理沙に睨まれて畏縮してしまっている。

数週間前に能力持ち、更に妖怪と鬪える力があり医者といつ役割。そんな理由で纏め役の一人に選ばれたのだが、今回は本当に間が悪すぎる。

「えーと、日時だけ教えていただけませんか？行けるかは……分からないですけど」

「はい。明日の正午から年末についての打ち合わせ……後、里の財政についてです。年末年始は宴会になるだけでしうから不参加でも問題無いです。では失礼しましたっ！」

必要な連絡だけ済ませ、逃げるように帰つて行く。何だか気まずい。「それより、もう直ぐ仕事を再開する時間だから手伝つか帰るかしてほしいんだけど……」

咲夜はともかく、他三人は役に立ちそつにないのでお帰りいただきたい。

「じゃあ今日は休みだな。これをドアに掛けなければいいんだろ？」

魔理沙が手にしているのは『本日休診』の掛札。

「ちよつ……」

止める間もなく駆けだした魔理沙。

「勇輝、これで勝負しなさい。負けっぱなしでは吸血鬼の名が廃るの」

レニアが将棋を何処からか取り出し、スペルカードを構えて強制的に付き合わせようとする。

何故こうこう時だけ連携して来るのか不思議でならないのだがこのままでは生活が危ない。

「一つがよく休む不死の医者、なんて感じになつたらお終いだと思う。」

「魔理沙。それだと勇輝が困るだらひじつけにしたら?..」

靈夢が取り出したのは『御用の方は博麗神社に賽銭を』と書かれた掛け札。患者を殺す氣だらうか。

「いえ、じつにしては?..」

咲夜が取り出したのは『御用の方は献血を行つて下さ』と書かれた掛け札。患者を何だと思つているのだらうか。

「……分かったから、居てもいいから仕事だけはさせてくれ」

その日、午後に来た患者はいなかつた。

其の参拾（後書き）

この小説での人里について

基本江戸時代。たまに中世ヨーロッパ（香霖堂等）

民間は繋がつてゐるかのように隣接してゐる。診療所は中心部で孤立。

診療所の間取りは「ひぐらしのなく頃に」の入江診療所をベースに。
地下は無い。

後は基本皆様の想像にお任せします。

其の参拾壹（前書き）

PVが10万を超えたました（2011年9月）

其の参拾壹

「……………」

空気が、重い。

里の中心部にある一番大きな屋敷の一畳広い座敷で里の重役達が一同に介していた。

勇輝は実感する。自分が此処に座るのは場違いだと。

長老、大手道具店の店長、寺子屋の教師、とりあえず自分よりも立場も年齢も上の人達ばかり。

いくら暴力団の方達の前に出た事があるとは言つてもこの空気は慣れないし好きになれない。

「……そろそろ始めてもいいのでは？」

十数人の内の一人が声を擧げる。

「そうですね。アレは出席する方が少ない。居るも居ないも同じだ
うづ
うづ

どうやらまだ誰か来ていな「うづ」が始まるらしい。

長老を奥に、一列に向かい合つて並んで座っているのだが、勇輝の席は一番出前の右側。隣は慧音が座っている。

あの会話を切つ掛けに、里の事について話し合いが始まる。

秋の農作物の収穫量について。家畜について。各自の経済状況について。

どれも重要そうな話なので口は出さない。新入りがあれこれ言うのは気分も悪いだろ？

「ところで桜井殿。診療所の方はどうですか？」

……何も話さないつもりでいたのに一人の爺が話を振つてくれる。

「里の皆さんのが健康なので目立つた仕事はありませんね。設備もそれなりに揃い始めているので大抵の病なら対処できるかと…。勿論、何事も無いのが一番ですが」

「それは頼もしい限りですね。少女を何人も連れ込んではいると噂を聞いたので心配していましたが」

一人の男性が皮肉げに会話に混ざつてくる。アレは……。

「お子さんが気になりますか？霧雨さん」

魔理沙の父親だ。

「いえ別に。あの魔女とは縁を切つていますので

「育児放棄ですか、器が知れますね」

少し話しただけだが確信した。「コイツは自分の嫌いなタイプだ。

「勇輝、少しばかり考へてモノを言わないか……」

慧音から小声で注意されるが、それを聞くつもりは無い。

「放棄とは人聞きが悪い。アレは自らの意思で家を出ましたし、存在が危険なんですよ。いつ妖怪になるか分からない」

確かに、魔法使いになつた人間は歳を取るのが遅くなり、百年もすれば妖怪と言えるだろう。だが、実の子供に言つていい筈がない。

しかし、感情的になつても仕方ないのは十分承知している。

だから、この放ちよの無い苛立つた感情は……修正しよう。

もう自分は子供ではない。

自分の行動に責任を持ち、回りと共生していかなければいけない。

人命に関わる仕事に就くなら尚更だ。

「そうですか。まあ、他人の家庭にあれこれ言つ必要は無いですね。それと訂正ですが少女を連れ込んでいる訳ではありません。以前世話になつた対価として吸血鬼に血液を提供、博麗の巫女や魔法使いの少女とは友好な関係を築いて異変解決をスムーズに行って頂く為でしたが、問題がありますか？」

感情の込もつていらない声で坦々と話す。それで興が削がれたのが魔理沙の父親は顔を背けた。

他の重役達もそれを察したのか、議題を次へと進めていった。

「勇輝、さつきのは不味かつたぞ……」

話し合いが終わり、それぞれが帰宅しようと席を立つた後、慧音に話しかけられた。

「何がですか?」

「お前が歪み合っていたのは道具店の店主で、この人里では屈指の権力者なんだ……」

「別にあの店から機材を買っている訳では無いですし、そこまで徹底的に対立する気は無いんですけどね」

「風評の問題だ…。誰も霧雨店に嫌われたくは無いからな」

「来る者は拒まず、去る者は追わずです。命より対人関係を重視するならそれも良じですよ」

「……本氣で言っているのか?」

慧音が見逃せ無い、といった表情になる。まあ、医者の発言では無かつただろう。

「命は……平等で不平等ですから。人は理性が高い分、そこを割り切ります」

生きたいと願う、死にたいと願う。正反対だが、どちらも同じ。苦しみから逃れたいだけ。

生き地獄を味わうくらいなら死ぬ。なんて考えも少くはないだろう。

本当に死を理解しているかどうかは別だが。

「慧音さん。俺つて結構、残酷な性格しますよ?……必要となれば、やつきまで此処にいた奴等を殺すくらいには」

午後からの診療所は変わらぬ様子を見せていた。

「気候が変化したからでしょうね……。栄養を付けてしっかり休ませて下さい。必要なら薬を出しますが、どうします?」

子連れの女性に問い合わせる。

薬はやはり高価だ。だからこそ、簡単に手を出せない人がいる。

「おいくらく、なんでしょうか?」

「失礼ですが、職種をお聞きしても?田那さんの中でも、貴女のいいですが。あと、家族の人数もお願いします」

「主人は畠仕事です。家族は主人と、私と、この子。あと主人の両親で五人家族です」

「なら、これぐらいですね」

紙に書いて女性に渡す。

「これだけで良いんですか?」

「薬を貰わせて栄養失調になられては立つ瀬がありませんから」

今渡した紙には本来の六割程度の金額しか書かれていない。

だが、小売りでは無いので売値は言い値で良いのだ。

「これなら大丈夫です。お願ひします」

「分かりました。五日分用意しますので待つていて下さい。説明書も付けておきますので」

これで本日七人目の患者。少し多い方だ。

いつもは五人以下だが、本格的に寒くなってきた事が原因なのだろう。

薬を渡し、料金を受け取った後、誰も居なくなつた待合室でソファーに座る。

考えたのは慧音に言つた事についてだった。

其の参拾弐

十一月一十四日。世間で言づくコスマスイグの日。

当然、診療所は営業中である。

「……暇だ」

誰も来なかつたとしても、だ。

薬も材料分は生成してあるし、道具の手入れや診療所の掃除も終わつた。

勤務中なのに、仕事が無い。

「……暇だ」

ジヤビヤソド、白衣のポケットを探ると一枚の紙が出て来る。スペルカードだ。

もつ何ヶ月も使っていないし、作っていない。

他にやる事も無いし、偶には異変対策をしてみるのも一考だらう。

今まで作ってきたのは相手の戦意を奪つような、もとい、もう一度と見たくなるようなスペルカードを目標としてきた。

空が飛べなかつた分、回避範囲が狭かつたし弾を放つ位置も地上からに限られてしまつていたからだ。

だが、今は空が飛べる。……とんでもない量の靈力を使うが、その欠陥は既に対処する事が出来ている。

つまり、空中戦で十分な効果を発揮し、尚且つ決定打に欠けていた弾幕の密度を上げるのが理想。

紙と鉛筆を用意し、相手の動きを計算に入れて弾幕の配置を決めて書き込む。

時間を忘れ、勇輝はスペルカード製作に没頭した。

「……うわあ」

自分で作つておいて、吐き氣のする弾幕が出来た。

気持ち悪い、絶対に相手に使われたくない。使われたら土下座をしてでも止めてもらいたい。

今日作つた他の数種類のスペルカードと比べても、一番最初に出来たこれに比べたら易しいものだ。

……魔理沙や靈夢は力づくで突破してしまうかもしれないが。

窓から外を見ると、既に空は赤くなっていた。

そういえば、明日は紅魔館に行く日だった。週に一度の帰還だ。

クリスマスだし、何かプレゼントでも持つていった方がいいのだろうか。何の用意もしていないが。

レミコアには血、咲夜にはナイフ、パチュリーには本、小悪魔には栄養剤の試作品。フランは弾幕「ひで良いだろ」。

行く前に其処らで買って行こう。……何か忘れている気がするが、忘れているのだから大した事ではないと思う。

「…………あ」

紅魔館の前まで来て美鈴へのプレゼントを忘れていた事に気づく。寝ているし、気づかなかつた事にして紅魔館の庭を通り、大きな扉を叩く。

「…………？」

出迎えは妖精メイド。何か言つてゐるが未だに理解出来ない。

しかし荷物を指してゐるので、持つていいのか？みたいな事だらう。

「これは土産だから自分で持つてくよ」

それを聞いて納得したのか、妖精メイドは仕事に戻つていった。

空を飛ぶ方法を得てからはチルノを探す必要も無くなり數十分で行き来できるようになつてからは紅魔館に来るのも近所に遊びに行く。

とこう気分になっていた。

最初に向かうのは図書館。パチュリーに本を渡すためだ。

相変わらず巨大な扉を押して、中に入る。

「パチュリーいるか？」

呼んでみるが返事は返つてこない。いつもなら小悪魔辺りが駆け付けて来るのだが…。

パチュリーがいつも座っている椅子にも、たまに何かを作っている研究室にも姿は無い。

「仕方ないか……」

パチュリーや小悪魔は後にして、レミリアと咲夜に渡しに行こう。

図書館から出て、長い廊下を歩きレミリアの部屋の前に着く。

しかし妙だ。気配が無い。

「レミリア、いるか？」

返事は無い。ノックしてから中を確認してみたが、やはり誰もいなかつた。

寝室にも行ってみたが、誰もいない。

食堂にも行つたが、妖精メイドが働いているだけで咲夜やレミリア、

パチュリー、小悪魔の姿は無い。

「……フランの所に行くか」

地下室から出られなくなりそうだが、他に見つからないのだから仕方ない。

長い廊下を歩き、長い階段を下り、長い地下通路を歩いていく。

……！ こんなに長かっただろ？

しかし辿り着くには辿り着いた。

「フラン、入るわ」

重いドアを開けて、中を確認する。そして……。

「どうしてこうなった……」

落ちた。ドアを開けて中を覗き込んだら床に穴が開いて落ちた。

しかも穴は閉じ、靈力弾では壊せない程の結界で完全に閉じ込められる。

まさかとは思うがレミコア達の仕業だろ？ ……とりあえず、落ちた先の暗い通路は蠟燭の明かりで照らされていた。しかし 7 - 8 メートル間隔で配置されており薄暗い。

落ちた穴からは出られないになかったので、一〇分ほど前へ前へと進んでいた。

分かつた事は一つ。壁、床、天井は結界により防御されている。破壊して脱出するのは魔理沙でも不可能だ。

もう一つは「」が迷宮のような作りになつて「」の事。通路は分かれ道がいくつもありて、どこも似たような作りになつていて。そのせいで感覚が鈍つてしまっている。それに気力が削がれてしまつている。

何か変化が無いと精神的に参つて……。

「……フラン？」

フランが両膝を抱えて通路で蹲つていた。

「……つー？ お兄様あ！」

「どうちに気がついた途端に、涙目になつながら走り寄つて来て抱きついてくる。

「どうじてこんな場所が……。というか何でフランも落ちてんだよ」

「外からお姉様の悲鳴がしたから、外に出たの……そしたら

「ミコア、お前もか……。

「壊して出るとかは出来ないのか？」

「リリもフランの部屋と同じ結界が張つてあるから……」

「じゃあ、リリが何か分かるか?」

「侵入者殺しの迷宮」

「いや、部屋の前に作るなよ」

「作ったのはフランじゃないし、お屋敷が出来た時に作られたらしないんだもん」

「じゃあ何で今更……」

「間違えてフランが作動させちゃった」

……………“ひきめり吸血鬼はバ……計画性が無いらしい。

とりあえず、出口を探さなければ話にならないのでフランを引き摺つて再び進む事にした。

其の參拾弐（後書ナシ）

さうしていられた……。

其の参拾參

「……なあフラン。」ひたちで本当に合つてゐるのか?」

「……もつ少し、もう少しだよつ!……たぶん」

あれから一時間。地下の迷宮を一人で彷徨つていた。

「勘弁してくれよ、いい加減荷物を持つのも苦痛に感じるし、気が狂いそうなほどストレスが急激に貯まり始めてる」

「だつて今まで一度も落ちた事無いもん!落ちるなんて思つてなかつたから出口だつて分からぬいよ!」

「……言ひやがつた。分からぬいって認めやがつた」

フランに頼つていたら……一度と日の光は拝めない。

「……仕方ない。能力を使つか

足りないのは……欠陥しているのは知識。だがそれだけではまだ足りない。

空間を把握する程度の能力を……。

「フラン、こつちだ

「あれ? お兄様道分かるの?」

「お前よつは分かる、といあえずはこいつだ」

能力で得た力で分かったのはこの迷宮の構造と現在地。それと迷宮の中でも迷う数名の位置。

ロールプレイングゲームの地図のような感覚だ、大体の道は分かる。

数分歩き続けたところで遭難者一名を発見した。

「勇輝さん！ それに妹様も。どうしましよう、パチュリー様が…」

倒れたパチュリーとオロオロしている小悪魔だ。

「今日は喘息の発作か…どうしてここに落ちたのかは知らないけど今は良い。脱出するからパチュリーを背中に乗せてくれ」

ととりあえず膝をついて姿勢を低くするが、パチュリーは立ち上がる。

「けほつ。大丈夫……それに、貴方の背中に乗ると……死ぬわ」

パチュリーはチラッとフランに視線を移す。

ああ、本当だ。何か禍々しいオーラを放つている。

「じゃ、じゃあ私が肩を……」

小悪魔がパチュリーを支える。

「だけど一人は何で落ちたんだ？ フランの部屋なんて行かないだろ？」

「「」に落ちる穴は幾つもあつて……レリヤとフロンの部屋にある起動装置を、両方とも作動させなきゃいけないの。私たちは図書館から落ちたわ」

つまり、吸血鬼姉妹のせいでの騒動が起きている訳だ。

「道は分かってるんだけど、人間の形をしていない生物がこの中にいる理由は？」

「「」は、最後の抵抗手段として作られたから……けほつ。不死の怪物が徘徊しているの、お腹を空かせた状態で。頭を潰しても半日で再生するから、戦わないのが賢明ね」

何故屋敷の中にそんなものを作るのかは描いておくが、とりあえず……。

「じゃあ、あっちの方で……」

指で指した方向から爆発音が響く。

「戦つてるのがレミリアでいいんだよな？」

「クッ、とパチュリーは首を縦に振った。

「咲夜、コレはどう壊したらいいのかしら？」

「頭を潰せば問題ないと思します」

田の前にいる……ケルベロスのような何かに向けてグングニルを振るひ。

頭を一つ切り落としたが、残りの一つがレミリアに食らいついた。それを咲夜のナイフが貫く。

レミリアのドレスは既に深紅に染まっていた。

「まったく、母様も厄介なモノを用意して逝ったのね。音を聞きつけて雑魚が湧いてくるし」

「お嬢様もですが、妹様も入口を開いているなんて思つてもいませんでしたから……」

頭を失つたにも関わらずピクピクと動くケルベロス的な何かを、放たれたレミリアの圧倒的な妖力の塊が消し飛ばす。

「恐らく紅魔館の住人は全員落ちているわね、でなければ此処の意味が無いもの」

「穴は紅魔館の通路という通路に配置されていますからね。まあ、一人は地上で寝ているんでしょうけど」

「さつき新しく靈力を持った奴が落ちたわ。きっと勇輝ね」

「……死なないでしょうか？」

「アーツも不死だし、能力も温存しているでしょう?」

「それもやつですね」

レミコアが紅い液体と肉片で汚れた通路を踏み、歩を進める。

咲夜もそれに続くが、五歩と進む前にその歩みを止めた。

「あら、セツキのよりは強そうじやない」

田の前には獅子の頭、鷲の翼、蛇の頭の尾を持つ体高四メートルはあるキマイラが…。

「……間違いなく、レミコアだな」

真っ赤に染まつた通路。レミコア達が通つた後だろう。

「お兄様……。フランも、思いつきり何か壊していいよね」

血を見て発狂し始めた娘までいる。病んだ少女はお断りだ。

「出できたら思いつきり遊んでいいから今は我慢しろ」

小悪魔の顔が責ざめて来ている。この中では一番戦闘力が低いからだろうか。

「あ、出て来た出て來た」

フランがわくわくしながら通路の先に視線をやる。

「……『ゴーレム』？」

石で出来た巨体で壁や天井を削りながら、じりじりに向かって歩いてくる。

「あーあ、これじゃ赤いの出ないし面白くないや。お兄様に譲つてあげる」

本当に残念そうに溜息を吐きながら、フランは後ろに下がる。

だから、面倒臭そうに溜息を吐いてから、いつの間にか

「おい、冗談も程々にしろ。頼む、戦ってくれ、俺はまだ死にたくない」

極力他人に任せたい。能力が使えるのはあと一度しかないのだ。

「むー。お兄様の頼みなら仕方ないか……」

フランが右手を開く。

「ぎゅう！」

フランが開いた右手を力強く握る。すると、ゴーレムが爆発して粉々に砕け散った。

「……いや、最初から使えよ」

と言いつつ、アレが自分に使われる事が無かつた事に心の底から安心していた。

其の參拾參（後書~~參~~）

公式設定では無いので細かい事はお~~氣~~になさり~~さ~~す。

「……。何でそんな強いのにここまで手の込んだ迷宮を作るんだよ」

「……吐き気がしそうだ」

嘔せ返るような濃い生き物の血の匂い。それが通路に充満していた。レミリア達に追いつくどころか、キマイラと遭遇してから殆ど出口に近づけていない。

原因は襲ってくる妖怪……いや、これは使い魔だろう。目の前の人や妖怪を殺す事だけを命じられ、それ以外の自由を奪われた哀れな使い魔。

「パチュリー、フランもそろそろ疲れ始めてる。今は感情が高ぶつてるから問題ないけど切れたら戦えないぞ」

「そういう場所なの。ここはレミィのお母さんが作った最後で最狂の罠。私は話でしか知らないけど、死んでも尚ここまで強力な使い魔との契約を続けられるんだから相当……今のレミィの五倍は妖力があつたと思うわ」

「負けたのよ。大昔に西洋からこの幻想郷に入つた時に。吸血鬼は数名、相手は鬼や天狗、そして博麗の巫女。幻想郷と吸血鬼の総力戦になつたらしいわ」

話しながらもフランの援護のために靈力で武器を作り、使い魔達に放つ。

「だから子供の為に、か？」

「分からないわ。レミィはあまりお母さんについて話をないから……」

背後からトカゲのような使い魔が食らいついてくるが、靈力の槍でその頭蓋を貫く。

しかし、そのまま勇輝を食い殺そうと顎を止めない。しかし、フランの能力によつて内側から弾け飛び、肉と血液を撒き散らす。

「ちつ、数が多くなつて来たな。フランの能力は一体ずつが限界。俺や小悪魔じや持て余すし、パチュリーは体が……」

……パチュリーの体の調子を良くしたら良いのでは？

「フラン！ ちよつと時間を稼いでくれ！」

フランに能力ではなく、広範囲を攻撃できる妖力弾に変えて貰おつとしだが……。

「お兄様を食べていいいのはフランとお姉様だけなのに……お前等が食べようとするなんて……」

駄目だ。変なスイッチが入つている。話を聞くどころか声も届いていない。

だから、隣で必死に応戦している小悪魔に手をやり、ポンと肩を叩く。

「頼んだ。お前しか頼れる奴がないみたいだ」

「ええっ！？ 無理です、私死んじゃいますよ！」

使い魔の鳴き声やフランの戦っている音がつるぎくて何も聞こえない。だからパチュリーに話しかけた。

「体の調子が良ければどの程度戦える？」

「そうね、少なくとも魔理沙に後れを取らないぐらには戦えるわ

「十分だ」

今日の最後の一回の能力。それでパチュリーの体のあらゆる病、弱さ…欠陥を修正する。

通常の状態ではない、最高の状態にまで。

「……！ 行ける、今ならレミィを簡単に泣かせられるわ！」

酷い表現だ。しかし例えが例えだけに期待が持てる。

パチュリーがフランの横に並び、微笑む。

「少しだけ、本当の魔法を見せてあげるわ……そう、見れるのは一瞬だけ。貴方たちは……」

一瞬で死んでしまうのだから。

刹那、パチュリーの前に浮かび上がった魔法陣から業火が吹き出し、使い魔を一掃した。

「す、凄い……」

小悪魔の口からそんな言葉が漏れる。

緋色の炎は一瞬で使い魔たちを灰へと変え、消滅させる。

いつも見ている病弱なパチュリーからは想像もできない、圧倒的な光景。

「ああっ！？ フランのおもちゃが……パチュリー何するのー。」

しかしふランは不満そうな声を上げる。

「フラン、今そんな事を言つと流水を頭から浴びせるわよ。それにここから早く出たいでしょ？」

「むー」

「拙いわね……」

「申し訳ありません。お嬢様」

咲夜は致命傷では無いが、動きに制限が出てしまつよつた傷を負つ

ていた。

咲夜のメイド服は返り血で赤く染まっている。しかし、その一部には自分の血も混ざっていた。

その強さから忘れてしまう事もあるが、咲夜は人間だ。体は妖怪より遙かに脆い。相手の一撃が致命傷になつてしまつ程に。

未だ立つて戦えているのは実力、才能。そしてレミリアの従者としての氣概によつてだらう。

「咲夜、少し下がつて休んでいなさい」

「ですがお嬢様っ！」

「私を過小評価しているんじゃない？ 偉大なる吸血鬼の力。その後ろで揉んでいなさい」

レミリアはグングニルを使い魔たちに向ける。

「母様には悪いけど、お前等は肉片へと変えてやるつ……一度と復活できない程細かくな」

「……近いな」

薄暗い通路の先から伝わってくる、直接胸を抉られるような威圧感。それは今迄に一度だけ経験したモノであり、この館の主である吸血鬼の物。

「ええ、レミィの妖力ね。それより大丈夫なの？　体力自慢には全く見えないわよ」

「小さな子供を背負つて走れないんじゃ男としてどうかと思つけどな」

そう、今はフランを背負つて走っている。

やはり能力の多用や、ハイになつていた反動だらう。疲れて寝てしまつた。

「お二人とも、私は心配する対象に入らないのですね……」

小悪魔が何か言つていたが、構つているほど余裕はない。

「その荷物は小悪魔に預けたら？　さすがに走りにいくでしょ？」

「いや、これぐらいは何ともないから。それより……」

見えてきた。深紅の弾幕が飛び交う戦場が……。

其の參拾肆（後書也）

ああ、予定より遅く……。

「レミリアー！」

やつと追い付いた。

しかしそこは地獄絵図。使い魔だつたものが散乱し、床は赤い水溜まりが幾つも広がつていた。

そこに立つ者はレミリアただ一人。

「勇輝！　咲夜が怪我を負つたわ。早く治してちょうだい！」

「つ！」

紅い床の上に、壁にもたれながら座る咲夜に駆け寄る。

脇腹に少々深い切り傷、足も筋肉を切られている。このまま放置したら死んでしまうだろう。

「咲夜。正直、どれぐらい持ちそうだ？」

出血が傷の大きさに対してもない。恐らく能力で血液の流れる時間操つているのだろう。

「そうね……、意識は持つて五分。死ぬのは十分後じやないかしら

拙い。能力がもう使えない今、診療所で治療を行つしかない。

「応急処置はしてあるな……。レミリア、悪いけど全速力で診療所に向かう。護衛はフランが付いて来てくれ。フラン、頼む。起きてくれ」

「ん……。どうしたの、お兄様？ フラン、まだ眠たい……」

「フラン、お願い。咲夜を助けて欲しいの」

レミリアの真剣な声を聞き、フランは手を擦り意識を覚醒させる。

「……分かった。フランはお兄様の邪魔をする」「!!を壊せばいいんでしょ？」

「ああ、それでいいよ。それとパチュリー、出口は分かるか？」

「ええ。図書館でこここの地図は見たから。それに今の私は出来ない事の方が少ないわよ？」

「よし、じゃあ咲夜。ちょっと背中に乗つてくれ」

咲夜は黙つて勇輝の背中にしがみつぐ。

通路は狭い。フランはともかく、勇輝は靈力の翼をフルに使えないでの飛んでいく事は至難だらう。

だつたら、何か乗れるものを作り出せばいい。

以前レミリアと戦った時に、靈力に人の形を「えるスペルカードを使用した事がある。その応用だ。

しかし、いくらなんでも自動車やバイクなんて複雑な物が作れる筈がない。

とりあえず、時速三十キロ程出たらいいのだ。

イメージは狼。 それも大きな。

折角だ。白紙のスペルカードに記録して使用してしまおう。そうすれば少しは余裕が持てる。

「創造『ショイドクリーチャー』」

「おー、速い速い。飛んでたら追いつけないかも」

予想以上に速かつた。大きさは二メートルもあるし、スペルカードによつて動作はループしている。そこまで精密なコントロールは必要ない。

形の維持のためにどんでもない量の靈力が消費されていくのが分かる。人が乗つても形が崩れない程の密度があり、大きさもかなりなので無理もないが。

しかし、靈力切れの心配は無い。

以前は靈力の少なさを欠陥とし、量を修正していた。しかし今は靈力が“減る”という事を欠陥とし、修正しているのだ。

だが良い事ばかりでもない。元々の靈力の量を超えるような出力が

出ないのだ。

つまり、靈力の翼を使っている時は単発で靈力弾は放てもスペルカードを使用できない。この狼を作ったスペルカードを使っている限り、靈力弾は作れない。

だからこそ、フランの護衛が必要不可欠だった。

フランが落ちないように勇輝がフランを囮うように乗り、咲夜はその背に抱き着く。

使い魔が見えたらフランが能力で倒し、他の使い魔が集まつてくる前に靈狼で駆け抜ける。

これなら出口まで一分で着くだろう。しかし、問題はここからだ。

既にここのは紅魔館ではない。壁や床も加工された石造りではなく、剥き出しの石壁となつていて。

空間を把握する程度の能力によれば、出口は霧の湖の水中。当然肉食の妖怪が泳いでいるし、以前鮫がいるのを確認した。

そして、今の三人にの衣服には血がべつとりと染み付いている。

「いいか！」

目の前に半径2メートルほどの池が見える。霧の湖に繋がっているのだろう。

「お兄様、ここ行き止まりだよ？」

「……ああ、フランは外に出た事無いのか」

なら、湖も知らないだろ？。

靈狼を消し、違うスペルカードを取り出す。

「咲夜、傷に触ると思うけど我慢な。それと、泳ぐから潜る前にしつかり息を吸い込むよ！」

「え、ここの風呂じゃないよ？」

フラン、風呂は泳ぐ場所じゃない。

「行くぞ……。惨符』一本道の鬼』』」

開発した中でも、三本の指に入るほどヒグイスペルカード。四方が二メートルの通路に敵を閉じ込め、両側の出口から大量の靈力弾を送り込むというもの。

本来なら出口は両方自分の前に作るのだが、今回は湖の上だ。

一時的に作り、使つているだけとはいって、『空間を把握する程度の能力』は便利だ。

距離まで分かるのは嬉しい誤算だらう、そのお陰でこうしてスペルカードを最大限利用できる。

水上まで二十メートル。……息が持つか心配だが、行くしかない。

そして、靈力の通路の中に肉食の魚が入っていないとも言い切れない。

意を決し、三人は水の中へと飛び込む。

「ん？ アレ何だろ」

霧の湖の上、そこには妖精がいた。

「チルノー。どうしたー？」

肉食の妖怪もいた。

「ルーミア、ほら、これ……」

チルノは湖から突き出るよう現れた靈力の柱のよつたものを指差す。

「何これ？ 食べられるの？」

「あたいの感じじゃ、これはアレね……アレよー！」

「……そーなのかー」

「どうあえず凍らせよっと」

「……！？」

通路の先の水が凍り始めた。拙い、あの馬鹿を計算に入れていなかつた。

フランに目配せすると、フランは額き右手を掲げて開く。

視線を上に戻すと同時、氷が粉々に砕け散つた。

水面まであと少しだ。もう、スペルカードはいいだろ？

フランに見えるように上を指差し、通路を消し去ると同時に、背負つていた咲夜を腕で抱き、靈力の翼を作り出し浮上した。

翼が水を持ち上げ、水が舞い上がる。その時に悲鳴のようなものが聞こえたが氣のせいだろ？

「フラン！ 僕は診療所に向かう！」

「フランも行く！ どうせお家への帰り方分からぬもん！」

咲夜は氣を失つていた。急がなければ……。

靈力の翼を羽ばたかせ、人里へと急いだ。

フランが氣化しそうになり、慌てて赤く染まつた白衣を被せたのは余談である。

「……とつあえず、命は助かるか

診療所で咲夜の傷の縫合を済ませ、輸血をしながらベッドに寝かせた。

赤い白衣は水を張った桶に突っ込んである。

傷痕は大きく目立つし、足の神経にも損傷はあるだろう。悔しいがこここの設備ではどうする事も出来ないので能力に頼るしかない。

「お兄様の家、ちっちゃくて可愛いね。キレイだし」

フランはさつきから診療所の中をぶかぶかのシャツ一枚でうらうらしている。血塗れの服でいるのはどうかと思ったので着替えさせた。咲夜もメイド服から着替えさせたが、不可抗力だった。やましい気持ちちは微塵もない。

死にかけた患者に欲情する医者がいたら、医者を辞めた方がいいだろ？

「フラン、頼むから大人しくしてくれ」

診療所に入るまでに何人もの人に見られた。しかも吸血鬼と共にいるのだ、直に慧音や妖怪嫌いの人間達がやって来るだろう。

「桜井殿、話がある！」

玄関の方から声がする。

「来たか……。フラン、咲夜を見ていてくれ。それと何が聞こえても、里の人間が何をしようと大人しくしてくれ、頼んだぞ」

「うん……。でも、お兄様が危ない目に遭うようなことはしないでよ」

「……ああ、約束する」

「桜井殿、お聞かせいただきたい。何故悪魔の従者を助けるのですかな？」

やつて来たのは十人。若い男が七、重役が一、そして慧音だ。

「何故か？愚問ですよ、俺が医者だからです」

「そういう意味じゃねえ！ どうして妖怪の見方をするのかつて聞いてんだ！！」

男の一人が声を上げる。血の気が多いようだし、献血でもしてやろうか……。

「アーツは人間だ。助けていけない理由は見つからないな」

「悪魔に魂を売ったんだろ、だつたらもう人間じゃねえ！」

「……ああ、駄目だ。

物事を感情的に、まるで自分の考えが正しいとでも協調されると思

つていて。

自分を中心に世界が回っているとでも勘違いしているのか。

「……おい。餓鬼か、お前は？」

「う…………」

男は面を食らつたような反応をする。突然、今まで呆れ顔で話していた相手が威圧感を含む声色で罵倒してきたのだから無理もない。

そして当の勇輝の眼光は鋭く、声には感情が無い。

「偏見で物事を判断するな、吐き気がする。それにお前が邪魔をするなら、俺はお前を殺す。患者一人を馬鹿一匹排除するだけで救えるなら安いモンだ。答える！ 邪魔をするのか、しないのか！」

「……チツ」

男は舌打ちをする。だが、そうするべきでは無かつた。

いつ取り出していたのか、勇輝は手でメスを弄ぶ。そして、それを俺の足下に投げる。

ドツ、という音と共に半分以上を氣の床に沈ませたメスを見て、慧音以外の九人から冷や汗が流れた。

「俺はさ、一択で質問してんだよ。理解出来なかつたか？」

「し、しない……。邪魔はしねえよ」

怖じ気づいた男から視線を外し、重役に目を向ける。

「里に危害は無い。それに咲夜はある程度友好的に里と接していた筈だ」

「ああ、治療は構わない。しかし、被害が出ないという確証が欲しい」

「……博麗靈夢を呼ぶ。それで文句は無い筈だ」

「分かった、それなら皆納得してくれるだろう」

「これで里との交渉は済んだ。だが……。

「まだ何がありますか？慧音さん」

「……少し、話がしたい」

其の参拾伍（後書き）

ああ、まだ終わらない……。

そして文字が多くなってしまった。

「それで、話つて何でしょうか?」

診察室では咲夜が寝ている。一人は待合室で向かい合つて座つていた。

「お前は……。お前は何のために医者になつたんだ?」

「…………」

「私には分からぬ。だが、少なくとも人を救つために医者がいると思つてゐる。……どうしてあんな事を言つた?」

「…………少し、昔話をします」

十三年前の事だ。

父親がいつものように、表向きに病院に行けないような人達の所へ朝から治療に行つた日の朝。

当時六歳だった勇輝は、既に父親の仕事を見たり、勝手に資料を漁つて勉強をしたりしていた。

周りの子供より大人びていたが、ヒーローに憧れたり、親の仕事に興味を持つなど年齢相応の感性を持っていた。

しかし、その日は唐突に訪れてしまったのだ。

母親と二人、何も変わった所の無いマンションの一室で母親に甘えながら休日を過ごしていた。

「勇輝、大きくなつたらどんな事がしたい?」

今はもう、顔も思い出せなくなつてしまつた母親。

どういう訳か、小さな頃の自分の写真や映像はあるのに、そこに母は一度も写つていなかつた。

「んー。父さんと同じ仕事がしたいかな」

「そりなの? ならいつぱい勉強しないといけないわね」

「大丈夫だよ。クラスではテストも一番できるもん」

「そりだつたわね。勇輝は頭も良いし、しつかりしてるからきっとなれるよ」

子供の将来の夢を聞いている。そんな普通で微笑ましい時間だつた。

だけど、母親は倒れた。

その症状から、勇輝は母親が重い病気にかかっていることを理解した。だから、病院に連絡を入れた。

「母さん! もう直ぐだから、あと少しで救急車が来るから!」

最適とはいえたが、父親の部屋から薬を持ち出し、その病の苦痛を和らげる処置を行つた。小学生であつた身から考へると、これ以上ないぐらいの判断だつた。

救急車が来たのは十五分後。母親は病院へと運ばれた。

「君、お父さんは今何処にいるか分かるかな?」

母親を担当したのは初老を迎えた白髪の男性の医者だつた。

「分かんない。父さんは電話も持つてないし……」

医者は困ったように、ボールペンで机を叩く。

「君のお母さん。恐らく過労による貧血、……って言つても分からぬよな」

「分かるよー。でも違ひ、母さんは貧血じゃなくて……」

「ははっ、賢い子だね。でも、症状は貧血で合ひてこるんだよ。今田一田、点滴をしながら入院すれば直ぐに良くなるから」

「話を聞いてよー。母さんは違う病気なんだー。早く治療しないと

……」

「大丈夫だよ。お母さんの病室まで案内してあげるからね」

医者は看護師を呼んで、勇輝を連れて行くように指示する。

勇輝は不満だったが、本物の医者が言つなら氣のせいかもしない。

そう思つて、一晩中母親の傍で寝ずに看病をしていた。

次の日の朝。母親が冷たくなつてゐる事に気づいた。死因は、虚しくも勇輝の思つていた病による物であった。

「と、まあこんな所ですね。あの時、親父がいたら母さんは助かつたかもしない。それに自分にもう少し知識と自信があつたら、助けられたかもしない。それが医者になつた理由です」

慧音は何も言わない。ただ、勇輝の話に聞き入つたい。

「だから、俺は自分の患者は全力で助けます。一度とあの時の状況を作り出さないように。誤診も失敗も許されない、絶対に死なせてはいけない……それだけです」

「……他人を、犠牲にしてもか？」

「場合によります。俺の中では、治療に当たつた患者の命が最優先です。例えるなら二十人分の命でしょうか？ そういう事です。大勢を救うための少数の犠牲、正しいと自信を持つては言えませんけどね」

「だけどそれでは……ツ！」

「理屈じゃないんです。言つてみるなら枷ですね、幼いあの時の自分が架した……」

慧音は何も言わず、診療所を後にした。呆れられたのか、黙認され

たのか。さりげない事に変わつは無い。

とつあえず、里の人間たちを納得させるために靈夢を呼びに行へることにした。

「て訳だ、明日まで診療所にして欲しい」

「嫌よ。面倒じゃなー」

「飲み食いは好きなようにしていいからね」

「よし」と行くわ

話がつべのこ、モノの数十秒もいらなかつた。

「お兄様……」

フランは戸惑つていた。

聴こえていたのだ、勇輝の過去の話が。

それに、その話は自分に話されたものではなく、それでいて他人が
聴くには重すぎる話。

フランは勇輝を気に入つてゐる。寧ろ好意を寄せていると言つても
いいだらう。

初めて、自分から逃げずに共にいる事を選んだ存在。

姉のレミコアでさえ隔離という処置を取っていたのだから、その反動もあるのだろう。

勇輝がストッパーになつてゐるという事で、紅魔館の中なら自由にして良いという許可も貰えた。

あらゆる方面で自分を救つてくれた存在なのだ。

だから力になりたいと思つ。けど、自分にはそれができない。

壊す事しかできない自分には、人を治す事はできないのだ。

眠る咲夜を見ながら、フランは右手を血が出そつたほどに握りしめた。

其の参拾漆

冬の博麗神社。

いつも巫女以外に人影の見えない、人里の人間は何故この位置に建つているのかも分からぬ静かな神社。

しかし、今日この日は賑やかな声と人気で騒がしくなつていた。

里の医者、桜井勇輝もその宴会の席に招待されている。そんな彼の、此処に着いてからの第一声は……。

「酒臭え……」

彼は生前といふか、外で普通に暮らしていた際、十九歳という大人の一歩手前の年齢であった。

当然、飲酒喫煙はした事がない。成人式にすら出る事が出来なかつた。幻想郷に入つたせいだが。

そう考へると、何故あのタイミングだったのかと自分の運の無さを嘆きたくなるが、この際どうでもいい。

幻想郷に来て、あと数ヶ月で一年だ。そして年齢も二十を迎えた。

その事は周りに話していない。そもそも、身体は十九で成長どころか老化も止めている、そして周りには見た目小学生低学年の長く生きている吸血鬼。何十年も紅魔館で図書館に籠つてゐる魔法使い。年齢は分からないが、周りからの反応を見るとかなり年上扱いされ

ている節のある半獸。

……「んな面子の前で、自分、一十年生きましたよ。なんて報告をしてみる、殺される。

きっと、許されるのは靈夢や魔理沙にだけだ。だけど奴等は口が軽い。

「おーい、勇輝ー。飲んでるかー？」

顔をアルコールで赤くさせながら、上機嫌で魔理沙が近寄つてくる。開けたばかりの、中身が大量に入った酒瓶を“両手に”持ちながら。

「んー、まあ少しずつ。あんまり酒は強くないみたいだから」

身体が成人してないから、という訳ではなく体质の問題なのでこればかりはどうにもならない。

「なんだと、私の酒が飲めないってか？」

「いや、そういう訳ではなムグツー？」

酒瓶」と口に酒を注ぎ込まれる。

飲まなければ窒息死。そして、短時間での大量のアルコール摂取は……死ねる。

「おーおー、飲めるじゃないか」

駄目だコイツ、早く何とかしないと……。

いや、本当に何とかしないと死ぬ。少なくとも、明日素晴らしく鬱

になるような頭痛に見舞われる。
酒に弱いのは欠陥だつたのか……、いや、それは個性といつヤツであつて酒に強い人間が優れているなんて事はない筈で……。命の危機が迫つてゐる。

でも、死ねなくなつてるんですね。また苦しみ続けるんですか。

「はつ……！」

何時の間にか宴会用に敷かれたシートの隅の方で座つていた。さつきまで中心部にいた筈だが。

「少しさ断る事を覚えたらいづりへ、将来、尻に敷かれる事になるわよ

「咲夜か、助かつた」

「別に良いわよ、助けたのはお嬢様の相手をさせたためだから

「ああ……」

咲夜にあの時の怪我の面影はもつ無い。後日に能力で傷を元に戻したお陰で、その日からメイドの仕事に復帰している。代償は違う方面でそれなりにあつたが。

余談だが、あの地下迷宮はパチュリーの手によつて何重もの結界と行程を一つずつ解除した場合のみ使えるようになつて設定された。一度と

行きたくない。

紅魔館からも、総出で宴会へと出席していた。残っているのは小悪魔だけである。

普段、図書館から一歩もでないパチュリーですら宴会に参加していた。美鈴も忘れられずついて来てている。

「勇輝、早くこいつに来なさい」

「お兄様ー、早くー！」

フランはあの日、咲夜を診療所に連んだ際に何の問題も起こそなかった事もあって勇輝に会いに来る場合のみ外出を許可された。勿論、監視に誰かつけるのが条件だが。

紅魔館メンバーの周りには、日本酒ではなくワインの瓶がいくも置かれていた。正直、空気を壊しているように見えなくもない。

見渡してみると、この宴会の席の食べ物の比がおかしい。

まず、飲み物と食べ物の比が九対一なのだ。この時点で常識離れしている。

そして、“宴会”であるのに和と洋の比が半々なのである。決してパーティーではなかつた筈だ。

料理を作っていたのが咲夜と靈夢なので仕方ないのかも知れないが、見栄えとしてはどうかと思つ。

「夜なら外でも自由に行動できるのにな……」されじや傘の下しか居られないわ

「なら夜になつてから来たりまつだよ……」

「私がもひつけたわ。レミィが貴方に会いつて聞かなこのよ

それで氣化されたらどんな反応をしたらこのだろ？

「別に良いけどな。俺の家でやる訳じゃないから片付けも難で良い

し

「あー、お兄様が靈夢に喧嘩売つて……」

「やるよー。少なくとも自分の出したガリベリこ見壁に片付ける
よー。」

靈夢に喧嘩を売つたら消し炭になる。魔理沙の魔砲が可憐く見える
ぐらこの攻撃で。

「でもさ、何で僕から宴会するかな……」

「田舎もおかしいわね」

「……やっぱり数え間違えとかじやなかつたか

「ええ。今日は十一月三十日、大晦日の前日よ

そつ、今日は大晦日ですらない。その前日だ。

宴好きな巫女が、前日の晝から宴会を始めたのだ。

正直に言おう、迷惑だ。掃除がしたかった。

大晦日は忙しくなるだろうと、今日掃除を終わらせる予定だった。

そんな事を考へていると、酔った靈夢がこんな事を言い出した。

「よーし、酔酔つて来たといひで名前、秘密の暴露を始めるわよー」
「...」

其の参拾捌

「また唐突な……」

靈夢は酒瓶片手にふらふらと紅魔館メンバーの方へ近寄つてくる。駄目だ、完全に出来上がつてゐる。

よく見ると、靈夢は魔理沙ともう一人、誰かを引き摺つていた。
魔理沙と似た金髪に、カチューシャをした頭……ビニカで見た気がする。

「靈夢……。秘密を話し合つのは別に構わないけど、まだ口が傾き始めたばかりよ？ 年明けまで持たないんじゃないから」

「なに言つてゐのよ、最後は弾幕！」にあまつてゐでしょー

無理です。貴方達のような化け物と一般人と一緒にしないで下さい。

靈夢がビシイツ！ と勇輝の顔を指差す。

「まずは勇輝さんから、はじめてー！」

「んな無茶な……」

「五秒以内に言わなかつたら全員のスペカで挟み撃ち

「はっ？ いや待て、死なないけど死ぬよ俺」

「「」一、よーん」

「分かつた！ 分かつたからー。」

「仕方ない、」しつなつたらアレを言ひつけ……。

「実は、外界にいた時は彼女がいました……」

殴られた。誰とは言わない、ただ五人ぐらいた時に殴られた。

「嘘吐くなよ、何か言え」

「……家の診療所、庭にお墓を建ててあります」

手紙を届ける際に妖怪に襲われた鳩の。幻想郷で伝書鳩は使ってはいけない。

「はーい、じゃあ私ね。家の神社、私の代になつてから賽銭が五百円しか入つてしませーん」

言つてから足で地面を蹴りつける噩夢。もう駄目だ、寝てしまえ。

「次は私だな。……図書館から借りた本の半分は勇輝の書斎に置いてあるぜ」

魔理沙、お前はどうしてそり……。

「じゃあ私ね。五百年生きているけれど……背が、何百年も変わつてないわ」

レミリアが持っていたグラスを碎く。……後悔するなり言わないでほしい、そして物に当たるのをやめてほしい。

「じゃあ次フランね。えっと……あー、お姉様の部屋にお兄様のしゃしつ……」

フランが何か言いかけた所でレミリアが口を塞ぐ。

その後も、秘密の言ひ合には続いた。咲夜は……。

「お嬢様の下……ではなくパン……。そうですね、月に一度くらい掃除の手を抜きます」

パチュリーは……。

「体は弱いけど、流行り病には罹った事が無いわ」

美鈴は……。

「何度も……仕事中に寝ました」

と、馬鹿正直に答えるか適当に当り障りの無い事を話していく。

そして、彼女の番になった。

「まだ言つてないのは私だけ?」

「あれ? アリスか?」

「気づいてなかつたの? 最初からいたんだけど……」

此処に着いてからは、直ぐに魔理沙に絡まれ靈夢に飲まれ、魔理沙に絡まれてレミリアに絡めた。

とてもではないが、周りよく見る暇は無かつた。……と、思つ。

「なんだよー、勇輝とアリスは知り合いだつたのかー」

もつ眞面に立つていられない魔理沙は放置。

「じゃあ言つわね。私……何年か前まで人形だけが友達でした」

……重いんだけど。

「でも今は人間の友人が持てたわ……普通ではないけれど」

「失礼なー、私は普通の魔法使いだぜー」

「あんな魔砲が連射できる奴が普通なら幻想郷は既にねーよ

そして一周目に続く。

日が沈み始め、空が赤くなる頃には勇輝以外の全員が酔いつぶれていた。

「……賑やかな奴等だな」

……。断り、逃げ続けていたらほとんど飲んでいない。むしろ助かるが…

「幻想郷はどうかしら? 桜井勇輝君」

いきなり背後からかかった声に、年甲斐もなく肩をビクッと震わせてしまつ。

「妖怪の賢者様が何か用で?」

振り向いたそこにはスキマ妖怪。いつもの様に怪しげな笑みを浮かべながらスキマから足を出し、座っていた。

「冬眠する前に宴会でも参加しようと思つたのだけれど……どうして夕方に終了しているのかしら?」

「昼からやつてたからな。夜になればまた始めるんじゃないのか?」

「アハ……、じゃあ春まで待つ事にするわ」

「本当に冬眠するのかよ」

人間じゃないが、姿は人のそれと同じ。……どう冬眠するのだろ?。

「それで、答えは決まったの?」

「当然。それに、あの時に話した筈だけだ」

「まだ何も知らない状態で聞いたんだもの、今聞いたら答えが変わつているかもしないでしょ?」

「変わらないや。利用されても構わないし、あの約束も数年内には果たすよ。身体も幻想郷に馴染み始めたみたいだからな」

「あら？ 気づいていたの？」

「自分の身体の状態ぐらい把握してるよ。一見、外界にいた時と変わらないけど」

靈力、妖怪、能力、異変。外界では存在しないものに触ってきた今、自分は“普通の”人間の枠から外れてしまっている。

既に、靈力を“普通に扱えてしまっている”自分は幻想郷で生きていくしかないのだろう。

「それに、日に日に靈力が増えてているんだ、嫌でも分かる」

「……もひ、外界で貴方は忘れられた存在になつていて。血の繋がつた親からも、親しかった友人からも、貴方が桜井勇輝だと認識されない。そして、貴方がいたという記録さえ世界から抹消される」

「上等。やりたい事は見つけた。生きる目的もある。こつちで仲良しく、面白可笑しく話せる友人も出来た。俺はそれで十分、俺が生きている理由なんてそれだけで良い」

「……ふふっ。やつぱり貴方は面白いわ。この幻想郷を作っていた時以来かしら、ここまで気分が高揚するのは」

「あの約束も、やるなら徹底的にやるぞ。一度と俺に頼みたくないなるくらいには」

「へえ……。まあ、死なない程度にやつてちょうどいい」

「死なないってか、死ねないんだよな……。死のうと思えば死ねそうだけど」

「生と死の境界、弄つてあげましょうか?」

「冗談じゃない。俺はまだやりたい事がある」

「そうね……。じゃあ、改めてようこそ、幻想郷へ」

其の参拾捌（後書き）

閑話入れたら妖々夢。さて、暴れようか。

まだ、勇輝が紅魔館で働いていた時の事だ。

「パチュリー様が、ですか？」

「ええ、何でも外にはどんな本があるのか聞きたいらしいわ。フランには咲夜が言つておくから勇輝はパチエの所に行きなさい」

「分かりました。それと嬢様、咲夜に俺が寝ている間に血を抜くのを止めて貰えるように言つてはくれませんか？ 起きたら頭がくらくらしてしまつて……」

「咲夜はそんな勇輝の姿を見て楽しんでるみたいよ？」

「……そうですか？」

諦めよう。時間を操る相手に対応出来る奴がいたら、それはとんでもない化け物だ。

不満な気持ちを拭いきれないまま、勇輝は図書館へと歩いていった。

「あ、勇輝さん。パチュリー様がお待ちですよ」

図書館に入つてすぐに、小悪魔が近寄つてくる。

何度か入っているが、ここは迷つ。

「了解、案内してくれると助かるんだけど……」

「良いですよ。その為に待機していたようなものですから」

小悪魔に続いて、山のよつた本棚の間を歩いていく。

「大変そつだよな……こんな『カイ図書館で働くなんて』

「私はもう慣れてますから。それに、私からしたら……お屋敷で一番危険な職場に平気な顔をして出向く勇輝さんの気が知れません」

「貶してないか？」

「まさか、誉めてます。勇者ですよ」

「……ハア。転職を考えようかな」

本気で出ていく事を考えた。恐らくはフランがキレて、咲夜に連れ戻される。

お先真っ暗、せめて少しごらい人里に行かせてくれても良いと思う。未だに入りへは入った事が無いのでどんな場所かは分からないうが、普通に暮らしたい。

「遅い」

開口一番に出た言葉はそんな厳しいものだった。

「申し訳ありません、パチュリー様。何分、屋敷に慣れていないも

のですから

「まあ良いわ。急ぎの用では無いし」

そう言つと、パチュリーはテーブルの上に積まれた本を移動させ、空いたスペースを作る。

「そこ」に座つて

「失礼します……」

言われた通り、指示されたイスに座る。

「今日聞きたいのは外界の本についてよ

「と、言われましても中身を完全に記憶している訳ではありませんので役に立てるかどうか分かりませんよ?」

「欠けた知識は能力で補えるんでしょう?」

「ああ、成る程……」

「それで、外界にはどんな本があるの? 偶に幻想郷に流れて来る物もあるけれど、他にどんな物があるか知りたいの」

「一応確認して描きますが、流れて来た物にはどのような本がありますか?」

「まずはコレね

パチュリーが取り出したのは、現代にはないような紙を糸で纏めた歴史を感じさせる本。

タイトルは……『書新体解』。

「つて解体新書！？」

何て物が流れて来ているのだろう。日本で初めての解剖学の医学書、読みたい。

「そんなに有名な物なの？　じゃあどうして幻想郷に流れてきたのかしら……」

「名前は有名ですが、その形に問題があります

「そういう物なの……？　じゃあ、次はこれなんだけど」

……同人誌ですね。それもボーアズラブの。

「それは捨てて下さい。お願いします、それだけは世界から抹消して下さい」

その後も、無駄に驚かせる本ばかりが紹介されていった。

「これで全部ね。それで、外界には他にどんな物があるの？」

「何、と言われましてもね……。取りあえず、漫画に関してはこの
数千倍はあると思います。小説も数百倍、図鑑も同じくらいでしょ
う」

「そんなに……、じゃあ貴方の読んだ事のある本を全て複写して
出来るでしょ?」

ジャンルが偏りそうだ。そして趣味が丸分かりになる。

「大した本は読んだことが無いのですが、それでもよろしいでしょ
うか?」

「どうせ、この漫画といつもばかりなんでしょう? それでいいか
ら書きなさい」

「……了解しました」

著作権は……まあ大丈夫か。

能力で記憶の欠陥と、絵をそつくりそのまま『写せる』という画力を修
正。

……最後に紅魔館で医者らしい事をしたのはいつだったっけ。

「……漫画を描くために紙四千枚とペンの用意をお願いします。丸
一日かかりますが良いですよね?」

徹夜してやつと一種類。しかし『ミック十数冊分を一日で描くのだ、
早いのには違いない。

パチュリーは言われるまことに道具を用意する。

後にパチュリーは語る。あの時の勇輝は明日世界が滅亡するのではないかとこゝの氣迫で、ペンを走らせていたと。

「…………」

「そんなにならなくても良かつたのに」

書き上げたのは半分以下。しかしあいのには変わりない。

パチュリーは纏めて置かれた紙の束の一つを取り、読み始める。

現在、午後十一時半。あと三十分で日付が変わる。

バラバラと紙が捲られる音だけが図書館の中で響いていた。

「……『ヒーリングの漫画なの？ 他にもあつたと思つんだけど』」

「……いや、何となくです。孤島での惨殺とか、解ける筈のない文書とか、魔女とか。とりあえず『今なら続きを書かなくとも許されるかと思いまして……最初は』

「やつ……。じゃあ、続きを願いね

「え、あの……」

「やつ一日へりこなり借りられて戻されると困つから

「俺の精神的な問題なのですが……」

「能力、使えば良いでしょ」

「……はい」

閑話式（後書き）

紅魔館での何気ない話の一つ。出番が少ない人の救済とも言える閑話です。

どういう漫画を描いていたかは……分かる人には分かるでしょう、前作のが面白いですが。

其の参拾仇（前書き）

東方妖々夢・春雪異変。次の幻想をお楽しみあれ。

其の参拾仇

幻想郷も、何度目になるか分からぬ春を迎えてから數十日。

まだ、雪が降つていた。

「……異変、なのか？」

幻想郷に来て早一年。患者の来ない診療所の所長であり、人里唯一の医者である桜井勇輝は窓越しに雪が降るのを見ていた。

今は五月。本当なら桜も散り始める季節だ。

ある日を境に患者の来なくなつた診療所は設備ばかりが充実していった。

他の家屋には見られない電子機器が幾つも置かれているが、やはり勇輝以外に人はいない。

「……異変を解決してみるか」

やる気の無さそうな表情で、勇輝は診療所を後にした。

人里の道は雪が積もつており、歩く者は少ない。

子供が数人遊んでいるが、特筆する所は無いだらう。

「勇輝？　こんな所で何をしている？」

「慧音さんじゃないですか、お久しぶりですね」

あの気まずい会話も今となつては昔の事、二人の関係は以前と変わらないものになつていた。

「今から余合の筈だが……。何処へ行くつもりだつたんだ？」

「紅魔館、魔法の森、博麗神社ですね」

「……また厄介な場所ばかりだな」

「ほら、ここまで冬が続くなんて立派な異変じやないですか。異変と言つたらこの三つでしよう?」

「博麗神社は分かるが後の二つはどうしてだ?」

「紅魔館は前回の首謀者がいますし、魔法の森には霧雨魔理沙がいますからね。異変についての先輩には話を聞いて損は無いでしきつから」

「そりが、じゃあ他の者にもそいつをつけておく」

「お願ひします。異変は俺か靈夢、それか魔理沙が解決するでしょうから待つて下さい」

「ああ、期待している。……それと、やはり診療所の方は」

「大丈夫です。必要としている患者は来てくれていますから。それでも、あの時から減り続けているのは間違いないんですけどね……」

「……。そつか、では異変の解決、頼んだぞ」

「はい。まあ期待せずに待つていて下さい」

誤算だつた。

「……死、ぬ……」

厚着していくのを忘れた。とんでもなく寒い。

現在、霧の湖の周辺を散策中である。

理由は紅魔館に行く事と、もしかしたら犯人かもしれない奴に会うため。

「寒い……凍る……」

これで本当に死んだら……いや、死ねないのか。

冷凍されるだけ、解凍は自分で出来る。

「まさかコレが冬眠……ッ！」

違うだろ。

と、ふざけた事を考えていたら目的の人物が凍った湖の上に倒れているのを見つけた。

よく見ると湖の氷が割れていたりする。戦闘の後だらうか。

「おーい、生きてるかー？」

倒れている人、ではなく妖精に話しかけると、弱々しくも答えが返ってきた。

「また……負けた」

…… わて、靈夢の仕業か魔理沙の仕業か。

とりあえず、チルノが負けたのに気温が変わつていない所を見ると、どうやらチルノは今回も無関係らしい。

助け起しそうに、紅魔館に向かつことにしてやつ。

「せせなこよひー！」

「早いな、復活」

「ゆーきになら勝てるー。弾幕、いつこじド勝負よー！」

「いや、この前俺が勝った……」

「いいから勝負！ あたいが勝つたら今すぐにお菓子を勝つてくれる」と

「じゃあ俺が勝つたら俺の周りの冷氣を抑えてくれ」

「こいよ、勝つのはあたいだから

「枚数は二、機数は一。それでいいな？」

「分かった。氷符『アイシクルフォール』！」

……あ。

「……使うスペル、間違えただろ」

勇輝が立っていたのはチルノの目の前。対してチルノの使ったスペルカードは両サイドから挟むように“一定以上の距離離れた”相手を狙う弾幕。

何も言わず、靈力の弾を一つ、右手で作り出す。

勝敗は決した。これ以上無いほどに呆気なく、虚しく……。

少しだけ寒さが抑えられた後、今度は飛行して紅魔館を目指した。

本日、既に能力は一度使用している。

いつもの事ながら、半日経つていいのに回数制限に達するのは勿体ない気がしたのだ。

用途だが、身体の総合的な修正。それと靈力、体力の減少を修正した。

詳細を言つと、妖怪に劣らない身体能力と強度。尽きない体力と靈

力だ。

十分過ぎた気もするが、周りに化け物しかいないのでこれでもまだ不安だ。

さて、紅魔館が見えてきた……。

「咲夜が解決しに行つた?」

「ええ、今朝早くに出て行つたわ」

まさか咲夜が異変解決に動くとは思つていなかつた。

「咲夜は花見が好きだから……」

「いや、そんな理由でかよ」

まあ、レミコアに聞くのも咲夜に聞くのも同じだろ?。

「じゃあ聞きたいんだけど、異変を解決した事つてあるか? それと、冬が長引いてる原因とか」

「異変に関わったのは一度だけ。どちらも起こした側よ。原因はそうね……春を盗んでしまえば冬のままになってしまつんじやないかしり」

「季節を盗むなんて意味分からねえよ……」

「それが幻想郷よ。外界とは隔離され、外では有り得ない事が多々起きる。実感はあるんでしょう?」

「……ああ、外での常識は通用しないんだつたな」

となると、何か痕跡のよつた物が残つてゐるかもしねない。

降雪機のように露骨な物ではないだろうが、所々に春が来なくなる原因が。

「助言としては……田の前で起きている事を疑わない事。ぐらいかしい」

「要はひとつあえず理解するのは諦めて認めてしまえ、と

「……あ、うん。それでいいわ」

其の肆拾

「手掛けりが……無い」

もつ歎を過ぎている。しかし、一向に異変については分からず、飛び回るばかり。

そして迷っている。

空に田印がある筈なく、自分の直感に従い進んでいたら今どこを飛んでいるのか分からなくなってしまった。

地上を見れば雪や樹木。同じ風景がずっと続いている。

「しかしアレだな。ここが日本だなんて信じられなくなってくる」

自分が住んでいたのは建物ばかりが建ち並び、木は公道に立つもの、草はコンクリートの間から生えているもの。山なんて遠目にしか見たことがない。

しかし、此処はそれが満ちている。いや、今までと真逆なのだ。

外は人の住み処で溢れかえっている。だが、ここでの勢力図では人間など気にならない程でしかない。

と、感傷に浸つてゐる場合ではない。

とりあえず東に向かおう、博麗神社がある筈だ。

だが東がどつちか分からぬ。空は雪雲で覆われていて、太陽の位置が分からぬのだ。

「ん？ 此処は……」

以前見たことのある、人里から離れた場所にある小さな民間。

しかし、住んでいるのは人でも、獣でも無い。

そして、民間の中から煙が上がった。

「さて、運べそーな日用品を探すとしますか」

「うう……本当に持つてくの？」

スペルカードルールでの決闘に勝利した博麗靈夢はマヨヒガで日用品の物色を始めていた。

今日、偶々マヨヒガにいた式である橙は侵入者を閉じ込めようと思つたが、その明らかに空き巣を働こうとする態度を見て迎撃戦を挑んだが、敗北。

「紫様と藍様に怒られる……。けど私じゃ……」

そんな時、数ヶ月前に出会つた者の靈力をマヨヒガの入り口から感じた。

「あつ！ 異変の犯人がこの家の入り口に！」

「え？ 本当？」

「靈夢が出入口へと向かつた後、橙は……。

「すみません勇輝さん。これも紫様と藍様のため……」

「さて、八雲家の誰かはいますかねーっと……」

マヨヒガには一度だけ来たことがある。例の紫に助けられた時だ。
本家は別の辺境にあるらしいのであまり期待は出来ないが、誰かい
るのは間違いないのだ。

「まさか勇輝さん。貴方が犯人だったなんてね……」

「え？」

いきなり田の前に現れた靈夢。更に、その手には弾幕^{ひじり}この弾で
あらう靈力の御札。

「賽銭の恩があるけど仕方ないわ……。わざと春を返してもせりつ
わよー！」

「いや、意味分からな……」

「問答無用！ 弾幕勝負よー！」

「……まあ、良いか。異変を解決するのは本来俺の仕事じゃないし、暇を潰せるなら」

きっと人間相手になら手加減……してくれそうに無いな。咲夜は全治三週間だったらしい。

時間を操って一日で治したりしが、今はどうでもいい話だ。

「ルールはスペルカードルール。枚数は五枚、機数は二。立会人は……猫、出てきなさい！」

「私には橙という藍様に貢つた名前が……」

何処からか現れた式の妖怪。ああ、原因はコレか……。

「橙、今度会つたら紫にチクる。当然藍にもな」

「そんなん！？」

少しは反省したらいいと思つ。

「外で良いよな？」

「ええ、じいじゅせまいもの」

さて、暇潰しで異変解決をしようと思ったら大変な事になってしまった。

自業自得だが、相手はレミリアを瞬殺できる。

しかし、今の桜井勇輝は普段の桜井勇輝では無い。

靈力は減らない博麗靈夢並みの靈力。身體能力も吸血鬼並みで体力も減らない。

体も、人間とは思えない程に強固だ。

しかし、弾幕による勝負でそれらは少しのハンデにしかならない。

如何に相手の虚を突き、美しく恐ろしい弾幕を作り出せ、相手を翻弄出来るか。

それがスペルカードルールの大前提だ。

正直に話そう。勇輝のスペルカードは相手に当てる事が大前提となつていて。

つまり、美しさもへつたくれも無いエグい弾幕が殆どなのだ。

枚数が決まっているこの勝負、どちらも機数を残したまま勝負が終わつた場合に勝てる自信は……無い。

だが、こつちは靈夢のスペルカードを見たことがあるし、今なら避けられると思う。

しかし、話によれば靈力の翼は体の一部として扱うらしい。これは誤算だった。

経験値、状況、スペルカードの種類、その他色々から呑み出した勝率は……。

「じゃあ……始めつ……」

橙の声と同時に、靈夢が十や二十では済まない靈力の御札を飛ばしてくる。

勇輝はまだ飛んでいない。それに、靈夢の弾にはいくつか追尾してくれるものが混じっている。

「勝率三十パーセントの戦い。少しばかり粘りさせて貰おつか」

取り出したのはスペルカード。Hグarahは上から七つ程。

「道化『奇術・ペテンバインド』！」

お馴染みの鎖状の弾幕。

それが靈夢の放った弾を打ち消しながら空へと伸びる。

幾つかは靈夢を狙つて行くが、簡単に避けられている。

「勇輝さん……もしかして、物凄く弱い？」

「いやいや、まだここからがメインだつて」

「いいで、勇輝の弾幕のちょっとした欠点を話しておくれ。

勇輝は魔法陣の類いを使えない。つまり、弾を放つ起点は勇輝自信

だけだ。

だから、相手は勇輝だけに集中すればいい。

だから、危機察知能力が余程高くない限りこのスペルカードの真意には気づけない。

「ちょっとした挨拶だ。怪我をしたら診療所に、つてな」

其の肆拾（後書き）

どうしていつなつた……。

レティは出番無し。すみません。

其の肆拾壹（前書き）

むう…。己で書かないと遅くなりますね。

鎖状の弾幕は空中をウネリ、靈夢を襲う。

更に勇輝が球体の弾幕をいくつも放っているので鬱陶しい。

だが、避けられない程ではない。

故に靈夢はスペルカードで応戦せず、通常弾を放ちながら勇輝の弾幕を掻い潜る。

勇輝も弾幕に集中しながらも、靈夢の放った弾を自分の弾幕で潰していく。

「す、じ、い、……」

そう声を漏らしたのは橙。彼女の主人達も規格外の強さではあるが、目の前の二人はそれに匹敵する。

ましてや、一人は人間だ。どちらも普通とは言えないが。

だけど、靈夢には余裕があるように見える。

才能も、経験も、力も。勇輝は靈夢に劣っている。それを能力で補つても靈夢に全力を出させる事すら出来ない。

「……そろそろ、か

張っていた罠が靈夢を陥れるまであと数秒、それまでスペルカードを使わせてはいけない。

靈夢がスペルカードを使えばこの弾幕は意味を成さなくなってしまう。

「鬱陶しくなってきたわね……」

靈夢も弾か鎖という事で、動きが次第に制限されていく事に苛立つてきていた。

スペルカードを温存すれば、後々有利になる。

普通なら相手の体力が減るまで出来る限り攻撃を緩めず、疲れさせた所でスペルカードによる攻撃を放つ。

それが、最も効率的な戦い方だというのが一般論。

だが、相手のスペルカードに自分の強力なスペルカードをぶつけ、戦意を削ぐという戦法もある。

早い段階でスペルカードを無効化すれば、プレッシャーをかける事が出来る。だが、時間が経てば経つほど苦し紛れの一手という印象が生まれてしまつ。

だから靈夢が勝負を有利に進めるためにはこのスペルを逃げ切らなければならぬ。

見た目そこまで危険なスペルカードではないが、弾か留まるという

のはやはり鬱陶しい。

「……仕方ないわね」

靈夢が一枚のスペルカードを取り出した。

勇輝もそれを確認する。

「チツ、まだ早いがやるしかないか」

勇輝が靈力の鎖に、上乗せして更に多くの靈力を込めた。

「へつ！？」

声を上げたの「ら」靈夢。

それも当然だ、自分の身体が拘束されているのだから。

「そいつは鎖と一緒にばら蒔いてた靈力の糸だ。アリスが人形を操るモノと同じ様な糸だけど、鎖に絡み付けて靈力を上乗せした。見えなかつたのは太さが黙視出来ない程だつたから、な」

説明をしながらも次の手順に移る。

靈夢の周囲に弾幕を張り巡らせ、それを全て靈夢の方向へ放つ。

……のが目的だったのだが。

「夢境『一重大結界』！」

靈夢を中心とした結界に全て搔き消された。

だが、それだけでは終わらない。結界の中から靈夢は次々に弾幕を放つ。

「人が通れるスキマが……」

無い。無理、避けられない。

勇輝も負けじともう一枚のスペルカードを取り出す。

「焉戯『デッド・イレギュラー』！」

靈力で生み出るのは刀、剣、槍、鎌、鋸、矢、針、釘、鎌、その他様々な殺傷力を持つ物。

「物騒だけど、仕方ないんだよな……」

無数の武器を浮遊させ、更に靈夢の強力な結界を碎くために巨大な槍を作り出し、構える。

さつき勇輝が使ったスペルカードの意味は表に現れない呪縛。そしてこのスペルカードの意味は、想定外の死。

見た目が派手、ストレス解消用のスペルカードだ。

だが、威力は十分。

誤つて殺さないように、靈力を調節する。

靈夢も何かを感じ取ったのか、次のスペルカードを用意した。

作り出した槍は幅一メートル、長さハメートル。

もつ狂器に見えるそれを、靈夢の結界田掛けで投げ飛ばした。

「大結界『博麗弾幕結界』ツ！！」

靈夢がスペルカードを使用する。

先程の結界よりも強力な結界は勇輝の放った槍を弾き、全ての弾幕を無効化した。

だが、護りに徹した結界は弾幕を放つことなく消滅する。

お互いにスペルカード一枚。だが、どちらも被弾はしていない。

「まさか、ちょっと前までまともに飛びことも出来なかつた勇輝さんがここまで出来るなんて思いもしなかつたわ」

「自分でビックリしてる。実はスペルカードを一枚使われた時点で負けると思つてたんだよね……」

「じゃあ、一機だけ貰うわ。神靈『夢想封印 瞬』」

靈夢が再びスペルカードを使つ。

「ツー？」

気付いた時にはその場から弾き飛ばされていた。被弾したのだ。

地面を転がるが、上がった身体能力で直ぐに体制を整える。

「速い……見えもしねえよ」

背中に痛みを感じる、動きに影響は出ないがそれでも先手を取られた事によって焦りが生まれてしまつ。

「後ろよ」

背後からした声に、靈力の翼を作り出ししその場から逃げる。

見えたのは砕け、砂煙を上げるさつきまで自分の立っていた地面と靈夢の姿。

しかし、直ぐに靈夢の姿は消える。

どうしたらいい?

何をしたら勝てる?

アレを使えば……いや、アレは今使つべきではない。

能力を使つか? 何を修正しろと言つのだらう。

考える、冷静に。把握しろ、現状を。見出だせ、活路を。

「……さて、勝ちに行くか」

勇輝は、次のスペルカードを手にした。

その口元からすらりと笑みを浮かべ、背後に回り込んでいた靈夢に視線を移し、その符の名を読み上げる。

「医術『引導渡し 魔薬の投』」

其の肆拾弐

そのスペルカードは、今までのどの弾幕よりも異質だった。

靈夢も動きを止める。

確かに、勇輝は符の名を宣言した。しかし、弾幕ごじゅうか弾の一つ見当たらない。

不発？ それとも未完成だつた？

違う。この弾幕は発動し、正常に靈夢を追いつめていく。

「また見えない弾幕？」

「当たりだ。やつせとは全く違つけどな」

靈力の翼を炎のようじに揺らめかし、空中で留まる勇輝。

靈夢は十メートルほど離れた場所で浮いている。

前後左右上、どこにも勇輝の弾幕があるように見えず、勇輝もただ滯空しているだけ。

「なり、対処法は」「うね

靈夢が弾を無造作に撒き散らす。

何に当たる訳でもなく、靈夢の弾幕は上空へ、遠く離れた山へ、マ

ミヒガへと飛んでいく。

勇輝にも放たれたが、それは勇輝自身に書き消された。

「どうした？ 何も変わつてないぞ」

「……そういうつもりなのね。いいわ、じつから攻めてあげる」

靈夢はこのスペルを捨て弾だと考え、自分が攻めるために弾幕を放つ事にした。

先程見せられた見えない靈力の糸。あれで疑心暗鬼を誘い、精神と体力を削り取るスペルカード。

頭のいい勇輝の事だ、そいつた規格外の行動もとつて見せるだろう。

「良いのか？ もしかしたら危険な賭けになるかもよ？」

「それでも何もしないよりはマシよー」この異変、今すぐ解決させてもらうわ！」

……そういえば犯人扱いをされていた。なら、ちょっと搔きぶりを掛けみてよう。

「本当に解決できるのか？」

「……どうこう事よ」

「いや、俺を倒したからってこの異変が収まるとは限らないし。そ

れに、俺が死んだらずっとこのままかもよ?」

黒幕ではないから倒されても異変は收まらないし、この“異変”といふ欠陥”は能力で解決できるものかもしない。そして、犯人に検討がつかなかつた場合はずっとこのままかもしない。

嘘はついてないし、包み隠さず真実を話してもいい。

「脅迫のつもり? 別に殺さない程度に痛めつけられて拷問されてもこのままにしておくって事ならそつなるかもしないけど」

「拷問で……」

「あ、でも医者なら痛覚とか麻痺をせられそうね……。社会的に抹殺?」

「自分の感覚を麻痺させる医者なんて……いそいで怖いな。けど、俺にはそんな技術も薬もないから無理だ。社会的抹殺は断固拒否する」

ただでさえ小さな里で変な噂が広まつたりしたら……死ねる。

「だつたら早く異変を……あれつ?」

靈夢の体がガクッと揺れた。

「やつと効いてきたか。そいら辺の妖怪なら一瞬で倒すかもしない量だったのにな」

「何を、したの……?」

「靈夢が辛そうに額を押される。」

「簡単だ、このスペルカードは毒を撒くように俺の靈力を氣化させ、相手に吸收させる。許容量を大きく超えたら……まあ、そんな症状になるんだろうな」「……」

「そんな……、私が今の戦いで使った靈力は勇輝さんの靈力の合計よりも遥かに多かった筈よ。それに、勇輝さん自身も強力なスペルカードを何枚か使っている。それに、その羽だつて相当の靈力を……」

「そんな欠陥。とっくに修正してあるよ」

「そう。能力で……」

「だが、これで負けるような靈夢ではない。」

靈夢は四枚目のスペルカードを取り出した。

「靈符『夢想封印 集』！」

放されたのは七つの巨大な弾。これは一度、見た事がある。

そして、これが避けられるようなモノでは無い事も、知っている。

「銃符『ロシアンルーレット』！」

勇輝が放つたのはレーザー状の弾幕。

放つ方向、威力、本数は撃つてみないと分からぬ。だが、靈夢の弾幕を消せる威力の攻撃を瞬時に撃てるスペルカードはこれしか持ち合わせていなかつた。

本数は大当たり、二十。

威力はそこそこ、魔理沙の魔砲の五分の一程度のモノが何本がある。方向は……ゴミだ、靈夢のいる方向とは逆。つまり真後ろに十。

しかし、その内の一本が靈夢に当たる。威力は相当低かつたが。靈夢が被弾した事によって、悪夢の様に追いかけてくるデカイ弾幕は消える。

これで、お互に残り一枚。

次が最後の攻防になるだろう。

靈夢はスペルカードで靈力を消費し全快状態に近い靈力。そして、勇輝は体力も靈力も減つていない。

お互い、一機と一枚。どちらか被弾した方の負けとなる。

二人は最後のスペルカードの名を口にする。

靈夢は空を埋め尽くすよつた無数の弾幕を、勇輝は相手の虚を突くよつたトリックキーな弾幕を。

靈力の弾が交差し、弾け、相手を打ち落とそうと襲いかかる。

靈夢は少しぎこちないが、確実に勇輝の弾幕を避け。

勇輝は危なげながらも、器用に翼を縮小、拡大とさまざまに操作し避けていく。

時間にして数分。だが何時間にも感じる攻防の中。

同時に、同じ個所に、同じような形状の弾幕が被弾した。

「引き分けです」

橙が降りて来た二人に向かつてそう宣言する。

「引き分けって……そんならないようアンタがいるんでしょ」

「でも引き分けです！」

橙の内心では、引き分けでないと自身の危険が迫つていてることに恐怖し、引き分けで勝負が終わつたことに安心していた。

靈夢が勝てば靈夢に何をされるか分からぬし、勇輝が勝てば勇輝に何をされるか分からぬ。

「で、俺が異変の犯人として扱われていた理由は？」

「コイツがそう言った

「……私、猫の妖怪なので勘違いを起こす事が

「殴るよ?」

「すみません。集めてた春を渡すので勘弁して下さい」

そう言つと、空中で舞う桜の花弁を渡される。……ああ、どうこう原理で浮いてるのだと、何故こうこう形で春が……認めよう。これが幻想郷の春だ。

「え、勇輝さん犯人じゃないの?」

お氣楽な巫女は今更知つたらしい。

「成る程ね。悪いのはここの猫、勇輝さんは無関係……何で言わなかつたのよ」

「暇さえ潰れるなら誰が相手でも良かつたんだよ。一番ハードな奴に当たつたけどな」

靈夢に状況を説明しながら少し休憩をとつていた。橙は靈夢によつて氣絶させられている。

「でも、勇輝さんがあんなに強いなんて思つてなかつたわ」

「……良く言つよ。本気なんか出してなかつた奴が」

靈夢は本氣を出していくない。出していくなら勇輝が五体満足でいられる筈がない。

スペルカードルールは人間と妖怪が対等に戦つための物だが、やはり死の危険はあるのだ。

「私だつて知り合いを本氣で殺しに行くような真似はしたくないもの。それがお賽銭を入れてくれた人なら尚更よ」

……ビルまで賽銭にこだわつているのだろうか。

「はあ……じゃあ、俺は異変解決からはリタイアかねえ。精神的に疲労したし」

「何言つてゐるの？ 私の春も預けるから異変の解決、お願ひね」

「はい？」

「だつて、暇なんでしょう？ 私は神社の雪搔きもやらないといけないし、巫女なのに神社を空けるのは何だか申し訳ないし、疲れたから」

「異変解決も仕事だら一がよ……」

「魔理沙だつてそろそろ気づいてる頃だし、私の分は勇輝さんがやつてくれるんでしょう？」

そういうえば咲夜も異変を解決するために紅魔館を留守にしていた。だったら一人ぐらじ抜けても問題無いのでは？

「それと、私の感だけど犯人は妖怪じゃないと思うのよね。そつれっぽい奴を打ち殺したけど何の関係もなかつたから。あと、空の上の方が暖かかつた気がするわ」

「そんな事言われたらサボれなくなるだろ……まったく面倒な」

春を持つていて、異変解決のプロからの有益な助言。

他一人が感づていなければ幻想郷は冬のままかもしれない。

「ん？ 外界つてどうなつてんだる。冬のままなのか？」

「そんな訳ないでしょ、結界で隔離されてるんだから。外からは認

識も干渉もできないわ」

まあ、それでもなければ此処は見つけられているだろうし、大惨事になつてゐるだろう。

ただでさえ環境問題が話題なのに冬が明けないとなれば……あれ？ 特に問題が無い気がする。

「まあ良いや。どうせ診療所には来ないし、少しは人間様のお役にたつて診療所の信頼を上げるとしますかねー」

「……隨分と投げ遣りだけど、何かあったの？」

「ん？ ああ、古臭い場所に住んでる奴等はやっぱり頭も固いのかなーと再認識したんだ」

「答えになつてないわよ……」

「いやあ、咲夜を治した時にさ、やっぱリアイツは怪しいだの、紅魔館に血を売つてるだの、本当は毒薬しか扱わないだの変な噂が流れたんだ。で、人が来ない所か寄り付かなくなつた訳」

「……まあ、里の人たちは臆病だから。幻想郷では人より妖怪や神、妖精の方が多いし」

「それでも来る奴は来るんだけどなー、少ないからさ。収入は安定してないから食事も儘成らないし、薬は無駄になるし、暇だし」

「じゃあ、尚更異変を解決した方が良いんじゃないの？」

「……妖怪専門の医者ってどうなんだろ」

吸血鬼って病に罹るのだろうか？あと、人型でないものは勘弁だ。

「あ、そりそり。異変を解決するとお金も入るから」

「なつ……本当かー？」

「魔理沙は家出してるから貰った事は無いけれど、私は何度も貰ってるわ。じゃなきゃ生活できないし」

確かに賽銭無し、参拝客皆無の神社では収入は得られないだろ。

「仕方ない、金のためってなると人聞きが悪いがやるか

「思いつきりお金のためよね。田がそう言つてるわ」

「失敬な、半分は里のためだ」

「……半分は認めるのね」

「せめて、もう少しでいいから人間と妖怪の仲を良好にできたら一番楽なんだけどな」

「別に、妖怪でも友好的に接している種はいるわよ？天狗や河童が代表的な例ね」

「成る程、吸血鬼だからか」

なら、レミリアにも何かしてもらいうしか無いのだろうか。……外に

出でてくれるのかが心配だ。

「えじや、異変を解決するとしますか。空でいいんだよな？」

「感だけどね」

「……やつぱ、もつ少し地上で探索してみるわ」

そこまで感だ、なんて言われたら信憑性が薄くなる。もつ少し論理的な根拠が欲しかった。

幻想郷の魔法の森。そこでは一人の魔法使いが何かを相談していた。

「つまり、この花びらを集めれば暖かくなるんだな？」

「ええ、大量に撒けば春になるでしょうし、纏つていれば自分の周りだけ暖かくなる。春度とでも言つておきましょうか」

「ふーん。どうでも良いけど、寒くなくなるなり向でもいいぜ。花見もやりたい」

「これを、どこかの誰かが纏めて盗んで行つたんでしようね……じやなきや、この時期に雪はおかしいし……」

「やつぱ異変か……よし、行くぜアリスト」

「何處に?」

「さうだな……私としては春を持つてゐる奴を片つ端から潰して行けば良いと思う

「……まあ、宛も無いしね

二人の魔法使いも、異変を解決するために動き出した。

異変解決にここまでの人数が関わる事が吉と出るか、凶と出るのか。

それはまだ、誰にも分からぬし、誰も考えていなかつた。

「ヤバいな、暗くなつて来やがつた……」

幻想郷を飛び回り、春を盗んだ犯人を探していたが、日は沈み始め、雪原は緋色に輝いている。

雲の隙間が多くなり、夕陽が射し込むその景色は神秘的だが、どうじに勇輝を不安にさせる。

晴れてきたが、それでも雲が多い。夜目が聞かないのでは探しよつが無いのだ。

「急がないとな……」

勇輝は靈力の翼を更に力強く動かし、速度を上げる。

空には冬なのに、桜の花びらが一枚だけ舞っていた。

「……お前、その春をどうするつもりだ?」

魔理沙は目の前の人物を睨みつける。

「どうするつて……集めただけよ? 妖精を蹴散らしたり、妖怪を蹴散らしたりして」

睨まれた咲夜は動じる事無く、淡々と答える。

彼女からしたら、魔理沙とアリスは異変を解決しようと動いている時に、関係ないと言えない程の量の春を集めている邪魔者。

咲夜の目的は、紅魔館周辺を春にする事。幻想郷全体は二の次だ。

つまり、一定量の春が得られるのなら誰から奪つても良いし、他の場所が冬のままだろうと良いのだ。

そして、魔理沙からすれば咲夜は前回の異変の犯人の一人であり、多くの春を集めている怪しい人物。

前科がある分、疑いやすいのもあるだろう。

アリスは宴会の時に会つただけなのだが、それでも咲夜が集めた春は犯人と疑える程に多い。

「魔理沙、私がやるから下がつていて。知り合いならスペルカードも知られていいでしょう?」

アリスが魔理沙の前に出る。

「おう、頼んだぜアリス。アイツは時間操る能力とナイフを使つてくる」

「そつ……なら、八割程度で足りるかしら?」

八割……つまり、全力は出さない。

その挑発とも言える言葉に、咲夜は眉をしかめる。

「随分自身があるようね」

「メイドに負ける程弱いつもりは無いもの」

「ただのメイドじゃ無いわよ?」

「じゃあ、どんなメイド?」

咲夜はナイフを両手の指の間に挟み、構える。

「貴方を一瞬で亡骸に変えるメイド」

咲夜がナイフを投擲する。

真っ直ぐにアリスに向かって行くが、アリスはそれを簡単に避ける。

「じゃあ、私からも攻撃しようかしら」

アリスは何処からか人形を取り出し、それを操る。

二体は剣を持ち、四体は魔力の弾を撃ち出す。計六体の人形。

咲夜は剣を持った人形二体をナイフで貫き、残り四体が放つ弾を時間操る訳でもなく避けていく。

しかし、そう簡単に事が運ぶという事は無い。

ナイフが突き刺さっている剣を持った人形が咲夜に向かって飛んでいく。

「成程、バラバラにでもしない限り動かせるのね」

再び、咲夜は剣を持った人形にナイフを投擲する。今度はバラバラに砕け散るようだ。

「……何処にナイフを隠し持つてのかしら」

アリスが若干不満そうな声で呟く。

咲夜が使うナイフは靈力の物と金屬の物の二種類。今使っているのは金屬のナイフだ。

だが、本数が有り得ない。絶対に。

アリスは壊れた人形の糸を切り、次の人形を取り出す。

「早く終わらせないと、お嬢様に叱られるから……悪く思わない事ね」

咲夜がスペルカードを取り出す。

「幻世『ザ・ワールド』」

次の瞬間、アリスを囮むように無数のナイフと弾幕が現れる。

「つー？」

アリスは人形を盾にし、辛うじて避けるが第一派といった感じに飛び弾幕は現れる。

時間操ると魔理沙から聞いていたが、これは酷い。

もし、咲夜がどこかの医者のように魅せる事を考えずに入スペルカードを作つていたら既にアリスは負けている。

何とか避けていくが、やはり危な氣だ。

今にも当たつてしまいそつだが、アリスは何とか避けていく。

「仕方ないわね……。操作『乙女文楽』」

アリスもスペルカードを発動させる。

人形からレーザーや弾幕が放たれるが、咲夜には当たらない。

「弱いわね。あの巫女よりも、家のお嬢様よりも。そして、私よりも……」

咲夜は余裕を持った声でアリスを挑発する。

前回の紅霧異変で、靈夢にこそ敗北したが咲夜は魔理沙に勝るとも劣らない実力を持つている。

時間を操る程度の能力。

時の流れを早く、遅く。そして停止させる。単純だが恐ろしいほどに強力な能力。

倒せるとしたら、避けようがない程に圧倒的な弾幕を使うか、カウ

ンターを狙つか、不意を衝くしか無いだらつ。

「メイド秘技『殺人ドール』」

咲夜が次のスペルカードに切り替える。

余談だが、決闘前にはスペルカードの枚数や機数を指定しなかつた場合、機数は一、枚数は無制限での勝負が暗黙のルールとなつていてる。

無数のナイフがアリスに迫る。

「そんな直線的な攻撃……っ！？」

真っ直ぐ迫っていたナイフに対し、横に逸れる様に移動したがナイフの軌道が曲がった。

「単純にナイフを投げる訳無いじゃない。そんな事も分からなかつた？」

「くつ、呪詛『首吊り蓬萊人形』！」

再びアリスはいくつもの人形を取り出し、咲夜の飛ばしたナイフを打ち落していく。

時には人形の腕が落ち、頭が飛び、胴体が砕け散るがナイフがアリスに当たる事は無い。

だが、アリスは既に負けを確信していた。

「降参して春を渡してもらえるかしら

背後から聞こえる声と、首筋に当たる金属の冷たい感触。

「……負けたわ」

アリスは思つ。ああ、本気でやつておけば良かつたかもしない。
と。

其の肆拾肆（後書き）

弾幕勝負で咲夜の能力は狡いと思う。

それをボコボコにする靈夢は人間では無いと思ツ
.....。

其の肆拾伍

アリスを下した咲夜は、観戦していた魔理沙に向き直る。

「貴女も私の邪魔をするのかしら？」

「当然だ、アリスが戦つたのに私が逃げたら立つ瀬が無いんだぜ」

咲夜だつて消耗している筈だ。というのが魔理沙の考え方。

それは正しいのだが、今考えるべきなのはそこではない。

「じゃあ、さつさと始めまじょつか。お嬢様の世話もしなきゃいけないし」

日は沈み、僅な月明かりが一人を照らした。

「暗い……寒い……」

幻想郷を飛び回って数時間。

襲つてくる妖精を倒しながら犯人の手懸かりを探していったが、一向に何も見つからない。

靈夢は空が怪しいと言つていたが、考えて見ると空に城が浮いている訳でもないし、四六時中留まる厚い雲がある訳でも無い。

……帰つて寝てしまおうか。

「最後に雲の上だけ見ておくか……」

翼を軽く振るつて上昇。一気に雲の上まで飛び上がる。

黒い雪雲の上には都合では見られない輝きを放つ満月。心なしか近い氣もする。

辺りを見渡して……。

「人、だよな……アレ」

空を飛んでいる三つの人影。怪しい。

夜だし、冬だし、何より今は異変の真っ最中。

決めた。尾行しよう。

「…………ふう」

靈夢は机に布団をかけ板を乗せただけの「タツ」に湯飲みを乗せ一息吐ぐ。

まだ外は冬、異変は解決されていない。

「遅いわね……」

一口。靈夢が異変を解決するために動き、解決にまでかかった最長時間だ。

紅霧異変の際は一夜にして解決している。

靈夢は湯飲みが空になつてゐる事を確認すると、コタツから足を出して立ち上がる。

そのまま神社の物置小屋へと向かい、陰陽玉を持ち出した。

異変の際に弾幕勝負で負けた者は解決まで手を引くのが筋だが、生憎靈夢は引き分けただけ。

靈夢は境内から空を見上げる。

黒い雪雲の、その向ひを。

「恋符『マスター・パーク』……」

夜の幻想郷の空に七色の魔砲が放たれる。

魔理沙と咲夜、知り合つて数ヶ月になるが、まともに戦つのはこれが初めてだった。

そして、咲夜は焦りを表情に出しながら戦つていた。

魔理沙のスペルカードは恐ろしく強力な物が多い。

何より、レーザーを主体にしているのが咲夜にとっての誤算だった。

通常の弾幕と違い、レーザーは速く、しかも軌道が分からぬのだ。アリスの場合は人形の位置を確認し、そこから自分に向かつて直線的に放たれるだけだつた。

しかし、魔理沙は咲夜の動きに合わせられる。

更に、そのレーザーが広範囲に及ぶ巨大な物となれば状況は悪くなる。

アリスの時のように後ろをとつても、魔法陣からレーザーが飛んでくるかもしれない。

時間を止め、移動した先はレーザーが放たれる軌道の上かもしれない。

そんな思いが、咲夜を攻めに回らせなかつた。

「メイド秘技『操りドール』！」

「恋心』ダブルスパーク』！…」

そしてコレだ。

放つたスペルカードが全て魔砲に焼き消される。

ナイフも消耗品であるが故にやる気を削がれる。

咲夜は時間を止め、ナイフを回収していたのだがそのナイフが破壊されてしまうじゃない。

勝てない。そんな言葉を思い浮かべてしまつ。

実力的には魔理沙に勝つている。だが、相性が悪かった。

そもそも、魔理沙ほど鬼畜な戦法を取る人物がこの幻想郷にいるだらうつか？

嫌になる程に魔砲を乱射され、自分のスペルカードが焼き消される。

嫌になる。何を使えば勝てるのか分からぬ。

だが、それも永遠ではない。

「ハアっ、ハアっ……くつ……」

魔理沙にも、限界はある。

魔理沙が靈夢に敵わないのもコレが大きく関係していた。

魔理沙のスペルカードは靈夢のスペルカードさえ焼き消す事ができる。だが、魔理沙が靈夢に弾幕を当てる前に魔理沙の魔力は底をくいでしまつのだ。

咲夜のナイフが死るのが先か、魔理沙の魔力が死のが先か。

「いい加減、降参したらどうだ……？ 吸血鬼のお嬢様が待つて、るだろ？」

息も絶え絶えになつてゐるが、魔理沙は挑発に出る。

「こまでに使つたスペルカードは十を越してゐる。疲れて当然だ。

「そうしたいけど……貴女は春を譲つてくれないんでしょう？」

「当然だ。私がこの異変を解決するんだからな」

「だつたら私に構つてないで犯人捜しでもしたりどうかしら？」

「お前が犯人かもしねりだろ」

「私は犯人じゃないわ」

「犯人はいつもやつてないつて嘘を吐くぜ」

「……疑われた人間は全員そう答えると思つけれど」

「なら交渉決裂だな」

「交渉なんてしていたかしら？」

「今面白するか、倒されてから面白するか」

「……それは交渉じやなくて脅迫よ」

溜息を吐きながら咲夜はナイフを取り出す。

魔理沙は魔法陣を開け、咲夜の攻撃に備えた。

「さて……」

尾行を開始して早數十分。

分かつたのは三人が女の子で、楽器を持つてゐる事。

……自分は何をしているんだろう。

こんなストーカー紛いの事をして、相手が関係ありませんでした、
では立場が無い。

いや、こんな時間にこんな高度の場所にいる人物が普通である筈がないのだが……遣る瀬無い。

しかし、無関係という事は無かつたようだ。

三人が向かつた先に有つたのは巨大な門。

何故浮いていられるのか、飛行機に当たつたりしないのか。そんな事は幻想郷だからと結論付ける。

靈夢の感は当たつていたようだ。あの門には強力な結界が張つてある。

三人は門の前まで飛んで行くと、各自の楽器を……演奏し始めた。

「…………帰つていいか、コレ」

其の肆拾陸

「いい加減、当たれよつ！」

「嫌よ、死ぬじゃない」

未だ戦い続ける咲夜と魔理沙。しかし、魔理沙の体力は限界に近かつた。

魔砲も威力が落ちて来ている。それは、この場にいる全員が分かっていた。

咲夜も攻めに回る回数が増えている。このままでは魔理沙の敗北は確定だ。

「くつ……何で当たらないんだ」

魔理沙は自分の弾幕に少なからず自身がある。

勿論、それは咲夜も認めているし、勇輝も敗北したのだ。

では、何故こうも当たらないのか。答えは簡単だ。

魔理沙のスペルカードの一枚、魔砲『ファイナルスパーク』。相当な威力を持ち、それはレミリアやフランの妖力に劣らない靈力を手にしていた紅霧異変時の勇輝に全力の防御をさせ、尚且つそれを破壊するまでの攻撃力を持っていた。

だが、あの時勇輝が魔砲を受け止めず、避けていたらどうなつてい

ただろうか？

勇輝は立場上、紅魔館を破壊されるのを防がなければならなかつた。だから、あの時回避ではなく防御を選んだ。

もし避ける事が許されていたのなら、勇輝は上昇した身体能力で簡単に避けていただろう。そして、魔力の尽きた魔理沙を簡単に倒していた筈だ。

つまり、魔理沙のスペルカードは相手が避けれない時、または戦場が極端に狭い時に全力を出す事ができる。しかし、四方八方全てが逃げ場となる空ではその威力も宝の持ち腐れでしかない。

だが、仮に数で勝負するスペルカードを使っていたなら咲夜は既に魔理沙を倒していただろう。

勿論、魔理沙にそこまでの考えがあつた訳では無い。

いくら攻撃が速くても、直線的にしか進まないレーザーなら注意していれば避けられる。

拳銃と同じだ、銃口さえ見ていれば弾の飛ぶ方向が分かつてしまつ。

「そろそろ先に進みたいんだけど……。今ならまだ見逃してあげるわよ？」

咲夜も、結構な量の靈力とナイフを消費してしまつた。

本来なら異変解決のために協力するべきであるのに、お互の足を引っ張り合い、果てには戦線から外してしまおうとしている。

「誰が逃げるかよ。私はお前から春を奪つて、その後に犯人を見つけるんだ」

そもそも、春を何故奪うのか。犯人が奪つているから、盗られないよつこ？

違う。寒いから、自分の周りだけ春になればいいから。そんな私欲で奪い合っているに過ぎないのだ。

「じゃあ……」

魔理沙の視界から咲夜が消える。反射的に魔理沙は上に逃げると、さっきまでいた空中を何本ものナイフが通過する。

まだだ、魔理沙は素早く移動を続ける。

まるで魔理沙を追うようにナイフが一瞬前まで魔理沙のいた空間を貫く。

魔理沙は全力で箒を走らせながらスペルカードを取り出す。

「光撃『シユート・ザ・ムーン』！…」

いくつもの魔法陣。その中心からレーザーが放たれ網の様に交差していった。

「つー！」

咲夜がレーザーに動きを制限され、その動きを停止させた。そして

咲夜の姿が魔理沙の目に入る。

「貰つた！ 魔砲『ファイナルスパーク』！」

魔理沙の魔砲が咲夜を飲み込んだ。

かの、よしに見えた。

「時符『プライベートスクウェア』」

咲夜は無事だつた。魔砲による傷は一つも無い。

咲夜を囲う様に存在していた透明の立方体が砕け散る。

「何だよ……それ……」

魔理沙は驚愕し、目を丸くした。

勇輝の防御さえ押し潰した魔砲が完全に防がれたのだから。

「時間を操つて生み出した結界……みたいなものかしら？ 勿論、時を超えるほど強力な攻撃だったのなら私は負けていた所かこの世から居なくなつていたでしょうけど、そこまでではなかつたようね」

咲夜の手には再びナイフが握られる。

「どうする？ 刺されて死ぬか、降参するか」

魔理沙は……。

「どうなつてんだろな……アレ」

門の前で演奏を始めた三人を遠目に見ながら勇輝は溜息を吐く。

人の敷地前で大合奏……迷惑にも程がある。

問答無用で攻撃を放つても良い気がするが、ここは堪えて措こう。

果たしてあの三人は異変の関係者なのか、それともただの迷惑な奴等なのか。

とりあえず話をしよう。

「なあ、お前等……」

「？ 珍しい、生きてる人間がこんな所にいるなんて

答えたのはバイオリンを持つた金髪の少女。

「单刀直入に聞くけどさ、此処で何してんの？」

「リハーサルだよ、宴会での演奏の」

宴会……。いや、その前にリハーサルは野外でやらないのでは？

「じゃあ、この門が何か分かるか？」

「冥界への扉だよ、開いた所は見た事がないけれど」

「……『イツ、テンションがやたらと低い。

「なら、この中に入る方法とか分かるか？」

「上を飛び越える」

「……隨分と簡単な侵入方法だな」

まあ、入り方も分かつた事だし、この冥界とやらに犯人がいるだろうからと三人に背を向け……。

肩を掴まれた。

「まあ、何かの縁だと思つて演奏を聞いて逝きなよ」

「そうそう、私たちの演奏を聞いていられる人間なんて滅多にないんだから」

「聞いてけ~」

何か、寒気がする。といつも、聞いていられる人間がないとはどういう事だろう。

「あー、お断りす……」

顔の真横を弾幕が通過する。

「ゆづくつしていつてね」

其の肆拾漆（前書き）

今回、読んでいて非常にイライラする場面があります。お詫びをつけ下さい。

……リア充、ぶつ壊す。

其の肆拾漆

「冗談じやない。

演奏を聞かなかつたら弾幕勝負、そんな無駄な事をしている場合ではないのだ。

よつて……。

演奏を聞いていた。

とりあえず適当に理由をつけ、門から離れた場所に移動して貰つたのだが少し困つた事がある。

能力の効果があと数十分で切れるのだ。

それに、何だかやる気が無くなつたり無駄な高揚感が込み上げてきたりと調子がおかしい。

が、そこは医者の端くれ。呼吸法やらちょっとした思い込みで感情の操作など軽いものだ。

それよりも、問題は靈力だ。切れたら絶対に落ちる。間違い無く落ちる。

浮くことは普段の靈力で可能だ。しかし、時計の無いこの場では秒単位で自分の靈力量に変化が訪れる事が分からぬ。よつて急には対応出来ない。

そして、やつと一曲の演奏が終わる。

「あれ、この人まだ大丈夫そうだよ？」

おいキー ボード、どうこう意味だ。

「本当に、自殺まではいかなくとも鬱病ぐらにはかかると思つてたのに」

バイオリンの人、それはどうこう意味ですか？

「ハイになつてゐようとも見えない……」

トランペッタ、だからどうこう意味だ。

だが、今はそれどころではない。

真剣な顔で、真剣な声色で、三人に告げる。

「演奏を聞かせて貰つた身で申し訳無いけど、三人に頼みがある。俺を、側で支えて欲しい」

落ちなによつた。

「えつ……」

最初に反応したのはバイオリンの人、何故か顔が赤い。アレか、男性恐怖症みたいな感じの。

「三人でだなんて……」

次に反応したのはトランペットの人。いや、女の子が男支えるのに一人一人じゃ無理だろ。そして何故か顔が赤い。照れる要素が見当たらない。

「……？」

キーボードの子は他一人を見てきょとんとしていた。まあ、普通の反応だと思う。

「ええっと、本気なの……？」

「他に考えられないからな」

「じゃあ、どうしてそんな考えに？」

上擦つた声で照れながら聞かれる。こいつまで恥ずかしくなつてくれるから止めて欲しい。

「俺には三人が必要だつたから」

協力してもらわないと真っ逆さまに落ちるとか、笑えない。

そして、この三人はまだ演奏し続けるだらつ。第六感がそう言つている。

よつてあの門を数分で突破する事も不可能だが、辿り着く事すら出来ないかもしけれこの状況では目の前の三人に助けを求めるしかない。元凶としても。

ここでお前等の所為だけどな、なんて抜かしたら打ち落とされる気がする。

「でも、私達は幽霊だし……」

初耳だ、まあこの際は関係ない。

「触れ合えるんだから関係ない」

そう、落ちないように支えてくれるなら天使でも悪魔でも妖怪でも良い。

「でも……」

「頼む、この通りだ」

頭を下げる。……まあ、死ないんだけどこの高さから落ちたら痛いじゃ済まないから。

三人は目配せをする。

キーボードの子は未だに分かつていない様で、二人に耳元で囁かれてから何故か顔を赤くする。

そして、三人は頷きあつた。

「分かつたよ、私達はこれから君のすぐ傍で君を支え続ける。でも、その……平等にして欲しい」

体重の掛け方だろうか？

「初めからそのつもりだよ。じゃ、いいか？」

「ええっ！？」「ここので！？」

「いや、ここでしないで何処でするんだよ」

「でも、心の準備が……」

「もう、限界なんだ」

「わ、分かった。じゃあ初めは何をしたいいかな？　こんな事、初めてだから」

「ああ、まずは……」

「ハア……」

咲夜は夜の空を飛びながら溜息を吐く。

結局、魔理沙は一步も退かなかつた。だが、限界を迎えた魔理沙では咲夜に勝つ事どころか、スペルカードの使用すら儘ならない。数分の抵抗を示した後に被弾し、敗北した。

咲夜も、そこまで抵抗するとは思つていなかつたし知り合いを殺す程冷徹に物事を運ぶ事は出来ない。

アリスの時以上に疲弊した咲夜が向かうのは、紅魔館。

魔理沙とアリスから奪つた春ではまだ足りない。そして、春が無いのは奪つた奴らが原因であり、やはり大量の春を持っている。つまり、結局は犯人を懲らしめる事になるのだ。

少し疲れた、それにレミリアの事が気になる。

だが、咲夜は目の前を飛ぶ人影を見て顔をしかめる。

「…………」

「おおっ」

「ん……」

「悪い、でも後少しだから」

結局、勇輝が三人に抱き着く形となつた。

説明をすると、話が違う。という表情をされたがこちらとしては知つた事では無いし、承諾もしたのだ。

フツ、と自分の力が抜けるような感覚。時間だ。

腕を解き、三人を解放する。

「悪かつたな、もう大丈夫だ」

自分の靈力を再確認し、それを総動員して浮く事に専念する。

「ああ、良いんだ。私達が誤解しただけで……うん。私が悪いんだ
…………」

なんか、とてもネガティブだった。

他一人も納得がいっていないようだった。

「プリズムリバー三姉妹をたぶらかして……抱き着いてその反応…
…」

トランペッタの人、命の危機が迫っているのに欲情するのは頭の中
が万年桃色の奴だけだ。

「じゃ、俺はそろそろ……」

「あ、まだまだ演奏は終わってないよ」

キーボード……テメ。

その後の演奏は何故かトランペッタがメインだった。

「そつか、だから勇輝は私達の演奏で変に影響を受けなかつたんだね」

「……ああ、次は耐えられないけど、な」

いつの間にか、夜が明けていた。

長時間の靈力のコントロール、感情の抑制、睡眠不足。倒れそう。能力を使えば良いのだが、感情を抑えるのに精一杯で上手くいきそうになかった。だから終わるまで待っていたのだが……。

「……目眩がする」

もう、限界だつた。

「大丈夫？ ごめん、長い間演奏を聞いてくれる人は久しぶりだつたから……」

「いや、貴重な体験が出来たから気にしなくていいよ。演奏も上手かつたと思うし」

聞き流していた……といふか集中して聞いたら駄目になると思つたので真剣に聞く事はしていなかつたが、下手なうじこままで人の感情を搖さぶる事は出来ないだろう。

音楽が人に与える影響は思つた以上に高い。

ゲームをやっている時も、無音とBGMがかかつた状態では緊張感がまるで違うのが簡単な例えだ。

「何も返せないのは悪いんだけどさ、地上の春を取り返しに来たんだ。だからあの門の中に行きたい、お礼はまた今度で良いか?」

「ちょ、ちょっと待つて……」

バイオリンの人、もといルナサがトランペットの人、メルランとキーボードの子、リリカに詰め寄つて小声で話し始める。

今のうちに能力を使わせて貰おう。

身体能力は吸血鬼並、靈力の量は靈夢並に……。両方を“力”に置き換え一回の能力使用で修正する。

身の回りに基準となる人物が出来た事によつて大分この作業が楽になつた。普段とはまた違つてくるので百パーセント出し切る事は出来ないのだが。

更に、靈力と体力の減少を修正……。

「……ふう」

集中するために閉じていた眼を開け一息着く。

この能力に必要なのは明確なイメージ。欠陥を見出し、修正後のイメージを固める。

ある程度大まかでも使えるが、やはり明確にした方が後々分かりやすい。

不死を元に戻さないのも、その後どうなるか分からぬからだ。

フランとの約束の事もあるが、やはり死ぬかもしないというのが大きな原因だった。

「決めた。勇輝……」

ルナサが決心したように話しかけてきた。

「私達と、スペルカードルールで勝負して欲しい」

……あれ？

「これは……」

靈夢が見つめる先には巨大な門、それも結界で守られた……。

しかし、靈夢にとってその程度は些細な事でしかない。

「確か……冥界、だつたかしら。来た事なんて無かつたし、来る必要も無かつたから覚えてないのよね……」

普段から異変を警戒している訳では無く、神社の掃除と縁側でお茶を飲むだけ切つた生活を送っている靈夢には博学という言葉はあり得ない程に似合わない。

勘でスペルカードを避けたり、勘で犯人の居場所を突き止めボコボコにする靈夢にとつて知識が必要ないのも確かなのだが……。

「門番の一人ぐらい雇えば良かつたのに……紅魔館のより眞面目な奴を」

靈夢が結界に触れ、目を閉じる。

次の瞬間には、結界はガラスの割れるような音と共にバラバラに砕け散っていた。

「さて、春を奪……取り返しに行こうかしら」

何故言い間違えたのかはこの際置いておき、幻想郷最強の巫女が冥界。白玉楼へと入つて行つた。

「申し訳ありません。お嬢様……」

ボロボロのメイド服を身に纏つた咲夜はレミリアに頭を下げる。

「どうしたのかしら？ 昨日は帰つて来ないし、そんなボロボロの姿で……」

「ええ、実は……」

魔理沙を退けた後の事である……。

咲夜は目の前を飛ぶ人物を見て顔を顰めた。

「博麗、靈夢……」

異変解決のために飛んでいるのだろうが、靈夢はこっちに向かって飛んできていた。

「アンタ、また異変を起こしたの？」

靈夢が呆れたように咲夜に話しかける。

今の咲夜には疑われても仕方のない程の量の春があり、しかも向かつっていたのは紅魔館だ。

「違うわ。私は屋敷の周りだけ春にしたいのよ、だから必要なだけ春を集めていたの」

「あ、そう。なら……」

靈夢は一いつ口りと笑つて、その清々しい程の笑顔で。

「私が異変を解決して幻想郷全体を春にするから、その春を渡しながら」とい

どこの盗賊だ。

「渡すも何も、犯人から取り返せばいいじゃない

「だつて寒いじやない。少しほ貢献しなさいよ」

横暴にも程がある。

「なら、私も明日犯人を漬しに行く予定だつたから貴女は神社でゆつくりしていらう?」

「最初はそのつもりだつたんだけどね……勇輝さんには私の春も預けたし」

「なら勇輝に任せるとか返して貰えぱいにじやない」

「だつて、遅いじやない。それに勇輝さんつて相手が病人とかだつたら向ひつけんつくかもしれないでしょ?」

それは無いと思つた咲夜だが、まあ靈夢が聞く筈もない。

「なら、力ずくで奪つてみたら?」

そんな事を言つたのが間違ひだつた。

「それで、負けた上に全て春を没収されたと……」

「はい、申し訳ありません」

「別に良いわよ。島に桜は無いし、花見は神社でやううと思つていだから」

「そりですか……」

「でも、勇輝が異変解決を、ね……。咲夜、勇輝が失敗した時の準備をしておいて」

「……ああ、了解いたしました」

何を了解したのか、それを勇輝が知る事になるのだろうか。

其の肆拾仇（前書き）

非チートを目指した筈だった。だけど幻想郷がそれを許してくれなかつた。

其の肆拾仇

「ルールはお互いに三機、私達は三人で三機ね。枚数は六枚、それで大丈夫かな？」

「いや、こつちは八枚だ。人数の違いは大きいからな」

「あ、そうだね。分かつた、それで良いよ……それと、もう一つ」

「何だ？」

「枚数を増やす代わりに、勝った方が、負けた方に一つ命令できる。お互に納得できる物ならどんな命令でも」

「んー、まあ良いんじゃねーの？ 負けるつもりはないし」

この状況で枚数を増やした所で不利なのは変わらない。
だから……。

「最初から本気でやらせて貰つ」

靈力の翼を作り出し、スペルカードを取り出す。

「解符『トラップパズル - Lunatic -』」

レミリアに一撃入れたスペルカードの改良型スペル。より悪質になつたそれを三姉妹に向けて放とうとするが……。

「……あれ？」

ポフッと音を立てるだけに終わってしまう。

「」
ヒロは勇輝は思い出す。靈力の翼とスペルカードは両立出来ない事を。

靈夢との戦いはどうかしていたのだ、氣分がハイになっていたからだろうか？

三姉妹が哀れむよつた視線を向けてくるが気にしない。

靈力の翼は移動用、なら以前の戦い方に戻すまでだ。

空に、いくつもの靈力の板が現れ、その内の一つに勇輝は足を着ける。

この弱点だけの足場だが、スペルカードの使用を上空でするには仕方ない。

「変わった戦い方だね……」

「よく言われる」

三姉妹は各々の楽器を媒介に弾幕を放つ。

威力はそれほど高くないが三人が同時に放つ分、量が多い。

宙に浮かぶ足場を移動しながら淡々と避けていく中で感じる。

……あれ？ 余裕で勝てそう。

思えば今まで相手をして来たのは化け物ばかりだった。

魔砲を遠慮なくぶつ放してくる魔法使い。

気の触れやすい、戦闘狂の吸血鬼。

上記の姉の吸血鬼。

時間を止めてくるメイド。

スペルカードルールを忘れて凍らして来そうになる妖精。

実験と称してスペルカードを次々に撃つてくる元気のこじもり魔法使い。

もう人間では無い強さの巫女。

……初めて、まともなスペルカードルールでの決闘になるのではないだろうか？

ああ、もう自分から当たりに行つても良いこと思えるぐらうの弾幕。

もう抱きしめても良い。こんなまともな弾幕を見れる日が来るなんて思つてもみなかつた。

だつて当たつても痛いで済みそつだ。絶対に命の危険が無い。

音符型という所も、何だか可憐らしく思えてきた。

刺さらないし、骨が折れないし。ああ、なんて素晴らしい弾幕なのだろう。

「……ルナ姉、どうしよう。私、あの人に当たれる気がしない」

「うん。私もこの勝負が無謀だったと思えて来た……」

「ね、姉さん。勇輝がなんか凄い楽しそうに避けてるんだけど」

今までがおかしかった。何が楽しくてあんな命の危機を感じながら弾幕を避けなければならなかつたんだろう。

「どうする？ スペルカードでも使うか？」

「言われなくともっ！」

「じゃー私がら。鍵靈『ベーゼンドルファー 神奏』！」

リリカのスペルカードが発動。それは一般人から見たらもう避けるのを諦めたくなる弾幕だつたが……。

「えつ？」

これがスペルカードですか？ と言わんばかりに簡単に勇輝は避けていく。

リリカは開いた口が塞がらない。そんなリリカを押しのけてメルランが前に出る。

「リリカなんかじゃ駄目ね、私のお手本を見せてあげる。鍵靈『ゴ

ーストクリフォード』「

このスペルも、常人が見たのなら顔を引きつらせるような弾幕だった。

だが、勇輝は楽しそうに避けていく。

「次は私が……。偽弦『スードストラティギヴァリウス』」

ルナサの放ったスペルカードを勇輝は避けようとしている。

「まあ、これぐらいか

勇輝を囲う四枚の靈力の壁。それにビビを入れる事さえ出来ずにルナサの弾幕は消えていく。

「嘘……」

三人は目の前の光景が信じられないようだった。

ここで勇輝が普段使うスペルカードを使えば、鬼畜以外の何者でもないだろう。

だから、作った中でも数少ない魅せるためのスペルカードを勇輝は使う。

手加減をするなど、どれだけ偉くなつたつもりなのだろうか。何でレミリア辺りに言われそつだが、あの三人とは敵対した訳では無い。それに、医者がケガ人を出してどうするというのだ。

だけど、負けるつもりは無い。

「弾幕『命知らずの大乱祭』」

三姉妹は顔を引きつらせる。

勇輝が生み出した絶望的な量の弾幕が辺り一帯、前後左右上下を囲い球状に。

「さて、弾幕に色を着けるのって意外と面倒だという事を知ったこのスペルカードだけど……最後まで立つていられる自身はあるか？」

色取り取りの無数の弾幕。それが渦を巻くように中心、ルナサ、メルラン、リリカ、勇輝の四人に迫つてくる。

祭りでスーパーボールすくいというのを見た事があるだろ？
あんな感じだ。

「でも、これじゃ勇輝も……」

「祭りを楽しむなら全員でつてな。この弾幕の動きはランダムだし
……俺も避けるしかないんだ」

「ルナ姉、これ拙くない？」

「私、降参してもいいかなーって……」

冷や汗をかくメルランに、諦め気味のリリカ。

数十秒後、三人は被弾し勇輝の勝利で決闘は終了した。

其の伍拾

「負けたよ。強いんだね、勇輝は……」

「周りが化け物しかいないからな」

今更だが、自分が十分戦えるだけの力を持つていて事を認識できたのは良い経験になつただろう。

かと言つてこれから戦う事になるであろう異変の犯人がレミリアよりも弱いとも言えない。

もしかしたら靈夢と同等の実力を有しているかも知れないのだ。

「じゃあ、その……命令を決めて貰えないかな?」

「ああ、そんな約束してたな」

しかし、実質勇輝が使用したスペルカードは一枚だし、勝利したのも勇輝だ。

何かルールに不備がありますか、と聞かれても機数も枚数も変わらない訳で、勝つ方が命令、と言わても頼もうと思つ事は何も無い。

い。

「じゃあ、俺の命令を聞くくな。つてのは?」

「それじゃあ私達が納得出来ない。勝者なんだから貞操を奪つくれいの事を言つてくれないと……」

「いや、何処の外道だよ」

自分がどんなイメージを持たれているのか非常に問い合わせたい。

「じゃあ……。演奏だ、俺が聞きたいなーって思った時にまた演奏して欲しい。これなら良いか?」

「……まあ、それなら」

びつじて消極的な物になるにつれて不満そうな顔をされなければならぬのだろうか。普通は逆だと思つ。

「私達は霧の湖の近くの廃墟に住んでるから、聞きたくなつたら何時でも来て」

「ああ、やつせさせて貰う」

妹二人がルナサを呼ぶ。

三人が地上に降りていくのを見てから、勇輝は空中に浮かぶ巨大な門の方へと飛んだ。しかし……。

「……どんな化け物が通つたらこうなるんだよ

結界は消え、門が破壊されていたのだ。

中に入つてみると、終わりが見えない程続いている階段となつていた。

「エリを上るのが……ストレスの溜まりそうな道だな

紅魔館もそうだが、同じ風景が延々と続くと精神的に効いてくるので少しは変化をつけて欲しい。

侵入者はいいが、自分たちまでおかしくなっては元も子もないというのに。

「歩くのは……無謀だから飛んで行くしかないな」

いつじて、勇輝も冥界へと足を踏み入れた。

「貴女、人間ね？」

「そう言つアソンタは人間っぽいけど人間じゃないわね」

桜の花びらの舞い散る白玉楼の庭。そこでは靈夢と、この白玉楼に仕える魂魄　妖夢が対峙していた。

長い階段の上では桜の木が立ち並び、一本の道となっている。

「貴女の持ってきたなけなしの春。全て幽々子様のために奪わせて

貰ひつい

「じゃあ、立てなくなるまで遊んであげる

靈夢の言葉を合図に、両者の弾幕が交差した。

「……まさか、こんな弱点があったとは」

勇輝は長い階段を一段一段、踏み締めながら上を目指していた。

勇輝の飛行方法。靈力のコントロールで浮いた後に靈力の翼を動かした風圧で移動する。というもののだが、場所が悪かつた。

斜め上方向に移動するのは思ったより難しい。

少しの距離なら良かつたのだが、いつも長いとボロが出てしまうのだ。

さつき、思い切り階段に突っ込んだ。

決めた、ここではもう飛ばない。足があるのだから歩いて上る。

赤くなつた額を押さえながら、勇輝は階段を上り続ける。

「くつ……！」

妖夢が刀を振るい、靈夢の弾を両断する。

劣勢にはなつていないが、攻勢には出ていなかつた。

妖夢の役割は、この白玉楼の庭師兼、主人である西行寺幽々子の護衛。

何が言いたいかといふと、攻めた事が殆ど無い。

そして、相手はあの靈夢、しかも勇輝の時に手加減をしすぎる訳では無く全力で妖夢を潰そうとしている。このまま消耗戦が続くのはちよつとした事情で避けたい妖夢。

「…………ちつ」

靈夢が舌打ちをする。

攻め手であるといふに、全くと言つていい程に決定打が入らない。

そして、刀を使う相手と戦うのも初めての経験でありその戦闘スタイルが見えないのだ。

間を開けず。余裕を与えず。その圧倒的な数の弾幕で妖夢を撃ち続ける。

妖夢は一本の刀で靈夢の放った弾を切り裂いて行く。

両者が攻めに、守りに持てる力全てを使い攻防を繰り広げていた。

だが、勘違いしてはいけない。

攻める側、守る側。いくら拮抗しようとも有利なのは攻めている方なのだ。

この勝負に制限時間が、ハンデが、何か特別なルールがあったのなら守る側が有利になっていたのかもしれない。だが、これは正真正

銘の決闘。

どちらかが諦めるまで、どちらかが倒れるまで、どちらかが死ぬまで続く真剣勝負。

そして、現実というものは非情である。

靈夢の放った弾幕。それは妖夢には当たっていないが地面や桜の木に被弾している。

当然、地面に当たれば道が砕け爆風が上がる。木に当たれば花は散り、その幹には抉られたような傷がつく。

たつた数枚。重さ十グラムにも満たない桜の花びらが妖夢の視界を遮ってしまった。

「つー？」

靈夢の弾幕が妖夢の小さく軽い体を弾き飛ばす。

「くつ……」

刀を地面に突き刺し妖夢は踏み留まる。

「獄界剣『一百由旬の一閃』！」

妖夢がスペルカードを使う。

だが……。

「…………ふう」

靈夢は通常の弾幕で妖夢のスペルカードの弾幕を吹き飛ばした。

「興が冷めるわね。これなら勇輝さんが強かつたんじゃないかな」

妖夢の刀を持つ手は無意識の内に震えていた。

「一Jの程度で異変を起こすなんて思い上がりも甚だしいわね。何が目的だったの？」

膝をつき、刀で体を支える妖夢は空中から見下りる。

「私は、幽々子様の願いを叶えるよう努力するだけ……。それ以外の目的なんて持ち合わせていなければ！」

妖夢が己の刀、楼観剣を構え直し、靈夢を睨みつける。

「ハア……主犯じゃないなら引っ込んでいて欲しいんだけどね」

靈夢は溜息を吐ぐが、その次の瞬間から放たれる弾幕は加減など一切無い。

妖夢は長刀で弾を切り裂き、弾の間を縫うように靈夢へと向かう。

刀を振るうなら足場が有つた方がいいのは百も承知。だが、靈夢が飛んでいる以上は妖夢も飛び上がる事が必要となる。

しかし、靈夢がそれを許す事は無いし、そこまで妖夢は無謀でもなかつた。

妖夢にできるのは倒されないギリギリの所で踏み留まり、靈夢が諦めるのを待つことだけ。

妖夢は目の前に迫った弾幕を大きく避け、後ろに下がる。

「靈夢は鬱陶しいという表情になるが、攻め手を緩める事も更に強める事もない。」

そんな時、妖夢は靈夢の後ろの階段から現れた人物に気付く。

「え、どうこう状況？」

勇輝は上がって直ぐの場所で何故かボロボロの白衣を纏つて呟く。

妖夢の意識が勇輝に向いたことによつて、その隙に靈夢は白玉楼へと飛び去る。

「勇輝さん、そいつの相手お願ひね」

「…………は？」

ポカんとした表情で勇輝は回りを見渡し状況を確認する。

倒れる木々、割れた地面、刀を持つ殺氣立つた少女。

成る程、靈夢が暴れた後だ。

「まさか仲間が来るとは思いませんでした。それに、その格好を見る限り相当激しい戦いを越えてきたようですね」

靈夢が去った事に少し安心した妖夢が刀を鞘に戻しながら勇輝に話しかける。

「激しげって言えば激しいんだけど……うん」

調子に乗つてジャンプしながら階段を上つていた時に転けた時の傷だと言つていよいのだろうか……。

まさか使い魔的な存在がいるとは思つていなかつた。いきなり攻撃されて何段転げ落ちただろうか。

「ここより先に、これ以上誰かを通す訳にはいきません。大人しく去るか……」

妖夢が刀の一振りに手を掛ける。

「……で倒されるか……」

ダンッと地面を蹴る音と共に妖夢が接近していく。

その速さは素人には到底反応できない程。だが、レミリア並の身体能力を持つ今の勇輝にはそれを避けることは不可能でもない。

タンッと軽い音と共に勇輝は後ろに飛び退く。

「…………あつ」

階段の方へ。

目の前は刀、後ろは嫌になる程に転がった階段。

妖夢もこの行動は予想外だったようで田を丸くしている。

まあ、前後左右が駄目なら。

「飛べば良いだけか」

靈力の翼はを作り、それを大きく羽ばたかせる。

「つー？ 成る程、思っていたよりずっと強いみたいですね……」

靈力の翼を見て、妖夢は勇輝に対する認識を改める。

感じ取ったのは膨大な靈力。それを実体を持つ形に仕上げ扱いこなしている。

「過大評価をありがとうございます。先に進んだ巫女と比べたら蟻とゾウぐらいの差があるけどな」

「……ゾウ？」

「あ、知らないのか。じゃあトカゲと竜ぐらいの差が……」

「それってもう人間じゃないですよね……」

「……恐くて言えるかよ」

「所で貴方はここに何の用があつて来たんですか？」

「えーと、暇潰し」

「生きた人間が、冥界で？」

「冥界だつたのか。……いよいよ幻想郷が何なのか分からなくなつ

てきた」「

「暇なら地上で潰して貰えません?」

「冬に家でゆっくりしていたら飽きるだろ?」

「……貴方も邪魔をするんですね」

「お前等が迷惑をかけてるんだろ?」

「それでも、私は幽々子様のために西行妖を満開にする

「……なら、力づくで止めさせて貰うしかないな

妖夢が抜刀し、勇輝はその手に靈力の槍を作り出した。

「アンタが今回の異変の主犯でいいのよね?」

「あら? 妖夢は負けてしまったのね……」

「あのままやつてたら勝ったけど、今は他の人が相手をしてくるわ

「そう……。それで、貴女はどうして異変を解決しようとするのか
しらへ?」

「迷惑だからに決まってるじゃない」「?

「相手の事情も知らず、考えずに?」

「必要ないわ。人に迷惑をかけてまでやる事に口クな事はないでしょ」

「そうね。そうかもしない……。だけど、これは私にとって重要な事。妖夢のおかげで西行妖が咲くまであと少し、そしたら下の骸が誰のものかもはっきりする」

「……それに何の意味があるのよ」

「失った記憶と、自分の末路」

幽々子は扇子を開き、口元に当ててから続ける。

「この冥界には、地上から来た物が一つだけある。白玉楼と、西行妖。……白玉楼は生前に私が住んでいた屋敷。だけど西行妖は何故ここに持つて来られたのか分からない。もしかしたら、失われた私の記憶に関係しているのかも知れない」

「だから何？ そんな事がどうしたっていいのよ」

「自分の記憶が無いって、意外と惨酷な事なのよ？ 家族がいたのか、どういう暮らしをしていていたのか、何故死んでしまったのか……。私は、それが知りたい」

「……だとしても、私は博麗の巫女としてこの異変を解決する」

まだ花のついていない西行妖が風もないのにザワザワと揺れる。

「どうしても邪魔をするといふなら」

「どうしても異変を止めない氣ない」

両者が構え、戦闘の姿勢に入った。

「花の下で眠るがいいわ、紅白の蝶！」

「花の下に還るがいいわ、春の亡靈！」

其の伍拾壹（後書き）

最後の台詞は東方妖々夢より抜粋。こういう展開ってテンションが上がります。

ガキイインと、金属同士が強くぶつかりあつ音が白玉楼へと向かう道に響く。

「凄いですね、この刀で切れない所か形がぶれもしないなんて……」

「放出と凝縮を繰り返してるので実際は削り取られてるけどな」

ギチギチと音を立てながら槍と刀が擦れる。

だが、勇輝にとつてそれは全く意味を成さない。

勇輝の持つ靈力の槍から、妖夢に向かつて棘のようなものが飛び出る。

咄嗟に飛び退いた妖夢だったが、その白い髪が数本だけ舞う。

「……決まった形が無い武器。厄介ですね」

「反応出来たお前も達人クラスだと思つぞ?」

槍が霧散し、次に握られたのは双剣。

「スペルカードで戦うのが普通らしいけど、お前はこっち（近接戦闘）の方が向いてるみたいだな。手加減つて訳じやないけど合わせてやるよ」

寧ろ、弾幕よりもこっちのが分かりやすい。

ちょっと弾幕に追い詰められるのとはまた違った恐怖があるが、我慢できない程ではない。

「（あれ、この人って良い人……？）」

妖夢は妖夢でズレた思考をしているが、両者やる事は変わらない。

「さて、特定の武器が無いのは申し訳ないけど、少しお付き合いで貰いますか」

「…………」

勇輝の軽口に、妖夢は無言で刀を構える。

「ほじつと」

「つー？」

先に仕掛けたのは勇輝。

その、本来手数で相手を翻弄するためにあるであらう双剣の一本を妖夢に向かつて投擲。

しかし問題無い。勇輝の武器には限りが無いのだから。

妖夢は飛んで来た短剣を刀で弾く。

靈力で作られた武器故に、役割を終え短剣は霧散し消えた。しかし、もう一本が妖夢の眼前まで迫る。

同じ軌道で顔に向かつて投げられた事で出来た死角に飛び短剣を、妖夢は体を捻り、姿勢を低くしながらもう一本の刀を抜刀し叩き落す。

「ん？ 何で避けなかつた？」

「貴方の武器、弾幕としても使えそうでしたし、何よりここまで器用に靈力を操る人が飛ばした靈力を後から操れないとも限りませんから」

「へえ……」

なら、数で勝負を仕掛けよう。

勇輝の周囲に十、二十と短剣が生み出され、それが一斉に妖夢へと襲い掛かる。

妖夢は一本の刀を器用に使い、全ての短剣を叩き落し、弾き飛ばす。

「無駄です。その程度では私に致命傷を与える事は到底出来ません」

「みたいだな。つーか、大ケガはさせる気ないんだよね……どうせ靈夢が終わらせるだろうし、それまでお前があっちの援軍に行かないうにしておけばそれで十分そうだ」

「随分とお仲間を信用しているんですね」

「いや、アイツより強い生命体が存在するって信じられないだけだ」

聞かれたら何をされるか分かつたものではないが、実際そつなのだから仕方ない。

「…………」

妖夢にも思つ所があるのか黙りこんでいた。

「あまり険悪な雰囲氣で戦うのも好きじゃないし、自己紹介でもしておこうか」

一度武器を消し、体から力を抜いて戦う姿勢を崩した事をアピールする。

「俺は桜井 勇輝。人里で医者をしている」

「……魂魄 妖夢、です」

何のつもりか分からぬ。といつ表情をしながらも妖夢は名乗る。

勇輝としてはちょっとした暗示をかけただけなので相手が名乗りさえすれば良かつた。

名前も知らない奴が死んでも気にならないが、少しでも認識のある人間を殺すのには恨みでも無い限り戸惑いが生まれる。

と、普通の人間なら少しは効いてくれるのだが……。まあ、なるようになるだろ？

「じゃあ、仕切り直しどうか」

「残念ですが、もつ責方は負けていますよ」

「は？」

間の抜けた声を出したと共に、勇輝は体に違和感を感じる。まるで何かに縛め付けられているような……。

「何だ、この白い餅みたいなの？」

「私は半人半靈、人と幽靈のハーフなんです。その子は私の半身でありながら巫女の弾幕にビビッて逃げていた薄情者の半靈ですよ」

「……苦労してるな」

何というか、苦労人から漂うオーラを感じる。

「そう思つならこれ以上問題を起さないで欲しいです」

「問題を起したのはそっちだろ」

「ど、とにかくこれで動きは封じました！ 隆参するなら今の内ですよー！」

「とは言われてもな……」

腕が使えないだけで足も靈力も使える。

靈力で棒を作り出し、それで半靈を突く。すると半靈は慌てて妖夢の方へと逃げて行つた。

「なつ、何してるんですか！？　これじゃあ私の正体がバレただけじゃないですか！」

妖夢が半靈に怒鳴っているのを見て、やはり苦労していると勇輝は再認識する。

白玉楼の前庭では激しい弾幕合戦が繰り広げられていた。

幽々子の靈力や身体能力はレミリアには劣るが、それでも特徴的な弾幕によって現在はほぼ互角の勝負をしていた。

『亡舞』生者必滅の理 - 死蝶 - 』

幽々子がスペルカードを使つ。

靈夢はそれを時には避け、時には自分の靈力弾をぶつけ相殺する。

『靈符』夢想封印 散』 - 』

靈夢も仕返しのようにスペルカードを使つた。

靈夢の弾幕は幽々子の弾幕を飲み込むように拡散し、そのいくつかが幽々子を襲つた。

「へつ……」

幽々子は田の前に迫つた弾を自分の靈力をぶつけて相殺。

ここまでに使つたスペルカードは靈夢が三枚、幽々子が五枚。被弾はお互いに無し。

どこかの医者モドキのように囁さえあればスペルカードを考えるような事をしていない彼女たちのスペルカードの総数は十数枚。このままいけばルール上、幽々子の敗北となる。

幽々子は焦りながら、次のスペルカードを取り出した。

再び桜並木の道では金属がぶつかりあう音が響いていた。

「はっ！…」

妖夢が刀を横廻ぎに一閃する。

それを勇輝は屈んで避けると左手に靈力の塊を作り出し、それを妖夢にぶつけようと腕を伸ばす。

妖夢は体勢を崩しながらも後ろに飛び、勇輝に時間を与えず踏み込み、斬りかかる。

それを勇輝は右手に持つ剣で受け止め、左手には新たに槍を作り出す。

妖夢はもう一振りの刀を抜き、即座に月を放つが勇輝は体を回転させてそれを避け、そのまま槍で妖夢を突く。

妖夢は半靈で槍の軌道を変え、それをやり過ごした。

一進一退の攻防。時間にして数秒だが一人はその何倍にも感じていた。

勇輝に殺す気は無いが、当たれば間違いなく戦闘不能になる一撃をお互いが繰り出している。

妖夢も接近戦を維持しようと、必死で食らいつくような猛攻を続け

る。

このままでは埒が明かない。

そう思い、勇輝は妖夢との間に分厚い巨大な靈力の壁を作り出す。

妖夢は咄嗟に反応し、後ろに下がつて刀を構え直す。

勇輝は白衣のポケットから一枚の紙を取り出し、溜め息を吐きながら。

「どうも普通に戦つてたら進展が無いみたいだから、急遽スペルカード戦に切り替えさせて貰うな」

その言葉に、妖夢もスペルカードを取り出し警戒を強める。

「行くぞ……。映符『禁忌 レーヴァテイン』！」

「……え」

何処かで吸血鬼が使つていたようなスペルカードと同じようなスベルを使つた勇輝。

妖夢は妖夢で弾幕と思つていたのに巨大な紅い大剣を振り被られて固まつてしまふ。

月に一度の頻度でフランと弾幕』『こをしていたせいで完成してしまったスペルカードの一枚。

名前の通り、人のスペルカードを真似たスペルカード。正直反感が

色々な所から来そうだがこの際気にしない。

勿論、こんな大胆なスペルカードは性に合わないのでフランが使つた時より威力は劣るのだがやつぱり世間一般から見たら泣きたくなれる恐ろしいスペルカード。

伊達に紅魔館に通つてゐる訳では無いのだ。

まずは妖夢に向かつてレーザーテインを思い切り振り降ろす。

妖夢は避けるが、地面は砕けレーザーテインが五十センチ程埋まる。

やつぱり人のスペルカードは加減が分かり辛い。

それに、フランが振り降ろしていたら地面が熔けていた筈だ。

「な、何がスペルカード戦ですか！　思いつきり剣を振り降ろして
るじゃないですか！」

「いや、これは俺のスペルカードじゃ無いし。それに槍を使う奴だ
つているんだからそいつ等に文句言つてくれよ

最初に見た時は少し間違えば致命傷だったからなー、と少し昔の事を
を思い返し、レーザーテインを振り回す。

妖夢は不条理だ、こんなおかしい。という表情になりながらもレー
ーザーテインを避ける。

追い打ちに弾幕も放つてゐるのだが、それも当たらなかつた。

「そつちがその気なら……。人鬼『未来永劫斬』！」

一瞬、妖夢の姿がぶれる様に見えたと思えばレーヴァテインが砕け、辺りの弾幕が搔き消されていた。

「……おい、お前も十分規格外じゃねーか

僅かに見えた抜刀術による風の斬撃。

勇輝の頬を血が濡らす。少し切れていたようだ。

「被弾一、ですね」

「いや、弾じやねーだろ」

「これが私のスペルカードですか？」

まあ、弾幕に決められた形など無いので良いのだろう。そもそもこの勝負に被弾数は関係ない。

それに、一度使ったスペルカードを同じ戦いで使用するのは御法度だ。あのスペルカードが出て来ないなら楽なものだろう。

「医療『キープアウトーム』」

仕切り直し、と言った感じに次のスペルカードを使う。

テープのような、包帯のような形に整えられた靈力が辺り一帯の桜の木に絡みつき妖夢の動きを制限する。

「「」んな物ならつー」

妖夢が刀で靈力のテープを切ろうとする。

テープは簡単に切れた、しかしそこの新たなテープが飛び交い妖夢の行動範囲が更に狭くなつていく。

「こんな事ならさつきのスペルカードを残しておけば良かった。か？」

後ろからした声に妖夢が振り向いた。

勇輝は振り向いた妖夢を押し倒し、動けないよつに組み伏せ喉元に靈力の短剣を突き付けた。

「まだ戦る気はあるか？」

妖夢は悔しそうな表情をするが、目を閉じて一言。

「……私の、負けです」

妖夢が負けを認めると、辺り一帯に張り巡らされていたテープは霧散した。

「んじゃ、奥で戦ってる靈夢と犯人を見に行くか

妖夢の上から退き、手を差し出す。

「……変な人ですね。さつきまで戦っていたのに

妖夢もその手をとつて立ち上がる。

白玉楼の前庭。

そこでは未だ靈夢と幽々子が激戦を繰り広げていたが、押しているのはいるのは幽々子だった。

「どうしたの？　何やら疲れが出ているようだけれど」

「別に、アンタを倒した後に休むからお構いなく」

靈夢の靈力は桁外れの量だが、無限ではない。

先日からレティ・ホワイトロック、橙、勇輝、咲夜、リリー・ホワイト、少しだけ妖夢。その他妖精等との戦いの後、幽々子との戦いに挑んでいる。

紅霧異変の時は魔理沙がルーミア、チルノ、小悪魔、パチュリー、勇輝を。靈夢が美鈴、咲夜、レミリア、フランを擊破している。また、美鈴は一人で同時に撃破していた。

そして不眠。

中でも勇輝との戦闘では犯人だと思っていた節があり、大量の靈力を消費している。

「博麗の巫女を、ナメんじゃないわよ！」

靈夢がスペルカードを使つ。これが最後の攻撃だと残つた靈力の殆どを使って。

「つー？ まだそんな余力が」

靈夢の弾幕が幽々子の弾幕を消し去り、幽々子を襲つ。

幽々子は己の弾幕で相殺しようとしたが、幽々子の靈力も然程残つていなかつた。

「負けつ……」

そして、勝敗が決した。

其の伍拾肆

勇輝と妖夢は白玉楼への道をゆっくり歩いていた。

「んで、結局春を集めてた理由は妖怪桜を咲かせるため……馬鹿だろ」

「幽々子様は唐突に物事を決めてしまつので……」

事情徵収と称した雑談をしながら自分達の足で歩いて行く。

勇輝はポケットに手を突っ込みながら桜を見る。

右を見ても、左を見ても満開の桜。これが幻想郷から奪つた春による物なのかは分からぬが、外界では見る事が出来ない程多くの桜の木だった。

「で、その西行妖だつけ？ そいつが封印されてるって事は桜事態が危険な物つて可能性は？」

「それは無いと思いますよ。所詮木ですし、幽々子様のお話では桜の木の下にいる存在を封印しているらしいんです」

「……そんな桜の木を咲かせて何の得があるんだか」

勇輝の呟きに妖夢は表情を曇らせる。

「本来なら、無礼と分かつていても私が止めるべきだつたんでしょうね……」

「だらうな。一番近くにいた訳だし」

そこで会話は途切れ、無言のまま一人は進む。

しかし、唐突に一人を言い様の無い悪寒が襲つた。

「つー？」

勇輝は全身の毛が逆立つたかと思つ程の悪寒に体を強張らせる。

「まさか……幽々子様っ！」

妖夢が勢いよく走りだし、勇輝もそれに続いた。

「ふふっ……あははははっ！…」

幽々子は満開になつた西行妖の前で狂つたように笑う。

幽々子の近くには靈夢が倒れており、先程の勝敗を物語つていた。

あのまま、正式なスペルカードルールでの再選なら靈夢が勝利していた。

だが、幽々子の能力、“死を操る程度の能力”がその勝敗を歪めてしまつたのだ。

そして、靈夢の持つていた春は魔理沙が、アリスが、咲夜が集めた

物。その量も並では無かつた。

「靈夢ー。」

駆け付けた勇輝が倒れる靈夢に近寄り、安否を確認する。

「……………っー。」

脈が、無い。

「お前、何をした?」

幽々子を睨みつけ、勇輝はいつもの言葉からは信じられない程に低い声で囁つ。

「死んでいるのでしょうか? 私が殺したんだもの」

「…………そつか」

刹那、幽々子の体が大きく後ろに吹き飛んだ。

「一応、靈夢の代わりに蹴つとく」

少し遅れてきた妖夢は勇輝が幽々子を蹴り飛ばしたのを見て刀を抜いた。

「妖夢、ちょっと『イツを避難させてくれ』

靈夢を両手で抱え、妖夢の元まで歩き、地面にゅうへり降ろす。

「何をするつもつ……」

妖夢が刀を落とし、頭を抱える。

「これは……西行妖の妖氣、こんな……」

息苦しそうに妖夢が咳くが、そんな事は意に反わず勇輝は西行妖の方へ歩く。

僅かに紫掛かつた桃色の桜の花びらを咲かせ、妖氣を振りまく西行妖。

それを眺めていると顔の横を何かが掠め、髪の毛が数本落ちる。

蹴り飛ばされた幽々子が西行妖を支えにふらふらと立ち上がった。

「…………どうして、何も蘇らないの？ 桜は咲いたのに…」

困惑したように叫ぶ幽々子。勇輝はそんな幽々子に近づいて行く。

西行妖の花びらが勇輝の白衣を裂く。まるで勇輝を警戒し、拒むようだ。

れつき髪を切り落としたのも花びらなのだろう。

「おい、西行寺 幽々子。お前はまだこの木に未練があるか？」

「私が欲しいのは私の記憶……西行妖の下で眠る存在に用があつた。でも……」

「なら、この木は要らないな」

勇輝が靈力によって巨大な鎌を作り出す。

それは普段の青い勇輝の靈力とは違い、ただひたすら黒かった。

「そこを退け、西行寺。お前の記憶の欠陥はその内に修正する。その前にこの木の排除だ」

木の直ぐ傍、幽々子の隣に立ち、この巨大な妖怪桜を勇輝は見上げる。

次に、幽々子を見るが目と焦點が合っていない。疲弊した体でこれだけの妖気に当たられているからだろうか。

「……ハア。人の生き死にでここまで感情が揺れるのは医者としてはどうなんだか。これじゃ親父に馬鹿にされるな……」

まだ甘い。

そう思つて鎌を振り被り、西行妖に引導を渡そうとする。

鎌は勢い良く迫り、西行妖の幹に刺さり、その刃が西行妖を切り倒す。

その筈だった。

「……おい、何してんだ」

幽々子が鎌の柄を掴み、それを止めていた。

顔は下を向いていて表情は窺えない。

「邪魔をするなら……っ……？」

勇輝の体が宙に浮いた。

止まつた思考のまま田線を前に向けると、弾幕を展開している幽々子の姿が。

「おい！ わ前っ……」

勇輝の言葉など聞こえていないかのよつに幽々子が弾幕を放つ。

皮肉にも桜の花びらを模したその弾幕は西行妖の意志を具現してい
る様に見えた。

しかし、勇輝もそれなりに修羅場は踏んでいる。

体制を持ち直し、幽々子の弾幕を避けながら状況の確認をする。

まず、幽々子の姿を確認したが一田で異常が確認できた。

瞳に生気が全く感じられない。あれは廃人と同じ田だ。

恐らくは無意識での行動。少なくとも、今自分の意志では動いてい
ない。

妖夢や靈夢の姿は無い。言つた通りに避難してくれたのだろう。

推測するに、西行妖は自らが意志を持ち、人を狂わせ惑わせる妖怪。しかも妖力だけならレミリアやフランをも凌ぐ程だ。

「つたく。俺も甘いね、犠牲者が出ない戦い方を真っ先に考えるなんて……」

勇輝は靈力の鎖を作り出し、それを纏う様に伸ばしていく。
春雪異変最後の戦いがここに始まった。

青い鎖は西行妖と他の桜の木を繋ぎ止め、更に複雑に絡まっていく。

幽々子は自身の近くを鎖が通うつと、顔色一つ変えずに淡々と勇輝に向かって弾幕を放つ。

張り巡らされた鎖は保険。万が一の可能性も考えての事だ。

だが、その数パーセント以下の可能性の事態も無く事は進みそうだった。

幽々子の体を鎖が拘束し、その隙に勇輝は西行妖に切りかかる。

「つー？」

勇輝は西行妖の鞭のように振り回された枝に弾き飛ばされ、己の張った鎖を巻き込みながら後ろに下がらされる。

枝が動くとは……本当に妖怪、もう植物に分類してはいけないだろう。

「ゲホッ……何だよ、自分で動けんのか」

脇腹を抑えながら立ち上がる。今ので骨が數本折れた。

しかも、臓器に……肺や心臓に近い位置の骨だ。しかし関係ない、自分は死ないのだ。

が、身体は動かなくなるだろ？から早めに決着を着ける必要がある。

ヒュンッと風を切る音と共に西行妖は枝を振るつ。

違う目的で張った鎖だが、こういう意味でも役に立つた。

身近にあつた鎖をその吸血鬼並に上がつた身体能力で思い切り引っ張り、西行妖の枝の動きを止める。

「あぐっ……！」

幽々子の呻き声。鎖は連なつているが故の事態に慌てて勇輝は鎖を放したが、直後に西行妖の枝に弾き飛ばされた。

「……つそう何度も直撃はしねーよ」

咄嗟に作り出した大剣で受け止めたが、着地の衝撃が骨に響く。

しかしこのままでは拙い。西行妖が枝を振るえば幽々子の体が引き裂かれかねないので。

「なら……。映符『神槍　スピア・ザ・グングニル』！」

レミリアのスペルカード。レーヴァティンと対抗する槍を西行妖に投擲する。

威力は十二分。破壊力は絶大。

紅い槍は西行妖の枝によつて少し軌道をずらされたがその太い幹を僅かに抉つた。

西行妖が悲鳴を上げるかのように花びらが舞い散る。

「映符『恋符 マスター・スパーク』！」

魔理沙の十八番とも言える魔砲が西行妖の枝を数本消し飛ばす。

舞い散る桜の花びらは白玉楼の庭を埋め尽くしていく。

「映符『メイド秘技 殺人ドール』！」

無数の靈力のナイフが西行妖の至る所に突き刺さる。

「映符『呪詛 首吊り蓬萊人形』！」

靈力で形作られた人形が西行妖に無数の傷をつけ。

「映符『人鬼 未来永劫斬』！」

風の斬撃が一番太かつた枝を切り落とし。

「映符『靈符 夢想封印』！」

七つの色の巨大な靈力弾が西行妖を薙ぎ倒す程揺さぶった。

ザアアアアと西行妖は揺れ、桜吹雪が巻き起こる。

連続してスペルカードを、それも強力な物ばかりを使用した所為か
鎖は千切れ霧散していく。

「まだ、倒れないか……」

枝は半分ほど無くなり、幹には無数の傷がつき、花びらは殆ど散つても西行妖は倒れない。

そして、西行妖と勇輝の間に幽々子が割って入る。

「人質のつもりか？」

答えは期待していなかつたが、幽々子が口を開く。

「貴様は何故このような事をする」

西行妖の代弁か。未だ幽々子の瞳に生氣は無い。

「決まっている。お前が邪魔だからだ」

「私は貴様に危害を加える気は無い。何故貴様は我を消そつとする」

「それは手を出さなかつた奴が言えるセリフだ。それに、お前は危険だ。人を狂わせ、操り争わせる。とてもじゃないが放置したら医者の名折れだろ?」

「『』の娘『』ど我を消すか?」

「まさか、消えるのはお前だけで十分だし……死出の旅に付き添いは無粹だろ?」

「笑止。貴様が我の前で散るがよい。『反魂蝶 - 狂咲 -』」

西行妖が弾幕の名を告げた。そして視界を埋め尽くす程の桜の花びらを模した弾幕が勇輝に襲い掛かる。

勇輝は白衣の中から何かを取り出し、右手に。ポケットからはスペルカードを取り出し、左手に。

「……解剖学『解体神書』」

瞬間、勇輝の位置はさつきと真逆。幽々子のいる側とは反対方向に移動しており、西行妖は縦に切り裂かれていた。

「な……あ、あああつ！？」

幽々子を介して西行妖が悲痛な叫びを上げる。

「何だ、まだ意識があるのか？」

手でメスを弄びながら勇輝は顔だけを西行妖に向ける。

ギギギ……と音を立てて左右に分かれていく西行妖。

糸が切れた人形のように幽々子の体は地面に倒れ、その後西行妖を大きな音を立て倒れる。

「ゴホッ……。内臓に骨が刺さりやがった」

咳と共に吐き出される大量の血液。壊死しかかっているのか折れた骨はもう痛まない。

「先ずは、靈夢の死の修正を……」

そつ言いながら、勇輝は自らが作った血の水溜りに倒れ込んだ。

「…………んあ？」

間の抜けた声を出し、勇輝は田を冷ます。

何度もになるか分からぬ致命傷を負い倒れた所までの記憶はある。ついにオート修正でも働いたのだろうか？

掛けられていた布団を除け、周りを見渡す。

武家屋敷の一室、と言つた所だろうか。

白衣も元通り。体には傷一つ無いし、だるさも感じられない。

布団から立ち上がり、暗い部屋に薄明かりを射し込む襖を開ける。

開けてたそこは縁側になつっていた。空を見上げると地上で見るより遙かに大きく見える月があった。

月の位置からして、もう口付は変わっているようだった。

「…………西行妖」

白玉楼の前庭。そこには何事も無かつたかのように佇む月光に照らされた西行妖の姿があった。

やつ過あれた。ナビ後悔はじてこなー。

「どうしてコイツが……」

あれだけ攻撃し、あれだけ傷付けた西行妖は何事も無かつたようにその満開の枝を夜風に揺らす。

裸足である事も気にせず、庭をフラフラと歩いて西行妖の側へと寄る。

そして、屋敷とは反対側の根本に座る人物に気付いた。

「西行寺……。これはどういう事だ？」

「あら？ 田が覚めたのね。……どうしてそんな不機嫌そうな顔をしているの？」

「状況が分からぬ。西行妖は元に戻っているし、庭も荒れた様子が全く残つていない」

「私が田を覚ました時にはいつよ？」

「……靈夢は？」

「生きているわ。今は博麗神社に居ると思つけれど」

置いていかれたらしい。

「……まあ、細かい事は良いか

能力についての知識なんて既に明確ではないのだ。

大方、範囲的に対象をした欠陥の修正。それが冥界 자체を修正対象としたのだろう。

「これは返しておくわね。寝ている人間に刃物を渡すのは危ないから預かっていたけど」

幽々子が袖に手をやり、中からメスを取り出し勇輝に渡す。

「悪いな。……で、記憶はどうする？ 何なら今直ぐにでも戻してやるけど」

「必要無いわ。全てでは無いけれど、西行妖の中に分かつた事があるから」

「そうか。じゃあ俺は何もしないでおく」

「聞かないの？」

「聞いて欲しいのか？」

「普通は聞くものじゃない？」

「……なら聞き流してやるから話せ」

勇輝も幽々子の隣で西行妖に背を預ける。

「私は、生前にこの能力を嫌っていた」

幽々子が少し暗い声で話し始める。

「私の一時の感情の揺れで人が死ぬ。口喧嘩をした相手が死ぬ。隣に座つて談笑していた友人が死ぬ。……私はこの力を今ほど制御出来ていなかつた」

幽々子の声は次第に重く、沈んで行く。

少し間を置いて。

「だから、私は自害した」

「…………」

夜風が一度だけ強く吹き、西行妖の花びらを散らす。

「だけど、私の変わつた友人が靈体として私を此処へ連れて来てくれたの。彼女は妖怪だつたけれど、何より大切な友人だつた。その時、生前の私の記憶は消えた。消されたのかもしれないけれど」

「…………この下にいるのは西行寺、お前か？」

「…………ええ。だから、思い出せた。少し遅くなつてしまつたけれど」

恐らくは靈夢の事だらう。

幽々子は自分の嫌う力で、靈夢を一度“殺して”しまつた。

「思い出すために、知るためにやつた事が思い出そうとしていた事と真逆なんだもの。……貴方には感謝してもし切れないわね」

「そう思うなら最初から異変を起しそうなんて考えるな。……全く、異変に関わると口クな事がねーよ」

「私は得る物があつたわ。何も失わずに……」

「俺はそろそろ失いそうだ。常識の認識が変わつてく」

「幻想郷に非常識は存在しないわよ。ここでは何が起しつても不思議じやないもの」

「……ハア。それでもホームシックにならない程度にして欲しいな」

「あら、外来人なの？」

「知つてたろ、絶対」

「可能性としては考えていたけれど……。でも、あれだけの力を持つた外来人を私は見た事が無い」

「……そもそも、外来人ってのはどういう扱いなんだ」

「私の友人……八雲 紫つて妖怪なんだけど、紫が気まぐれで攫つて来るか、元々特別な力がある人間がこの幻想郷に入つて来るの。大抵は半日もしない内に妖怪の餌になるらしいわ」

「俺は能力の影響で襲われなかつたからな……」

「落ちた場所も良かつたんじゃないの？ 妖怪の山なら天狗に食われていいし、魔法の森なら狂い死にしていたと思うけれど」

「成程、紅魔館の近くには妖怪も少なかつたって事か……」

「紅魔館？」

「吸血鬼の館だ」

「……一番危険な場所だつたんじゃないから」

「って言われても生きてるしな……」

確かに恐ろしい場所ではある。主にフランとかフランとかフランとか……。

「それと、これだけは聞いておきたいんだけれど……。どうして西行妖を元に？」

「知らん、無意識にだ。それにコイツは妖力が微塵もないし、もう妖怪桜じゃないから元に戻したとも言えない」

「でも、ありがとう。この桜は私の友人でもあつたから……。まさか自分の死体が埋まっているとは思いもしなかつたけど」

「知るかよ、大体俺だって桜を元に戻す気は無かつたんだ」

「そりいえば貴方の名前をまだ聞いていなかつたわね。何でいつの間にかしら？」

「……桜井 勇輝。お前は別に名乗らなくても良い、世話役から聞いたい」

「私は西行寺 幽々子よ。今回は世話になってしまったわね」

「おい、人の話は最後ま」

「何かお礼をしようと思つんだけれど、何か希望はあるかしら？
妖夢をお嫁に、以外なら聞いてもいいわ」

「……花見の席にでも呼んでくれ。絡み酒をしてくる人間のいない
花見に」

「あら？ その程度の事でいいのかしら」

幽々子が立ち上がり、勇輝に詰め寄る。

「……じゃあもう一つ、今後俺の話は最後ま」

「却下」

「何を言わせたいんだ、お前は……」

「そうね……。抱か

「言つかば」

「あ？」

「……花見だけで良い。それだけで十分だ」

殺氣が尋常では無かつた。もう一度と口上つゝと思はない。

「夜も更けて来たわね。今日は泊まつて行つて、妖夢もお礼が言いたいと思つから」

「帰らせてくれそうにないしな」

「分かつてゐみたいね」

そつと幽々子の声は先程までの沈んだ声を忘れさせるほど弾んだ物だった。

「……朝、か

白玉楼で目を覚ました勇輝は立ち上がろうと布団から出で、立ち上がる。

「あれ? ……?」

しかし、身体が思う様に動かないで尻餅をついてしまう。

試しに手を閉じたり開いたりしてみる。しかし手は震え、思う様に動かす事が出来ない。

「筋肉痛か……いや、違うな。じゃあこれは……?」

まさか能力に副作用でもあったといつのだらうか。でも、だとしたら既に確認を終えているだらう。

能力の副作用ではない。しかし、筋肉痛でも過労での立眩みでもない。

そんな事を考えていると後ろの襖が開く音がする。

「もう朝ですがお目覚めに……どうしたんですか?」

妖夢だった。布団の上で座つたままの勇輝を見て何か疑問に思った様で尋ねてくる。

「……立てなく、なりました」

妖夢に肩を貸して貰い、客間に案内される。

朝食、と聞いていたがそこには朝に食べるには……というか三人では食べ切れない程の量の料理が並べられ、幽々子は既に席に着いている。

「あら、どうかしたの？」

「どうやら歩けなくなってしまったみたいなんです。それで私が」「成程ね。そういう理由をつけて妖夢にセクハラを……」

「なら杖でも何でも用意してくれ。俺もその方が気が楽だから」

とは言つても食事のために座るので今直には必要ないのだが。

「他に何人ぐらい食べに来るんだ？ 人数が人数なら待つてるけど」「心配しなくとも全員揃っているわ」

「……見えない幽靈とかいるのか？」

「私と、妖夢と、貴方の三人。これで全員」

「食い切れないだろ」

……二人で、それも朝から消費できる量ではないのだが。

「やつぱりそれが普通なんですね……ええ、薄々は気づいてたんですね。私が極度の小食ではないですよね……」

妖夢が何やらぶつぶつと言つているが勇輝は聞き取れない。

しかし、その疑問は食事が始まつて直に解消された。

「…………妖夢、西行寺は何ていう化け物なんだ?」

「普通の……普通より力の強い幽霊、だと思いますけど」

「いや、明らかに体積と食つてる量が……」

アレでしょうか、全身が胃なんだろうか。だから頭のネジが数本ぶつ飛んでいるのだろうか。

とりあえず黙々と料理を胃に詰め込んで行く幽々子を見て、二人は非情に疲れた表情をしている。

「んぐ……はむつ……」

幽々子はそんな二人を視界の片隅にも入れないで食事を続ける。

何というか、見るだけでお腹いっぱいになりました。

「で、問題は?」

妖夢が稽古用に使っていた木刀を杖代わりに白玉楼の庭へ出ていた勇輝は思いつめた表情で現状を把握しようとする。

昨日、いや今日の深夜か。その時には少し足元が覚束ない程度だった。

あれは精神的な疲れからだと思ったのだが、それではおかしい。

能力で冥界全体の欠陥を修正しているなら勇輝に疲れは残っていい筈なのだ。

しかし、今は一人で立つのも辛い。

「勇輝さん、身体はどうですか？」

後ろから聞こえた声に振り替えると、妖夢が心配そうな顔をして立っている。

「大丈夫ではないな。それに原因が分からぬから手の打ち用がない」

「そうですか……。後、一つ聞きたいんですか良いでしょうか？」

「答えられる事なら」

「昨日よりも弱っているんじゃないですか？失礼ですけど、勇輝さんから感じられる靈力は昨日の半分……いえ、十分の一もありません。とても同一人物とは思えないんですけど……」

「ああ、それは俺の能力……。ん？ もしかしたら」

可能性の話だが、脳の神経伝達速度と身体の性能にズレが出来てしまつたのではないだろうか。

一日間も吸血鬼並の動きを続けていて、急に普通の人間の身体能力に戻つてしまつたら？

それでなくとも、脳は戦つてゐる間の事を記憶してゐる。故に動きに誤差が出てしまつ可能性がある。

使用してゐた時間、それに能力値の差から考えて……。

「最低でも三週間はこのままか……」

ガクリと頑垂れる勇輝を見て妖夢は慌てる。

「あの、やっぱり聞かない方が良かつたでしょうかー？ 分かりました、忘れます！」

「あ、いや違う。原因と症状が分かつだけで寧ろ感謝してゐる

「本当ですか？ それなら良いのですが……」

上司（幽々子）がアレだからここまで真面目なのか、部下（妖夢）が真面目だから上がアレなのか。

どちらにしても妖夢の苦労は絶える事は無いだろ？

「それと、地上まで降りたいんだけど送つていって貰えないか？

予想してなかつた反動で靈力が使えなくなつてゐるんだ」

使えるが、これ以上何か身體に問題が起きたら困る。それに、この推測が明確な原因かどうかは分からぬし下手に脳を修正して廢人になつたらお終いだ。

「それぐらいは……。此方としても迷惑を掛けてしまつたんですし」「助かるよ。でも男一人抱えて行けるか？ 知り合いを呼んでくれても良いんだけど」

「いえ、これでも日々鍛えてますから大丈夫です。それに……言い難いんですが勇輝さん、普通の男性より弱そ……ほつそりしているので」

「ああ、どうせモヤシだよ。勉強ばかりしてましたよ、でも偶には鍛えてましたよ？ 父親の診察は命懸けのものがあつたので。

言い様の無い劣等感を感じながらも、妖夢に支えられ勇輝は白玉楼を後にした。

幻想郷の春はあつたりと戻ってきた。

桜の木も待ち望んでいたかの様に咲き誇り、満開となつてゐる。

まあ本来ならば散つて葉をつけてゐる時期なので何とも言えないのだが。

幽々子を降したのは靈夢だが、報酬を受け取る権利は勇輝に譲つていた。

里の人には、勇輝がいなければ自分は死んでいたし、幻想郷に春が来る事は無かつたと説明したらしい。

複雑な気持ちで報酬を受け取つたが、一度受け取つたら手放す事は出来なくなつっていた。これだけあれば一年は持つ。

診療所も信用を完全に取り戻す。という事は無かつたが以前来た患者が自分を心配して来てくれたので少しば認められたのだろう。

やはり妖怪、それも人間の益になる事のない吸血鬼と関わつているという事が大きいのだろう。そこから改善していかなければ駄目なのかもしない。

だが、今の自分にそこまでの力が無いのは知つてゐる。幸いにも時間だけは無限にあるのだ。少しづつ、僅かでも進歩して行ければ良い。

そして……。

「 「 「乾杯！—」」

「」「、博麗神社では盛大な花見が行われていた。

例によつて勇輝は魔理沙に簾に縛り付けられ、『』まで運ばれて來ている。

白玉楼の戦いからまだ三日。全員が戦いの跡を残していない訳ではないが、暗い表情の者は誰一人としていない。

更に、白玉楼の住人も参加していた。

目に見えた謝罪をしてはいなかつたが、そこまで険悪な空氣になつていないので気にする必要もないだろう。

一方で、何処から聞きつけたのかは知らないがプリズムリバー三姉妹もこの席で演奏をしていた。聞いている者はいないが……。

しかも、一曲¹とに感想を求めて来るので面倒だ。飲んでいる所は見ていないが酒が入つていてるのだろう。

そして見たことの無い、頭に角が生えている幼女は誰だ。さつきから酒しか飲んでいない。

「…………ハア」

思わず吐いた溜息に通り掛かつた靈夢が反応する。

「どうかしたの？　まさかとは思うけど花見が嫌つて訳じゃないわ

よね?」「

「せめて日時の報告と身体の調子を伝える機会は欲しかったな。後は……酒以外の飲み物を用意してくれたら良い」

「水があるじゃない」

「お茶とか、そういう物が欲しい」

「なら本殿で入れて来たら?」

「茶葉どひいか台所の場所も分からんだけど」

「適当に行けば迷うくじゅ」

「…………そーですね」

先日用意した簡易型松葉杖を支えに立ち上がると、靈夢はハツとして。

「やつぱり私が入れて来るから勧輝さんは待つて」

パタパタと小走りに靈夢は本殿に向かっていく。少しほはれいができるらしい。

一般レベルの思いやりがあつたなら自分は家でゆっくりしていろられる訳だが。

しかし、この満開の桜を見ずに夏を迎えるのも勿体無い気がする、少しは感謝しておこう。

「勇輝！ 何でまた女が増えてんだよーー？」

酔つた魔理沙に後ろから勢いよく抱き着かれ転倒、鼻を打つた。

「何しやがる……」

「だつてよ、私がいるつてのに勇輝の周りに女ばっか集まるからさー」

酒臭いし顔が赤い。駄目だ、完全に酔っている。

「別に意識して増やしてる訳じやないから安心しろ。それと退け、服が汚れる」

少し強引に魔理沙を退かし、松葉杖を持つ手に力を入れて立ち上がる。

魔理沙は不満そうな顔をしていたが、アリスに呼ばれて渋々と去つて行く。

「お兄様……」

勇輝の背筋が凍る。

恐る恐る振り向くと、日傘を差した少し精神面が危ない状態のフランが。

「何、してるの？ 今、誰かに抱き着かれてたよつて見えたよ？」

蛇に睨まれた蛙。浮氣の見つかった夫の様にその場から動けない。とこうか動いたら殺られる。

「フラン、なん？」

「お兄様は自覚が足りないんだね。でも大丈夫、フランは許してあげるよ。だけどお兄様、少しばかり考えて行動して欲しいな。いくら可愛い女の子がいても、フラン以外を見たらフランだつて嫌なんだよ？それにね、最近は弾幕^{はじ}こもあんまりやつてくれないから少しイライラしているんだ。あ、気にする必要はないよ。お兄様が忙しこのはフランが一番良く知ってるもん。それと……」

「あの、何かスミマセンでした。明らかに俺が悪いとは思えないけど」

フランは生氣の消えている田で勇輝をじっと見ながら。

「向こうで、話そうか。お兄様」

断つたり、どうなつてしまつのだらつ。

着いて行く以外に、選択肢は存在しなかつた。

「フラン、お使い」苦勞様

「ヒリア……。まさかお前がフランヒ

「ええ、勇輝が女を侍らせてしまつていてるヒリアヒみたら

「お姉様、言われた通りに連れて來たから良じよね？」

何を許可したのだろうか。

「ええ。今日は勇輝を連れて帰りましょ」

……生きていられるのか。

遠くに皿を向かると、不意に田衣を引っ張られ弓を墻に突き刺されてしまう。

「あんな所にいたら容態が悪化するんじゃない?」

「靈夢……、助かった」

一時的にだが。

「はい、これ」

靈夢が持っていた湯飲みを渡してくれる。

「お、ありがと」

「下剤は入ってないよな?」

受け取つてから近くの桜の木の下に腰を下ろして、お茶を……。

「そんなの買つお金があつたら茶菓子でも買つわよ

それもそつかと納得し、お茶を飲みながら桜を見る。

長こ冬はもつ終わった事を実感しながら。

其の伍拾捌（後書き）

終わった。色々とやってしまった感のある章ではあります、第参
章・春雪異変はこれにて終了となります。
たまには長いあとがきを……いらない？ そんな殺生な。

其の伍拾仇

診療所の書斎の中にカリカリとペンを走らせる音だけが淡々としていた。

「…………」こんなモンか

書き上げた書類を積み上げ、勇輝は背筋を伸ばして一息吐く。既に身体の不調も消えていくようだ。

窓の外からは蝉の鳴き声がしている。

ニアロンの効いた診療所は恐らく幻想郷の何処よりも快適に夏を過ごせるとと思う。

問題は……。

「どーして診察希望者がこんなに増えたのか……」

積み上げられた書類……ではなくカルテに視線をやり、勇輝は溜息を吐いた。

幻想郷の夏は、以前にも増して暑かつた。

『休診中』の掛けを後に、勇輝は里のある場所へと向かう。

その恰好はいつも通りの白衣で、暑いのか不機嫌そうな顔をしてい

た。

「あれ、先生じゃないですか。今日はどうひらく？」

通りがかつた茶屋のお婆さんに呼び止められる。

「いえ、少し自分の仕事に思う所があつたので前々から誘われていた副業を思いまして……」

冷たい空間を求めて来る健康な人間を相手にする暇は持ち合わせていない。というのが本音なのだろう。

答える勇輝の表情は若干不機嫌そうで、お婆さんはそれを察したのか苦笑いしている。

勇輝と霖之助で暇さえあれば作っていた発電機と配線コード。幻想郷を駆け回り必要なガラクタを集め、勇輝の能力で直しては分解し、部品にして制作していた。

とりあえず太陽光とモーターでの発電の一つか出来たので、立地条件的に勇輝がソーラーパネルを獲得している。霖之助は水力か風力で迷い、未だ使っていないとか。

強引に奪つたエアコンや冷蔵庫は今では診療所に欠かせない物になつた。これで易々と取り返される事もない。

という勇輝の思惑に天罰でも下されたのか、診療所は仕事にならない仕事で溢れている。

冬場は火を起させばいいが、夏はそうはいかない。涼む方法といえ

ば水遊びぐらいいだろ!」

だから「」や、エアコンは魅力的だつた。

そして勇輝は田的の場所へと廻り着く。すると……。

「あ、白いお兄ちゃんだ!」

「せんせー、今日は女人の人といつしょじゃないのー?」

「…………俺つて里の子供にじつ思われてるんだらうな

寺子屋に入つて直ぐ、その生徒に田をつけられる。

副業とは、寺子屋の教師だ。

「ん? 勇輝じゃないか。何か用でもあるのか?」

寺子屋の奥から慧音が顔を出す。

「えーと、前々から誘われていたので少し見学でも、ヒ

「一度良かつた。私はこれから竹林まで行く予定でな、田舎に来るつもりだつたんだ」

「え……」

「そんな訳で、あと一限らしいけど代理で俺が教えるから形だけで

「元気があるなつむ

「えー」「」

大ブーケイングだった。

確かに本来は自習になる筈の時間だったが、こじまであからさまな反応をされると腹が立つ。

少し青筋を立てながらも勇輝は。

「とつあえず適当に問題を出しちゃる。しかも……」

何か企むよつた、誣いて言つならここれから人を嵌めてやつといつ様な笑みを浮かべ。

「全問正解出来たら、家の診療所で好きだけ涼んで良い。それも毎日だ」

生徒達のテンションは一変し、やる気で満ち溢れた。子供は素直な物だ。

「せんせー、嘘じゃないよな、絶対だよな?」

活発そうな男の子が疑うよつた言葉を希望に満ち溢れた声色で尋ねる。嘘つて言つたら泣くと思つ。

「勿論、俺はそんなに汚い大人じゃないからな

おおーっと歓声が上がる。

しかし、桜井勇輝は……狡かつた。

「じゃあ、一問目だ。それとちょっと訂正な、誰か一人でも正解したらその問題は全員が正解だ、全員が間違えない限りは続けられる。相談も許す」

黒板に文字を書き始める。まずは無難な所から……。

$$『2685 + 4672 + 7564 = ?』$$

「そ、答える。制限時間はないからゆっくり考えていいぞー！」

生徒全員の顔が引き攣った。コイツ、半端なく汚い大人だ。と言わんばかりの視線を向けて。

二十数人の生徒が一斉に一つの机……卓袱台？ の周りに集まり解き始める。

生徒の年齢は五つ十四と言つた所だろう。バラつきはあるがそれなりに仲は良いようだ。

十分が経過し。

「14921！」

「はいお疲れ様。じゃあ次な」

書かれていた問題を消し、新しく問題を書き始める。

『博麗神社の昨年のお賽錢の総額はいくらでしょう?』

生徒の数人が、涙目になった。

「……」でゼロと答え、それをあの巫女に聞かれてしまつたら……。

「少し横暴だからヒントだ。去年、俺が一枚だけ入れてたな」

凄い結束力を見た。人海戦術みたいなものだろうか? 一円から五百円まで答えた所で終了。

「んじゃ、次な」

『はくれいじんじゃ。を漢字で書け』

五人が間違いかどうかを確かめる犠牲となつたが、これも正解した。

「次は……」

『紅 美鈴。の読み方を答える。尚、これは名前である』

驚いた事に、正解者が出る事は無かつた。

何故か、申し訳ない気持ちになつた。

今度、紅魔館に行く時には差し入れでも持つていこう。

その後、生徒達も気に入ったのか問題は続き、慧音の年齢を予想し

る。といつ問題を出した所まで覚えていながらそこの記憶が飛んでいる。

思い出せないのが賢明だと直感的に感じている。

其の伍拾仇（後書き）

新章スタート。しばらくほのぼのした感じで続きます。

其の陸拾

靈夢は今、窮地に立たされていた。

「そんな、これじゃ、もつ……」

博麗神社の家計は既に底を突き、食べるのにも困るほどに金欠だった。ある。

「といつ訳で勇輝さん。看護師の募集はしてない?」

「却下。勉強してから出直して来い」

診療所は珍しく賑やかである。

「何ですよ? これでも手当ならそこそこ出来るし看病だってできるわよ」

「今は病人は少ないし、薬を作るぐらいしかやる事がないんだよ。だから知識が無いなら何の役にも立たない。……紅魔館でメイドでもしたらどうだ?」

「嫌よ。妹の方の弾幕ごっこの相手になるのが田に見えてるから」

「そもそもうだ。」

「でもな……」

この人里、今まで医者無しでやつてきたことも関係しているのか病氣に罹る人間が殆どいない。

健康なのは良いのだが、これでは診療所の意味が無い。

エアコン目的に来る健康な人間が殺到したので今は窓から入る風が頼りな診療所は、再び人気が無かつた。

「じゃあ、他に仕事が出来そうな所は無いの？ 勇輝さんなら心当たりの一ツや二つあるでしょ？」

「獵師や山菜を探りに行く人の護衛、とかは？」

「か弱い女の子に紹介する仕事じゃないわよね……」

「いや、だつて靈夢は人外な」

「何か言った？ まさか私が人外だなんて勇輝さんが言つ筈無いわよね？」

「……分かったよ、研修生として雇う。給料は日払いで一食分、昼飯はこっちで出す。これなら文句は無いだろ？」

「流石勇輝さん、話が分かるわね」

「けど、三田様子を見て使えないって判断したら飛ばす。他を当たつてくれ」

「大丈夫よ、むしろ私が必要になると思いまさい」

「つして、靈夢を看護師として雇つた。のだが……。

確かに巫女の衣装では違和感があると言つたのだが……。

「靈夢、その服は何処から調達してきた？ 言え、製作者を殴らないと気が済まない」

何故ナース服を来ているのだろう。それもピンク色の。

「えつと、外界の看護師の制服が丁度あるつて霖之助さんが……」

あの外来物マニアは服まで拾つて来るのか？ 変態以外の何者でもない。

「……まあ良いか。じゃ、ロビーの掃除。その後に出入口の掃除をしてくれ。患者が来たら受付まで案内、健康な妖怪が来たら……話次第では追い返す」

「分かつたわ」

掃除は能力を使えば一瞬なのだが、人の手でやるのも良いだろつと任せる。

勇輝は薬の調合をするために奥の方の部屋へ。

「……から……でしょ」

「……も……じゃ……ない」

薬を作り始めてから数十分。出入口の方から争う様な声が聞こえてくる。

「……ハア」

溜息を吐きながら立ち上がり、出入口の方へ歩いた。

「だから、勇輝さんに雇われて妖怪が来たら追い返すように言わてるって言つてるでしょ！」

「私は勇輝に話が有つて来たの。それを追い返すのは横暴だと思わない？」ねえ、咲夜

「そうですね。それに、」ちらとしては一刻を争う事なので。貧乏巫女には理解出来ないかもせんけど

「む、そこまで言つなら話してみなさいよ。内容によつては通してあげる」

靈夢は依然としてドアの前に立ち塞がる。

レミコアと昨夜は、どうしてこうなったのか、といつ呆れた表情をした。

「血のストックが切れたのよ。だから勇輝に貰いに来たの。これは正当な仕事の依頼だと思うけれど?」

「なつ……。わせる訳無いでしょ!?

大体、吸血鬼って血を吸わなくて生きてられるでしょうが!」

「妖力が落ちちゃうじゃない」

「落ちれば良いのよ! 口クな事しないんだから!..」

「とは言われてもね……」

勇輝を最初に拾ったのは紅魔館。よって幻想郷に描ける勇輝の立場は未だ紅魔館一行に含まれる。

勇輝が人里に住み始めてからまだ一年経っていないので、住民票もないのだ。

つまり、未だレミリアの傘下である。お互にそりは思っていないが。

「とにかく、勇輝さんは今忙しいから帰るなり他から吸血するなりしたら?」

「悲しい事に非番なんだよね。何もやる事が無い」

靈夢は後ろからした声に振り替える。

「悪いレミリア。先週に血を届ける予定だったな。……フランは?」

「あの子なら何とかトマトジュースで騙しているわ。もう限界だけ
ど……」

「直に用意する。中で待つてくれ」

冷や汗をかきながら早足に戻つて行く勇輝を見て、靈夢は不満そ
な顔をした。

一人が血を持つて帰つた後、靈夢は勇輝に詰め寄つた。

「どうして吸血鬼に血を渡すのよ。力を削げば異変が起るされる心
配も無いし、勇輝さんならそれぐらいの話をつくれるでしょ？」

「長い間世話になつた。つていうものもあるけど、どうせ俺が断つて
も他の里の奴から咲夜が血を持つていくだろうし、それなら俺が渡
した方が安全だと思わないか？」

勇輝には失つたものを元に戻せる力がある。だが、他の人間ではそ
うはいかないだろう。

「……それは、そうだけど」

「里も俺も被害は無いんだ。それで良いだろ？」

「そう言われてしまえば靈夢は何も言えない。

「じゃ、掃除頼んだ」

ポンと靈夢の肩を叩きながら書斎へと向かつ。

靈夢は未だ、何か納得のいかないような、気に入らないといった表情をしていた。

其の陸拾壹（前書き）

ユニークアクセスが五万を突破しました（2011/11）。読んでいただいている皆様に感謝です。

其の陸拾壹

「…………くつ？」

「だからさ、一々神社から来るのは面倒だつてなら泊まり込みでも構わないって事なんだけど」

幸いにも寢室と診察室はかなり離れているので気兼ねする事は無いだろ？と思つての事だ。

「でも迷惑じや……」

「別に。飯なんかも一人分だけチマチマ作るのは性に合わないし、何より材料の保存を考えなくて良いから寧ろ楽だから」

診療所の冷蔵庫には切り掛けの野菜が「ロロ」ロロ入つてます。

「な、なら私が料理するから。それで貸し借りなしつて事で」

「…………いや、請求なんてしないぞ？」

「ナニ？？」

「…………おまでもお金優先の靈夢だった……。」

材料的に簡単な物を何品か、といつ夕食だった。そういえば一週間ほど買い出しに行つていない。

「…………」

「どうしたの?」

「いや、普通に食べれるものが出て来たなー」と

「馬鹿にしてるの?」

「レミリアとか、西行寺とかスペルカードの決闘が強い奴って料理が出来ないイメージがあつて」

「人間じゃないからじゃない?」

「……やっぱ根本から違うな」

初見の時は驚いたレミリアの羽も、今では慣れきってしまったいて偶に妖怪だといつ事を忘れてしまつ。

「それで、寝室と診察室……。あ、靈夢は寝室を使ってくれ

「? 普通は勇輝さんが使うんじゃないの?」

「いや、薬とか置いてあるし、間違えて作った毒薬なんもあるから危険だろ?」

「……流石に毒薬が転がってる場所だと寝られないわね

「そこまで強くないけどな。幻覚作用と覚醒作用、あと心酔作用があるだけで

俗に言う麻薬である。外界で作った事あるなー、と調合を進めていたら出来てしまった。

氣化しないようにビンに詰めて栓をしてあるが、万が一にでも割つてしまえば廃入コース確定だ。

量は……一百ミリぐらいあつた気がする。

今度妖怪にでも試してみようか、もちろん人型では無い物に。

「布団とかシーツは替えた方が良いか？ ベッドが駄目なら敷布団も出すけど」

「そこまでして貰わなくても大丈夫。そのままでも良いわ」

「分かつた。後、風呂は用意した方が良いか？ 水は張つてあるから火を起こすだけになつてるけど？」

「ならお願ひ」

水の入つた桶の中に食器を入れ、勇輝は裏口に向かつ。

「火を起こしてくるから。熱かつたりぬかつたら言つてくれ」

この診療所。フローリングに窓はガラスの洋風なのだが、風呂だけは和風なのだ。

ガスは無いし、電気で温めるにしても、夜はそこまでの電力が供給出来ない。

何より、水道が無いので数年かけても作成していくしか無いだろう。今は発言力が無いので無理だが。

壁の向こうは浴室、という位置まで移動し纏めてあつた薪をくべて火を……火を。

月を雲が多い、灯りが殆ど無い外。診療所には照明器具が付いているが、外までは届かなく暗い闇の中である事を思い出す。

「火打石、台所だ……」

ライターが懐かしい。きっとアレは世紀の大発明の一つだったのだろう。

それに、火の勢いを上げるために枯草も要る。紙は勿体無くて使えない。

台所へ向かおうとし、裏口のドアに手を掛けた所で……。

「さて、貴方にはこれから一役買つて貰いましょう」

何者かに肩を掴まれ、闇の中に引き摺りこまれた。

「……遅いわね」

身体にタオルを巻き付け、寝室で風呂が沸くのを待っていた靈夢だが未だに火が入っていない。

まさか火が起こせないと呟うのではないだろ？

そう思つた靈夢はさつきまで来ていたナース服では無く巫女装束を来て勇輝を探す。

案の定勇輝の姿は浴室の外には無かつた。

靈夢は溜息を吐きながら書斎を、寝室を、台所を、ロビーを、診察室を、庭を探す。

「…………いない？」

何処にも勇輝の姿は無かつた。

まさか、急病の患者でも出たのだろうか。そう思つた靈夢は大人しく寝室に向かい、普段勇輝が使つているベッドに入る。

胸騒ぎがするのは年の近い異性の布団で寝る緊張からか、それとも悪い事の前兆なのか。

慣れない事をして一日を過ごした靈夢は、強い睡魔によつて微睡んでいた。

「…………まだ帰つてないのね」

翌日、窓から入る日の光で靈夢は目を覚ました。

台所へ、診察室へ、書斎へと足を運んだが勇輝の姿は無い。

大方、診察が夜だったからと泊まり込みなのだろうと靈夢は結論づけ、勝手に朝食を作りそれを食べる。

それから一時間が経つた。まだ勇輝は帰らない。

更に一時間。もう寺子屋が三時間目に入る時間だが勇輝は戻らない。

そして、11:15まで来て漸く靈夢は気づく。

勇輝の身に、何かあったのだ。と……。

それからの行動は靈夢自身でも驚くほどに速かつた。

博麗神社に陰陽玉を取りに帰り、再び人里へ。

最初に向かったのは香霖堂だった。

「霖之助さん！ 昨日の夜、勇輝さんがどこへ行つたのか知らない？」

「勇輝、か？ 最近は店にも来てないからな、一週間は顔を合わせていられない」
「じゃあ、昨日の夜に人が倒れたとか、急病で倒れたって話は無かつた？」

「聞いてないな。勇輝がどうかした……？」

霖之助が言い終える前に靈夢は香霖堂を飛び出していた。

もしかしたらと、少し出掛けただけではないかと、再び診療所へ向かつ。

「どうした靈夢、受付の仕事ぐらいしてくれよ」

靈夢は身体から力が抜け、へなへなと地面に座り込んでしまう。

診療所の前で勇輝と鉢合せになつたのだ。

「ほひ、わわわと着替えて仕事しる」

いつもと変わらぬ声や仕草で靈夢の手を取り立たせると、勇輝は診療所の中へと入つて行く。

靈夢はその場から動かない。いや、動けない。

勇輝の来ている真っ白い汚れ一つない白衣。

それからしたのは、濃い血の匂いだつた。

其の陸拾壹（後書き）

章題詐欺じゃないですよ？

其の陸拾弐

勇輝が診療所から消えた。

その直後まで時間は遡る事になる。

「……これはこれは。大賢者様が何の用ですか」

以前にも来た事のある、とある妖怪の空間。

そして、勇輝の目の前にいる胡散臭い笑みを浮かべる幻想郷の大賢者。八雲 紫。

「言つたでしょ。一役噉んで貰つて」

「…………厄介事ですか」

呆れた表情で溜息を吐く勇輝をスルーし、紫は説明を始めた。

数十分に渡る説明を聞き終え、勇輝は更に深い溜息を吐いた。

「これでも忙しい身なんですから、やらないと黙ります?」

「別にやらなくて良いわ。けど、それをこなしたなら」褒美をあげる

「それは俺にどんな利益が?」

「そうね…………」

次に紫の口から発せられた言葉に、勇輝は目を丸くし息を飲んだ。

「分かりました。必ずやり遂げますよ、例え多くの人から反感を買つたとしても」

そんな会話があつた一日後の朝、勇輝は診療所でいつも通りに仕事をする。

「靈夢、そここの薬草取ってくれ」

「あ……うん」

靈夢が浮かない顔をしているのは夜に出掛けた、もとい連れ去られた事からだらうか？ と予想しているのだが、まあ何でも良いだらうと思ひ聞いていない。

重要な事なら聞いてくるだらうし、言ひ辛い事なら言わないでも良いだらう。

それに、例の要件は異変に関わった事のある者には話すな。というのが紫との約束だ。

「それで靈夢、一日になつたけど印象は？」

「……へつ？ あ、えつと、患者が来ないって本当だつたのね」

「健康なんだよな、幻想郷の人達は……。まあ、生活態度を見れば

当然なんだけど」「

外界と違い、身体を動かしていない時間が少ないくらいの生活を送る里の人達には当然体力がある。

そして、この鎮された里の中。人が密集していないだけあって流行り病がまったく見られないのだ。

空気感染する伝染病なんかでも来ない限りは村が死滅する事はないだろう。

「んで、靈夢の勤務態度だけどな……」

そう言いかけた時、診療所のドアが勢いよく開け放たれた。

「おい医者の若造！ 妖怪に襲われて怪我人が出た、速く来い！」

怒鳴りこむように入つて来たのは屈強そうな体つきの男だった。

「……分かりました。少し準備が必要なので出血をしているなら止血、あまり動かさないようにお願いします。場所は？」

男は場所だけを告げると、わっと走つて行つてしまつ。

「さて、久々の大仕事だ靈夢。包帯、あと布を持って来てくれ。後は俺が準備する」

「ちょっと待つてよ！ あんな言い方で、それも命令するように言つてきたのに何も言い返さずに行くのー？」

「ああ。別に泣きながら頭を下げて頼まれても、刀を突きつけられて命令されてもやる事は変わらないからな。それよりさつと支度しろ、死人が出る」

いつも以上に真剣な表情の勇輝に靈夢は言葉を詰まらせた。

そんな靈夢を放置して、勇輝は医療器具をリュックに詰め込んでいく。

「肩から胸にかけて切られた後……傷の深さは一、三センチ。骨で止まつたのか、これなら……」

倒れ、血を流す男に近づくとメスで衣服を裂き、傷口を見る。

横にいる靈夢も、生々しい傷は見慣れていないのか嫌悪感を隠せていなかつた。

「先生よお……俺あ、助かんのかい……？」

まだ意識はあるようで、弱々しくも怪我を負っている男は勇輝に聞く。

「はい、必ず助けます。だから少し休んで下さい」

「ひとつ、この場にいる誰もが真剣な顔つきを、絶望的だという表情をする中で勇輝は微笑んだ。

「靈夢、これから俺が言つ物を三秒以内に取り出して渡せ」

何人の人が見守る中、勇輝は手術を始めた。

野次馬は傷口を、流れる血を見て顔を顰めたが勇輝は顔色一つ変えずに治療を進めていく。

止血を、輸血を、縫合を慣れたような手付きで淡々と進めてくれのを見て、靈夢はふと疑問に感じる。

そんなに深い切り傷の人の身体を見る機会はあったのだろうか、と。幾らなんでも、ここまで戸惑いなく速い処置が出来る物だろうか。

それこそ、何度も練習を繰り返していなければ……練習？

思い出したのは先日の晩、勇輝からした血の臭い。

「…………ふう」

勇輝が肩の荷が下りた。と言つた感じに一息吐く。どうやら終わつたようだ。

「この方の親族か、親しい方つていますか？ これからどうするかの相談をしたいのですが」

野次馬の間から一人の女性が手を上げながら出て来る。

「じゃあ、傷の事からですけど……」

靈夢は少し下がった所から勇輝を見る。

付き合いは長くはないが、人柄はこの一年に満たない間でも良く分かつた。

変に不器用で、分け隔てなく人や妖怪と接し、困つていたり危なかつたりする者を損得を気にせずに助けてしまつ。そんな印象だった。

だからそんな事は無いと、そう信じたい。だが、靈夢は勇輝の能力を思い出す。

欠陥を修正する程度の能力。

使い様によつて、力を得る事も、傷を癒す事も、失つた物を取り戻す事も出来る力。

そして、その力は人の命さえ繋ぎ止めるのを靈夢は知つている。

言い様のない不安を、疑問を抱えながらも、靈夢は診療所の研修の最終日を迎える。

幻想郷の、とある森の中。そこに一人の男女が向かい合つて立っていた。

「答えて。勇輝さん、貴方は……人を殺した事がある？」

靈夢は否定して欲しい、ある訳がないと笑い飛ばして欲しい。そんな思いを抱きながらもその問いを声に出して言つた。

勇輝の答えは

「……ああ、あるよ。もう、何人も」

靈夢が、一番聞きたくない言葉だった。

手術を終えた勇輝は白衣に棒を通して担架の代わりにし、ケガ人を運ぶ。

「あまり揺らさないようにお願いします。傷口が開かないとも言切れませんので」

内臓や重要な血管は傷ついて無かつたが、大怪我である事には変わり無い。

「それぐらい誰でも分かるに決まつてんだろ、上手く行つたからって調子に乗るんじゃねえよ」

反対側を持っているのは診療所まで勇輝を呼びに来た男だが、相変わらず厳しい態度である。

それでも呼びに来た時ほど声に嫌味は無く、それなりに感謝しているかもしない。

そのまま怪我をした男の家まで行き、ある程度の説明をして痛み止めの薬を渡す。

お金の管理は男がしているらしいので、代金は来週にでも相談する。といつ事になつて解散となつた。

「どうした靈夢、慣れない光景で疲れたか？」

診療所に帰る道で、ずっと黙つている靈夢に話しかける。

「……へつ？」

「いや、どうかしたのかつて……」

「えつと……」

靈夢は視線を泳がせ戸惑つているような声を出す。

「まあそれは置いといて、どうだ？ 今日みたいな事はこれからもあるだろ？し、流行り病なんかが広まつたら忙しさは数十倍だ。それでも良いなら看護師、続けてもいいぞ」

「……じゃあ、その前に一ついいかしら」

靈夢は何か思いつめた様な、決意したような目で勇輝を見る。

「少し、一人で話しておきたい事があるの」

そして森まで移動し、二人は向かい合つ。

「……その人たちは、どうして死ななければならなかつたの？」

「生きていくる見込みが無かつた。それに、もう表では存在しない事になつていた奴等だよ。……勿論、俺だつて」

「言い訳なんかしなくていい！　どうして殺したの！？　その人達で実験もしたんでしょう？」

勇輝は目を見開く。隠していた事の確信を突かれた様に。

「……他に、方法が無かつたんだ。夢を叶えるために」

「私はそんなやり方を認めない。誓つて。私が勝つたら、一度と医者を名乗らないって！」

靈夢がスペルカードを取り出す。

勇輝は能力を使つていない、今は脆く、弱い存在だ。

「……無駄だよ。俺は勝敗に関わらず医者を辞めない。それが犠牲

になつた奴等への手向けだから

勇輝はスペルカードを使おうとも、弾幕を作り出そうともしなかつた。

「…………どうして何もしないの？」

「どうして何かしないといけない？」

「…………」の期に及んでまだ戦わないつて言つたの？

「言つただろ？ 意味が無いんだ、ここので戦つのは

「それじゃ私が納得いかない！」

「…………いや、そんな事言われてもな

「人を殺して、死体で実験して……。ならどうして医者なんて名乗るのよ！」

「確かに誇れるような事じゃないけどさ、靈夢。じゃあお前は俺の何を知ってるんだ」

「…………？」

「俺は親父に連れられ……いや、自分から付いて行つて何人も死にかけた奴らを見た。腕が切り落とされた奴、銃弾が内臓を突き破つた奴、目も耳も利かなくなつて死にたいと願う奴。救えた人だっている、けど人の身で、ただの人間には救えない奴だつているんだ。だから引導を渡し、次の糧にする。お前はこれを全て否定できる立

場にいるのか?」

勇輝は苦虫を噛み潰したような表情で語る。

勇輝も幻想郷に来る前まで、そこそこに修羅場を潜っていた。

父親の助手として、自分の技術を磨くため、知識を広げるために色々な事をした。

選んだ道は、卓上の勉強だけではどうしても足りない事だらけだったのだ。

それを聞いた靈夢は、膝から力が抜けて草の上に座り込んでしまつ。

「それじゃあ、死ぬ寸前の人しか殺してないって事……？」

「は？　いや、当たり前だろ。健康な人間の身体の構造は図説で足りるし」

「じゃ、じゃああの日の夜は何をしてたのー？」

「……狩り」

「は？」

「良いよ、全部話すよ。八雲　紫つて妖怪は知ってるか？」

「ええ、勇輝さんが寝込んでる間に一悶着あつたから……」

「そいつがさ、人と妖怪の仲を深めるために夏祭りを開けつて言つ

んだよ。村の上方には自分から言つておくつて。んで、屋台をいくつか作るうつて話になつて木材を取りに行つたら熊に襲われて……鍋にした

何の反動があるか分からないので身体の強化をせず、少ない靈力をフルに活用しての戦い。一度と夜目も利かないような場所で作業はしないと誓つた。

「……やつだつたの」

靈夢は大きな溜息を吐く。自分の取り越し苦労だったと安心して。

靈夢はふと思つ。自分は何故こんなにも安心しているのかと。

「で、看護師はどうある?..」

やつだつまでの重苦しげ空氣はビヨへ行つたのか、勇輝は軽い調子で靈夢に聞く。

「遠慮するわ。ストレスで死にやが……」

三日でこれだつたのだ。これ以上心配させられては適わないと靈夢は断る。

「そつか。まあ、餓死する前に来るなら何か食べる物ぐらいは出すよ

そつ勇輝が笑いながら皿つのを見て、靈夢も思わず笑つた。

其の陸拾參（後書き）

思つた通りに書けない……。そしてお祭りフラグを立てました。
おみこしワッショイおみこしワッショイ……博麗神社つて何を奉つ
てるんでしょう？

暑い夏の日。人里は例年よりも忙しく、賑わっていた。

变化として、外界から来た一人の変わった青年が住み着いただけなのだが、今……。

「だから、題賢者から任された事で調子に乗っている訳では無く祭を行う方針として出し物がこうなつてくるつて言つてるだけじゃないですか！！」

その青年は大勢の大人の前に立ち、声をあげて口論していた。

「じゃが、いくらなんでも不確定な事が多すぎる。その冥界から来る御仁は大賢者様のご友人だと言うが、吸血鬼は信用出来ん」

「そこは博麗の巫女を付けるという事で話を着けたばかりです。私はこれが失敗したとしても身の安全を確保出来ますが、皆さんは違うでしょ？」

勇輝はイライラした口調になりながらも言葉を続けていく。

こんな話し合いになつたのも、今朝の紫の話に原因があつた。

「大賢者様。一体どうなされたのです？　何年ぶりにお越し頂いたと思えば、こんな朝早くに皆を呼び出して……」

今、この広場には里の一割程の人人が集められていた。

そして、まだ時間帯は早朝。普段なら寝ている者も少なくは無いだろつ。

紫は一度辺りを見渡し、咳払いを一つして。

「今日は、皆さんにとても素晴らしいお話をあつてきましたの」

胡散臭い口調で、胡散臭い笑みを浮かべながら言った。

「今年から、人と妖怪の親睦を謀るための祭を開催する事を義務付けますわ。必ず夏の間に行い、最低十名の人外が参加する。それが最低限の決まり事です」

その言葉に、一部以外の人々は顔を青くする。

里の中にも半獸、半妖はいるが数は十に満たない。

つまり、里の外に住む妖怪に声をかけなければならぬのだ。

「責任者はソコの桜井 勇輝が務める事。また、この祭が開かれなかつた場合、最低限の決まり事が守られなかつた時は……。里を覆つている私の結界を解かせて貰いますわ」

そして、現在に至る。

「声をかける予定は紅魔館のレミリア・スカーレット、フランキー

ル・スカーレット、パチュリー・ノーレッジ、紅 美鈴、小悪魔。魔法の森のアリス・マーガトロイド。白玉楼の西行寺 幽々子、魂魄 妖夢。これで八人、そこに上白沢 慧音、森近 霖之助を含めれば十名。良いですか、妖怪の山と繋がっている人間が居ない以上はこれが限界です。安全だと河童を呼ぶ伝も無い、吸血鬼が恐いのも分かりますが、これ以外に方法が無いので納得して下さい」

勇輝が言い終えた所で霖之助が手を擧げる。

「知り合いに天狗がいるんだが、それもこういった事に目がない様な天狗なんだが声を掛けておくか？ 欠席が出ないと限らない」

霖之助がそう言つと、何かの店の店主から声が上がる。

「ウチの店に、偶にだが来る風見 幽香といつ妖怪がいるが……」

「どうやら妖怪を呼ぶのにそこまで抵抗の無い人も居るようだ。

「なら頼みます。では催し物についての相談ですが……」

今、この場には一家から一人の代表者が総出で集まっているため部屋が狭い。

稗田という里の代表的な人の屋敷だが、五十人以上は厳しかった。

「屋台は各商店が開き、他に希望者が居れば内容によつて許可を出す。そこに問題がある方は……？」

部屋は静まり返つたまま。異存は無いよつだ。

「……ではメインイベントですが」

これは人と妖怪の友好関係を良好にするための祭。よつて誰でも参加出来る物にしたいのだが……。

「寺子屋の子達に先程希望を聞いたのですが……」

勇輝は呆れた表情で告げていく。

- ・弾幕王者決定戦
- ・スペルカード対戦会
- ・弾幕迷路大会
- ・トラウマを植え付ける大会
- ・終わり無い弾幕合戦

「と、口クな案が出なかつたので皆さん何か考えて下さい」

勇輝は言い終わつてから慧音を見るが、目を逸らされた。

しかし、他の人の反応は……。

「いや、それで良いだろ。俺達に危険はねえし」

「……っ！ そうだよな。俺達には関係ないし！ 強制参加つて言つても出れるのは桜井と慧音先生だけじゃねえか！」

ここぞと言わんばかりに賛同していく人々。まったく薄情な奴等である。

「むしろ、ここで博麗や桜井が優勝すれば里は安泰ではないのかのう？」

「「「それだつ……」」

「落ち着いてください……。落ち着けよお前等つ……」

收拾が着かなくなつてしまつた。これでは……。

「先生、会場はワシ等で作るんで」

「里の外れに開けた空き地があつただろ？ そこなら観戦も……」

「先生、頑張つて下さいね。息子共々応援しますので」

……勇輝は、これ以上何かをいつ事は出来なかつた。

忘れていたが、この里の文化レベルは江戸と明治の間ぐらい。娯楽は少ないので。

弾幕ごうの観戦。これ以上の娯楽は幻想郷に存在しないのかもしない。

勇輝も、一度だけ観戦者の立場に立つたことがある。靈夢とスカーレット姉妹との決闘だ。

殺し合いだったにも関わらず、魅了され、言葉を失つ程にそれは美しかつた。

だが……。

「……今は能力を使わないようにしてるんだけどな」

普段の状態で相手出来る程、他の面子は力を抑えてくれそうに無いので勇輝は祭りの事務をしながら、弾幕の創作に勤しんだ。

其の陸拾肆（後書き）

秋が、遠い……つ？

其の陸拾伍

紫が祭を開けと宣言してから一週間。

現在は八月の上旬にあたる時期なのだが、里では暑さに負ける事無く人々が大通りを行き交っていた。

勿論、祭の準備のためである。

畠の世話、家畜の世話、商店の経営。それに仕事がありながらも皆が祭を成功させようと取り組んでいた。

一方で、勇輝はと云つと……。

「……今更だけどさ、ルナサ達が演奏するつてのがメインでも良かつた気がするんだよね。ほら、花見の時に幽霊がいただろ?」

「それをどうして此処に来てから言うのか分からぬけれど、要するに弾幕ごっこがしたくない。と」

紅魔館でレミリア達に祭の事を告げていた。

「いや、冥界での一件以来人体の欠陥の修正に抵抗が出来てな。そもそもこの能力が指す欠陥が“不足”なのか“欠落”なのか。それとも両方なのか、また別の事なのか。今考えると説明できるような物じゃないんだよね。修正も“改善”なのか“改造”なのか分からぬいし」

「使えば良いじゃない。困る訳でもないでしょ?」

「まあ、使つて死ぬなんて事は無いんだけど動けなくなるのは困る」

「でもフランとの弾幕^{1)1つ}は続けるのよね」

「新しい戦い方の模索中だ。如何に少量の靈力で、僅かな身体能力で戦えるかの」

勇輝は咲夜が入れていた紅茶を飲んで一息吐く。

「それについても、何を考えているのかしらね。今更になつて人と妖怪の仲を取り持つ祭を開こうだなんて……」

「それについては大体の推測が出来る。紅魔館に博麗、それに白玉楼、後は魔法の森か。ここまで強力な面々とパイプのある存在が人里に居るんだ。もし、そういう疑惑が以前からあつたとしたら俺が里に住みついてる間に形にして置きたいんだろうな」

「靈夢は分かるけど、亡靈共や魔法使いは大した事無いでしょう?」

「靈夢は……、たぶん今なら負けないんだろうけど西行寺に一回負けてる。それに魔理沙は言わずとも分かるとして、アリストだつてそこそこ出来ると思うけど」

「安心しなさい。咲夜が一人とも負かしているわ」

「…………何してんだよ、お前等は」

「これ以上殺伐とした仲にならなくても良いだろ?」

「とにかくさ、案内ぐらいはするから来てみなよ。少なくとも紅魔館で紅茶飲んでるよりは面白いだろ?」

「……そうね。勇輝が弾幕DJに参加するなり、もう一度相手をするのも悪くない」

そう言いながらニアリアは紅茶の入ったカップに口をつける。それを見る勇輝の顔は引き攣っているが。

「じゃあ、次に誘う奴等の所にも行くから今日はこれぐらいにしておくよ」

「その前に、勇輝。何故知り合っていくのが女ばかりなのか説明して行きなさい」

「…………比率の問題だと思つ」

そつだあつて欲しい。でなければ生まれつき女難の相があるのだろう。

霧の湖の近くの廃墟である洋館。洋風なその建物からは昼夜問わず楽器が鳴り響く。

外界なら心靈スポットになるだろ?この場所も、幻想郷ならば「ああ、幽靈がいるな」と軽い認識しかされない。

「と、いつ詰だけじゃ。じつする?」

この洋館に住む幽霊。プリズムリバー三姉妹も一応は縁があるので声をかける。

「行きたい、けど……」

「里はちょっと、……ねえ？」

「え、行かないの？」

「どうもリリカを除く一人は渋つて『いる』ようだった。

「人里がどうかしたのか？……襲つたりしてないよな？」

「そ、そんな事はしてないよ！？　ただ、死んでからは人が多い所には行つた事がないんだ」

どうやら不安らしい。そう言つるナサの手は少し震えていた。

名前からして死んだのは外界でだろうか？　それは定かでは無いが、一般的な幽霊の捉え方をしているのかもしれない。

靈力を扱つて空を飛んでいるような人間なら気にしないだろうが、一般人からしたら幽霊も恐怖の対象なのだ。

「なら、幽霊って事を隠せば良いんじやないか？　分かる人には分かるだろうけど、俺からしたら普通に人と変わらない様に見えるし」

「そう、かな……？」

人と変わらないと聞き、ルナサの顔が綻ぶ。

「メインにはならないけど、弾幕『JET』の休憩中に三人の演奏をしても良いと思うしや。まあ、気が向いたらで良いから」

それだけ言って、三人の元を後にする。

里に戻る途中、チルノとルーニアと、あと一人妖精がいたのを見かけたがスルーした。

あの二人は呼んではいけない。そんな気がして……。

里に戻ると、祭の準備は結構進んでおり屋台も形だけは出来ていた。

「あやや、もしかしなくても最近人里に住み始めたといつお医者様、で良いですよね？」

診療所に向かつて歩いていると、誰かに呼び止められる。

振り向くと、黒い髪の里では見ない服を着て、頭に変わった防止のよつなものに乗せた少女がいた。

「合ひってるけど……。ああ、天狗か、森近の言つてた」

「どうも、私はこの『文々。新聞』の記者をしています。射命丸文です」

そう言つて文は新聞を差し出していく。

「…………あ、やつ」

何かが壊れる音がした。きっと天狗へのイメージが粉々になつたのだろう。

「いやー、最近は貴方の噂で持ち切りですよ。紅魔館を落とし（恋愛的な意味で）、冥界に殴り込みに行き、更には博麗の巫女に喧嘩を吹っ掛ける。とても面白いです」

「褒めてるのか馬鹿にしてるのか……。馬鹿にしてるな、うん」

「さて、ijiからが本題なのですが……」

その先に続いた言葉を聞いて、勇輝は苦笑いするしかなかつた。

其の陸拾陸（前書き）

PVが50万を突破しました。皆様に感謝です。（2011/11）

其の陸拾陸

「…………勇輝、今にも死にそうな面してるけど何かあったのか?」

「…………魔法の森の、瘴気…………」

「あ、そういうえば普通の人間だったな。忘れてたぜ。あれ? でも死なないらしいから…………」

魔理沙とアリスに連絡をしようとして森に入つて数十分、魔力に体を蝕まれ苦しむ青年がいた。

「いやー、焦つた焦つた。何で能力使って無いんだ?」

「人体への使用を控えてんだよ。悪いと思つたなら定期的に里に来い」

魔理沙に引き摺られ、例のマジックアイテムを装着するまで苦しみ続けた事もあって、口調の割に勇輝の声に霸氣はなかつた。

「死ぬ気で私に会いに来るなんて……そんなに寂しかったのか?」

「こんな辺境で暮らす奴が何言つてんだか……、ただの連絡だよ」

「チツ……」

「…………近々、里で祭をやるんだ。それで、人外を十名以上参加

させないとハ雲 紫が里の結界を解く。ここまでは良いか?」

「祭? 収穫祭は秋にやるもんだぜ?」

「ああ、夏祭りって幻想郷には無いのか。まあ、人と妖怪の仲を良好にするのが目的らしいから大した意味は無いと思つけど」

「祭、か……。宴会するのに懲々なんで里の危機になつてるんだ?」

「どうやら、幻想郷での祭と、これから行う祭には大きな差があるらしい。」

収穫祭は秋に里が一体となつて宴会でもしていたのだろう。

「説明するどだな、屋台を並べたりちょっととした催し物をする。んで、人と妖怪の親睦を図る。それを、祭つて名田でやるんだぞ」

里の奴等は勇輝の言う事に何の疑問も持つていなかつたが、紫が任せたのだからコイツには何をしたら良いのか分かつているのだろう。と丸投げだつたに違いない。

「……へー、つまり勇輝は私の事を人じやない、と。そう言いたいのか? 流石に私でも堪忍袋の緒が切れそになるんだが」

「違う、本題は今から話す。メインイベントだけど……弾幕ごつこだ」

「詳しく聞かせてくれ」

即座に答えた魔理沙の顔は、いつになく真剣だつた。

「成程、了解したわ

魔理沙からマジックアイテムを購入してから、適当に書かれた地図を貰い、数時間かけてアリスの家に辿り着いた。

反応は呆気ない物で、説明を終えると即座に了承して貰えた。

「何だ、意外と抵抗ないんだな」

「私は人里に出入りもするし、特に被害を出してないもの。私にまで敵対心を抱かれていたらスキマ妖怪はこんな提案はしないと思うし」

「ああ、そういうれば何度も里で会つたな

「まさか忘れていたの?」

「……………そり

「……………そり

可愛そうな物を見るような目で見られた。

「つて訳だ。じゃあ、暗くなる前に帰りたいからこれで

「里まで送つて行きましょーうか?」

「お構いなく。少し練習も兼ねてるから」

「…………？」

翌日、勇輝は博麗神社へ。

「おー、「マイツ鬼じやなかつたのか? なんで神社に住み付いてんだよ」

「萃香の事? あれは住み付いてるんじやなく、じいなら旦が当たるつてお酒を飲みに来てるだけ」

「……いや、神社だろ?」

「森の中よつは良いんじやない?」

確かに森の中で飲むのはどうかと思つが……。

「ん~? あれ、靈夢が男になつた」

萃香と呼ばれた小さな鬼が勇輝を見ながらそんな事を言い出す。

「靈夢はあつちだ」

「ん? ……おお、靈夢だ」

見た目幼女なのだが……大丈夫なのだろうか? 瓢箪を傾け酒を飲み続ける鬼から視線を逸らし、靈夢に話し始める。

「前にも言った祭の話なんだけど」

「祭ー？ 宴か！ 宴会か！」

「何なお前ー？ 飲んでるか黙つて聞くかどつちか選べよー。」

祭に反応した萃香に若干苛立ちながらも勇輝は話し始める。

「って説でや、靈夢はそっちの方でも頑張つて欲しい」

「良いけど……。誰が参加するの？」

「ユーリア、フラン、咲夜、魔理沙。」こつらは確定だと思つ

「……相当面倒なメンバーね」

「俺も出る事が決定してる。不本意にだけど」

「……勇輝さんが優勝したら良いじゃない。それで色々と丸く收まるでしょ？」

「勝てる気がしない」

「…………無理そづね」

能力を使えば互角にまで持ち込める可能性はあるが、後の反動が分からぬ今それは避けたい。

「分かったわ。たぶん萃香もついてくると思つけど……」

「それって大丈夫なのか？」

「憑ねはしないでしょ、お酒でも渡しつければ」

そんな事で良いのだろうか。

少し不安だったが、靈夢が見張ってくれるだらつと信じ、博麗神社を後にした。

翌日、冥界の白玉楼で。

「つい訳なんだけど」

「……その屋台には、食べ物はあるのかしら?」

「半分ぐらには食べ物の屋台だと思ひけど……」

「妖夢、すぐにお金用意しなさい。里に行くわ」

「待て西行寺、祭は三日後だ」

「…………やうなの」

露骨に残念そうな顔をする幽々子。春風異変の時のカリスマ性は微塵も見られない。

「そういえば、八雲 紫とは知り合いつて言つてたけど、あの人普

段は何してるんだ?」

「ソレに来て一緒にお茶を飲んだり、お菓子を食べたり……」

「大変そうだな、妖夢が」

「あの子が大変なの?」

「……いや、何でもない」

苦労しているだらつ妖夢に田に向けると、田を細めどこの遠くを見ていた。

其の陸拾漆

祭の日は訪れた。

里にはいつもの倍以上の活氣があり、行き交う人々は皆樂しそうにしている。

一方で、稗田家の前に特設されたテント。そこには浮かない顔をした勇輝と森之助の姿があった。

二人の前のテーブルには、欄が作られた一枚の紙が。

「……森近、俺は『コイツらを相手に正氣を保つていられるのかな

「……スマン。俺の口からは言えん」

その紙には……。

博麗 靈夢

霧雨 魔理沙

レミリア・スカーレット

フランドール・スカーレット

パチュリー・ノーレッジ

十六夜 咲夜

紅 美鈴

チルノ

アリス・マーガトロイド

伊吹 萩香

西行寺 幽々子

魂魄 妖夢

風見 幽香

橙

八雲 藍

……何を間違えたらこうなつてしまふのだろう。

そして、主催者は勇輝という事になつてゐるのだがこの弾幕』につこ大会、ルールも組み合わせの決め方も勇輝は知らない。

全て、射命丸によつて決められる事になつたのだ。

フェアじゃない、不公平だ。そんな理由をつけられ、勝手に審判や司会を手配してしまつたあの天狗は何を考えているのだろうか。そんな事を考えながら、勇輝は参加受付のリストをもう一度見る。

殆ど全員が知つた顔、その大半とは一度は弾幕を撃ち合つた。

ただ、一人だけ種族も能力も、その力量がどれ程のモノなのか分からぬ奴がいるが。

こうして考えると有利な事に変わりないのだが、今の自分……桜井勇輝の力のみで渡り合える可能性は低い。

能力に頼り、力を上げた状態で互角。だが、この能力の全てを把握できていかない今はやはり使いたくは無い。

少ない靈力、乏しい身体能力、多少狡賢い頭脳。これらでどこまで

行けるのだろうか。

「…… わて」

「どうした？」

溜息を吐いた勇輝に霖之助が声を掛ける。

「いや、男なら腹を括りつと思つてな」

それだけ言つと、勇輝はリストに、自分の名を書き記した。

「さあやつて参りました！ 妖怪だらけの弾幕大戦。司会は私、天狗の射命丸が務めさせて頂きます」

祭一日目、正午。昼食を取らせて貰えないまま弾幕大戦とやらが開かれる。

竹で作られた二重の囲いの中、参加者が一堂に会している。

囲いは半径三十メートル程の円形で、高さは一メートル程。そこから更に五メートル離れた場所に観客とリングの仕切となる柵が作られていた。

殆どが空中戦の弾幕」ついで、この柵の高さでは意味を成さないが恐らくルールに関係していくのだろう。

「ルールは簡単、この柵の中でスペルカードルールでの決闘を行つ

て頂きます。ですが、ヒット判定は私を含めた三名の審判で行います。勿論、弾幕以外でもそれが攻撃であればヒットであり、自爆はヒットになりません。審判が一人でも判定を出したらヒットです

つまり、審判の言つ通り。で勝ち負けが決まる。

「肝心のスペルカードの枚数は十枚！ 持ち機は三！ それと、相手に直接能力を使用する、明らかに死人が出る弾幕の使用、これらは反則行為として即失格になるのでお気をつけ下さい」

意外と簡単なルールに勇輝は拍子抜けする。そんな時、靈夢が手を上げ質問した。

「柵の中つて事は、高さに制限はあるの？」

「あやや、失礼しました。人間の肉眼で見える程度なら大丈夫です」

アバウトな答えに靈夢は眉を顰める。

所で、日傘を差している者が三人、炎天下でフラフラしている魔法使いが一人、溶けそうな妖精が一匹いるのだが大丈夫なのだろうか？

「えー、本日は八試合行つ予定なのでさつさと行きます。組み合わせですが……」

第一試合	霧雨	魔理沙	V S	チルノ
第二試合	十六夜	咲夜	V S	魂魄
第三試合	桜井	勇輝	V S	伊吹 萩香
第四試合	紅	美鈴	V S	風見 幽香

第五試合	博麗 霊夢	VS	パチュリー・ノーレット
第六試合	橙	VS	八雲 藍
第七試合	西行寺 幽々子	VS	アリス・マーガロイド
第八試合	レミリア・スカーレット	VS	フランドル・スカー

レット

……悪意を感じる組み合わせである。

第六、第八試合など普通の感性をしている者が組む筈もない。

「では、審判の紹介ですが……」

射命丸が観客の方に向かつて手招きをする。すると、人込みを搔き分けて霖之助と、もう一人小柄な少女が出て来た。

「香霖堂店主、森近 霖之助さんと稗田家当主、稗田 阿求さんです」

……あの天狗は何をしてんだ。よりもよって一番権力のある家の子を選ぶなんて。

「それと、BGMをそこの幽霊楽団に担当して貰いますが大して取り上げる事でも無いので省略します」

射命丸が指差す方向には暴れるメルランを抑えるルナサとリリカの姿が。紹介のされかたに文句もあるのだろう。

射命丸含む審判たちは、無駄に頑丈そうに作られた四畳程の小屋に入り、射命丸が叫ぶ。

「では、一試合の選手以外は観客席に入つて下さい！」

魔理沙とチルノだけを残し、他の面子は一つだけ作られた出入口から出していく。

ふと、勇輝は魔理沙と視線が合つた。

「

魔理沙が何かを言つたが、それは勇輝には聞こえない。

しかし、口の動きで大体の事が勇輝には分かつっていた。魔理沙はこう言つたのだ。

必ず勝つ、だからお前も先に進めよ。と。

其の陸拾捌

「一回戦がお前とはついてゐるぜ。これなら三三分で終わる」

魔理沙がチルノに挑発的な言葉をかける。

「三分で負けるのはお前にしょー。あたいはさこきょーだから、手加減してあげる」

まるで去年の事を覚えていないチルノを見て、魔理沙は苦笑いする。

紅魔館に向かう途中で撃墜された事を。

射命丸が声を上げ、宣言した。

「それでは、試合開始！」

「恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙が開始と同時に魔砲を放つ。

「おおつと、魔理沙選手。不意打ちのスペルカード攻撃だーー！」

「レは酷い、汚い。流石魔理沙選手！」

射命丸の声など届いていないかの様に観客は畠然とし、魔理沙の魔砲を見る。

彼等の認識する弾幕『』は、こんな不意討ち紛いのスペルカードをいきなり放つ様なモノでは無かつたのかもしない。

「ふふん。弾幕なんてあたいには効かないもんね！」

魔理沙の魔砲は、避けられた訳でも弾かれた訳でも無いのにチルノには届かない。

本来、妖精は人間よりも脆弱。取り柄と言えば何度でもそこに自然がある限り蘇る事。

だが、チルノには“冷氣を操る程度の能力”という物がある。

凍り付き、氷柱と化した魔砲をチルノは碎く。

靈力とは凍るものなのか、以前チルノに勝負を仕掛けられた時にそう思つた勇輝だが、凍つてしまつのだから仕方ない。

いきなりスペルカードを一枚消費してしまつた魔理沙。だが、魔理沙は笑つている。

「やつぱり、今までのままじゃ駄目か……。なら、少し本気を出してやるぜ」

幕に又借り、魔理沙は上空へ。チルノはスペルカードを。

「あたいのスペルを見せてやる！凍符『パーフェクトフリーズ』！」

チルノが大量の弾をばら撒き、上空を埋め尽くす。しかし……。

「……【反則】」

阿求が紙を掲げ、チルノに反則を取つた。

「おつとチルノ選手、弾幕が柵の範囲外に出でますね。減点です、残り一機ですね」

「ほえ？」

あの？（バカ）はルールを理解していなかつたらしい。

決闘は柵の中で、当然弾幕もその中から出ではいけない。

「つーか、何で稗田は口に出して言わねーの？」

「…………【大きな声が、出せない】」

人の呟いた声は聞こえるらしい。

勇輝の後ろでは、「ああ稗田様、あんな楽しそうに……」と何処かの婆さんが手を合わせていた。やはり幻想郷に常識人は居ないのだろうか。

そんなチルノの反則等は些細な事で、弾幕「」は続いて行く。

上空に展開されたチルノの弾幕は凍り付いたかのようにその動きを止める。

「これでチェックメートー！」

チェックメイトと言いたいのだろう。言えないなら言わなければ良

いのに。

そんなチルノが続けざまに、魔理沙に向けて大量の弾を放つ。

しかし、魔理沙に小細工など通用しない。

「弾幕はパワーだぜ。恋心『ダブルスパーク』！」

魔理沙の背後に現れた二つの魔法陣から一本の魔砲が地上に向かう。魔理沙の展開した弾幕が動き出そうとするが、魔砲によつて焼き消され、飲み込まれていく。

「うう……、ならもう一度つ！」

チルノは再び魔砲の“一つ”を氷柱へと変える。

「ばーか、今度は二つだ」

魔理沙の声がチルノに届くと同時に、チルノは魔砲に飲み込まれた。

地面が魔砲によって碎け、砂煙が舞つた。

勇輝は目を逸らす。かつてアレを受けた身として、アレを凝視するのは辛い。

「おおつとー 魔理沙選手の攻撃が文句なしにヒットオオ！ チルノ選手、耐えられるか？」

砂煙が晴れ、チルノの姿が見えてくる。

目を回しふらふらしているが、まだダウンしてはいない様だつた。

「それで終わりだと思つたら大間違いだぜ？」

チルノの背後の砂煙の中から、箒を振り被つた魔理沙の姿が現れる。そのまま箒を野球のバットの様にフルスイングし、チルノを打ち上げた。

「……ヒットだ」

霖之助がヒットの判定を出す。これで、チルノの残機はゼロ。

魔理沙がガツッポーズをすると、観客席から歓声が上がつた。

「えー、尺が押していますので早速次に移ります。十六夜 咲夜選手、魂魄 妖夢選手、リングに入つてください」

初日は試合数が多い。このベースでいかないと終わらないのだろう。

咲夜が柵の中に入つて行く。……別に上手い事考えたつもりは無い。しかし、妖夢の姿が無い。勇輝は辺りを見渡すが、人が多い事もあって妖夢を探し出す事は出来なかつた。

「あれ？ 妖夢選手、いませんかー？」

射命丸が飛び上がり、上空から見渡そつとする。

「……居ないです。不戦敗になつちやこますよー？」

「……あの馬鹿、まさか」

「幽々子様！ 私の出番、一回戦なんですから負けでくださー！」

「でも妖夢、あのお店のお菓子を食べていなーわ」

「明日にして下さーよー。大体、幽々子様が出場するよつて言つたんじやないですか！」

「んー。でも私は紫に参加するよつて言われたのよね

「巻き込んだだけ！？」

食べ物の入った紙袋を抱える幽々子を引き摺つながら、妖夢は会場へと走る。

「……遅れ、ました」

息も途切れ途切れに、妖夢はリングに駆け込む。

「……では、妖夢選手は遅れやがりましたので一機減点からスター

トです。試合開始ッ！」

無慈悲な宣告と試合開始の宣言が射命丸から下された。

妖夢の切り替えは速く、直ぐに刀の一振りを抜刀し構える。

咲夜は曲芸のように何処からかナイフを取り出し、投擲の構えを見せる。

しかし、お互いにその場から動こうとはしない。

魔理沙とチルノの時は違った空気の対決に、会場は静まり返っていた。

ヒュンッと風を切る音が鳴る。咲夜がナイフを投擲したのだ。

妖夢がそれを無駄のない動作で叩き落す。投擲武器の相手はとっくに経験している、そう言っているかのような、自身のある表情をしていた。

「甘いわよ」

上から聞こえた声に、妖夢はハツとなつて見上げる。

「奇術『エターナルミーク』」

空から降り注ぐ無数の弾幕。

ナイフ型と、円形の弾が入り乱れていて、回避するには範囲が広すぎる。

妖夢はもう一振りの刀も抜刀し、弾幕を切り裂いていく。

しかし、咄嗟に反応したとはいえ体勢も悪い。

妖夢の頬をナイフ型の弾が掠めた。

「ヒットオ！　咲夜選手の攻撃が妖夢選手に当たりました！　勿論本来はスルーの範囲ですが時間の都合上ヒットですね」

射命丸の残念な実況により妖夢の機数が減った事が告げられる。

「うつ……なら…」

妖夢は弾幕を切り裂くと同時に自らも鋭く尖った弾幕を放つ。

ナイフ型とは相殺し合い、円形の弾を切り裂き咲夜へと弾幕は迫る。

「つ！」

咲夜は身体を捻り、妖夢の弾幕の範囲から離脱する。

その足が地面に着くかと思われた時だ、妖夢は思い切り地面を蹴り咲夜に接近する。

「はあつ…！」

妖夢は刀の鞘で咲夜に突きを放つ。

だが、既にそこに咲夜の姿は無かつた。

「惜しかつたわね」

後ろから聞こえた声に、妖夢は鞘を振り向きそのままに離ぐ。

しかしそれは空振りに終わり、空を切る音だけが虚しく響いた。

そこに居た筈なのに居ない。いつの間にか消え、見当違いの場所から現れる。

「能力……」

妖夢がそう呟く。

妖夢にも能力はあるが、それは“剣術を扱う程度の能力”というモノで、応用が出来る様なモノでもこれといって目に見えた変化も分からぬ能力。

対する咲夜は“時間操る程度の能力”。勇輝曰く、弾幕ごっこでは反則的にその効果を發揮するもう弾幕を作るために生まれた能力。

その、弾幕ごっこに描いての使い方と言えば……。

「なつ……ー？」

一瞬で妖夢の視界を埋め尽くす程に現れた弾幕に、それを見る者全員が息を飲んだ。

そして……。

「勝者、十六夜 咲夜選手！！」

妖夢は敗北し、咲夜は次の戦いへと歩を進めた。

其の陸拾捌（後書き）

長くしないこと20話で章が終わらないので増量中です。

ダラダラと戦闘パートが続くでしょう。

其の陸拾仇

次は第三回戦、風見 幽香と美鈴の戦いになつたのだが……。

「情けない」

「教育しておきます」

と、紅魔館メンバーの機嫌を見れば分かる通り瞬殺であった。

風見 幽香という妖怪は、能力もこれといって変わった弾幕を使つた訳でも無く、ただ力押しで美鈴を撃ち破つた。

勿論、美鈴が弱かつた訳ではない。

紅魔館は幻想郷の中でも選りすぐりの強者が多いために目立たないだけで、単純な身体能力なら咲夜を上回る。

が、風見 幽香は強すぎた。

「つか、勝ち抜いてもアソシと当たるのか……負けようかな」

勇輝は溜息を吐く。

「では第四回戦、桜井 勇輝選手対伊吹 萩香選手、入場してください」

場の凍つた空気を何とかしようとして、射命丸が次の試合を催促する。

里の人達は萃香を見て、「あれ？ 鬼？ でも小さいし、居る筈もないか」なんて事を言つてゐる。

一方で寺子屋の子供や見知つた患者等は勇輝が近くを通つた際に応援の言葉をかける。

「」で手を抜けば、恥晒しにも程があるじゃないか。

「んー、行き成り私が相手なんてついてないね~」

「手は抜いてくれよ？ 僕は一応人間なんだから」

「何言つてゐの？」

その小さな体から漏れるのは、レリコアにも勝る程の妖力の片鱗。

「喧嘩で手を抜くのは、鬼の礼儀に反する」

いつもの酔つた口調ではない萃香。その威圧感は正に大妖怪のソレだ。

「では、試合開始ッ！」

射命丸の声と共に、勇輝は一度距離を取る。

リングは半径三十メートルの円。最大で六十メートルの距離を置けるが、それは相手がリング端に居る場合。

大体のお互いの距離は四十メートル、弾幕「」をするには少し狭い程度。

萃香はまだ動かない。いや……動こうとしていない。

「来なよ、先手は譲つてあげるからさ」

その挑発的とも取れる余裕な態度、それは鬼としての性分なのだろうか。

「なら、お言葉に甘えて」

確認しておくが、今の勇輝は靈力も、身体能力も、常人とそれ程大きな差は無い。

むしろ、身体能力に関しては里の同年代の男性に及ばない程度。そんな状態で、何故この試合に臨むような事をしたのか。

「…………？」

萃香が不思議そうに勇輝の拳動を見つめる。

勇輝は弾幕を展開している訳でも、スペルカードを取り出そうとしてもいない。

ただ、そこに立っている。一部を除く観客にはそう見えた。

それは萃香にも同じで、勇輝が何か仕掛けている様には見えない。

「さて……」

勇輝が靈力で刀を作り出す。勿論それに切れ味など微塵も無い。

萃香は身構えるが、次の瞬間には目を丸くして硬直してしまった。

勇輝が、まばたきをするにも短い時間で目の前まで移動しているのだ。

勇輝の刀による突きが萃香の小さな体を吹き飛ばす。

萃香は空中で一回転し、体制を整え着地する。

しかし、勇輝は既にその後ろに回り込んでいた。

一撃目が入る。そう勇輝は思つたが、萃香の姿は霧散するように消え、数瞬間を措いて勇輝から三十メートル程離れた所に姿を現す。

「…………ひ、ヒット！ 勇輝選手、目にも止まらぬスピードで萃香選手から一機？ぎ取りましたーッ！」

射命丸が少し遅れて宣言する。静まり返っていた観客も思い出したかの様に歓声を上げた。

「成程ね、靈力を纏つて無理矢理身体を動かしてるのは、一撃目は反応出来なかつたよ」

「俺の靈力じや放出量は限られてくるけど、纏うだけなら一定量の靈力の消費だけで済む。スペルカードだつて何枚も使えないんだ、これぐらいの考えはあつて当然だろ？ そつちこそ、厄介そうな能力じゃんか、もうコイツで殴れる気がしない」

“密度を操る程度の能力”、それが私の能力だよ。だから……」

勇輝が纏っていた靈力は霧散してしまつ。

「もう、その手は使わせない」

「それは、恐ろしい能力で……」

暑さによるものとは違つた汗が勇輝の頬を伝つ。

ここ数週間、試行錯誤を繰り返した戦闘方法が全く意味を成さなくなつてしまつたのだ。焦るのも当然。

「じゃあ、次は私の番だね。鬼氣『濛々迷霧』」

翠香は圧倒的な量の妖力で自身を囲う。そして……。

「嘘だろオイ……」

そのまま浮遊し、弾幕を撒き散らしながら勇輝へと向かっていく。

それも結構なスピード、競輪選手が乗る自転車程。

しかし、勇輝の回避スキルは今までの経験からかなりのモノとなつてゐる。

身を捻つて翠香を避け、距離を取りつつ走る。

翠香は此方が見えているのか、急停止した後に勇輝に向かい再度突進を開始する。

何より困るのは未だに漂い続ける撒き散らされた弾幕。これが勇輝の動きを制限していくのだ。

「鬼つて割には随分といやらしいスペルカードな事で……」

悪態を吐きながらも、勇輝は足を動かす事を止めない。

しかし、魔理沙の様に強力かつ広範囲に影響するスペルカードなんて、有るには有るが今の靈力で使える筈もない。

仕方ない、ここはもう一つの成果を早々だが見せる事にしよう。

「弾幕が三秒以上空中で停止し続けるのは、欠陥である」

勇輝の呴いた言葉に、試合を見ている者達は何を言い出すのかと首を傾げる。

弾幕に持続性があるものなど珍しくも無い、極当然の弾幕なのだ。それが欠陥である等と、何を言つているのか。

しかし。

「これはどういう事でしょうか！　萃香選手の弾幕が次々と消えています！…」

萃香の弾幕は消え始めている。

修正したのは世界の法則、自然の理ともとれる何か。

勇輝の“欠陥を修正する程度の能力”、これは己の価値観が大きく影響している。

だから、それが欠陥だと思い込んでしまえば、それは能力で修正出来る対象となってしまう。

声に出したのは自己暗示のため。そして勇輝は続ける。

「密度が変化する事は、欠陥である」

能力封じ。これは誰に對しても有効であり、それはもはや世界の理への反逆とも取れる行為。

世界のルールすら変えかねない能力。何故こんなモノが勇輝に宿っていたのか。

しかし、その暗示には絶大な集中力が必要となる。

「貰った！」

妖力を纏つたままの萃香が勇輝の背後を狙つて突撃する。

「…………『撃墜』」

阿求のジャッジにより、勇輝の持ち機が一つ減る。

能力を封じた代償は、小さくは無いようだ。

「ゴフツ……」

勇輝の口から漏れたのは血。いくら能力が強大であつても、その身体は普通の人間だ。

萃香はスペルカードの効果が切れたのか、その姿を露わにしている。

「あれ、ホントに能力が使えないや」

自分の手のひらをまじまじと見つめ、そう声を漏らす萃香。

「これで、こっちの攻撃は当たる。って言つても体力なんて殆ど残つてないんだけど」

勇輝は靈力を纏い直す。

後は氣力と集中力と、スペルカードの精度次第だ。

萃香が身構える。

勇輝はスペルカードを取り出し、その符の名前を読み上げる。

「騙討『プライド』は捨てました』」

勇輝はあろう事かスペルカードを発動させる事無く札を放り投げ、萃香に接近。

呆気に取られ、反応が遅れた萃香に足払いを掛け、そのまま格闘ゲームのコンボでも決めているかの様に身体を回転させ蹴り飛ばす。

射命丸の説明から考えて……。

「これはツーヒットです！！ 勇輝選手、一瞬で二度の攻撃を当て、勝利を？ぎ取りましたーッ！！ しかし「コレは狡い汚いえげつない！ しかし時間の都合上、またルール上の違反を犯していないため勝利となります。次やつたら失格ですけどね」

勝利したのに歓声も沸かず、冷めた……いや、汚いモノを見る様な目で見られる。

「勇輝せんせーつてきたねー大人だよなー」

「私、ちょっとカツ『いいと思つてたけどもう一度と思わない』

寺子屋の子供達のそんな呟きが、勇輝の心を抉っていた。

其の陸拾仇（後書き）

勝てる要素が無かつたとはいへ、これはやり過ぎですね。

法則の変更、となりますので一日で戻るタイプです。……チートは好きじゃないんですけどね。

其の漆拾

「さて、試合も半数を消化しました！ 第五試合は博麗 霊夢選手対パチュリー・ノーレッジ選手。あと、この試合のみ桜井 勇輝殿によるドクターストップが設けられています」

……自身が怪我しているのに試合を止めようと叫びつい、あの天狗は。

試合を放棄した慧音に肩を借りながら射命丸を睨む。

「では、試合開始ッ！」

結果、パチュリーが一枚目のスペルカードを使用した時点で勇輝からのドクターストップ。試合は靈夢が不戦勝に近い形で勝利。

第六回戦、橙と藍の試合は藍が辛そうな表情をしながらも橙に弾を掠らせ勝利。

第七試合、アリスと幽々子の勝負は幽々子が勝利。特筆する様な事は無かつた。

ここに申し訳ないのだが、勇輝の能力によつて滞空を続ける弾幕は殆ど使い物にならない。アリスが恨めしそうな目で見ていたのはそのせいだと思う。

そして、日も暮れ始めた頃。

「フランと戦うのは、いつ以来だつたかしら」

里の人達も、紫がここに結界を張つてゐる。という事で大抵の人間はここに留まつていた。

それでも、小さな子供や夕食の支度をする者、屋台を見る者は席を外して行つたが。

例え恐ろしい吸血鬼と言つても、実際にその田で力を見た者は里にいない。

好奇心に抗えなかつた者が、今、ここに留まつてその真価を見よつとしている。

「お姉様、悪いけど今日はフランが勝つよ」

「……少し、姉としての威儀を示さなければいけないようね」

一触即発の雰囲気に、射命丸は満足そつた顔をして。

「試合、開始ッ！」

その宣言から「ン」数秒。

「禁忌『レーヴァテイン』！」

「神槍『スピア・ザ・グングール』！」

紅い剣と槍がぶつかり合い、突風を巻き起こす。

どちらのスペルカードも経験している勇輝は苦笑いをする事しかできない。

むしろ、自分が見ていたモノより数段威力が上がっている様にも見える。

妖怪は月日と共に妖力が増していくと聞いたが、数ヶ月で変わるものなのだろうか。

深紅の槍がフランを襲い、深紅の剣がレミリアを襲う。

誰もが息をするのも忘れ、決闘を見つめる。

「フラン。まずは一撃、入れさせて貰うわね」

レミリアが飛び上がって距離を取り、グングールを投擲する。

フランはそれが何処に落ちるか分かつていていたように自然な動作で横に逸れてかわし、レーヴァテインを一薙ぎしてから声を出す。

「そんなのフランには当たらないよ。お姉様って勝つ氣ある?」

レミリアはピクッと眉を動かすが、そこは抑えて話し始める。

「私のグングールの本質はその速さと殺傷力。けど、そのチャンスが一度しかない事が唯一の欠点」

レミリアの後ろにいくつもの深紅の魔法陣が現れる。

「知ってる? 数に勝る暴力は存在しないのよ

次の瞬間、地面が広範囲に渡つて弾け飛んだ。

轟音と砂煙。リングの外からはその一つしか確認する事は出来ない。

「勇輝、お前本当にアレに混ざつて暮らしていたのか……？」

「不本意ながら。半年経つ前には既に妹の方と定期的に弾幕『じゅんばく』をしてましたね」

「……お前、本当に人間か」

「靈夢が人間であるなら、俺も人間だと思います」

そんな事を勇輝と慧音が言つている間にも、轟音は鳴り続ける。

射命丸もヒットを取つて良いのか、そもそも当たつているのかも分からないので戸惑つている。

そんな時、音がピタリと鳴り止んだ。

「……駄目ね。自分で投げてない分、やつぱり一つ一つのスピードが三分の一まで落ちてしまつて。これじゃあ欠点を克服したとは言えないわね。勇輝の様に精密に動かせれば違つてくるんでしょうけど」

里の人達は「いやいや、十分に恐ろしい殺戮用スペルカードです」みたいな表情をしていたが、レミリアは本当にそう思つてゐる様で溜息を吐く。

刹那、煙の中から紅い剣がレミコアを切り伏せようとする。

レミコアは当然避けた。そして、煙の中から無傷のフランが飛び出してくる。

「お姉様、やつぱり弱くなつたんぢゃない？　だつてあんなの、数が多くたつてフランに当たる訳無いもん」

「……少し、口の利き方から教育し直す必要がありそうね」

レミコアの顔には影がかかり、その肩はふるふると震えている。
まるで小さな子供が癪癩を起すのを必死に堪えているような、そんな反応だ。

「そんなんだからお姉様は、お兄様の前で猫じやらしを前にした猫みたいに尻尾振つてるのが周りに丸分かりになるんだよ」

ブツンと、聞こえる筈のない音が聞こえた気がした。

「ふふつ。ふふふふふ。面白い事を言つわねフラン。ちょっとグングニルを避けただけでこんなに調子に乗つて……。私も子供じやないから大目に見ようとは思つていたけれど、そんな事はフランには必要なかつたみたいね」

「うん。だつてお姉様の方が子供っぽい」

レミコアから凄まじい妖力が溢れ出す。

「魔符『全世界ナイトメア』！――」

レミリアを中心に、空は紅で覆われた。

圧倒的な量の弾幕がフランに、地面に降り注いでいく。

「あ、怒った？……じゃあ、フランもやるね」

フランは雨の様な弾幕を見据え、回避は不可能と判断した。

「禁忌『禁じられた遊び』！」

四つの刃を持つ手裏剣の様な弾がいくつも現れる。

一つ一つが大人よりも大きく、近づいたら胴体を分断されてしまい
そうな雰囲気があるソレは、弾幕の雨を弾きながらレミリアに向か
つていく。

フランの刃を持った手裏剣の様な弾がいくつも現れる。

レミリアの髪が数本舞つた。

フランの足に切り傷が走つた。

レミリアの頬が薄く裂けた。

「…………はつ！　まさに接戦！　お互に譲らぬ一進一退の戦い
です！」

射命丸が思い出したかのように実況を開始する。

他の者達、いや、ここにいる全ての者が勝負に見入っていたのか、射命丸の声に弾かれた様にざわざわと騒ぎ始める。

聞こえて来るのは称賛、畏敬、そして種族等関係なしにした評価の言葉。

「……んだよ、人が治療してる時は文句しか言つてなかつた奴等が今更さ」

思わず勇輝はそう呟いてしまう。

恐れていたのは、知らなかつたから。

幻想郷の伝承が書き記されている『幻想郷縁起』に記される吸血鬼は、かつての戦争とも呼べる戦いのモノ。

誰も、本来の姿など知りはしなかつた。

羽がある、血を吸う。それがどうしたと言うのだ。レミリアもフランも、少なくとも勇輝が幻想郷に来てからは人を殺していない。

何が危険なのか、どこが危害を与えていると言つのか。

尤も、吸血については勇輝が一人で請け負つてているからだが。

五百年を生きた吸血鬼。だが、見た目も精神も子供のソレと大して変りない。何故恐れる必要があるのか。

それはきっと変化を求めなかつた代償。里に最低限の安全を、交流を。

だからこそ、その無知、そして定着していった偏見。

鎮国をした日本が世界の変化についていけなかつた様に、里も妖怪と敵対した時間のまま止まつてしまつていた。……いや、小さな変化に気づこうとしなかつた。

だから、ここから変わる。

人は、切つ掛けさえあれば大抵の事は可能としてしまうのだから。

「勝者、レミリア選手！」

そして、試合も決着を迎える。

澄んだ空は月が上り、星がその存在を主張している。

が、空は割れた。否、スキマが現れ、そこから一人の妖怪が現れる。

「高い所から失礼しますが、皆様お見事でしたわ。顔見知りは多いけれど自己紹介を、幻想郷の立案者にして実現者。八雲 紫と言う者ですわ」

胡散臭い口調で現れた紫に、人々は驚き戸惑つ……一部は呆れていたが。

「里の皆さん。この催し物、楽しんでいた様で何よりです。そこで、急なお話になつてしまいますがお伝えしておきたい事があります」

わざとらしく間を開けてから、紫は澄んだ声で宣言する。

「そこの桜井 勇輝を、里の代表者兼纏め役として任命いたします。
異議は受け付けませんわ」

其の漆拾壹

「賢者様、それは一体どういう事で……」

村でも力のあつた老人が恐る恐る紫に尋ねる。

「貴方達は感じません？　まさに今、幻想郷はその形を変えようとしていますわ」

この場には人と妖怪が争う事無く集まっている。

確かに今までの里の様子を見ていた者からしたら信じられない事なのだろう。

「その変化に、これから幻想郷の在り方についていくには、強く、賢い交渉役が必要になるのは一目瞭然。それを兼ね備え、更に多くの力を持つ者とラインを持つている。彼以上の適任者はいないと思うのですけれど……」

「ちょっと待ちなさい」

紫が語り終えた所で靈夢が反意を明らかに話し始める。

「勇輝さんは幻想郷に来て長くない。それに、アンタの顔は今の里の在り方が気に入らないって言つてる」

靈夢の言葉に里の人々はざわめき立つ。

「紫様、少しお話が」

藍が真剣な表情で紫に耳打ちする。

「……そうね。私とした事が、何を焦つてているのか」

紫は肩を落とし、溜息を吐く。

「今の話し、聞かなかつた事にして貰いましょう」

紫がそれだけ言つと、回りから自分は今何をしていた？　何故賢者様があそこに？　という声が。

「……えげつない事しますね」

恐らくは一部を除く者の記憶を消した。勇輝は紫の話を覚えているし、靈夢やレミリアは紫を睨み付けている。

「さて、残り一日のこの祭、存分に楽しめるよう祈つてますわ

それだけ言つて、紫は藍と橙を連れスキマの中に消えていく。

それを見て、勇輝は呟いた。

「人と妖怪の共生する世界、か……」

それは、きっと叶わない幻想なのだろう。

「……暑いし、診療所に帰りたいんだけど」

「あら、エスコートしてくれるのではなかつたの？」

紅魔館一行、と言つてもレミリアとフラン、咲夜だけだが三人を案内するために勇輝は朝から駆り出されていた。

最初、靈夢をストッパーとして付ける予定だったが、昨日の勇輝の実力と、レミリアやフランの態度を見てこのメンバーでの行動が許された。

他、魔理沙はアリスと屋台巡り、妖夢は幽々子の付き添いで、幽々子は屋台で食べ歩き。靈夢は萃香と酒盛り。……酒を屋台に出す事を聞いた覚えは無いのだが。

プリズムリバー三姉妹は例の場所で演奏中、客足は少な……そこまで多くないらしい。

パチュリーは美鈴を連れて帰った。何でも教育をするらしい。チルノも避暑のため霧の湖に帰還した。

「あれは何？」

レミリアが一つの屋台を指差して勇輝に尋ねる。

「えっと、確か射的屋だな。……現代とは大違ひだ

ここでの射的は、獵銃で的を撃ち抜き得点に応じた賞品を。というのだ。

……子供がやつているのを見た時は本当に頭が痛くなつた。片頭痛に罹る勢いで。

「面白セハヅヤない、やつてみましょ」

「おー、走るなつて」

走るなら日傘を自分で持つてからにして欲しい。それより、仮にも五百年生きているのならもう少し落ち着いて行動をして欲しい。

そして、今日はやけにフランが大人しい。何かあつたのだろうか、そう聞いたらレミリアのせいだと言われた。……まあ、大体予想は着く。

獵銃は重い。そして反動が意外とある。……とりあえず子供にやらせるのは止めてほしい。

「…………」の屋台、潰しても構わないかしら

「的が見えないなら即に乗れ、騒ぎだけは起こさないでくれ」

一方、魔理沙とアリスはと言つと。

「そこ」の婆さん。ちょっと見ていいのか？　里では手に入らないマジックアイテムだぜ」

そんな事を言いながらガラクタにも見えるマジックアイテムを売る

うとする魔理沙に、アリスは頭を抱える。

勿論許可など取っていないし、そもそもアリスは普通に祭を楽しむ予定だった。

「これねー」を押すと……あれ？」

実況販売でもしようとしたのか、魔理沙が「マジックアイテムの説明をしようとしている。しかし反応しない。

「……他の人と回れば良かつたかしら」

そんなアリスの呟きは魔理沙に聞こえる事は無い。

「妖夢、次はアレが食べたいわ」

「幽々子様、あの店は昨日寄ったじゃないですか」

「でも、美味しかったのよ?」

「……ハア、分かりました」

妖夢は屋台の方に歩いて行き、商品を買って幽々子の元に戻る。

「どうぞ、幽々子様」

「…………」

しかし、幽々子は菓子の入った袋をじっと見つめて黙り込む。

そして、菓子を一つ取り出し渋ったような声で。

「妖夢、お礼に一つ食べていいわ」

「買つて来たのもお金を出したのも私なんですけど」

と言いつつも妖夢は菓子を受け取る。それに満足したのか、幽々子は自分の分の菓子を取り出し食べ始める。

「という訳でやつてきました。第九回戦。魔砲使い、霧雨 魔理沙選手対、パツ……悪魔の従者、十六夜 咲夜選手の戦いです」

何の脈絡も無く射命丸の実況が開始される。

現在時刻は午後三時といった所。各自昼食を終えるなり屋台巡りをして、一息つく時間帯だ。

人足は昨日よりも多く、普通に立っていたのでは試合が見えない。

「それで、私達の所に来たの」

「こんなパラソル用意して来る辺りは流石だと思つ。常識人には考えられない」

紅魔館の皆さんは常識外れの様でした。昨日からだが。

「レミコアはビリが勝つと思つ?」

「咲夜に決まつてゐるじゃなし」

即答かよ、と声には出さないが呆れる。

「それはどうかしらね」

後ろから聞こえたレミコアでもフランでも無い声に勇輝は振り向く。

「アリス? 何でここだ?

「人が少ないから」

考える事は同じらしい。

「それで、魔理沙は何か秘策でもあるのか?」

「無いわ。けどね、ここ何日もずっと私も靈夢と弾幕ごっこ練習をしていたし、珍しくアドバイスまでして貰つっていたわ」

「それだけでウチの咲夜に勝てる? でも?」

レミコアは眉を顰めてアリスに問う。

「可能性は、十分にあるわよ」

咲夜は一度魔理沙に圧勝しているし、それは一人とも承知している。なのに何故アリスはいつも魔理沙を買つていてるのか、それがレミコア

アには理解できない。

だが、アリスは言い切つた。何故なら……。

「だつて、私じゃもう魔理沙に太刀打ち出来ないんだもの」

「リベンジ戦か、燃える展開だぜ」

「そう。でも、今日はお嬢様の前だから勝ちは譲つてあげられないの。」じめんなさいね

「勝利は奪い取るものだぜ」

「貴女が奪うのは図書館の本でしょう？」

「アレは借りてるだけだ、私が死ぬまでの間」

「それを奪つていると言わなくて何と言つのよ」

「固い事言つなよ、私の方が先に逝くのは目に見えてるだろ」

「そりいえば、貴女はまだ人間だつたわね」

そこで、会話が途切れる。

射命丸が一人を交互に見てから息を吸い込み、大きな声で宣言する。

「では、試合開始ッ……」

其の漆拾弐

最初に動いたのは、以外にも咲夜の方だつた。

小手調べ、といったよつに四本のナイフが魔理沙に迫る。

魔理沙は既に簫に跨つており、持ち前の速さでそれを避ける。

次の瞬間には魔理沙を囮う様に展開された弾幕の輪が。

「咲夜選手、いきなり能力を使用しての弾幕だーッ！」

勇輝はチラリとアリスの方を見る。

しかしアリスの表情に焦りは無く、余裕すらあるよつに思えた。

「それはもう見飽きてるぜ」

魔理沙は魔砲でナイフを消し飛ばす事も、スペルカードで反撃する事もしない。

淡々とナイフを避け、空中を舞つ。

「成程、少しは考へてるのね」

じゃあこれはビツ？、と咲夜が次の攻撃に移る。

そして、魔理沙を三百六十度、前後左右上下を取り巻く弾幕が現れた。

これは避けられない。

「そいつは無理だ。けど突破口が無いなら作るだけだぜ」

魔理沙が小規模な魔砲で、弾幕の球体に人間一人が通れる程の穴を開け飛び出してくる。

咲夜の弾幕には能力を解いてから弾幕が動き出すまでほんの少しタイミングがある。

一定の実力者が身を守るのには十分な時間だ。

「次はこっちの番だぜ。星符『オールドクラウド』！」

魔理沙の周りにいくつもの魔法陣が現れ、意志を持つかの様にリンクの中を回り始める。

「…………？」

咲夜は見たことの無いスペルカードに動きを止め、警戒する。

その視線は、完全に魔理沙から外れていた。

そして動き回る魔法陣は一斉に攻撃を始める。

魔法陣から無数の星屑のような形状の弾幕が放たれ、咲夜に迫つて行く。

しかし、咲夜からしたらこの程度の弾幕は容易く避ける事が出来る

し、実際に避ける事が出来ている。

前回の戦いの時とは大分スタンスが変わっているが、これなら前の方が厄介だったと咲夜は思つ。

が、次の瞬間には認識を改める事になる。

「恋符『マスタースパーク』！」

魔理沙は、咲夜の遙か上空からリングから食み出しかねない程の大きさの魔砲を放つた。

この戦いは、リングの中で、肉眼で確認できる高さまでの範囲での戦い。

区切りは円ではなく円柱。そして、リングギリギリの魔砲を避ける手段等存在しない。

咲夜は咄嗟に自分を囲む空間の時間を操り、少しでもダメージを減らそうとする。

次の瞬間、魔砲が咲夜を呑み込んだ。

勇輝がチラリと隣を見れば心配そうにあたふたするレミコアの姿が。

「……まだ一回戦じやなかつたつけ」

気分的には準決勝辺りの試合。というか、一度ずつ試合を消化しただけで二、三倍のレベルの試合。これは射命丸を問い合わせなければ。

リングに田を向けると魔砲の光は段々と薄れ、咲夜の姿が露になつていく。

メイド服が多少破れ肌が見えている事から完全には防げなかつた事が窺える。

「……【撃墜】」

「稗田審判からヒック宣言！ 先制したのは魔理沙選だアーッ！」

高らかに声を上げる射命丸。……活き活きしている、とても。

しかし咲夜もやられっぱなしではない。

「時符『トンネルエフェクト』」

魔理沙を囮つ何重ものナイフ、そして弾幕。

「何だやつても無駄だぜ！」

「なつ……ー？」

魔理沙の魔砲が咲夜の弾幕を搔き消す。そう、誰もが思つたしかし。

「時が止まつてゐる物に、干渉は出来ないのよ

魔理沙の砲撃など意に介さなかつたかの様にナイフは魔理沙を襲う。

咲夜は一時的にナイフの時を止める事で魔砲による干渉が出来なくした。リスクと言えば相手に時間を『えてしまう事だが、全方位を

囮んでいる今、そんな事は関係ない。

「刃は潰してあるから安心するといいわ。それでも十分に痛いでしょうけど」

「だれが諦めるか、私はまだ手を残してるぜ」

「そう……。でも、警戒を緩めるのは危ないわよ」

次の瞬間、魔理沙の帽子が宙を舞つた。後ろから一本だけ、他の数倍の速さで迫つて来たナイフに持つて行かれたのだ。

それはいつでも倒せるという余裕からか。魔理沙は冷や汗を流す。

「言わねなくてもやつてやるぜ。彗星『ブレイジングスター』！」

そのスペルカードを見て、誰もが絶句した。

魔理沙自身が、膨大な魔力を身に纏い魔砲の様に向かつたのだ。

萃香が似たようなスペルカードを使っていたが、あちらは弾幕を撒いて行くのが主だった。

しかし魔理沙は違つた。

魔砲使いとは言い得て妙だつたのかもしれない。大きさも、スピードも萃香の倍以上だ。

咲夜は表情を引き締め全力で回避に回る。

あれではナイフも弾幕も、当たる前にかき消されてしまう。

攻撃は最大の防御、まさにそういうスペルカードだ。

……靈夢辺りなら力尽くで止められるのだろうが。

しかし、咲夜には相性が悪い。

咲夜は強力な弾幕を使わない。いや、使えないのだ。

能力は強力だが、燃費が悪いらしい。体力をこつそり持つて行かれ るんだとか。

よつて咲夜が使う弾幕は能力と併用するために靈力弾よりもナイフ が多くなる、そして、勿論火力が下がってしまいます。

魔理沙の魔力が尽きるのが先か、咲夜が当たるのが先か。

「……魔理沙の勝ち、かな」

勇輝の呴きにレミリアが眉を顰める。

「どういう事?」

「精神的な問題。魔理沙は無失点、咲夜は一機削られてる。あそこで攻撃を当てて置けばここでも余裕が持てたんだろうけど、一度勝つたつて実績が油断を招いたんだろうな。んで、失敗したことから生まれた負の感情はミスをしやすくなる。……って訳なんだけど」

「……それで勝負は決まらないでしょ？」

「実際、咲夜には強力な攻撃方法が無い。そして魔理沙の魔力の量はふざけているとしか思えないぐらい多い。咲夜が不利な事に変わりないな」

「…………」

レミコアが無言で睨みつけてくる。あくまで仮説を立てただけなのがだが。

視線を試合に戻すが、変わらず魔理沙の一方的な攻撃が続いていた。

「ツー！」

咲夜の身体から数センチの場所を魔理沙が通過する。

その強大な魔力が咲夜の背筋を凍らせた。

咲夜はナイフを飛ばすが、最早意味を成さない。

油断せずに攻撃しておけば勝負は着いていたかも知れないと思うと自責の念が込み上げてくる。

魔理沙にも限界はある筈。だが、衰えなど微塵も感じ取れない。

負けるのか。そんな思いが脳裏に浮かぶ。

「……せめて、一撃は当てようかしら」

咲夜は、一本だけナイフを取り出す。顔を上げれば、魔理沙がすぐ目の前まで迫つてきているのが見えた。

「くつ……」

魔理沙は痛む肩を抑えながら迫るナイフを避け続ける。

咲夜は空中でナイフを停止させ、放置した。

魔理沙のあのスペルカードは視界が悪くなるという欠点がある。

障害物が粉碎できる程に強力だったため、特に気にしていなかつたがこうもあっさり止められるとは思つていなかつた。

時間が止まっている物に干渉は出来ない。止まつたまま浮かぶナイフに魔理沙は自分から当たつてしまい肩を負傷する。

勿論咲夜も無傷では無い、隕石が掠つたかのような衝撃に肩で息をし、ボロボロの身体に鞭を打つて戦つている。

現在、お互いの残機が一になつた所だ。

一瞬でも気を抜いた方が負ける。

「空虚』インフレーションスクワード』

咲夜のナイフが舞い。

「魔十字『グランドクロス』！」

魔理沙の魔砲がそれを焼き消す。

お互い集中力が切れ掛けで危ない場面が増えて来ている。

「約束、したんだ……」

魔理沙が、スペルカードを取り出す。

「勝つて、勇輝と戦うって……」

そして、その符の名を叫ぶ。

「魔砲『ファイナルマスター・スパーク』！！」

光がその場にいた全員の目を晦まし、誰もが目を覆つた。

光が収まつた時、最初に聞こえたのは。

「勝者、魔理沙選手！」

魔理沙の勝利を告げる声だつた。

其の漆拾参

「さて……」

勇輝はリングの方に向かつて歩き出す。魔理沙が勝ったからには自分も負けていられない。

相手は美鈴を赤子の様に扱う程の実力者、一切の妥協は許されない。

「第十試合、外道のお医者さん、桜井 勇輝選手とフランワーマスター、風見 幽香選手の戦いです！」

「……誰が外道だ」

確かに能力封じ、騙し討ちなど卑怯な手は使つたものの、外道とまで呼ばれる筋合いは無いと勇輝は思う。

「何でも良いけれど、早く始めてくれないかしら」

幽香が溜息を吐いて試合開始の催促をする。

「試合開始！」

「え、ちょっと……」

勇輝の声は誰にも届く事無く、幽香が持つていた日傘を振り被つて勇輝に襲い掛かる。

咄嗟に避ける事が出来たが、先程まで勇輝が立っていた地面は割れ

ていた。

「あら、意外と速い……」

避けられた事などどうでも良いと言つた感じに、幽香が弾幕を放つ。一見、花の様に見えるそれは美しく、見ていて飽きない。しかしその弾は熊をも一撃で昏倒させる程の威力を持つている。

「幽香選手、いきなりの猛攻撃！ これでは外道も打つ手なしか？」なんて不公平な実況だらうか、しかし勇輝にはそんな事を気にしている余裕もない。

「クソッ、こんな弾幕……」

勇輝は靈力で大剣を作り出し、巨大な花を両断する。

しかし、その鼻先には既に幽香の傘が迫っていた。

ガツつという痛々しい音と共に勇輝の身体は後方に飛ばされ、受け身を取る事も出来ずに地面に背中から落ちる。

その衝撃で肺から酸素が抜け、一瞬の息苦しさを感じる。

顔は腕で庇う事が出来た、しかし……。

「勇輝選手に幽香選手の攻撃がヒット！ しかしそこは外道、ゴキブリの如く生命力で立ち上がって来ます！ ……？ どうしたのでしょうか、勇輝選手の腕が片方おかしな方向に……折れていますね」

妖怪と人間の絶望的な腕力の差、それによる勇輝は靈力も纏っていない状態で攻撃を受けてしまった。

「まだ戦えるようね。鬼に勝つたんだからもう少し楽しめると思つたのに、期待外れよ」

「……上等だ、後悔しやがれ」

相手は手加減などまるでする氣は無いし、殺しても構わないと思つてゐる。

ならば、こちらも全力で、最高の状態で相手をしなければならない。腕が折られているのだ。もう、副作用云々の話をしている場合ではないし、何より……。

自分の勝利を期待している者がいるのだ、期待外れと言われたまま終わる訳にはいかない。

「……力の小ささは、欠陥である」

それは、幽香の中での人間に對する常識を覆すのに十分な変化。

「人体の損傷は、欠陥である」

目の前の人間は、折れた腕が治つたどころか、自分の妖力と同等、あるいはそれ以上の靈力を有している。先程までは足元にも及ばなかつたというのに。

「とりあえず仕返しだ、一回吹つ飛べ」

不可視の攻撃が幽香を吹き飛ばす。

「これはどういう事でしょう！？ 勇輝選手の腕が治つたと思つたら幽香選手が見えない何かに吹き飛ばされました、……判定は？」

「……【無効】」

「判断できない、見えてないからな」

審判に勇輝の味方は居なかつた。

「……」「めんなさい、薦めてたわ」

幽香はスクッと立ち上がり、謝罪の言葉を述べる。

「だから、全力で貴方を潰しにかかる」

勇輝の背中に冷たいものが走る。

次の瞬間に見えたのは幽香の弾幕。それも、視界を埋め尽くす程の量だ。

「悪いけど負ける気はしないってな」

勇輝は増えた靈力を存分に使い靈力の壁を生み出す。

魔理沙の魔砲すら受け止める壁だ、打ち碎くのは容易ではない。

幽香もそれを理解したのか、回り込んで傘を振るおつとまる。

勇輝は瞬時に靈力の刀を作り出し、それを受け止める。

速い、そして普通の人間では耐えられない程に重い攻撃。

「なかなか出来るじゃない、安心したわ」

「そいつはどれも……」

傘を受け止める腕が振るえる。

身体能力を上げた上で靈力で強化しても受け止めるのが精一杯。一
体目の前の妖怪はどれ程の力を持つているというのか。

勇輝は靈力を更に放出し、靈力の刀の形状を無理矢理に変え幽香を
攻撃する。

しかし、あれだけの力を籠めていたにも関わらずあっさりと後ろに
回避された。

「……化物かよ」

「妖怪、それぐらい知ってるわよね」

「ああ、そうだな。本当に化物そのものだ」

勝つ手段は多くは無い。

萃香と違つて騙し討ちが通じる様な相手だとも思えない。

思考を巡らせ、打開策を考える。

「……何を考えているのかは分からぬけど、そろそろ終わらせてあげる。花符『幻想郷の開花』」

幽香がスペルカードを使つ。

遠くから見れば花の様に見えるのだろう、しかし勇輝には弾幕の波にしか見えない。

「霧符『葬々霧』！」

勇輝も負けじとスペルカードで対抗する。

しかし、勇輝のスペルカードは誰もが予想する事が出来ないようなものだった。

リングを視認する事は誰にもできない。青い靈力の瘴気が全てを隠し包んでしまったのだ。

「勇輝選手、そこはやはり外道！ 相手の目を潰して暗躍するするりでしょか？ ですが見えなければヒット判定も出来ない事が理解できなんでしょうか？」

しかし、射命丸の予想とは裏腹に丁度射命丸と幽香を結ぶよつて、その線だけが霧が晴れた。

「つッ……ー？」

そして、霧の一部が渦巻き靈力弾となつて幽香を襲つた。

それを確認できたのは戦つている一人と射命丸のみ。

「ヒット！ しかしこれは卑劣、本当に勇輝選手にプライドはないのか？」

射命丸の実況など誰も聞いてはいないが、試合が見れない事に不満の表情を見せている。

そして、それ以上に不快だつたのは当たつた本人である幽香だつた。

幽香は傘を思い切り振るい、霧を吹き飛ばす。

「……こつちの妖力はこの霧に食い潰されたのね。どこまでも面白くない戦い方」

幽香は妖力で巨大な葉を作り、それを恐ろしい程の腕力で振るつ。

暴風は全ての霧を一瞬で吹き飛ばした。だが、勇輝の姿を確認できない。

「上だ」

勇輝は幽香の肩に思い切り踵を振り降ろす。

鈍い音と共に幽香の大勢は崩れる。

「勇輝選手、続けてヒットオ！ 先程の陰湿な攻撃とは一転、清々しい踵落としです！」

「いい加減うるせえよー。もつ少し真面目に実況しろー。」

心の底からイライラした様な口調で勇輝は叫ぶ。

しかし、一瞬でも幽香から気を逸らしてしまったのは失敗だった。

勇輝の顔に、傘が叩き付けられる。

地面を割るほどの衝撃に、首の辺りで鳴ってはならない音が鳴る。
幽香はその音にハツとし、殺してしまったかもしれない人間に目を向ける。

「…………ッ！ ゲホッ、あー死ぬ。痛いにも程がある」

しかし、勇輝はそんな事をモノともせずに立ち上がった。

幽香の目は驚愕で見開かれる。

確実に折った。手応えからして間違いない。

「ん？ ああ、悪いけど死はないんだよね、俺」

ケロッとした声で勇輝は幽香に説明する。骨折なんて欠陥は既に修正した。

「じゃあ、次はこっちの番だ」

「ツー！」

幽香はこれ以上ないぐらいの警戒をする。

リングの中は勇輝の靈力の痕跡が残りすぎていて、見えない靈力弾を感知するのは容易ではない。

だから、自分の後ろに集まつて行く靈力に、幽香は気づけない。

「チェックメイトだ」

勇輝は自分の方から弾幕を放ち、尚且つ幽香の後ろに集めた靈力を操作する。

幽香は前方からの弾幕を躊躇切つた、しかし安心した所で後ろから迫つた弾に被弾してしまつ。

「勝者、勇輝選手！」

其の漆拾肆

十一回戦は靈夢の勝利、十二回戦はレミリアが棄権という形で終了した。

日の下に出られないのだから仕方ないとは言え、レミリアはとても悔しそうにしていた。

「では次の試合、準決勝、霧雨 魔理沙選手対、桜井 勇輝選手の試合です。お一人はさつさと出て来てください」

「へ、一日に一人一試合じゃないのか？」

射命丸の言葉に勇輝は思わず問いかける。

「何言つてるんですか、お祭は今日含めてあと二日。決勝は明日、準決勝は今日です」

「聞いてねえよ！ 事前に説明しろよ鳥頭！」

「あーはいはい。あんまり審判に文句をつけると減点しますからねー」

「…………」

何が都合が悪いかと言つと、勇輝は能力を既に使い切つてしまつている。

靈力と身体能力はまだ十分にあるが、紅魔館での一件でそれだけで

は不安が残るのは分かりきつている。

「どうしたんだ勇輝、怖氣づいたのか？」

魔理沙が挑発的な笑みを浮かべて話しかけてくる。

既にリングの中に入つたが、テンションは最低ラインだ。

「いや、つべづべ俺の周りにはまともな奴が居ないと思つてな」

「失礼な。私はまともだぜ」

「どの口がそんな事を言つのか……」

「それより、本気で戦つのは霧の異変の時以来だよな。あの時は引き分けだった、今日は勝たせて貰つぜ」

「あー、どっちも動けなくなつたんだつけか？ 僕がボロボロにされ、魔理沙は魔力の使い過ぎだった気がするんだけど」

「確かにそんな感じだつたな。忘れたけど」

「じこまでも自己中心的な奴だ、と勇輝は溜息を吐く。

それを狙つたかのよ！」

「試合、開始ッ！」

目の前を、魔砲が覆い尽くした。

「ま、そんな簡単には当たつてやられーよ

勇輝は地面を蹴り、自分から見て左に回避する。そのまま靈力の刀を作り出し、魔理沙に切りかかる。

だが魔理沙も簡単には負けるつもりは無い。勇輝の刀を箒で受け止め、更に勇輝を狙う四つの魔法陣を展開させ、勇輝を狙い撃つ。

しかし、弾は全て地面に当たり砂煙を撒き上がらせるだけに終わつた。

「萃香との戦いを見てなかつた訳じやないだろ?」

魔理沙の背後から勇輝の声がする。

その声に、魔理沙は一イツと笑みを浮かべた。

「ツ!」

魔理沙の背後に現れた魔法陣に、勇輝は慌てて距離を取る。

瞬時に、魔法陣からは魔砲が放たれた。

それ有何とか避け、勇輝は咳く。

「魔理沙が頭を使つてるだと……?」

失礼極まりない発言だが、スペルカードや魔砲を乱発していた魔理沙を見ている勇輝にとつて衝撃的な程に魔理沙は細かな戦いをしていた。

「行くぜ。天儀『オーレリーズソーラーシステム』！」

またも勇輝は聞いた事のないスペルカード。

しかし、それは咲夜と魔理沙の戦いで使用されたモノに似ていた。

いくつとも魔法陣がリングの中を回り始める。

あの星屑のような弾幕なら壁を作り出して防ぐ事が可能だが、そうはいかないのだろう。

魔理沙は箒に乗り、上空へと移動する。

そして、一斉に無数のレーザーにも見える弾幕で魔法陣が勇輝を狙い撃つた。

速く、鋭いそれはレミリアのグングニルには劣るもの、数は倍以上、方向はあらゆる面から。

「成程ね、確かに強力だ……」

勇輝は避ける訳でも、壁を作り受け止める訳でもなく、それを撃ち落とす。

身体能力の向上は力や速さが上がるだけではない。動体視力、反射神経も身体能力の一部だ。

当然、修正が施されている。

模範としているレミリアに見える程度の速さなら見る事が出来るし、反応出来るモノなら反応する事が出来る。

後は結構な靈力を込めた弾で相殺し、撃ち落すだけ。

しかし一向に攻撃が止む気配は無い。これでは消耗戦になるだけだ。

「……なら、映符『靈符 夢想封印 散』！」

お札状の弾幕が破裂したかのように飛び散る。

それは魔理沙の弾幕を相殺した上、魔法陣を次々に破壊していった。

「やるな、ケビン! からだぜ。魔空『アステロイドベルト』！」

その名の通り、空を埋め尽くす程の量の弾幕が勇輝に降り掛かって行く。

勇輝もスペルカードを取り出す。

「武符『武投乱舞』！」

時に靈力で出来た剣が、槍が魔力で出来た星屑を貫き、時に魔力で出来た星屑は靈力で出来た武器を押し潰していく。

拮抗しているように見えても、危ないのは勇輝の方だ。

砕けた星屑は消える事無く、地面に落ちていくのだから。

「面倒な……」

眉を顰めながらも、勇輝は回避を続ける。

お互いに使ったスペルカードは一枚。残り八枚で決着を着けなければ勇輝が負ける可能性は高い。

スペルカードルールは魅せる戦い。もし引き分けになつたらより弾幕の美しい方が勝者となる。

ぶっちゃけた話、勇輝にそのセンスは無い。

偶々綺麗に見える弾幕を作る事は出来ても、意図して作ると絶対に当たらない弾幕が出来るのだ。

よつて勇輝のスペルカードは威力、効率、命中率、趣味等の内から作られる事が多い。

他人のスペルカードを「コピー」した映符は勇輝自身のスペルカードではないため採点基準以前の問題だ。

「どうしたんだ勇輝、私が強くなり過ぎてビビッてるのか？」

「まさか。魔理沙をこれ以上ないくらいの勝ち方で倒す方法を考えてんだよ」

魔理沙は再び魔法陣を撒き散らし、星屑を降らせる。

勇輝は空中に靈力の足場を作り出し、それを昇つて魔理沙と同じ高度に立つ。

「『』れはあまり使いたく無かつたんだけどな……」

そつ言つて勇輝が懐から取り出したのは黒い小さな鉄の塊。

「いやいや、それはルール違反だな」

拳銃だつた。

「いや、一応弾だし死ぬ心配は無い。当たり所云々は弁えてるから安心して撃たれると良いよ」

「つか、どこでそんなもん手に入れたんだ？ 里じゃ売つてない筈だぜ」

「森近の所に壊れたヤツがあつたから、元に戻して改造した」

パンツ、と乾いた音が鳴り響き拳銃の銃口から煙が上がる。

そして、魔理沙の脇腹の辺りは赤い液体で滲んでいた。

「ヒットオ！つて、殺傷武器は禁止なんですがビー！」

射命丸が宣言するが、慌てて止めに入る。

撃たれた魔理沙は……。

「…………痛くない？」

「ペイント弾だ、水で落ちるけど長い間放置すると落ちないかもな」

もつ」これは使えないか、と勇輝はそれを地面に落とす。

「さすが勇輝選手、勝つためならどんな手段も使つ。外道、悪党、まさにクズ！」

驚かされた事が気に入らないのか射命丸が暴言を吐いている。もう慣れたと勇輝は溜息を吐くだけに終わるが。

「油断してたぜ。だけど次はもつない！ 光撃『ショート・ザ・ムーン』！」

星屑を撒いていたリングの中を回り続ける魔法陣。そこから空に向かってレーザーが放たれる。

足場を崩し、それは勇輝に迫るが今更その攻撃は通用しない。

簡単に勇輝は避けていく。

だが、それだけでは終わらない。

魔理沙自身も星形の弾幕を放ち、勇輝を追い詰め始めた。

レーザーで行動を制限され、そこを魔理沙が狙い撃つ。

「ツ！」

レーザーが勇輝の腕を掠めた。

「ヒット！ 魔理沙選手の攻撃が当たりました。やまないですー！」

しかし、本当にこれは拙かつた。

スペルカードを使う暇もない。足場を作るのに精一杯なので攻撃に移れない。

靈力の消費が大きいので使いたくはなかつたが、翼を作り出し更に上空へと回避する。

それを追つて魔理沙も飛び上がる。

「薬災『分量違ひの猛毒薬』！」

勇輝は一つ一つがパチンコ玉程の大きさの弾幕を撃つ。

急上昇していた魔理沙は勢いを殺し切れずに一撃を貰つてしまつ。

負けじと魔理沙もスペルカードで応戦する。

「魔符『ミルキーウェイ』！」

大きな星型の弾幕。

それは勇輝の作り出した翼に当たり、射命丸がヒットを宣言した。

残りお互いに一機。

「恋符『マスタースパーク』！」
「焉撃『ライフピリオド』！」

息を合わせたかのように、魔理沙が魔砲を放ち勇輝は靈力の砲撃を

放つ。

拮抗し、凌ぎ合つそれを見て外野は手に汗を握り、呼吸を忘れた。

「私の勝ちだぜ、勇輝」

魔理沙はそう笑い、残っていた全ての魔力を注ぎ込む。

威力を増した魔砲は靈力の砲撃と共に勇輝を飲み込んだ。

「勝者、魔理沙選手！」

祭三日目。

「約束を果たして貰おうか」

本来、祭の席に居なくてはならない勇輝は此処、博麗神社で一人の妖怪と向かい合っていた。

「ええ、約束は守るわよ。今から貴方を外界に送る。期間は四十八時間、それまでに要件を終え博麗神社に戻る事。それは理解して貰えていいかしら」

勇輝が祭りを成功させた時の報酬、それは外界への帰還だった。

見ればその服装もいつもの白衣ではなく、幻想郷に迷い込んでしまった時に着ていた物だ。

「分かつて。それよりこっちからの条件も覚えてるな？ 僕が外界から持ち込む物、外界での行動には一切関与しない。監視もだ」

「弁えているわ。……それと、もう一度言つておくわね。貴方の存在は既に忘れられている。戸籍も、写真も、記憶も、全てが無かつた事にされている。それが幻想郷で暮らすという事よ」

「向こうで馬鹿やつてた連中と話せないのは惜しいけど、それ以上に今が充実している。悔いがないって訳じゃないけどそこは割り切つてゐや」

「そつ……。通貨は共通だからこちらの物がそのまま使えるわ。少しの間、感慨に浸つて来なさい」

勇輝は紫に背を向け、博麗神社の鳥居へと向き直る。

その向いの階段の下に見えるのは妖怪が住んでいるような森では無く、ある程度整備された道。

結界が解かれ、外界と繋がっているのだ。

そして、勇輝は一段一段階段を踏み締め、道路へと足を着ける。

振り返った時、勇輝の知っているあの博麗神社はもう無い。

何の変哲も無い、寂れた神社がポツンと建っているのが見えるだけだった。

「……さて、まずはここが何処か調べるか」

勇輝が目的地に到着したのは半日が過ぎた頃だった。

思つた以上に田舎で、思つた以上に遠かつたのだ。

空気が悪く感じるのは幻想郷で暮らしていたからだろうか？ 自動車が車道を埋め尽くし、人が溢れ返る街中はどこか他人事のように感じられ、そして懐かしかった。

帰つて來た。

それを実感するには何かが欠けている。それもそうだ、自分はもう、この世界から外れてしまった存在なのだから。

両手をポケットに突っ込んで、自分の記憶と照らし合わせながら街を歩く。

時刻は昼をけつこう過ぎてしまった十五時。空腹は感じないが何か胃の中に入れて措かなければ身が持たないかもしれない。

そう思つてコンビニに立ち寄り直ぐに食べられる物を探す。

そして実感する。現代はここまで便利であると。

幻想郷は自分で食べ物を集め、作るしかない。紅魔館は咲夜が用意してくれていたが人里に住み始めてからはそつはいかなかつた。

一種の感動を覚えながらも惣菜パンを購入し、コンビニの前で食べてから再び歩き出す。

自分に関係あるものが一切消えてしまつているという話なのだから、今更こんな街に用は無い。

その筈なのに、自分の足はある場所に向かつてしまつ。

それは少しの、何の根拠もない儂い期待。

奴なら、あの男なら何か覚えているかもしない。そんな気がしてならないのだ。

街の中心部から少し離れて、一軒の武家屋敷の前を通りかかる。

「…………」

かつて、父親と一緒に仕事に来た場所だ。

それはもう命懸けの仕事で、指の一本や一本、片方の耳を失つてもおかしくないぐらい危険なものだった。

そんな屋敷を極力見ないようにし、勇輝は歩き続ける。

勇輝はあるマンションの一室の前で立ち止まつた。

表札には【桜井】の文字があり、勇輝の心臓は高鳴る。

ドアノブに手をかけてみると、鍵がかかっていた。どうやら中には誰も居ないようだ。

安心と、がっかりした気持ちを感じながら勇輝はバッグから鍵を取り出し、そのドアを開ける。

カチヤンという音を立てて鍵が開く。

勇輝はドアをゆっくりと開けて、中を覗き見る。

玄関に靴は無い。それどころか、玄関一帯が埃を被っていた。

数週間、下手したら数ヶ月の間、人の出入りが無かったという事。

埃塗れの床を歩くのもどうかと思ったが、既に他人の家もある。
靴を脱いでから上がる。

最初に向かったのはリビング。

テレビが一台、テーブルが一つ、そして、イスが一つ。

そこには三つのイスがあつた筈なのに、その面影は無い。覚悟していたとはいっても、胸を締め付けられるような思いだつた。

写真立ての中にある写真に、自分の姿は無い。食器棚の箸や皿は父親と、今亡き母親の物だけが置かれている。

耐えられない。

勇輝は踵を返し、リビングを出る。

次に向かったのは父親の部屋だ。

部屋の中は一端の研究室の様で、山の様に積み上げられたレポート。怪しげな薬品。大型のパソコンと、分厚い本の並べられた本棚。

何も変わっていない。それに勇輝は安堵する。

勇輝は部屋の奥に進もうとし、コシンと何かを蹴つてしまつ。

何かの薬品の瓶だった。拾い上げてラベルを見ればこう書かれている。

【ヒカル】、ゾーン。ドイツ語で……息子。

それを理解した時、勇輝は駆け出していた。

かつて自分の使っていた部屋、そのドアを少々乱暴に開け放ち、中を見る。

最初から使われていなかつたかのようにポツカリと空いている部屋。

使っていたベッドも、机も、本棚も何も無い。

その部屋の中心に、ポツンとローラー付きのイスが。

その上には、天井を仰ぎ見ながら煙草を吹かしている一人の男の姿があつた。

「よオ、遅かつたじゃねえか。クソ餓鬼」

それは紛れも無く、自分の父親の姿だった。

其の漆拾陸

煙草を吹かす人物はよれよれの白衣を纏い、一二十代後半のよつたな容姿をしている。

これで既に規格外な存在だが、行動は更に規格外な父親だ。

「遅かつた……？」

相変わらず口が悪いのに変わりは無い父親、しかし紫の話では自分は既にここには居ない存在となっている筈だ。

「どうして来るのが分かったか。いや、何で覚えてるって顔だな。そりゃあ手頃な助手が消えたんだ、少しは調べて見ようと思うのは当たり前だろ、片手間だったが」

片手間で居ない存在を探し出した？ それよりも、何故自分の事を息子だと認識できている？

「で、何したんだクソ餓鬼？ お前の居た証拠は何一つ存在していない。最初から居なかつたかのように。予想じやあオカルト的なモンに関わってるんだと思うが」

「……ホントに人間かよ。つーか何で覚えてんだクソ親父」

「さーね、俺が隣の国から戻つて来たら餓鬼のいた証拠が消えてる。戸籍も、家具も。そこまでだつたらどつかの組に喧嘩吹つ掛けてくたばつたのかと思うが、写真の中からも消えてやがる。コイツは普通の人間じゃ無理だ」

「……そつか。それで、今日ここに来るかもしれないってのははどうして分かった？」

「駅に監視カメラ、この範囲一キロでマンションに通じる道全てにカメラ、んでマンションの入り口にカメラだ。これだけあれば十分、確認はコイツで出来るしな」

そつと小型の端末を見せつけて来る。

それはやり過ぎではないのかとも思つたが、コイツは一応犯罪者だ。対策だらけ。

「次はコツチの質問にも答えるよ、お前を神隠ししたのは何だ？ 可能なら連れて来い、不可能なら居場所を教える。どちらも不可能なら正体だけ言え」

父親は怪しげな笑みを浮かべながら言つ。

いや、繫がりはもう既に存在しないのだ。目の前にいるのは父親であつて父親でない。桜井 魅憑という一人の人間。

それよりも不可解なのは魅憑が何故自分の事を覚えているのか。

単に国外に影響が無かつた？ しかし勇輝にそれを知る事は出来ない。

「妖怪、妖精、幽霊。……今一信用ならねえな。本当にいるんなら

解剖か実験に付き合つて貰いたい所だが……」

場所をリビングに移し、テーブルを挟んで向かい合つ形で二人は座る。

「それと、その靈力つてのは“氣”とは違うのか？　あつちなら大体の構造も、論理も持論を持つてるんだが」

「分からぬ、向こうにも氣を使う奴が居たけど詳しく述べた訳じやない」

「……なら、ある一定の条件でのみ感じ取れるモノ。いや、近すぎて気づけないモノ？　いや、仮に幻想郷とやらがあつたとして、作成者は既に何らかの力があつたと考えるべき……」

魅憑は口元に手を当てながらブツブツと呟く。

この男はいつもこうだった。

突拍子も無く何かについて考え、それを理解し、物にするまで何かを続ける。

歳は五十程だというのに見た目が二十代後半なのは人の細胞の衰退防止法を考え自分の身体を弄り回した結果なのだと。本人にしか知り得ない事なので確証は無い。

この男は人を救うために医者になつたのではない。人体を弄り回すのが、人の構造を調べるのが好きで物事を行つてきた結果が医者として発揮された。

学歴は高校まで、あとは独学。当然医師免許も資格も持っていない。靈力やら能力の事が分かるなら何人をバラバラにしてでも知りうとするのかもしない。

「……よし。クソ餓鬼、楽しい解剖の時間だ。喜びやがれ」

「断る、誰がテメエの解剖になんか付き合うか」

「同じ事言つなよ、お前の細胞の半分は俺の物だろうが」

「さーね、今はどうだか。それより、仮にも息子の俺が失踪してたのに感動の再会一つも無いってどういう事だ」

「俺が感動するのは人体の新たな神祕を見出せた時だけだ」

……」こんな男だが、その医療についての知識は数十年、下手したら百年近く先までのモノなのだ。この姿だから勇輝が高校生の時に担任から「お兄様はお呼びでは無いのですが……」と言われていたのはある意味滑稽であった。

そして、自分で勝手に病原体を作つては隣国に持ち込んで試す。その後ワクチンを使って治して逃走する。一度ついて行つた事があるがコイツの頭は末期ではないかと本気で疑つた。

「……まあ、元気そудだし安心したよ。俺はもう行く、他に見ておきたい場所や必要な物を買いたいし」

そう言って勇輝は立ち上がるが、その肩を急に掴まれ座り直させられる。

「まあやつはつな、一度仕事に付き合へ。丁度今夜、新しい仕事先を見つけて行く」

「……死ねばいいの？」

「俺はあと一百年は生きるつもりだ。何しろ老化が遅くてな」

化物かよ、と吐き捨てながらも勇輝は安心する。

本当に、田の前の男は何も変わっていなかつた。自分が幻想郷に迷い込む前と、何も……。

「行きたい所があれば行つておけ。ただし、十時には戻つてこい、仕事だ。拒否はさせねえぜ？　お前が消えたせいで狂つた予定は百を超えてるんだ」

「ヤニヤと笑いながら話す魅憑の顔からは、悪意しか感じられない。

勇輝は溜息を吐きながら「ひづれ」。

まともな方向になら、少しは変わつていて欲しかつた、と。

其の漆拾陸（後書き）

登場人物紹介

桜井 魅憑
さくらい みつき

年齢は五十に届くが、容姿は未だに二十代後半。

人を助けるためではなく、趣味で治療を行う結果で無免許の医師に。

その性格は異常なもので、小学生の時には自由工作で人体模型を作つた程。

医療知識は現代に広まっている物の数十年先まで進んでおり、よく外国の無法地帯で試したりしているとか、していないとか。また、医療とは関係なく人体研究を続けている。

身長は百八十程で、髪は乱雑に切り揃えてある黒髪。服装は皺だらけの白衣。

其の漆拾漆

「……なあ、毎度思うんだけど何しに行きたいの？」

「仕事探しだ」

そう言いながら魅憑は銀色のアタッシュケースに何かを詰め込んで行く。

しかし、その隣には鉛弾や銃器が「ロロ」と転がっており、とても穏やかな交渉になるとは思えない。

アタッシュケースをバタンと閉じ、魅憑は振り返る。

「さて、飯食つたら直ぐに行くぞ」

時刻は午後十時半、残業だとしても遅い時間である。

魅憑に連れられ、辿り着いたのは一件のビル。四階建てで、土地はそこまで広くないからか細長い印象を受ける。

魅憑はガラス製の自動ドアの前に立ち、開かない事を確認してから。

「オラア！」

アタッシュケースを振り回し、ガラスを叩き割る。

それと共に警報が鳴り響き、暗かつたビルに一斉に明かりが灯る。

「……ハア、どうしていつも暴力沙汰にしたがるんだか」

呆れた表情で魅憑を見送る。

勇輝の事など一切気にしていない様に魅憑はビルの中に入つてく。

聞こえて来るのは発砲音に悲鳴、本当に何がしたくて来ているのだ
ら？

音が一階に上がった事を確認すると、勇輝もビルの中へと入る。

入つて、少し通路を奥に進んだ所で腕と足を撃ち抜かれた男が蹲つ
ているのが見えた。

「テメエ……やつきの男の仲間か。何処の組のモンだ！？」

「あー、誤解しないで欲しいです。俺は一応医者田指して……いや、
医者やつてます」

「ふざけるなー、ドアぶち壊して銃片手に乗り込んでくる医者が何
処に居るー！」

「……認めたくないんですけど、いるんですよね。このビルの中に」

撃たれた男は見事に腱が切れてしまつていて、立ち上がる事さえ出
れない。普通なら全治数ヶ月、下手したら一度と動かせなくなる大
怪我。

それとは別に頭や肩にも包帯を巻いていた。恐らく、魅憑に此処が狙われた原因はコレだ。

とりあえず、動けない男を押さえつけながら止血を進めていく。これだけの怪我を負つて太い血管に傷一つ負つていなければ魅憑が意図してやつた事だつ。

骨も折れていないし、腱は魅憑が繋ぎ合せせるだつ。もうやる事はない。

呆けた様な顔をした男を放置し、勇輝は奥へと進んでいく。

最上階に行くまで計三十四人。きっと魅憑はしばらくは楽しそうに此処に通う事だらう。住み込むかもしれない。
最上階で確認できたのはソファに倒れ込んだ男の額に銃を押し当てる魅憑の姿だつた。

「何が、目的だ……」

「就職活動だ、文句あるか?」

「ウチ組の奴等を使い物にならなくして自分を売り込むか。この街にはとんだ化物がいたものだ」

だが魅憑マンションがあるのは隣街である。

「いや、そっちじゃねえ。お前等クズは当然公の場で治療は出来ねえ、だから俺が引き受けたやつってんだ。感謝しろ」

「医者？ 馬鹿を言つたな。医者がどうしてわざわざ怪我をさせる？」

「金取る為に決まつてんだる。それでどうだ？ 僕なら朝までに全員を元の身体に治せる、吹っ飛んだ耳も、潰れた眼も、？げた腕さえも戻してやる。氣に入つたなら契約書にサインしろ」

そう言つて、魅憑は白衣のポケットからぐしゃぐしゃに丸めた紙を広げて男に見せつける。

それを見た男は目を見開き、怒声を発した。

「正氣か！ 何だこの内容は、組を潰す氣か！？」

「ははつ、面白い事言つじやねえか。たつた十人を実験に借りるだけだ！」

契約内容はこうだ。組の関係者は魅憑の素性を調べない、報酬は魅憑の言い値で決める、月に十人を人体実験の被験体とする。これを破つた場合は他の契約者と魅憑自身が総力を挙げて関係者を抹殺する。

「誰がお前の様な危険人物に大切な組の奴等を渡すか！ 帰れ、貴様に用など無い！」

「強がるなよ、抗争の引き金は引かれてる。それを承知で俺は交渉に来ているんだ。このままなら……明日、ここは火事にでもなるんだろうな」

男の顔からサアアッと血の気が引いて行く。

その表情は恐怖と困惑で塗り固められていた。

「不景氣のこの御時世、仕事探しは楽しいねえオイ」

眠った男達が一列に並べられ、楽しそうに傷口を弄っている魅憑はやはり狂っている。

傷口からは筋肉が見えているものの、精々鼻血程度の出血しかしていない。何でも魅憑の使う弾丸は細く、貫通能力が高いのだとか。

勇輝も、魅憑が腱の治療を終えた者から傷口を縫い、塞いで行つた。

この男はいつもこうだ。以前は既に契約していた組だったにも関わらず、運悪く出会つた新入りに発砲された事から半数の人間に怪我を負わせた事がある。

初めて見た時は猛反対し、止めようとしたのだが、「どうせ後で治すんだからこっちのが安全」と言わされてそれ以上の抗議は無駄に。

「なあクソ餓鬼、生やすなら角か羽、どっちが良いと思つ?」

「頼むから普通の姿のままにしてくれ……」

つれない奴だ、と言いながらも最後の怪我人の治療を始める魅憑を見て勇輝も治療に専念する。

治療開始から三時間半、三十五人全員の治療が終了した。

「さて、これで仕事は終わりだ。そして喜べ、お前に一つだけプレゼントをくれてやる」

そう言つと、魅憑はアタッシュケースを『さあそと探し中から何かを取り出した。

それは……。

「……何だよそれ？」

魅憑が取り出したのは小さなビンだった。

中には透明な薬品が入っていて、ラベルも付いていない事から何の薬品かは判断できない。

「精力剤だ」

魅憑の言葉に、勇輝は思わず吹き出す。

「馬鹿だろ、何で餓別が精力剤なんだよ！」

「まあ。アレだ。個人的には人間と妖怪のハーフが見たい。つー訳で餓鬼、一匹作ってこい」

「例えそうなったとしてもお前だけには見せねーよ」

そう勇輝が言い返すと、魅憑は心底殘念そうな顔をする。

「さて、これでお前に言つ事も無くなつた。クソ餓鬼の割にはそこそこ出来るみてえだし、形だけの心配をする必要も無い。……行つてこい、精々目的のために足搔くんだな」

それだけ言つと、魅憑はアタツシユケースを掴んでビルの出口へと向かつた。

「…………」

最後まで口の悪い父親だった。アレなら自分が居ても居なくても、好きに暮らして行く事だろう。

まだ明け方まで時間がある。勇輝はバッグを背負い直し、ビルを出了た。

「あの餓鬼はそこそこ成長したのかねえ……。まだ俺の足元にも及びやしねえ、いつその事実験にでも使えば良かつたか？」

魅憑はまだビルに残っていた。正確には屋上に移動していたのだが。

そして、暗がりの中からは何者かの声が聞こえて来る。

「あ？…………ああ、あの薬か。アレは精力剤なんかじゃねーよ、強力なアルカリ性の液体。中に入つてるのは発信機、注意して見れば分かるサイズだが一日で溶けて無くなる。幻想郷とやらの場所を知るのには打つて付けの物だろ？ 気分としては有頂天ものだ」

暗がりの中にいるモノへ、魅憑は淡々と説明していく。

「いやいや、邪魔なんてする気はねえって。ただ、興味があつたんだよ。人の形をした、人ならざるモノ。構造とか、強度とか、細胞とか。今想像するだけでもわくわくするね」

暗がりからは呆れたような雰囲気が漂つ。

「さあ、準備を始めようか。お互にの目的を達する為に」

翌日、午後十一時三十分。

勇輝は外界の博麗神社へと再び足を運んでいた。

ここで戻れなかつたら妄想癖のある廃人と認定される事だろう。

石の階段を一段一段、踏み締めて上つて行く。

今ならまだ、外界で暮らす事を選べたのだろう。

しかし、幻想郷に残したものは多く、外界に残っているものは少なすぎた。

勇輝は迷う事無く、博麗神社の鳥居を潜つた。

「お帰りなさい。短い帰郷は楽しめたかしら？」

出迎えたのは紫だった。他に誰の姿も無いようだ。

「……出迎え」苦労様です。それより聞いて描きたいんですけど、外で俺の事を桜井 勇輝だと認識出来る人つて存在しますか？」

「そうね……。私の事を大賢者じゃなく、紫って呼ぶなら答えようかしら」

クスクスと笑いながら紫はそんな事を言う。ふざけているのか、焦

らしているのか。

「紫さん、答えて下さい」

真剣な勇輝の表情に紫はピタリと笑う事を止める。

「有り得ない話でも無いわ。仮に貴方を覚えている人物が居たとするなら、その人物は何らかの特殊な能力を持つ、或いは家系の人物。例えば、幻想郷に迷い混み、無事外界へと生還した者の子孫、そんな所よ。……尤も、生還した者を私は知らないのだけれど」

つまり、魅憑は何らかの能力に目覚めていた可能性が高い。

有り得ない話でも無いだろう。勇輝も能力を持つてはいるし、アレ程に規格外な人間を勇輝は他に知らない。

「後はそうね……。幻想郷を抜け出した妖怪、それと外界の幻想……例えば魔法なんかに関わった者。だけど貴方の回りの人物達の記憶は私が直々に消したわ。記憶と忘却の境界を弄つて。だから、貴方を覚えている人物は一人も居なかつた、そうでしょう？」

「……ああ、居なかつたよ」

ここに居たと答えたなら、真っ先に紫は魅憑の記憶を消しに行くだろ、ひ。

自分が居た事を証明する最後の砦を、呆氣なく消し去ってしまうのだろう。

それを知つてか知らずか、紫は胡散臭い笑みを浮かべて笑う。

「それでは、疲れている事でしようし人里までお送りしますわ」

そんな胡散臭い口調の言葉と共に、勇輝は足元に開いたスキマに落ちる。

次に見えたのは住み慣れてきた診療所だった。

しかし、その建物の主は中に居ないのに明かりが灯っている。出掛けた時に消し忘れたのだろうか？

診療所のドアを開け、一步足を踏み入れる。

「あ、やっと帰ってきた」

診療所のロビーには見知った顔が集まっていた。

最初に勇輝に気づいたのは靈夢。他にも魔理沙、紅魔館メンバー、アリス、白玉楼メンバー、プリズムリバー三姉妹、萃香。何故かチルノが遅れて勇輝に気づく。

「祭の主催者が最終日にどう言つてたんだよ。紫は里帰りなんて言つてたし、黙つて行くなんて心配したんだぜ」

魔理沙は若干拗ねたような口調でそんな事を言つ。

見れば、テーブルの上には色々な料理が用意されていて、幽々子を必死に止める妖夢の姿がある。

「いつの後夜祭つて言つのかしら？ 祭が終わったのは昨日

だけれど

「お兄様ー、早く食べよー」

これは、勇輝だけのために用意されたモノなのだろう。

そう思つと、勇輝の胸に熱いものが込み上げてくる。

「ああ、悪かつたな……。でも明日の朝にでも良かったのに」

そんな悪態を吐きながらも、自然と笑みがこぼれていた。

これからも、自分は幻想郷で暮らしていくのだらう。

後悔していない訳じゃなかつた。だが、ここには捨てられない多くのモノが出来た。

だから……。最後に父親に会えたのは良かつたのかも知れない。

母親の墓参りにも行けた。もう母では無くなつたのかも知れないけれど。

少しだけ友人も見る事が出来た。遠目だつたが、何一つ変わらない様子で。

もう、外の世界に思い残す事は無い。

「紫様……、随分と楽しそうですね」

藍は呆れた表情で紫を見る。

「そうね、私は少し歡喜しているわ。これであの子が外界に見切りをつける事が出来たのだもの」

「……惨酷なお方です」

「必要なのよ、彼の存在が。人と妖怪が共に暮らす世界。余りにも長く、先の見えない目標は今、この時代に実現しようとしているわ。態々外界に行かせたのも最後の別れをさせるため。これで前回焦つた里の代表者の事もある程度は水に流せた事でしょう」

「……そうでしょうか?」

紫はクスクスと笑いながら月を見上げた。その表情からは、考えていることは何も分からぬ。

其の漆拾捌（後書き）

第肆章、これにて終了となります。

次回からは永夜異変。ゴキョ、手羽先、兎、ニート。イロモノが
いっぱいですね。

永夜異変が終われば百話、百ページになるんじよつか。上手く区
切りを着けないと。

では、過度な期待をせずに、引き続き『東方医療録』をお楽しみ下
さい。

其の漆拾仇

幻想郷も夏が終わり、今は涼しげな秋となつた。

収穫祭なる祭の様な大宴会も終了し、冬に向けての準備などが始められているが。

「例によつて暇なんだよな……」

「だからといつて俺の店に来なくとも良いだろ?」

霖之助が何か言つているが気にせず香霖堂の商品を物色する。

時期の移り目なんかは風邪薬が飛ぶように売れたがそれも過去の話。ある程度の適応が効いた今は病人の一人も来ない。

数日前に獵師が熊に襲われたのを節目に、診療所はガラツとしている。

「お、これつて蓄音機だろ。これだけ古いのは初めて見るな……」

「壊れているけどな」

「直そつか?」

「いや、買い手も無いから必要無い」

それと、能力についてだが副作用的なモノは出なかつた。恐らくだが冥界という場所が人間にとつて良くなかったのだろうと勝手に結

論付けている。

「それもそうだな。これは……ああ、田覚まし時計か。こんな形の
がまだ見れるとは……」

時計にベルが取り付けられている形だ。相当煩いのだひつ。

「買わないなら触るな。壊れる」

「壊れてる物が大半だろ」

田ぼしい物は何も見つからない。一度帰郷した際に買えるだけ外界の物を買って来た事もあって必要な物は大体揃っているから問題は無いのだが……。

「やついえば桜井、寺子屋の手伝いは辞めたのか?」

「慧音さんが子供に悪影響だつて。クビになつた」

教えてる事に問題は無かつた筈なのにな、と勇輝は呟く。

そこで来店があつた。

「やつぱり此処に居たか……。勇輝、今日は阿求殿と会つ約束だつたのだらう?」

噂をすれば何とやら、入つて来たのは慧音だ。

「……えーと、短命の原因を調べらつてヤツでしたっけ?
必要だと聞いてますけど」

何でも、稗田家には“御阿礼の子”という転生し、妖怪の事を書き記している子がいる。その九回目が稗田 阿求らしい。

そのためか、千年以上続く稗田家は人里でも一番と言つて良い程の権力を持つ。

しかし“御阿礼の子”は短命で、長くとも三十代で死に至つているらしい。しかもその数年前からは転生の儀式を行うため本当に自由な時間は生まれてから数年と、『幻想郷縁起』を書き終えてから儀式を行うでの間だけなんだとか。

「転生に必要なのは儀式だけと話した事があつただろう? 原因を明確にするためにお前が呼ばれたのではないか」

「……不死の薬でもあつたら氣にする必要もないんじゃないですかね。俺が言える事でも無いですが

オカルトは専門外なため、そんな悪態を吐くが慧音はピクリと反応する。……幻想郷には存在するといふのだろうか。

「確かに伝えたからな。忘れずに行けよ?」

「了解です。精々原因の解明に努めますよ

慧音の用事はそれだけだったのか、さつさと店を出していく。

「……随分と信頼されているじゃないか」

「そうか? まだ嫌われ者が変わり者のポジションだと思ってたる

んだけど

「御阿礼の子の診察をさせて貰えるんだ。少しは信用され始めるんだろ」

まあ、信頼と患者の数は比例しないモノだから判断など出来ないないのだが。

「だつたら良いんだけどな……」

「用が出来たならさっさと帰れ。営業の邪魔だ」

「はいはい、帰りますよ」

少し肌寒くなつてきた幻想郷だが、勇輝は依然として白衣を着ている。

人里では白い格好=勇輝で結びついているのか呼び止められる事も多い。暇だから話に付き合つただが。

そして勇輝がやって来たこの、周りよりも大きな屋敷は何度か足を運んだことのある稗田家である。

「それで、何を調べると言つてのうじょうつか。お役に立てるとは思いませんが」

「阿求様は知つての通り短命。その一生は他の人間の半分程しかありません。ですから、阿求様のお父様がそれを不憫に思い、桜井殿

を呼んだ次第で「やります」

使用人らしき人に案内されながら向かうのだが、どこかで聞いたような話しか聞けない。

「転生を繰り返していれば価値観も変わってくると思いますけれどね。転生回数は零から九で九回。一度の人生が三十年だとしても二百七十年も生きている。そう考えるとかなり長生きだとは思いますが」

自分なら生き飽きている自信がある。これから体験していく事になるとは思つが。

「ですが、その大半は使命によつて費やされてしまします」

「むしろその方が良い。目的も無いのに転生を繰り返すのは馬鹿のやる事だと思いますよ」

それ以上使用人は口を利かない。勇輝も話しかけない。

最後に「こちらです」と部屋の前に案内され、使用人は持ち場へ戻るのか来た通路を戻つて行く。

「失礼します」

そう言って襖を開けると。

「あら、本当に来たのね。てっきりサボるのかと思つてたわ

紫がいた。

「……何で居るんですか。阿求様も定位置みたいに膝の上に乗せられてますし」

「偶然よ。幻想郷縁起の事を話そうかと思つたら貴方が来ると聞いて待つていたの」

「何か用ですか？」

「いいえ、面白そうだから待つていただけ。私はこれで帰るわ。
…それよりも、もう満月になるわね」

何か含んだような物言いの紫を無視。関わると口クな事にならないのは重々承知した。

……何も起きなければいいのだが。

其の捌拾

「……終わり?」

阿求は思つた以上に短い診察に思わず勇輝に尋ねた。

「何も分からぬ。採血だけして、それを調べるぐらいしかやる事が無いですし」

紫がスキマの中に消え、さつさと診察に取り掛かったのだが短命になる病気、といつより転生者に前例が無い以上、現時点で手の打ち様が無いのだ。

「望むのであれば周期的に俺の能力で年齢を戻す事も可能でしょうけど、阿求様はそれを望みます?」

「必要ない。私は幻想郷縁起を書くために転生を繰り返している。それが果たせたなら次の転生の準備をするだけ」

「そうですか。じゃ、気が向いたら診療所へどうづ。……あのスマ妖怪にも同じ事が出来ると思うのでそちらに頼つても構いませんけど」

きつと、老いと若返りの境界、みたいなのがあるに違ないので紫なら簡単だろ?。

「……貴方は変わっている

「? 急に何ですか?」

「他の里の人は私の短命に同情する」

「えーと、価値観の違いだと思いますけれど」

「そう。どちらかと言えば妖怪寄りの考え方」

それは心外だ。少なくとも鬼や吸血鬼や紫よりは常識的な考えを持つているつもりでいる。

しかし……。

「あー、恐らくですけど境遇が悪かったのかと。父親は非常識人、幻想郷で最初の住処は紅魔館。親しい知り合いも妖怪のが多いですし……。魔理沙や靈夢あたりも同じような事を言つんじゃないでしょつかね」

「慧音から聞いた。貴方は不死だと」

「確かにそれも関係しているのかもしませんが、実感するほどの一年月を過ごしていないので何とも言えませんね」

「貴方が生きているなら、縁起にも書く事が増えると思つ」

そいつ言ってクスリと阿求は笑う。

「……問題児って事ですか」

「私は転生前の事はあまり覚えていない。けど、その時の私を知っている存在が生きているのは、素直に嬉しい」

「確かに、生まれ変わったら知らない人間ばかり。といつのはキツイものがある。

「以前は一回」との人生を知り合いと共に終えたいと思つていた。けど今は転生後にも知り合いがいる。そこに同じ場所で暮らす人間がいるなら気が楽

「そういえば性別も一定じゃないんですね。変わるとどんな気分ですか?」

「……死にたくなる」

罪悪感でいっぱいになる返答が返つて来た。

「じゃあ、これで失礼しますね。何か分かったら連絡します」

「敬語は使わなくて良い。長い付き合いになると想つかう」

「あ、そう? なら以後そうするよ」

「……やっぱり変わってる」

と、阿求の診察を終えた後は特にする事も無く診療所でダラダラと勇輝は過ごしていた。

採血した血を調べたのだが、これと書いておかしな所は無くやる事が本当に無い。

こんな事なら外界で暇を潰せる物を買つてくるんだつたと後悔するが後の祭りだ。

薬品も最低限の蓄えがあるので材料を集める必要も無い。

日も暮れ始めているので出かける様な事はしないが、このまま寝るのも勿体無い気がする。

とりあえず夕食の準備を始めようと台所へ向かった。

「……いい加減慣れたけど、やっぱ不便だよな」

ガスコンロもライターも無いので火打石か火起こし機を使い釜戸で煮たり焼いたりする。何故洋風な建物がありながら文明は江戸時代なのだろうか。

きっと外界を自由に行き来できる商人がいたならぼろ儲け出来るに違いない。

正直、身体を壊さない程度の栄養が摂ればいいので味や見た目には拘らない。それでも一人、自分の為に料理をする習慣なんて現代人には無いのだ。

コンビニでパンを買うなりスーパーの惣菜コーナーに行けば調理された食べ物が食べたのだ。こんな感性を持つても仕方ない。

そんな事を考えながら、鍋に適当な物を放り込む。野菜、肉、米。面倒だから全部煮る。

多少見た目に問題が出て来るが気にしない。面倒だから。

「」で来客を知らせる呼び鈴が鳴る。外で買って来た物の一つだ。

鍋を火から外して来客が居るであるつ玄関に向かう。

しかし、来客は既にロビーにあるソファの上に腰掛け勇輝を待つていた。

「こんばんは、お兄様」

「……フラン、こんな時間に何しに来たんだ」

ロビーの先に見えるドアの外はもう暗くなっている。口は完全に落ちたらしい。

「えっとね、でーと? のお誘い」

「診察だけしてやるから帰つて寝る。お前、疲れてるみたいだから」

「あ、それってお医者さん?」……

「帰れ、忙しい」

勇輝が冷めた視線を向けながらそつと離つと、フランは頬を膨らませて不機嫌である事を主張する。

「冗談はこれぐらいにして、今日はお兄様に頼みがあつて來たの」

「飯食つてから聞くよ。聞いた後じゃゆっくり食えそつて無い」

「じゃあフランも食べる」

勇輝が台所へ戻りつとすると、フランもトロトロと後ろを付けてくる。

そして鍋の前に辿り着いて、フランは中を見て顔を顰める。

「お兄様、もしかして食べるのに困つてゐる……？」 咲夜に頬もつか?

「面倒だつた。他に誰か食べるつて分かつてたら真面な物を作つてゐる」

いろいろと放り込んだ雑炊は不味いと言ひ程の味では無かつた。見た目は悪いが。

「で、何の用だ？」

「うふ、えーっと。何て言えばいいのかな……」

フランは一瞬だけ言い濁むが。直ぐに満面の笑みを浮かべてこんな事を言った。

「お兄様、一緒に用をぶつ壊せつよ」

其の捌拾壹（前書き）

投稿日がクリスマスイヴになつてます。
ええ、勿論一人ですとも……それはもう、楽しく……小説を、書いてつ……。あれ？目から汗が、今は冬なのにどうしてでしょうか……。

「……はいはい、寝言は寝て言おうな。大体月壊したりしたら地球の重力バランスがおかしくなつて、最悪滅ぶから」

「違うよ。あの月は偽物なの。妖怪には分かるよ、アレは本物じゃない、誰かの作り出した偽物なの」

何時になく真剣な表情のフラン。だが、それだと……。

「能力で壊せないのか？」

「駄目だった。あの月には“目”が無い。だからフランじゃ壊せない、犯人も捜せないからお兄様の所に来たの」

「……本音は？」

「暇だから犯人と弾幕ごっこがしたい」

正直で宜しい。しかし、フランの弾幕ごっこは死者が出かねない。しかし行かないとなると矛先は自分や靈夢、魔理沙に向く訳で、だつたら下らない異変を起こしている犯人に犠牲になつて貰おう。

「でもな……手掛かりが一つも無い訳だろ？ どうやって探すんだ」

「まずは、お姉様と咲夜を探す。知らなかつたら靈夢を探す。靈夢も知らなかつたら魔理沙を探す」

「……他人任せかよ。俺は嫌だ、アイツ等と戦つたら身が持たない」

「えー」

フランはこの機会に全員と戦おうとも思っていたのだろう

ストップバーとして付いて行くしかなさそうだ。

「分かった。けど約束、今から言つ事を必ず守れ。じゃないと能力使つて紅魔館に送り返す」

「えー」

「……………ハア」

深い溜息を吐いてから、勇輝は診療所の外に出て空を見上げる。

見上げた先にある月は神秘的な輝きを放つており、とても偽物には見えなかつた。

「お兄様、まずは何処から潰して行く？ 博麗神社、魔法の森、霧の湖、妖怪の山。おススメは博麗神社だよ。最低でも誰かと弾幕ごっこがしたい」

「……………そうだな、まずは」

目の前の人物をどうにか説得しようか。

慧音は妙な胸騒ぎを感じ、夜の里を巡回していた。

満月が近い事もあってあまり出歩きたくないのだが、何か危険があるからでは遅い。

紫が里に張つている結界は知能の低い妖怪にしか効果がない。結界の存在を認識でき、尚且つそれが何の為に張られているのかを理解できる妖怪には意味が無いのだ。

実際、吸血鬼達は診療所に入り浸つていて、アリスや幽香は買い物に度々来る。

そもそも、結界を張つた張本人が妖怪である以上慢心してはいられない。

そして、ふと診療所に明かりが灯つているのが見える。

勇輝が試行錯誤や能力の乱用をしてまで取り付けた照明器具のおかげか、周りの民家の数百倍は明るい。蠟燭や行燈の光とは比べ物にならない程の明るさだ。

そして、他の建物と隣接していない事もあってかなり夜は目立つのだ。

中から誰かが出て来る。白いから勇輝だらう。

しかし、後から続いて出て来た者に慧音は顔を顰めた。

「……何故、吸血鬼がこんな時間に？」

いつもは従者に日傘を持たせて昼間に來ていた筈だ。

そして断片的に潰す、弾幕と不穏な単語が聞こえて来る。

疑いたくは無いが、もしさうこうつ事だとしたら止めなくてはならぬい。

これでも教育者、若い者の指導をしていくのが仕事なのだ。

勇輝がこいつを向く、気づいたらしく。

「このばんは、慧音わん」

どうしていつも運が悪いのか。

今からやれりとしていの事は表向きには異変解決。しかし実際はフランのフランによるフランのための弾幕、じの相手探し。

とつあえず褒められた事では無いのは確かだ。

「ああ、ところで勇輝。どうしてこんな時間に外に出てこる、普段は寝るか仕事をしているだろ?」

現在は午後九時といった所、じの里に居て今から出掛かよつとする人間は極少数だろう。

「えーと、じの子。吸血鬼なんですが、どつも用がおかしいらしいんですよ。それを調べよつと」

「月？ ディがおかしいんだ。普段と変わらない様にしか見えない
が……」

「半端な存在には分かんないよーだ。年増の半獣は大人しく人間の
御守でもしてたら？」

「ちょ、 フラ……」

「ほつ……。セイの餓鬼は教育が必要らしいな。勇輝、手は出すな
よ？」

「……はい」

忘れていた。フランは誰が相手でも良いから弾幕^じつこがしたいと
いう事を。

戦える相手がいたなら戦つに決まってるじゃ ないか。

里の外、以前の祭で使用していたリングの跡地でフランと慧音が睨
み合つ。

決勝戦は靈夢と魔理沙で戦つたようで、二人の戦いでリングは吹き
飛んだのだとか。

嘘か本当かは知らないが、少なくともリングの面影が見当たらない
事は確かだ。

先に動いたのはフラン。

レーグアテインを振り回して慧音に向かっていく。

そういういえは慧音の戦つている所を見た事が無いのだがどの程度戦えるのだろうか。

祭では棄権していたから好戦的ではないにじる、里を守る立場である以上そこそこの実力があるのだろう。

しかし、慧音の戦い方は勇輝の斜め上を行つた。

慧音は弾幕など使わなかつた。フランのレーヴァテインを軽々と避け、フランの両肩を驚掴みにし、自分の額をフランの額に振り降ろす。

鈍い音が響き、フランは足元が覚束ないのかふらふらと後ろに下がる。手に持っていたレー、ヴァテインは霧散していた。

「…………え、強つ」

暑くも無いのに勇輝の額には汗が浮かんでいた。

其の捌拾弐

「勇輝、お前達が何を企んでるかは知らないが里に危害を加えるつもつであれば教育し直してやる。それを忘れないようにな」

「あれ？ 僕はお咎め無しですか」

「私は口の悪い子供を矯正しようとしただけだ。別に異変の調査の邪魔をするつもりはない」

「ああ、そういう事ですか。了解です、里に被害が出ない程度で止めておきます」

慧音はその言葉に満足したのか、額を抑えて蹲っているフランを放置して里の方に歩いて行く。

勇輝はゆっくりフランの方に近寄り、膝を折ってフランの頭を撫でながら話しかける。

「らしくないな、やられっぱなしのままぐこるのは」

「……アイツ、戦う気なんて無いんだもん。それに普通の半獣じやなかつた、あのまま本氣出してたらお兄様が危なかったかもしれません」

「酷いな、そこまで脆い様な奴じや無いと想つんだけビ……」

「だつてフランひとつてはお兄様が一番だから。弾幕じつこいつ、お姉様よつもずっと……」

甘える様に抱き着いてくるフランの頭をポンポンと叩く。しかし手は振り払われた。

「そこ痛い。叩かずには擦つて」

暗くてよく見えないが相当腫れているようだ。

「慧音さん……アンタの頭蓋骨何で出来てるんですか……」

吸血鬼の身体は相当頑丈な筈なのだが……。

「それよりお兄様、早く行こ。早くしないと盗られちゃう」

「何を、誰に？」

「犯人潰しだよ、魔理沙辺りが搔つ攫つて行く気がする。お姉様は靈夢にぶつかると思う」

「……姉妹揃つて何がしたいんだか」

それに、フランの中では犯人を探す事より犯人を潰す事が重要らしい。

一応、生物に向けて能力を使わない様に何度も言つているのだがキレたりしたらどうなるか分からぬ。

気が振れやすかつたのは閉じ込められていた事が主な原因だったようで最近は収まってきた。だが感情的なのは変わらないので左程変化は無い。

四百九十五年も一人で狭い檻の様な部屋にいたら気が振れるのも当然なのかもしない。

それは妖怪にとってはそれ程長い年月でもなかつたのかもしないが、何しろ五世紀分だ。短い筈が無い。

現在ではフランは紅魔館内なら自由に、外ならレミリア、咲夜、勇輝の誰かと一緒に動き回る事が出来ている。度々美鈴が犠牲になる事があるらしいが問題は無いだろう。

そんな説明はさて置き、勇輝はフランに羽交い絞めにされていた。

能力の使用回数が本日の制限に届いているのだ。

だから飛べない、戦えない、逃げられない。とんだ役立たずである。

勿論日付が変われば解消されるが、まだ数時間あるのだ。期待は出来ない。

落ちるかもしぬれない不安に煽られながらフランに抱えられ空から森を見下ろした。

「フラン、これって何処に向かってるんだ?」

「んー、分かんない

「分かんないって……」

「だけどこっちに行つた方が面白い氣がする

「……せつか、程々にしろよ」

諦めたように勇輝は呟くが、やはりフランはそんな事を気にもしない。

そしてふと、下方に虫が飛んでいるのが見える。

発光しているので蚩か何かだらう。秋には見た事が無いので確証はないが。

「そこの人間！」

そして下の方から声がかかる。

声のした方にいたのは一見少女、しかし妖怪だ。

頭には一本の触覚、背には黒い虫のよつた羽。

「……ゴキブリ？」

「蚩だー。」

そういうえば虫の妖怪に殺虫剤は効くのだらうか。ちょっと試してみたい、そんな事を勇輝は考える。

「お兄様、虫の羽音が煩いから壊しても良い?」

「殺生は控えろって、例えゴキブリの様な害虫だとしても一応生きてる訳だし。まったく役に立たないけど、本能が嫌っているけれど、

それでも「キブリだつて生きていねから

「だから蚩だつて言つてゐるでしょー。」

例えで言つただけだつたのだが。

「蚩つて光るよね、光つてないじやん」

フランが疑問に思つた事を口に出す。

「人型でそんな事する訳無いでしょ、そんな事したら絵的に描いし」

「じゃあ「キブリじゃないって証明できないんだね」

「へへ……」

「でも蚩より「キブリの方が強い氣がするよな、何となく

「…………」

「あ、それフランも思つた。蚩つて捕まると直ぐに死んじやうんだよね？　どつかで聞いた氣がする」

「蟬と良い勝負だな、負けてるけど」

勇輝とフランが散々な事を言つて居ると、虫の妖怪の少女、リグルの肩はフルフルと振るえていく。

「やつぱり、蚩つて弱そうなイメージしかない」

一人が声を揃えてそう言ったのが引き金だった。

「お前等なんか虫の餌にしてやる！」

涙田でリグルが弾幕を放ってきた。フランは抱えていた勇輝を捨て、回避行動に移る。

「あ……」

「馬鹿！ 死ぬ！ 落ちるうひつひー！」

今の勇輝の靈力で、落下中に浮き上がるような筋道は出来ない。

何時もなら靈力量を修正し、一度翼を作り羽ばたかせスピードを殺してから靈力をコントロールして浮く。

「ぐふつ……ツ！！」

丁度太い樹の枝に洗濯物の様に勇輝は引っ掛かる。

意識が遠退いたが骨は折れなかつた。不幸中の幸いというヤツか。

空を見上げればフランに追いかけられるリグル。立場が既に逆転している辺り相当の実力差があつたのだろうか。

腕に付けて来た時計で時刻を確認する。今は午後十時半、能力はまだ使えない。

下を見れば名前も無い様な妖怪がうじゅうじゅと、落ちたら食われる。

「フラン、早く来てくれないかな……」

其の捌拾弐（後書き）

クリスマスにストックが出来ました。年末年始も投稿していくそう
です。……ええ、出来そうです。

「まさか吸血鬼だったなんて……」

「よくもお兄様を……、絶対に許さない」

「えつと、落としたのはそっちの責任じゃ……」

そんな会話が上空であつたのは知る筈も無く、勇輝は樹の枝の上で体勢を整え下を見る。

暗くて良く見えないが、ガサガサと枯れ葉を踏む音。ガリガリと樹の幹を引っ搔く音が無数に聞こえてくるのは分かる。獸か、妖怪か。どちらにしろ落ちたら拙い。

打った腹部がまだ痛むが、とりあえず上つてくるモノがない事に安堵し、急いで隣の樹の枝へと飛び移る。

さつきまで立っていた場所を何かが通り過ぎ、黒い影と風を切る音が確認できた。

「そりや、鳥の妖怪が居ない訳無いんよな……」

その身には既に靈力を纏っているが、流石に妖怪の爪や牙を防ぐ程の強度がある筈も無い。

爪で刺されたら穴が開くし、牙を立てられれば肉が引き裂かれる。

「あれ？ 気づいてなかつたと思つたんだけどな……」

「俺は靈力とか、妖力とかそういうのに意外と敏感なんだ。殺氣とかには鈍いけど」

外界からやつて来た影響か、勇輝は靈力を感じ取りやすい。温度が急激に変わった時に必要以上に暑かつたり寒かつたり感じるのに似ているのかもしない。

殺氣は……受け過ぎたのか、感じ取れる様なモノでは無いかのどちらか。後者であると信じたい。

「どひひで何て妖怪？ 冥土の土産にでも教えてくれよ」

「夜雀だよ、それで分かる？」

「ああ、お前の頭が弱いのは分かつた」

僅かに森に差し込む月明かりに照らされる夜雀の姿。長い爪と鳥のような羽、それが雀に見えるかは置いておくが、……何というかチルノやルーミアと同じような雰囲気がする。

「煩い！ 鳥田に鳥頭なんて言われる筋合いなんてない！」

「言つてないし、お前だと両方当て嵌まりそつだけど……」

「視界を奪われる恐ろしさ、思い知らせてあげるー。」

夜雀、確かに人の視界を真っ暗にする鳥の妖怪。

人間は周りの状況の七割以上を視覚から得ている。それが奪われた時に生み出される感情は戸惑い、不安、そして恐怖。

もし視界を奪われてしまえば、逃げる事すら難しくなる。

「つー？」

不意に勇輝は目の前が真っ暗になった。

「私の能力はこれとは別だけど、そつちは使うまでも無いかな」

妖怪としての力と、生まれ持った能力。二つの能力を持っている妖怪は少なくない。

レミリアやフランは目に見える力は無いが、吸血鬼としての膨大な妖力を。あまり人型の妖怪に出会った事が無いのでこういった存在を勇輝は初めて相手にする。

それよりも、視界を潰されたのが問題だ。

今はまだ樹の上にいるが、動いたら間違いなく落ちる。

フランはさつきから声すら聞こえないので助けに来れないだろ？

「あーて、どうやって食べようかな。人間を吃べるのは久しぶりだし、やっぱり味わって食べた方が良いのかな……。うん、まずはバラバラにして持ち帰るつ」

「……ちょっと待ってくれ

勇輝は、ある確信があつた。

「コイツ、絶対にチルノ並に頭が弱い。」

失礼極まりない確信であるが、雰囲気というか、第六感的なものがそう言つてゐる。

こういうのを電波を受信したとか言つのだらうか。この幻想郷で受信できるとは思えないが。

「見た目とか、雰囲気からは人間っぽさが出てるかもしれないけどさ。俺は人じやないんだ」

状況的には、人間辞めてる様なものだから嘘でもない。

「え、 そうなの？ なんだ、 羽も角も無いからてつきり人間かと…」

…

掛かつた！ 思わずガツツポーズをしそうになる。

「そもそも、人間がこんな時間に、こんな場所に居る筈がないじゃないか。ところで、月がおかしいと思うんだけど心当たりは無いか？」

「月？ ……言われてみれば少し違和感が。それより、人間の欠片とか持つてない？ 美味しそうな匂いもするから人間っぽいなーって思つたんだけど」

「氣のせいだと思つ」

「そつか。あ、私はミステイア・ローレライだよ」

「『』寧にどうも。俺は桜井 勇輝だ」

「でもさ、勇輝って何て妖怪？ そんな人間臭い妖怪は知らないんだけど」

……幽靈と言つた方が良かつたか、それとも魔法使いですか、そうしたら疑われなかつたかも知れない。どちらにしろ食われるかもしれないが。

「えーと……。あ、そうそう、種類とかじやなくて一個体の妖怪。うん、だから人に近いんじゃないかな」

鬼、天狗、吸血鬼。種族で分けられるメジャーな妖怪の他に、唯一の個体の妖怪がいる。八雲 紫がその例だ。

世界に一体しか存在せず、類似している存在も無い。そんな妖怪は少ない。

「へー、そうだつたんだ。じゃあ知らなくても無理も無いって訳ね？」

「だから俺なんか相手にせずさ、能力解いて里にでも行つて来たら？」

「あれ？ 鳥目の能力は人にしか効かないから……え？」

「えつ……」

「やつぱり人間！ よくも騙したな！」

「あ、お前の後ろに人間が」

「もう騙されないよ！」

ミステイアの後ろ、そこにいるのは確かに人間とは言い難いかもしない。

だつて……。

「勇輝さん、最近の異変に全部貴方が関わっているんだけど仕事は良いの？」

妖怪を超える力を持つ人間、博麗の巫女なのだから。

「へつ……？」

次の瞬間には、哀れな妖怪の悲鳴が夜の森へと響き渡った。

「ふう……。それで勇輝さん、今日せびりしてこんな所に?」

ミステリアを容易く撃ち落した後、靈夢は勇輝の方へと向き直り尋ねる。

「異変の調査、それと付き添いだな」

「付き添い? 誰の?」

「えーと、アイツだ」

そう言いながら勇輝は靈夢の後方の空を指差す。フランがこいつに向かつて飛んで来ているのだ。

靈夢は振り返つて、その正体を確認すると溜息を吐く。

「一人がそんな事をする筈もないし、出来る訳も無いから一人は白ね。呑つてる?」

靈夢は誰も居ない筈の虚空に向かつて話す。

すると空間に裂け目が入り、中から一人の妖怪が出て來た。

「ええ、犯人は少なくとも貴女と面識のある者ではないわ。だって実行しても利が得られないもの」

「珍しい組み合わせで、靈夢と紫さんが一緒に異変解決に乗り出す

とは。犯人に同情すらしそうだ

「あり？ 酷いわね。私達だって鬼じゃないし、やつている事を改めさえすれば見逃さない事も無いわよ？」

紫がクスクスと笑いながらそんな事を言ひと、靈夢と紫の間を裂くように紅い大剣が空気を切り裂いた。

「巫女見つけた！ なんか変なのもいるけど良こや。フランと弾幕！」
「じみつよー」

フランはまるで悪びれた様子など無く、純粋に、無邪気に勝負を仕掛けた。

「靈夢、面倒だからわざと撒くわよ」

「それは同感ね。吸血鬼なんて相手にしてたら犯人を逃がすかもしれないし」

「あれ、まずは鬼！」
「からなの？」
「フランが鬼なんだ、じゃあ十数えるね」

フランが一から順に数字を数えだす前に靈夢と紫は飛び去る。

「せーん、しーい」

フランはゆっくりと数字を数えるが、それを遮る様に勇輝が叫んだ。

「ちょっと待てフラン！ まだ時間じゃないから俺は飛べないんだ、それを踏まえて……クソッ！」

靈夢を見つけて頭に血が上ったのか勇輝の声は届かない。

フランは十まで数え終え、猛スピードで靈夢達を追いかけ始めてしまつ。

勇輝は足に靈力を多めに纏わせ、樹を蹴つてそれを追う。

ザワザワと、下の方でナニかが動き出す。まるで勇輝を追つかのようだ。

靈夢達をフランが追い、フランを勇輝が追い、勇輝を妖怪が追う。何とも滑稽な状況だがそれを笑う余裕は今の勇輝には無い。

よく漫画やアニメで忍者が樹の枝を次々に移動していくが、勇輝にそれを続けるのは無理そつだった。一度樹の上から飛び降り、今にも消えそうになるフランの姿を走つて追う。

「あの馬鹿ッ！ 追い着いたら強制送還してやる……」

落ちて来る木の葉やスピードを出している事から来る向かい風に顔を齧めながらも勇輝は悪態を吐く。

このペースで追い掛けて、追いかけ続けるのはおよそ十五分。

靈力を体に流して無理矢理に体を動かしているのだから疲労よりも身体へのダメージが大きい以上、疲れを感じてからでは遅い。

そして、ガサガサと勇輝が落ち葉を踏む音以外にも後ろから落ち葉の上を這う様な音が聞こえて来る。

「振り返つたらフランを見失う、振り返らないと後ろのヤツが何か分からぬ……。どんなホラーゲームだよ」

正直、怖い。

後ろにいるのが獣なのか妖怪なのか。虫なのか蛇なのか。それとも知り合いがふざけて追いかけているのか。

知り合いだつたら気が楽だ。後で渾身の拳を頭蓋にお見舞いしてやれば良いのだから。

しかしそれ以外だと、とりあえず食われるか引き裂かれるかだ。

死なないとは言つても死ぬ程に痛く、苦しく、怖ろしい。

そして今は能力が使えない。日付が変わるまで、その苦しみに耐え続けなければならない。精神が崩れてしまつては、能力を使う事も出来ないのだから。

だから、勇輝は走った。フランを恨めしげな目で睨みながら。

しかし、好奇心という誘惑に勝てないのは仕方ない。親であつた魅憑はそれを体現した生活をしているし、きっと遺伝か何かだらう。

一瞬だけ、ほんのコソマ数秒だけならフランを見失わずに済む。そう思つて勇輝は首だけを動かし自分を追う存在を確認した。

「…………あー、見なれば良かつた」

本当に、振り返ったのは一瞬だった。しかしそれだけで自分を追うのが何者なのか判断できた。

最初に目に映つたのは鱗、黒く堅そうな刀ですら弾きそつた。次に見えたのは金色の眼だ、もし耐性の無い者がそれに睨まれたら硬直する様な恐ろしい目つきの。

そして丸太のように太く、川の様に長い身体。それに足は無く、それでいて勇輝を追うスピードは自動車にも匹敵する。

うわばみ
鱗蛇、巨大な蛇だ。妖怪かどうかは知らないが、とりあえず見たくなかつた。

心なしか足に籠める事の出来る靈力が増えた気がする。

しかし、ズルズルと鱗蛇が巨体を引き摺る音はどんどん近づいてくる。

上空のフランがこちらに向づく素振りは無い。

「フランー 次の休みに弾幕じつじしてやるからー 頼むからこっち向けー！」

大声で叫んでみるがフランは振り返りもしない。聞こえていないようだ。

「ちつ、これでも食らえー！」

勇輝はその手に靈力の槍を作り出す。

長さは四メートル、太さは直径十センチ程の蒼い槍。吸血鬼の紅い槍と対になるかの様な蒼だ。

そして、勇輝はそれをフランに向けて投擲する。

其の捌拾伍（前書き）

皆様明けましておめでとうございます。これで2012年となりました。引き続き当小説をお楽しみ頂けるよう努力していくので、どうか温かい目で見守って頂けたら幸いです。

こうこう挨拶つて一ヶ用も経つと「え、この投稿田正田だったの？」みたいな反応になりますよね。

蒼い槍はフランの直ぐ傍の空を貫く。

フランは意図していなかつた方向からの攻撃に一度動きを止め、攻撃のあつた方向を睨みつけた。

そして氣づく。

「あ、……お兄様忘れてた」

鱗蛇に追われる勇輝を見て、自分が勇輝と一緒に行動していた事を思い出す。

そして、兄と慕つてゐる勇輝が危機に晒されているという事を理解し、フランはその右手を鱗蛇に向けて翳し、何かを握りこんだ。

フランの手の中で何かが粉々に砕けるのと同時に、鱗蛇は内側から破裂し、中身を撒き散らした。

そして、鱗蛇が息絶えた事とフランが動きを止めた事によつて勇輝も足を止めた。

「フラン……。言いたい事、分かるよな？」

「えっと……、もつ少しで明日だね……？」

「言ひ分は良く分かつた。確かに俺が能力を使い切つてた事も原因だろうけどさ、それでも約束しただろ？　まさか一日どじろか三時

間も経つてないのに忘れたなんて言わないよな?」

「確かに、お兄様の許可なく攻撃を仕掛けない、お兄様を一人で行動させない、それと……」

「少なくとも二つは破つてる訳だ」

勇輝の直ぐ傍に降り立ち頭を搔きながら苦笑にするフランを余所目に、勇輝は時計で時刻を確認する。

十一時数分前、まだ一時間以上は能力を使えない。

「……もしかして、お屋敷に帰されるの?」

勇輝が黙っているのを怒つていると感じたのかフランが少し控えめに切り出す。

「いや、靈夢が動いてる事から異変の可能性は上がったし、紫さんが付いているから面倒事なのは明らか。だけどあの人があえて円滑に異変が解決できると思えないから今回は見逃すよ」

「ホント…?」

「それより状況と現在地の確認、そして何よりも安全が欲しい。つて訳でまた抱えて飛んでくれ」

フランは言われるがままに勇輝を抱え、上空へと飛び上がる。

まず確認したかったのは大体の位置、と言つても周りは森なので何処か分からぬ場合が多いのだが。

しかし今回は運が良い。

「迷いの竹林か、里の近くに一回戻つてたんだな」

竹林は普通の森と違つて夜でも上空から下を見渡す事が出来る。

今まで入つた事は無いが、同じような竹が延々と生えているので迷つてしまつのだとか。

しかし、それは同時に隠れるのには打つて付けの場所にもなる。

「お兄様、何か分かつた？」

「とりあえずあの竹林に行こう、もしかしたら犯人が隠れているかもしれない」

「竹林？ でも、それだったら普通に森に隠れた方が見つかり難いんじゃないの？」

「あそこには滅多に人が入らないんだ、調べて見る価値はあるかもしない」

「分かつた、じゃあ行くね」

二人は竹林へと向かう。その先で何が待つているのかも知らずに……。

「知ってるなら最初から言ってくれれば良かったのに」

人里の直ぐ近く、そこには三人の人影があった。

一人はアリス、無駄な戦いだつたと溜息を吐き隣に呆れた視線を向ける。

「そうだな。 そうだつたなら私達は普通にそこへ行つてた筈だぜ」

魔理沙がそんな事を言いながら肩を竦めるが、それは直ぐにアリスに否定された。

「先に仕掛けたのは魔理沙でしょ。……まったく、一人で勝てると思つてたの？」

「いやあ……」

苦笑いをしながら魔理沙は視線を逸らす。

「……お前達、場所は教えたんだだから速く行つたらどうだ？ 私の知つている限りだと勇輝は既に探し回つているぞ。吸血鬼と一緒に」

慧音は見た目はボロボロだが余力が残されている様にいつも通りの声色で一人にさつさと里から離れる様に促す。しかしその表情は諦めたような呆れたものだった。

「勇輝が？ 吸血鬼つて言つとレミリアかフランか……。髪の色とか分かるか？」

「確か薄い黄色だつたな……」

「妹の方ね、どちらも敵に回したくないのは変わらないけど」

「むしろ性質が悪いぜ、見つかったら即バトルになりそうだ」

既に靈夢が襲われた事を知らない一人はそうならないと良いな程度の認識しかしていない。

会つたとしても勇輝が一緒に話す余地もあるだらうと甘い認識をしてしまっていた。

「結構深い森なんだな、竹林ってもう少し規模が小さいものだと思つてたんだけど」

迷いの竹林に入った勇輝たちはしばらく竹林の奥へと進み続けていた。

迷いの竹林と言うだけあって、この竹林を初めて入ったにも関わらず迷わないで進み続けるのは酷な、いや不可能だろう。

太さも、形も、長さも殆ど変らない竹が並び立ち、それは永遠に続くかのように続いている。

当然、道がある筈も無い。歩いてこの竹林の奥深くまで入ってしまえば抜けるのは困難だ。

「お兄様」

ある程度進んだ所でフランが急に止まる。

勇輝も気付いていた。

刹那、挟み込むようにして竹林から何者かが一人を狙い撃つた。

フランは上空へ、勇輝は投げ落とされ地面へと回避した。

「これで仕留められたなら異変に集中できただけど、一筋縄ではいかないようね……」

「（）今までついて来たって事は乱戦になるかもしれないし、退場して貰うしかないんじゃない？」

待ち伏せしていた靈夢と紫が姿を表す。

「良いよね、お兄様。“アレ”を試しても」

「それが前提条件で来てるんだ、さつさと終わらせるだ」

大見得を切つた勇輝だったが、致命的な欠陥がある事が分かり回避行動に専念していた。

能力で身体能力や靈力を上げないと話にならない事に気づいたのだ。

「ちょこまかと……」

靈夢が上空から勇輝を狙い撃つ。

勇輝は竹を遮蔽物にしたり、少ない靈力を振り絞つてそれを避ける。チラリと時計を見て時刻を確認するが長針は二十五を指している。まだ三十分以上あるのだ。

普段の勇輝はお世辞にも強いとは言えない。それは自分自身がよく知っている。

もちろん幻想郷内の事であつて外界から来た人間からしたら化物同然の強さもあるが、今戦っている相手はその化物以上の強さだ。

「見逃してはくれそうにないし、フランは……」

空の方に目線をやり、フランの姿を探す。意外と早く見つかつたが苦戦している様だった。

フランが攻撃を仕掛ける度に紫はスキマへと姿を消し、フランの死角から現れ攻撃を仕掛ける。フランは野性的感性でそれを避ける事

が出来てゐる様だが、やはり攻撃は当たらない。

二人が試したかったのは「一対一」のタッグバトル。相手は「一対一」では最強クラスなのだから、慣れていないタッグバトルではこちらに利があると思つての事だつた。

しかし、今の勇輝は足手纏い。フランの足を引っ張るような事しか出来ない。

タッグバトルは味方同士での補い合いが出来てこそその勝負、これでは有利になつたと言えない。

何か、時間を稼げる手段があれば……。

無論、そこまでタッグバトルに持ち込もうとするのには理由もある。

少し前の事だが、フランやレミリアに「一対多数、二対多数の戦いにはならないのか？」という質問をしたのだ。

スペルカードルールは決闘のためにあるものであり、「一対一」は基本の事、最早暗黙の規則と言つても良いだらう。

しかし、多数対多数は絶対にありえないのだろうか。フランやレミリアも少し思う所があつたのか試してみたのだ。

勇輝とフラン、咲夜とレミリアで組んでのタッグバトル。結果は敗北に終わったがフランは負けたのが気に入らないらしくメイド妖精を何匹も呼び出し練習をさせられた。

経験がある以上はこちちらに利があるので。

あと三十分、時間を稼げる何か。それを見つけなければ。

「恋符』マスタースパーク』……」

眼前の竹林が魔砲につて薙ぎ払われる。

土煙が舞い、それは勇輝の姿を包み込んだ。

「魔理沙！？」

靈夢が驚きの声を上げる。それは魔理沙も同じだ。

「あれ？ なんで靈夢がここに居るんだ？」

「私は勇輝さんと戦つてたの、魔理沙は？」

「私はアイツだ」

魔理沙が自分の進行方向を指し、靈夢はその先に手をやる。

「失礼ね、私には西行寺 幽々子といつ名前があるの……」「

「幽々子？ どうしてこんな所に……。って言つか冥界から出て来ないでよ、幽靈なんだから」

「妖夢も来ているわよ、人形遣いと戦っているわ」

「おお、アリスと逸れたと思つたら先に会つてたのか。安心したぜ」

靈夢は額を押さえる。異変を解決しに来ただけなのに、じつして過去の異変の犯人がこうも集まつて来るのかと。

「何だか賑やかね、こんな場所でお祭りでもあつたのかしら？」

「……ホント、今日は賑やかね。じつして吸血鬼まで出て来るのやら」

靈夢が後ろからした声に渋々と振り返る。そこには咲夜とレミリアの姿があった。

五組十人、幻想郷でも選りすぐりのメンバーがじつして出て來ている。

もし全員が結託していたなら犯人には最大限の同情を送つていたに違ひない。

そこから先は乱戦。

元より戦っていた靈夢、紫、フラン、アリス、魔理沙、幽々子、妖夢は元よりレミリアが面白がつて遊撃していくのだから收拾が着かない。

ちやつかり勇輝は避難して時間を稼いでいるのだから救い様が無い。

その乱戦の中でも田立つのはレミリア達だった。

咲夜が上手く能力でレミリアをサポートし、レミリアが強力な弾幕を撒き散らす。

既にこの場の全員にパートナー以外は全員敵、そんな意識が植え付けられているのは言つまでも無かつた。

そして魔理沙は祭の決勝戦を思い出し靈夢に攻撃を仕掛ける。レミリアも何年か前の敗北の恨みを晴らしたいのか靈夢に集中的な攻撃を仕掛ける。妖夢もトラウマ的な何かを克服したいのか靈夢に攻撃を仕掛ける。フランも面白がって靈夢に攻撃を仕掛ける。咲夜もレミリアに便乗して靈夢に攻撃を仕掛ける。幽々子は一番手強そうだからと靈夢に攻撃を仕掛ける。アリスはそんな他の面々を見て速く終わりそうだからと靈夢に攻撃を仕掛ける。

「何なのよ」これは！？

思わず叫ぶ靈夢だが時既に遅し、一斉に攻撃が放たれ轟音と共に爆発する。

それを見て数名がガツツポーズをしていたのだから靈夢は異変後に仕返しをしても許されるだろう。

攻撃が当たつていたのなら。

「ハア、どれだけ人の恨みを買ったのよ……」

「私が知る訳無いでしょ！ 異変を解決しただけじゃない！」

爆発地点の遙か上空で靈夢はスキマの中から姿を現す。紫が助け出していたようだ。

「靈夢、いのままだと間に合わなくなる。早く勝負を収めましょう

「そうね……。本来の目的は全員そこなのよね……」

納得がいかないといった表情をしながら、靈夢はスペルカードを取り出す。

そして、勇輝の腕時計の長針が十一を指した。

其の捌拾漆

「……さて」

勇輝は竹の陰に隠れながら辺りを見渡す。

様々な色の弾幕が飛び交い何本もの竹が折り倒され、少し前までの静かな竹林の面影は既に無くなっている。

能力を直ぐに使っても良いのだが、それでは総攻撃に遭つた時の対処が出来ない。

数が減るのを待つのが上策なのだろうが靈夢と紫は他チームに牽制され本領が發揮できていない。

何時の間にか加わったレミリアと咲夜は他よりは連携が取れていて厄介。

魔理沙の魔砲は一度張られた弾幕を無に還してしまつ。早々に退場して貰うしかない。

フランの姿を確認するが、言い付け通りに無茶はしていないようだ。大分頭に血が上っている様だが。

「あ……」

「は？」

考込んでこるとアリスと田が合つてしまつ。

無情にもアリスの切り替えは速く、即座に人形を取り出し弾幕を放つてくれる。

「そう言えば今日はこんな所にどんな御用で？」

弾幕の範囲から逃れようと走りながら勇輝は問いかける。

「魔理沙に用の事で相談して、犯人を探しに来たのよ。こんな事になるとは思っても見なかつたけど」

「帰つたらどうだ？ 夜更かしは肌に悪いだろ」

「嫌よ、魔理沙にどんな嫌味を言われるか分かつたものじゃないから」

「説得に付き合つからせ」

「私に被害は出ない？」

「…………保証は、出来ないな」

次に返つて来るのは言葉では無く弾幕。そして人形。

そしてその人形の一体が糸が切れたように勇輝の足元に飛ばされる。

即座にそこから離れたのは良い判断だつただろう。人形が爆発したのだから。

熱風と衝撃で碎けた地面が勇輝を襲う。

「火薬なんか仕込んでるのか……。爆弾かよ」

「私に火力が足りないのは前々から分かつていたし、これが一番手つ取り早いのよ」

以前なら人形を靈力の刀で切り裂いて壊していく手もあつただろうが、今回は遠距離からの攻撃で破壊しなければならないようだ。

しかしあの人形は意外と丈夫でちょっとやそつとの攻撃では破壊できない。

「余裕なんて微塵も無いか……」

勇輝の直ぐ目の前に一体の人形が飛び出していく。

そして勇輝は炎と黒煙に包まれた。

「…………」

アリスはジッと勇輝の居た場所を見つめる。

これで倒せたとは思っていない。だが、万が一直撃していたら致命傷だ。早々に治療しなければならないだろう。……いや、必要ない。勇輝は自分の能力で三度まで傷を完全に回復できる。

しかしそんなアリスの心配は無用の物だった。

黒煙が振り払われ、中から傷一つない勇輝の姿が現れる。

「危ないだろ、普通の人間だったら死んでる所だ」

「普通じやないでしょ、貴方は」

「それもそうだ」

勇輝はアリスに向けて反撃を開始する。

一対一なら勇輝も普段通りの戦いが出来る。だが、それはアリスも同じであり、勝機はどちらにもある。

いや、この場合は一対多数とも言えるだろ？

アリスの武器は人形。壊しても壊しても次の人形を取り出し勇輝を多方向から攻撃する。

操っている本人を護りつつ勇輝を逃がさない陣形は厄介な物だった。

だが、そんな攻防も今この場では一時のモノでしかない。

二人の間、そこに深紅の槍が突き刺さり地面は爆発する。流れ弾なのか故意にやつたのかは分からぬが勇輝は即座にその場を離脱する。

「ケホツ、何が起こったの……？」

土煙がアリスを覆い、アリスは咳込んでしまう。

だが何かを感じ取り、直にその場を離れた。

そして先程まで立っていた地面が斬撃によって切り裂かれる。

「外しましたか……」

アリスはハツとして声のした方へと田をやる。

「……そうだったわね、貴女と戦つていたんだった」

「忘れられているとは心外です。お陰様でスキだらけでしたが」

暗がりから現れたのは妖夢だった。刀をアリスに向け、言い放つ。
「私はこれ以上、幽々子様の警護役として相応しくない戦いをする
訳にはいかないんです。だから……」

妖夢は地面を蹴り、アリスへと接近する。

「勝たせて貰います！」

「お兄様！」

「フランか、今の状況は？」

アリスの方から逃れて来て、運良く勇輝はフランと合流できていた。

「あのスキマ妖怪、凄く面倒だよ。フランの攻撃が全然当たらない

「紫さんか……。今は何処……ツー！」

フランの背後にスキマが開かれたのを確認すると、即座に勇輝はフランを掴んで離れる。

直後、スキマの中から溢れる様な弾幕が流れ出ていた。

「大丈夫、だよな？」

「うん。ありがと、お兄様」

次にスキマから出て来たのは弾幕ではなく、紫だった。

「お姫様を助けるナイトって所かしら。魅せるじゃないの」

「会話中に攻撃をしかける所は悪役の極みですよね。射命丸から貰った外道の称号は紫さんにお渡しますよ」

「いらないわ」

「俺もいらないです」

勇輝の背には既に靈力の翼がある。機数の決まつた対決では邪魔でしかないが、相手が倒れるまでの戦いでは攻撃にも防御にも使う事が出来る。

勿論、靈力の消費が大きいが今は関係ない。

「フラン、アレを……」

「ん、分かった」

フランは勇輝から少し離れる。

そして一人はスペルカードを取り出した。

「『禁忌』『残酷な人形遊び』」

其の捌拾捌

フランと勇輝を中心として、竹林は見るも無残な荒地へと姿を変えていた。

「……恐ろしいわね、それ」

傷は無いが汚れだらけの服を着た紫は一人を見上げながら呟く。

原因は一人の使ったスペルカード。符の名前が同じだが動きはまったく違う一枚で一つのスペルカード。

「お兄様、前に試した時より威力落ちてない?」

「それは違うスペルだろ。これで最大出力だつて」

そんな会話を聞いて紫は冷や汗が背を伝うのを感じた。

先程のスペルカードも、紫に境界を操る程度の能力が無かつたら既に負けている程のスペルカード。

単純な一対一だつたら紫にも分はあつた。しかし息の合つた二人組なら話は別だ。

紫にとって、例えば魔理沙と咲夜の二人が各自で攻撃をしてきたなら各個撃破は容易いのだ。

「フラン、次」

「分かつた」

二人は次のスペルカードを取り出す。

紫も応戦しようとスペルカードを取り出したが、使う事は出来なかつた。

「使わせないよ、お兄様との約束だから」

フランが能力で符の目を破壊したのだ。手の中で燃え尽きる符を紫は慌てて捨て去る。

「『剣劇』ダブル・レー・ヴァ・テイン』！」

再び二人が同時に符の名を言い放つ。

「紫ー？」

援護するために来たのか靈夢が紫へと近づいた。既に勇輝達の攻撃範囲内だ。

勇輝とフランは全く同形の紅い剣を靈夢達に向かつて振るう。

勿論、簡単に中てさせて貰える訳がない。靈夢達は其々別方向へと飛び回避する。

そして、勇輝達の攻撃がこれで終わる筈も無い。

勇輝の手からレーヴァ・テインが霧散し、代わりに大量の弾幕を放つ。

そしてフランが弾幕「！」と靈夢達を切り裂く！とレーヴァテインを振るつた。

「靈夢ー！」

紫がスキマを開き、靈夢に中に入る様に呼びかける。

だがそれを勇輝達は許さない。

フランはレーヴァテインを霧散させ、猛スピードで紫に近づきながら弾幕を放つ。

靈夢はそれに牽制されスキマに近づくのを止めてしまう。そしてその後方から勇輝がレーヴァテインを再び作り出し振るつ。

その時、靈夢の巫女服の袖が少し切り裂かれた。

靈夢は一瞬悔しそうな表情を見せ、弾幕で応戦して来る。

勇輝やフランがレーヴァテインを一度振り回す事に爆風が起き、竹は薙ぎ倒され地面は削れる。

再び一人が同時にレーヴァテインを手に、交差するように飛び交いながら振るつ。

時にタイミングを外し、時にまったく同時に振るつ。

靈夢や紫はパートナーが邪魔でスペルカードを使う事が出来ず、広範囲の勇輝達の動きを阻害する様な弾幕を作る事が出来ていなかつた。

その状況が更に一人の冷静さを欠き、疲労を増大させていく。

「博麗の巫女を嘗めないでよね！」

靈夢が即興で放った弾幕も力不足だったのかフランのレー・ヴァ・ティンによつて撃き消される。

「靈夢、結界を！」

紫が叫ぶと、靈夢と紫が背を合わせ結界を張る。

次の瞬間、結界とフランのレー・ヴァ・ティンが火花を散らしながらぶつかり合つ。

そこに追い打ちを掛ける様に勇輝もレー・ヴァ・ティンを叩きこんだ。

しかし靈夢達の張つた結界は破れない。だけど、靈夢達の消費は大き過ぎた。

「……降参、打つ手無しね」

紫が両手を肘から上げてそんな事を言った。

その言葉にいつもの胡散臭さは感じられない。きっと本心で、言葉を選ぶ余裕もそう無いのだらう。

「……そつね、ここで力を使い切らせて犯人を優勢にするのも癪よね」

靈夢も手を上げる。

それを見て勇輝はレーヴァテインを手放した。フランは納得していなかつたが勇輝がフランをジッと見るように気付くと同じじようにレーヴァテインを消す。

これで一番厄介な一人は異変から退いた。する必要が無かつた戦いにも思えるが過ぎた事だ。あれこれ考えるのは止めようと勇輝は勝手に完結させる。

「残つてやうのは……」

「魔理沙とアリスなら帰つたわよ」

「なら、後はレミコア達と西行寺達か」

「うえ、お姉様も残つてるの？ 早く帰れば良いのに」

フランが心底嫌そうな顔をする。誰かに負けて帰つていたら指を指して笑つたかもしれない。

紅魔館に行くと、最近レミリアのフランに対する威儀がマイナスの域に達しているような光景をよく見かけるのだ。率直に言えば、かなり嘗められている。

肩をふるふると震わせて涙目で部屋を退出する時もあった。付いて出て行つた咲夜が鼻を押さえていた。

そういう事が頻繁にあるので今回は負けた方が教育上よろしい気がするが、レミリア達が本当に異変を解決してくれのか確証が無い

以上は自分が解決する氣で臨まなければならぬだろ。

「じゃあ、私達は」これで帰るわ。失敗だけは避けて頂戴

「勇輝さん……」

紫は素氣なく別れの言葉を口つが、靈夢は神妙な顔をしながら勇輝を呼び止める。

「どうかしたのか?」

「お願いが、あるの……」

靈夢は手を前で絡ませ、もじもじしながら言い濶む。

まるで戦場に向かう親しい人間に何かを伝える様な……いや、本当に行くのは戦場だろうが。

「えっと……その、……あ

「速くしないと犯人が何か仕出かすと思つんだけど」

「わづよね……」

意を決した様に靈夢は言った。

「異変を解決したら、その……。報酬を、分けて欲しいの

「…………考えておくよ」

途轍もなく、残念な申し出だった。

其の捌拾仇

荒れ果てた竹林に深紅と薄紫の弾幕が交差していた。

「亡靈が……中々やるわね」

レミリアは攻め切れない事に若干苛立ちながら、更に弾幕の数を増やす。

対する幽々子はその弾幕を次々と自分の弾幕で撃ち、相殺していた。

そして数弾、相殺されずに相手に向かう弾もあつたが幽々子の弾幕を咲夜が、レミリアの弾幕を妖夢が切り裂き各々の主へと攻撃が及ぶ事を許さない。

実力は拮抗……いや、どちらも本氣を出せていなかった。

一対一ならばレミリアも幽々子も全力を出して戦う事が出来たかもしれない。

「咲夜、少し向ひつの動きを止めなさい」

「妖夢、符を使つかり牽制しておいてね」

レミリアと幽々子がスペルカードを取り出す時、咲夜と妖夢の弾幕がぶつかり合つ。

しかしそれも一瞬の事。

「神槍『スピア・ザ・グングニル』」

「蝶符『鳳蝶紋の死槍』」

二人がスペルカードを使うと、レミリアの後ろには巨大な深紅の魔法陣が。幽々子の後ろには巨大な扇子の様な物が現れる。

そこからは地獄よりも恐ろしい光景だった。

二人の背後からは無数の槍と弾幕が放たれ、相手を殺そうと人の目で何とか捉えられる程のスピードで飛んで行く。

暴風と爆音。そして視界を埋め尽くす弾幕以外は何も分からぬ。

仮に里の人間がこの場に居合わせたなら既に影も形も残らない。咲夜や妖夢も自分の身を守るのに精一杯なこの状況で、一撃でも相手の攻撃を通してしまつたら敗北は確定。

レミリアは魔法陣の中から一本、グングニルを抜き取る。その行為は幽々子からは見えない。

そして、レミリアは不敵に笑いながらグングニルを投擲する。

魔法陣から放たれる物より威力も、スピードも倍近くのそれは幽々子の弾幕を貫き、真っ直ぐに飛んで行く。

そして、幽々子側の弾幕が止んだ。

だがそこに幽々子の姿は無く、薄紫の蝶がひらひらと舞う様に飛ん

でいるだけ。

「お嬢様！」

咲夜が珍しく叫ぶ。それを聞いてレミリアは魔法陣の向きを反転させた。

レミリアの背後に放たれていくグングニル。しかしそれはレミリアが狙つた人物に当たる事は無かつた。

「良くやつたわ。妖夢」

妖夢は一振りの刀で弾幕を切り裂き、レミリアの弾幕から幽々子を護つたのだ。

しかしその姿は既に満身創痍。肩や脇腹の辺りの服は破れ、血を滲ませている。長期戦は行えない。

「幽々子様……ご無事つ、ですよね？」

振り返らず、痛みに声を震わせながらも妖夢は幽々子の身を察じる。

「ええ、妖夢のお陰で勝機が出来たわ」

幽々子は妖夢をそつと抱え、スペルカードを使つた。

「『死蝶浮円』」

幽々子を中心として弾ける様に放たれる弾幕。

その数は先程までの槍の攻防での弾幕の数を優に超えている。

レミリアは近くに居た為に弾幕に飲み込まれ、咲夜は何度も時間を操りレミリアの下へと向かう。

息を切らしながらも咲夜はレミリアの手を引き、幽々子から離れる。幽々子が放つたのは上下前後左右。全方位にばら撒く弾幕。回避するには離れるしか無い。しかし咲夜はそのまま逃亡していく。

「咲夜！」

「申し訳ありません、お嬢様。ですが今回は退きましょう。そして足を引っ張った私の責任。どんな罰でも受けましょウ」

「…………する訳が無いでしょウ」

咲夜に抱えられながらレミリアは眉を顰める。

あのまま戦えば一対一に持ち込める可能性はあった。妖夢は負傷していて、レミリアもダメージは負つたがまだ戦える状態なのだ。

だがレミリア達は勇輝から聞いている。幽々子の能力の事を。

もし妖夢が死ぬ様な状況になつたら、間違いなく幽々子はそれを避けるために能力を使ってでもレミリア達を止める。

そして妖夢をこれ以上傷つけずに幽々子を倒す術を一人は持ち合わせていない。

負けは無いが、勝ちも無い戦い。

いや、本来の目的は本物の月を取り戻す事だったのだから戦い 자체が無駄だったのだろう。

「一体どこの馬鹿が始めたのかしらね……」

見当は着くがレミリアはそう咳かずにはいられなかつた。

咲夜も想像出来ていいのか困つたような顔をした。

「……妹様でしょうか」

「他にいるとしたら魔理沙」

実際はフランと妖夢だが、それは過ぎた事。

「……申し訳あつません」

「無理そつね、これ以上の戦闘は」

幽々子は妖夢の傷を見ながらそつ判断を下す。

「本当に……ツツー 申し訳ないです」

止血をしながら痛みに妖夢は言葉を詰まらせた。肩の傷は浅かつた、だが脇腹はそうはいかなかつた。

「白玉楼に帰りましょうか。お腹も空いた事だし」

「それが本音、ですか？」

「勿論妖夢の事も心配しているわよ？」

「そうですか……」

この状況でも暢気な主に妖夢は溜息を吐き、その時に走った痛みで再び顔を顰める。

「そうだ、折角だから里の診療所へ行きましょうか。朝までには戻るでしょうし、何より妖夢の反応が面白そうだわ」

「そんな理由で……」

「ま、おんぶしてあげるから背中に乗りなさい」

「傷が当たりそつなんですが……」

「大丈夫、妖夢の血なら付いても平気よ」

「いや、痛いんですけど」

現在、午前一時。

其の仇捨

「誰もいない……のか？」

静けさが戻ってきた荒れ果てた竹林の上空を飛びながら勇輝は呟く。
勇輝が思つた通り、既に勇輝とフラン以外の異変を解決しようとしていた者は既に帰宅している。

が、それを確認できない二人は警戒しながら竹林の奥へと進んでいた。

「お兄様一、フランもう飽きちゃった。帰つて良い?」

「帰つたら一度と異変に閑わらせないけどな」

妨害だけして帰るなんて事をしたら靈夢がキレる。それも本氣で。
きっと魔理沙もキレる、割と本氣で。

もしかしたら紫に殺される。きっと影の掛かった笑顔で殺される。

「むー……」

「文句を言つ前に犯人の場所を探せよ、第六感的な何かで」

「それならあそこだと思つよ」

フランが指差した方には割と大き目の家が竹に隠れる様に建つてい

た。

「……分かつてたなら早く言つてくれよ」

「だつて、絶対にさつきの一人の方が強かつたと思つ」

「次は殺しにかかるても許す」

「直ぐに行こ! お兄様!」

田を輝かせながらトランションを上げるフランを見て勇輝は溜息を吐く。

「……駄目だ! イツ、早く何とかしないと」

その呟きがフランに聞こえる事は無い。

家の中に玄関から堂々と入り、わくわくしていますと顔に書いてあるフランを先頭に一人は廊下を歩いて行く。

「変な仕掛けとか無いよな? 紅魔館の地下通路みたいな

「へ? ああ、あんな凄いのは幻想郷でも少ないと思つよ。よく知らぬけど」

「何も知らないの間違ひじゃないのか?」

「む、知ってるもん。博麗神社の菓子棚には罠が仕掛けあるんだ

よ

「いや、知らねーよ」

「触ると縛り上げられて天井から吊るされるんだよ?」

「……触ったのか」

「お姉様が」

……姉妹揃つて何をしているんだ？。この吸血鬼は。

そんな和やかな会話を遮る様に田の前から弾幕が飛んで来る。

しかしフランに呆気なく焼き消された。ビックやら実力はそつ高くな
いらしい。

「誰？ フランと遊びたいのかな」

フランの目が獲物を狙う獣の様に鋭くなる。

田の前、廊下の先からは相手の緊張感が伝わって来る様だった。

空気が張り詰め、言葉を発する事が許されないかのように感じた。

「……降参。私じゃ勝てないね」

暗がりの中から肩を竦めながら一人の妖怪が歩いてくる。

兎の耳と尻尾。うん、兎の妖怪だ。

「それにしても怖いね、月の使者様は。腰が抜けるかと思ったよ」
一見、人間で言えば十代にも届いていない様な容姿をしていたが恐
らく「まフラン」と同じ。

姿を変える事無く長い時を過ぎしてきた妖怪。

先程までの空氣をぶち壊すかのような漂々とした馴れ馴れしい態度
で近づいてきている。

「待て、月の使者ってのは何だ？」

「誰だ、その姫って？」

「…………え？」

驚きを隠せないのか、目を丸くして硬直する兎の妖怪。

そして、カラソと音を立てて何かを落とす。

「何か落とした……オイ」

落ちていたのは包丁。後ろから刺されるのはもう御免だと言うの。

「何だ、私の勘違いか……。森で迷ったのかい？ 残念だけど今は
手が離せなくてね、里まで送つて行くのは夜が明けてからになるん
だけど」

「いや、構わない。ここに用があつて来てるんだからな」

とりあえず勇輝は拾つた包丁を玄関の方向に向かつて思い切り投げ飛ばし。

「本物の月、返して貰うぞ」

その言葉を聞いた時、兎の妖怪は飛び退いて全力で家の奥へと駆けていく。

「逃がして良かつたの？」

黙つていたフランが尋ねて来るが、勇輝は必要ないと首を横に振る。

「生憎、弱い者虐めは趣味じやない。どうせ犯人じやないだらうしな」

「それもそうだね。そんな強そつじやなかつたし」

散々な評価を降した後、勇輝達は再び廊下を歩き始める。

外から見た感じではそこまで広い家では無かつた。だが未だに突き当たらないという事は何かの細工がしてあるのだろう。

「フラン、この結界みたいなのは破壊出来ないのか？」

「本人がいたら本人」とバラバラに出来るよ」

「……飛ぶか、あまり壁とか壊さない様に」

きっと、この異変の犯人だつて紅魔館や白玉楼のメンバー達と同じだ。

他の何かを犠牲にしてでも成し遂げたい目的。目的に近付いた故の副産物。

そもそも、幻想郷を好き好んで混沌に陥れようとする輩がいたなら紫が真っ先に始末しているだろう。

まず最初に目的を聞く。元に戻すのなら見逃すし、早く終わらせるための手伝いだって可能だろう。

さっきの兎だつて話は通じたのだからそれぐらいの余裕はあると思つて良い筈だ。後はフランが暴走しないか気を付けなければ。

……ん？ フランが原因で厄介な状況になつている気がする。

いや、まさかそんな事は無いだろう。これでも自分より歳は上で、外見通りの中身で少々氣が振れ易く、大分好戦的な所があるが聞き分けは良かつた筈だ。

「お兄様、早く犯人を漬しに行こよ」

訂正、この子が原因で異変は混沌へと陥つています。

「頼むから最初に言つた一番最初の約束だけは守ってくれよ?」

そう言われて首を傾げるフランを見て勇輝は更に不安になつて行く。

其の仇拾壹

「フラン、止まれ」

靈力の翼を荒々しく振るつて勇輝は急停止する。

フランも田の前の二人に気付く、全身を止めた。

「……から先には行かせる訳にはこもません。お引き取り願います」

飾りのよつなウサギの耳、容姿は高校生程度の妖怪。その後ろにはさつきの兎の妖怪もいた。

「どうあえずお前等の田的だけ聞いておいつか」

「お答えできません」

「名前は?」

「鈴仙・優曇華院・イナバ。いづちば因幡 てるです」

「仲間の数は?」

「十五つと感じます?」

「聞いてみただけだ。そっちがその気なら、いづちのやる事は一つだけだ」

相手に話す氣は無い。なら……。

「全部力尽くで聞き出しちゃるよ」

勇輝がフランに目線をやると、待つてましたとフランは特攻する。

まさかフランが飛び出して来るのは思っていなかつたのだろう。——人は動搖する。

フランが巨大な弾幕を振り撒く。

「兎狩りは初めてだから、殺しちやつたら『メンね?』

フランの無邪氣で無慈悲な攻撃を何とか避けて行く一人。

鈴仙の目が暗闇で赤く光る。離れていた勇輝にはそう見えた。

フランが急に勇輝の方へと視線を向ける。

「……フラン?」

何事かと勇輝は呼びかけるが、返事は返つて来ない。

虚空を見つめ、フランはその場に立ち尽くす。

何かされた。そう判断するには十分すぎる状況だった。

フランはまるで親の仇を狙つかのような目で勇輝を睨み、レーザーテインを握る。

「操られているのか、それとも幻覚か……」

一応、今の勇輝とフランの身体能力は同等。そしてフランの妖力より勇輝の靈力の方が多い。

油断さえしなければバラバラになるような事は無いが、早くフランを止めなければならないだろう。

「鈴仙とか言つたな、お前か？」

レーヴァテインを躊躇し、勇輝は鈴仙を睨みつける。

「さあ、その子が貴方に恨みでもあつたのでは？」

冷や汗をかきながらも鈴仙はニヤリと笑う。

大体想像は出来た。何らかの能力でフランの精神が正常では無くなり、勇輝を敵と認識した。

能力を使つたのは鈴仙。そしてフランの動きが想像より遙かに上だつたのか膝が笑っている。そこから自身で操つているのかどうかは怪しいと見えるだろう。

てゐは何時の間にか消えている。逃げたに違いない。

「ハア……」

勇輝は溜息を吐く。

勇輝の表情には絶望も鬱えも無く、まるで溜め込んだ宿題を終わらせるような面倒臭いといった氷上でフランを見る。

鈴仙は何故そんな表情が出来るのか分からぬ。

今にも命を失いそうな顔で、どうしてそんな顔がしていられるのか。

だが、その理由は直ぐに分かつた。

「つー？」

勇輝は真っ向からフランのレーグヴァテインを受け止めたのだ。

勇輝の身体能力は今、フランと同等になるよつに修正されている。体格で勇輝の方が僅かに有利。

そして、幾度となく弾幕ごつこを行つて来た一人には相手の行動パターンが手に取る様に分かる。自我を失つてゐるフランと冷静な勇輝ではどちらに分があるかは明白。

突つ込んできたフランの急所に手刀を落とし、元々有つたか怪しい意識を刈り取る。

「さて、種が分からない以上無闇に攻めるのは危険だけど……戦るのか？」

鈴仙は脅えを振り払うために勇輝を睨みつける。

時が止まつたかのように一人は動かない、しかし突然勇輝は足元が覚束無くなつたのか膝が折れ、倒れ込んでしまう。

「良し、勝つた！」

その場の雰囲気をぶち壊すかのように鈴仙が声を上げる。

彼女の能力は“狂氣を操る程度の能力”。物質の波、精神の波、電磁波、音波など様々な波を操作し、相手の心を狂わせる。

電磁波を操り、勇輝の脳を攻撃。普通の生物なら意識が飛んで当然の攻撃。

鈴仙は勇輝の傍へ近寄り、指で突いてみる。

.....。

「動かない……もしもーし？」

更に一度突いて見るが反応が無い。

「……やつたあ、これで師匠に褒められッ」

鈴仙の言葉は最後まで続かない。

その今にも飛び上がりそうな肩を、後ろから万力の様な力で掴む者がいたのだ。

「お兄様に、何したの？」

ギリギリと、肩を掴む力が更に強くなる。

「あ……ああ……」

恐怖で声も出せず、鈴仙はただ痛みに耐える事しか出来ない。

「治して、くれるよね？」

「クク」と、頷く事しか鈴仙には出来なかつた。

「お師匠様、鈴仙が負けちゃつたよ」

てゐは屋敷の最深部へ來ていた。そこには一人の人間の姿がある。

「そう、優曇華が……」

「逃げないのかい？ 敵は相当強いよ」

「姫が逃げると言えば、逃げたんだけど……」

「迎え撃つ氣だからね……」

一人が溜息を吐くと、黙つていたもう一人の人間が声を上げる。

「失礼ね、私だつてそれ相応の実力はあるのよ？ それに聞けば、片方は人間の男つて話だから」

「アレをやるの？」

「勿論。その前に、私の美貌に心を動かさない男がいると思つてゐの？」

「…………輝夜、頼むから態々面倒事に巻き込まれに行かないで欲しいんだけど」

「アイツは私の責任じゃないもの、今回が二回目よ。数百年の中でもたつた二回」

「実は、敵は本当に新手の月の使徒だったとしたら？」

「その時は永琳に任せろ。頼りにしてるから」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2112v/>

東方医療録

2012年1月13日21時47分発行